
新ブストサル

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新ブストサル

【Nコード】

N4039K

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

王子こと山野裕子は、千葉県公立高校の女子フットサル部の部長。言葉は荒っぽいし態度も乱暴。でも、どこから湧いてくるのかというような爆発的なパワーでぐいぐいと周囲を引っ張り、部員たちの心を変えていく。臨むフットサル大会、攻撃面の頼みの綱である佐治ヶ江優が試合中に倒れてしまい、出場できなくなってしまう。予選突破すら絶望的な状況下、果たしてどうなってしまうのか。

第一章 優ちゃんと裕子ちゃん（前書き）

以前に投稿した小説「ブストサル」の、主人公を変えての続編です。主人公交替により、やや暗かった前作に比べてがらりと明るくなつた雰囲気をお楽しみ下さい。

第一章 優ちゃんと裕子ちゃん

第一章 優ちゃんと裕子ちゃん

1

街並みが物凄い速度で後ろへと流れ、消えてゆく。反対にJR香取駅の駅舎がどんどん大きくなってくる。神社のような奇抜な形の駅舎だ。

「寝坊したあ。遅刻するう！」

この流れゆく風景というものに、もしも耳というものがあつたならば、あまりに毎度のこの言葉に、さすがに辟易せずにはいられなかっただろう。

声の主は、ようやく駅へと辿り着いた。改札の向こうには、すでに電車が到着しており、扉を開けている。

発車ベルが鳴り始めた。

去年からやっと導入されたICカード自動改札に、定期券を叩き付けるようにかざすが正しく認識されず、扉が開かない。慌ててもう一度かざし直すと、ようやく開いた。

制服のスカートなびかせて、ダッシュ。青とクリームのツートンカラーの成田線車両へとまっしぐら。

発車ベルが鳴り終え、扉が閉まり始めた。

ちよっと待てやこの野郎。お前にいかれちまったら次に来るのは三十分後なんだぞ。

と、心で叫ぼうが声に出そうが思いが届くはずもなく、電車の扉は遅刻常習者に情けをかけることなく閉じてしまった。いや、完全に閉じ切る直前、奇跡でも起きたのか突然に扉が開いた。よく見ると、ドアの隙間から黒い皮カバンが突き出ている。誰かがカバンを挟んで、閉まりかけたドアを開いたのだ

山野裕子^{やまの ゆうこ}は雄叫びをあげながら車両内へと、文字通りに転がり込

んだ。自宅から駅までの全力疾走に力尽き、床の上に俯せで大の字になった。

「王子、電車で叫んだり寝転がったり、はしたないよ。それに迷惑だし」

寝転ぶ裕子の傍らに、裕子と同じ学校の制服を着た女生徒が立っている。足元しか見えないが、首を上げて誰だか確かめるまでもない。

「サジ、ナイスアシスト」

裕子は親指を立てた。

クラスメートである佐治ヶ江優が、自分のカバンで電車の扉を開けてくれたのだ。

電車が発車してしばらくすると、裕子はゆっくりと立ち上がった。ベストもスカートも埃だらけだが、本人はまったく気にしていないようだ。仕方なく佐治ヶ江がはたいて落としてやる。

「いや、今日は寝坊しちゃって、まいった」

「毎日寝坊してるくせに」

裕子と佐治ヶ江は部活が一緒なので一年生の頃から知ってはいたが、あまり口をきく機会もなかった。二年生になり同じクラスになったことから、話す回数が増え、同じ駅を使っていることが分かり、一緒に下校するようになり、と、どんどん親しくなっていたのだ。登校はほとんど別々だが、佐治ヶ江としては、毎日裕子に合わせていたら、毎日遅刻してしまう。

車窓の向こうには、田園風景が広がり、ゆっくりと流れている。電車は三十分一本だが、乗ってしまえば五分で目的駅に到着だ。

JR成田線佐原駅。佐原は一応の観光地ではあるものの、そうなるには季節を選び、普段はかなり落ち着いた雰囲気、質素な街である。

二人は改札を通り、瓦屋根の駅舎を出、小さなロータリーで待機している市営バスに乗り込んだ。

バスは本年度より通勤通学時間帯の増便が行われたため、以前のよ

うな殺人的な混雑はないが、それでも相当に人と人がひしめき合っている状態だ。

いまバスに乗っているのはほとんどが彼女らと同じ、千葉県立佐原南高等学校の生徒たちである。

先日部活を引退した浜虫久樹先輩は、鍛錬のためにと入学時よりバスを使わず学校まで歩いていたが、混雑解消されようとも、部活を引退しようとも、その習慣は続けているらしい。裕子は素直に感心するものの真似するつもりはまったくない。ただでさえ朝は寝足りなくて辛いというのに、さらに早起きすることになったら絶対に授業中に寝てしまうだろうからだ。まあ、いまでも授業中によく寝ているのだが。

「おはようございます。王子先輩、サジ先輩」

ぎゅうぎゅう混雑を一山越えたところに、かろうじて見える梶尾花香の顔。その隣には、生山里子がいつも通りの仏頂面。

「ハナ、里子、うおっす！」

裕子、ところ考えず大声を出すので間にいる男子生徒が露骨に迷惑そうな表情。

花香と里子、二人とも山野裕子らと同じ学校、同じ部活の後輩だ。王子というのは山野裕子のあだ名である。彼女は顔立ちは整っているものの、いつも刈り込んだような非常に短い髪型で、女子というより美少年に見えることから、いつしか付いた名である。彼女自身はこの短髪を、女らしい短髪だと思っているので、その通称は面白くない。でも、誰もがそう呼ぶものだから、もう慣れてしまった。中学の頃などは、あだ名が兄貴だったから、それに比べれば遥かにマシだ。

花香は無邪気な表情を浮かべ、人混みを掻き分けて裕子たちの方へとやって来た。遅れて里子が続く。混雑で、胸から下がどうなっているのかさっぱり見えないが、きつと里子は花香に強引に手を引っばられているのだらう。でなければ裕子のほうに自分から近づいてくるわけがない。

花香と里子、性格はまったくの真逆ながら、非常に仲が良い。裕子と佐治ヶ江も同じようなことをいわれるが、この二人はその非ではない。

花香は小柄で、とてもお喋りで、なんだか子供のような感じ。特に話題がなくても無理矢理になにかを話そうと、とりあえず口を開いてみるので、すぐに会話がおかしい方向になったり、日本語が無茶苦茶になったりする。考えてから話せと、ひとからよくいわれる。

里子は無口というわけではないが、お喋りでもない。いつまでも沈黙していることもあるし、口を開いたと思えばキツイ言葉を平気で吐く。だから、周囲にあまり人は近寄らない。体つきにしても、すらりとしながらもしっかりと筋肉がついており、大人びた印象を見るものに与える。

さて、佐原駅を出発したバスは、江戸情緒の漂う古い町並みを抜け、山道を上り、さらに揺られること約十分、ようやく目的地へと到着した。

県立佐原南高校前。乗客のほとんどがこの高校の生徒、ぞろぞろとバスを降りていく。

すっかり軽くなったバスは、心なしか若干軽妙なエンジン音を奏でて走り去っていった。

裕子たちは、校門を目指し、フェンス沿いの道を歩き始めた。

裕子と花香が楽しげにお喋りしながら歩いているので、必然的に佐治ヶ江と里子の組み合わせになるが、こちらはやはりというべきかいつまでも無言のままだ。別に無口な者同士だからって仲がいいわけではないのである。もっとも彼女らのいる部には、度を超越した無口がいるので、それと比べたら佐治ヶ江も里子も無口どころかよく喋るほうになってしまふのだが。

「なんかさー、千葉県の道路って、やたらとマックスコーヒーが落ちてない？ よく見るんだよね」

裕子は道路脇に落ちている黄色いコーヒー缶に目をやった。

ちなみにマックスコーヒーとは、千葉や茨城で多く売られている

練乳入りのやたら甘い缶コーヒーのことだ。

「そうなんですか」

「花香、見たことない？ あたしがたまたま見ちゃうだけかも知れないけど。よく売れてるから捨てられてるのをよく見るのか、それともマックスコーヒー飲む奴は捨てちゃう奴が多いのか」

「うーん。犯人、フサエ先輩だったりして」

夏木フサエ、裕子たちのいる部を引退したばかりの三年生だ。彼女はマックスコーヒーが大好きで、毎日のように飲んでいたものである。

「いや、世間の印象悪くなるとかいつて、落ちてるマックスコーヒー缶を見ると拾ってたくらいだから、それはない」

などと裕子と花香がどうでもいい会話をしている間に、四人は学校の校門へと辿り着く。

赤いジャージを着た中年男性教師が、頭髪や服装の乱れを見つけては注意している。

少なくとも山野裕子が頭髪で引っ掛かることはないだろう。遅刻しそうになって、閉じた校門を乗り越えようとして怒られるのはしよっちゅうのことだが。

「じゃ、先輩、部活でまた会いましょう」

花香は裕子たちに手を振り、もう片方の手で里子の手を引っ張っていった。

裕子は手を振り返しながら、

「なんで仲がいいのかさっぱり分かんねーな、あの二人」

などとぶつぶつ呟いている。

裕子と佐治ケ江は同じクラス。今日も長いような短いような、いつも通りの学校生活が始まる。

時間の過ぎしかたはそれぞれ。佐治ケ江は勉強、裕子は居眠りしたり、廊下に立ったり、というか立たされたり。同じなのは休憩時間と放課後の使い方くらいだ。

そして、放課後になった。

武田^{たけだ}晶^{あきら}は佐原南高校女子フットサル部の副部長。

今日は、というか、今日もというか、部長がまだ来ていないので、代行で全体指揮をとっている。といっても、細かな技術的指導は佐治ヶ江優や衣笠^{きぬがさ}春奈^{はるな}に任せてしまっている。ゴレイロの自分があれこれ指図しないほうが良いと思うからだ。

晶はFPとしても優秀なのだが、だからといってそちらの領分まで指導してしまつては他の二年生たちの顔を潰すことになってしまふから。……というのは建前で、実際はただ面倒なだけ。その副産物として、佐治ヶ江に指導力やコミュニケーション能力、社交性といったものが身について来ているし、なにも悪いことはない。

佐治ヶ江優は幼い頃、友達がおらず、毎日一人でサッカーボールを蹴つて遊んでいたという。もともとの才能もあつたのか、ボールを扱う技術力は相当に高い。

そんな技術力の高い佐治ヶ江であるが、上手にボールを蹴ることは出来ても、どうすれば上手にボールを扱えるのかを言葉にすることが出来なかった。言葉にすることが出来ても、気が小さくてまともに発言をすることが出来なかった。それが、晶が技術指導を任せたことにより、少しずつ改善されてきたのである。

「ほら、声出して声」

篠^{しの}亜^あ由^ゆ美^みが大声で叫んでいる。能力が高からず低からず、秀でた能力もなく、一年生の時はどうにもぽつとしなかった彼女だが、そんな自分とうまく向き合えるようになり、後輩も出来て、最近、若干の貫禄というものが出てきた。技術が高くないなりに、それをも含めた経験を活かすこと、それと場のムードを盛り上げること、それが自分の役割だと思っている。

そのすぐそばでボールを蹴っている真^ま砂^{いし}茂^{しげ}美^みは、篠亜由美の親友である。茂美は性格は非常に積極的行動的なのだが、口を動かすことに関してだけは消極的で、凄まじいまでの無口。フットサルの技

術は、入部してから一年間真面目に練習しただけあって、その分、しっかり上達している。守備の要であるベッキというポジションで、かかせない存在である。しっかり声出してくれればもっと全体が安定するのに、と晶は思っている。

衣笠春奈。ちょうど去年の今頃に静岡からこちらの学校に転入、そしてフットサル部に入部。父親の過保護でそれまで運動らしき運動をしたことがなかったのだが、本人のやる気と前部長である木村梨乃の指導のおかげで技術力はかなり上達したし、なにより体つきがしっかりとしてきた。去年度は人員不足によりFPとゴレイロを兼任させられていた。今年は、未経験ではあるもののゴレイロ希望という新入部員が入ってきてくれたため、春奈は希望通りFP専門になった。

と、いま紹介した部員たちに、まだ来ていない部長を加えたのが、二年生の全員だ。

続いて一年生。生山里子、梶尾花香、九頭葉月くずはづき、友原鈴ともはらりん、梨本咲なしもとさきの五人。五人とも、フットサルやサッカーの経験はこの部活に入ってからという、新米ばかりだ。

能力的に一番優れているのは生山里子。素質としては優秀すぎるくらいで、もともと体力があり運動神経が優れているだけでなく、飲み込みが非常に早い。一を聞いて十を知るといふほど器用ではないが、七か八程度は学んでしまう。ただ、とにかく気が強く、負けず嫌いで、上級生もその扱いには手を焼いている。

梶尾花香は里子の中学時代からの親友だ。里子がフットサル部に入ったのも花香の誘いによるものだ。花香は、里子と違って素質に関しては並である。しかし運動することは大好きで、好きこそもののなんとやらで中学三年の時にはバスケット部のキャプテンを任されていた。前々からサッカーに興味があったのだが、佐原南高校には男子サッカー部すらないため、フットサル部を選んだのだ。部活を変えたため、キャプテンになるほどの立場はリセットされてしまったが、毎日フットサルを楽しんで、マイペースで少しずつ力をつけて

きている。

九頭葉月は中学の時に運動部に入ってはいたが、体力はあまりない。運動神経も鈍くはないが器用なほうでもない。ただ現実的な目標設定を立てて堅実かつ黙々と努力していけるという素晴らしい才能を持っている。非常に真面目で、前向きな性格。故にからかわれたりもするが、なんだかんだと一番の模範生だ。

友原鈴は一番の不器用者。小学生の頃から様々なスポーツを経験してきているので、そこそこの体力はある。しかし、長所といえる点がそこしかない。技の覚えが遅く、体の動かしかなどもあまり上手ではない。いや、正確に表現するならば「下手くそ」である。本人にもその自覚は多分にあり、それがコンプレックスになっている。自分に向いている競技がきつとあるはずだ、とこれまで部活を一年毎に変えてきている。

現在はFPとゴレイロとで分かれて練習をしている。

FPはボールタッチの練習だ。ドリブル、ターン、ドリブル、ボールを大きく蹴ってダッシュ、細かくドリブル、ドリブル、ターン。単純だが、そう綺麗に出来るものでもなく、個別に佐治ヶ江の技術指導が入る。

彼女らの隣では、武田晶と梨本咲が、一緒にゴレイロの練習メニューをこなしている。

この梨本咲、かなり性格がひねくれており、扱いにくい。中学時代を知る者の話では、学校は皆勤賞で部活も真面目に出ていたということなので、その点だけは誰も心配してはいないが。

晶もよく奇人変人扱いされるが、それは単に感情をあまり顔に出さないからそう受け取られるだけ。対して咲は、表情や言動から、あきらかに反骨心旺盛といった印象を見る者に与えるところがある。

でも晶には、そういう咲のひねくれたところに、なんとも愛着を感じてしまう。そして、咲は晶のそうした気持ちを読み取れるものだから、面白くない。だからといって、晶を驚かせるために良い子ちゃんになるなんて、それこそバカバカしくてとても出来ない。

晶たち二人がいま行っている練習は、片方がボールを蹴り、相手はそれをキャッチするというもの。距離を離したり近付いたり変化をつけていく。片方にはゴレイロとしての練習になるし、片方にはFPとして、足元の技術を鍛える練習になる。ゴレイロにはFPのように攻めあがっていくことも求められるため、このような練習も必要になるのである。

「咲、もうちょっと強く蹴っていいよ」

晶からすれば、その言葉のどこが気に入らなかったのか、というところだが、とにかくその瞬間、咲の表情が変わった。

それならこんなの取れるかといわんばかりに力強く蹴ってきたのである。

「お、いいね」

晶は楽々とキャッチし、咲にボールを返す。

バカにされているとでも感じたのか、咲の表情がより険しくなった。ボールを蹴る勢いが、だんだんとエスカレートしてく。

咲はかなり強めに蹴ったが、それでも晶はなんなく受け止めてしまふ。

もちろん晶の体から大きく離れたところに蹴れば、晶だって取れるわけではないが、そんなことしたら自分の負けだ。と、咲は意地になって、晶へとボールを蹴り続けた。

あまりの勢いに、さすがの晶も取りそこね、ボールは手を弾き、真上へと飛んだ。指を強く打ってしまったようで、痛みに顔を歪めたがそれも一瞬、落ちてきたボールを見上げると両手でキャッチした。

「なんで、全然怒らないんですか」

咲は晶へと突っかった。ルール違反をしているのは自分のほうなのにだ。

「遅くなってごめんちょー」

山野裕子が小走りでやって来た。

「王子さあ、部長がそうちよくちよく遅刻してどうすんの？」

と晶が注意する。

「いや、補習でさあ。文句あるならカマバロンにいつてね」

「普段勉強しない自分自身の頭に文句いったほうがいいよ」

「おまえだってたいして賢くないくせに優等生ぶってんじゃねえよ」

「少なくとも補習なんか一回も受けたことないからね」

二人のやりとりには、咲はなんだか脱力してしまい、黙って体育館の外へ水を飲みに出でいつてしまった。

3

「疲れたあ」

梶尾花香は、ぐるぐると肩を回している。

「あんな程度の練習で、だらしないなあ」

隣を歩く生山里子。疲労困憊といった気味の花香と違って、いたって元気そうだ。

「あたしは里子と違って普通の女の子なの」

JR成田線久住駅の改札を抜け、狭い道路を歩き出す。

二人は中学からの親友。里子をフットサル部に誘ったのも花香である。

彼女ら二人は性格どころか価値観まで正反対だということにとっても仲がいい。

でも花香は、里子がいつまでもフットサル部にはいないと思っている。中学生の時から毎年部活を変えているからだ。

同じフットサル部の友原鈴も、毎年部活を変えているらしいが、里子の場合はその理由が違う。

里子はあまりに能力がありすぎるのだ。一年ですべてを吸収し、すべての部員の中でナンバーワンになり、その競技を「クリア」して辞めていくのだ。

いくら能力があるからとはいえ、「新しい環境にチャレンジしたくなった」とでもいっておけばまだ 反感買わずにすむところを、堂々と「クリアした」などというものだから、中学時代、里子の評

判はあまりよくなかった。もっとみんなと仲良くしないと、と花香がどれだけ注意しても、見解の相違として受け入れて貰えなかった。

高校生になったからといって、がらりと性格が変わるわけではない。花香は今年からはじめたフットサルを結構気に入っており、今後も続けていきたいと思っているが、里子と一緒に活動出来るのが本年度だけであることを思うと少し寂しい気持ちになる。せっかくはじめて、同じ部活になれたというのに。

「あ、そうだ、忘れてた、晩の仕度、スーパー寄ってかないと」

花香は腕時計の針を見た。六時二十分。

「え、急がないと閉まっちゃうじゃん。あそこ確か、今年から七時くらいに店閉めちゃうでしょ」

「うん。だからこの時間がちょうどいいんだよ。安売りの時間も早くなったから」

「なんで？　　というか、スーパーって、時間によって安く売ったりすんの？」

「里子、本気でいつてんの？　君、いい奥さんになれんよ。だいたいのスーパーって、生鮮ものの売れ残りを出さないために、閉店が近くなると値引くんだよ」

「スーパーってそんなことやるんだ。ま、そういうこと無知でいいや、あたし。一生結婚するつもりないし」

「あたしは早く結婚したいなあ。でも、いつまでも相手が現れない気もする。里子のほうが、絶対に運命のいい相手が現れると思うけどな。あたしなんか、チビで、顔も個性なくて普通だし、勉強も運動も中途半端で、もうなんの取り柄もない」

「そんなふうにいわれると、なんて返せばいいか困るからやめてよ。運動のことだけなら、そうだねって軽く返せるけど。でも、絶対に、あたしなんかより花香のほうが魅力的だって。あたしなんかもないも、あたし嫌われているしさ。花香、性格も優しいし。誰と比べたって花香は素敵だよ、保証する」

「ありがと。里子が嘘つきにならないよう、頑張るよ。……あと、

あんまり花香花香いわないでよ」

「分かったよ……ハナ。やっぱりなんか、しっくりこないなあ。中学のときからずっとそう呼んでたのに」

「あたしは中学よりずっと前から自分の名前が嫌いだったの！」

裸に発音が似ていて嫌い。実際に、小学生の頃はそれで男子にかかわれていたし。

中学の部活では、苗字の梶尾からカジと呼ぶ者もいたが、いまのフットサル部にはすでにサジ先輩がいてそれだと紛らわしいためか、最初はやはり花香と下の名前で呼ばれ、そのうち略されてハナと呼ばれるようになった。ハナも鼻に繋がりそうだが、裸よりは遥かにマシだ。

久住駅から少し歩くとすぐに田んぼの広がる眺めへと変わる。田園風景の中、農道を二十分ほど突っ切ったところに、小さな住宅地。一戸建てばかりの中に一軒だけアパートがある。といっても、他の一戸建てと変わらないくらい小さな、古い木造アパートだが。そこが花香の住まいである。

建物横の階段を、梶尾花香は上っている。金属製のすっかり老朽化した階段で、いつも上っていて恐怖を感じる。まあ、自分で大丈夫な間は、弟たちも安全だろう。弟たちのためなら、この身がなんだ。と時折強がってみるものの、やはり怖い。はやく階段を作り直してくれればいいのに。

花香は、両手にスーパールのビニール袋を下げている。

「里子だって優しいじゃん」

ドアの前。いったん袋を足元に置いて、部屋の鍵を開けながら、独り言。

里子は買い物に付き合ってくれただけでなく、いまさつき別れるまで、重たいビニール袋を一つ持っていてくれたのだ。

あの異常なまでの負けず嫌いさえ直れば、本当に良い子なのに。多分、わたしたちがうまくいっているのって、わたしが最初から負

けているからだな。そう、唯一わたしが里子に勝っているのは、負け方を知っているということだ。

そんなことを考えながら、ドアを開いた。

廊下に灯りはついていないが、向こうに部屋の隙間から灯りが漏れており、ほのかに明るい。

「ただいま」

花香は両手に荷物を持ったまま、両足だけで靴を脱いだ。

「姉ちゃんだ!」という幼い声。襖の向こうでは、ドタバタと慌ただしくなる。そして小さな子供が部屋から出て来た。津波のような勢いで駆け寄ってくる。三人。見事に、大波中波小波だ。

「姉ちゃんおかえり!」

あつという間に小さな暴れん坊三人に取り囲まれてしまった。長男の啓太九歳、次男亮太七歳、三男健五歳。年齢の離れた弟たちだ。「ただいま。ドタバタと走っちゃダメっていつてるでしょ。下の部屋の人に迷惑でしょ」

口調は厳しいが、花香の顔は笑っている。

「はい」

家族構成は母と自分と三人の弟の、五人だ。父親は健がまだ母親のお腹にいる頃に、ガンで亡くなってしまった。

母親の帰りが、いつも仕事で遅いので、花香が実質的な母親になっている。掃除、洗濯、食事の仕度、お金を稼ぐ以外の大半のことをこなしている。

家事で相当に自分の自由時間を奪われることになるが、花香にはまったく不満はない。本来ならば自分だって家計を支えるためにアルバイトでもしなければやっていけないところ、それを母親が遅くまで頑張ってくれているから、学校で勉強や部活動をやっているのだから。

制服姿のまま、エプロンを身につけると、さっそく夕食を作りに取り掛かった。以前は帰宅するとまず着替えていたのだが、最近どうにも面倒で、お風呂から出て寝巻きに着替えるまでずっと制服姿

のままでいることが多い。

隣の部屋では、長男の啓太と三男の健が遊んでいる。本を見ながら、なぞなぞを出し合っているようだ。

花香のすぐ横には、亮太。ぴったり花香にくっついてる。

「んでさ、ゴンとたっ君と一緒に遊んでたらさ、たっ君が家で遊ぼうっていつてきてさ」

「それで今日は隆君とこで遊んで来たんだ。なにして遊んでたの？」
味噌汁に入れる長ネギを確かめるようにゆっくりと刻んでいる。

毎日料理をしているのに、包丁を持つとどうにも怖くて、トントントンとリズムよく刻むことが出来ないのだ。

「はじめはずっとゲームしてた。おばあちゃんがお菓子作ったから食べてって出してくれて、クッキーみたいなんだけどもって何枚か乗つけたような感じで、一番上にクリームみたいな乗ってて、それがすごい美味しかった」

「へえ。凄い美味しそう。いいなあ。あ、そのお皿取って。ありがとう」

電話のベルが鳴った。

手を拭いて、鍋の火を弱め、電話に出た。やはり母親からだった。今日は少しは早い時間に帰れるかもと出かける前に話したが、やはり遅くなりそう。とのお詫びの電話だった。

「やだなあもう、そんなことで謝らないでよ。でもさあ、そう毎日遅いと、お母さんの体が心配だよ。本当に無茶はしないでよね。体壊すくらいなら、仕事をもっと減らしなよ。それでお金に困るのなら、前からいつてるけど、あたし、学校やめて働いたっていいんだから。……うん。分かった。それじゃ」

花香は受話器を置くと、小さくため息をついた。なんのため息なのか、自分でもよく分かっていない。

4

「ここで、こう蹴って。いや、ここで、こうかな。……ああもう！

足がもつれる！」

友原鈴、チリチリの天然パーマが印象的な女の子だ。佐原南高校の女子制服姿。

学校帰りの公園で、今日の部活練習でサジ先輩に教えてもらったことを練習している。ドリブルでの相手の抜きかたについてだ。

しっかりイメージして取り組もうとすればするほど、なんだかたどたどしい足の動きになってしまう。

技術のない自分と、思うように蹴られてくれないボールとに、イライラしてくる。

イメージ通りに身体が動かないのは昔から。それでも心の奥では、自信を持っていた。いや、自信を持とうとしていた。だから、上手くいかなければいけないほど、自分がダメなのではなくて、この競技に向いてないんだ、と思っていた。

その僅かに残っていた自信のようなものは、高校に入り、生山里子と出会ってしまったことにより根底からぐらつきかけている。

「もう……ほんとううまくいかないなあ。サジ先輩は自分がもの凄く上手だからって、同じ感覚で凡人に教えてられても困るんだよね」

結局ただイライラしただけで、なんの満足も納得も得られぬまま、日も暮れて、自宅へと帰ることになった。

鈴の自宅は、JR佐原駅の北側、広い住宅街の中のごく普通の二階建てだ。近所には、同じフットサル部員の九頭葉月の家があり、時折ばったりと出くわすことがある。

玄関のドアを開けた。

「ただいま」

返事はない。母親は、たぶん買い物に出ているのだろう。

階段を上り、二階の自室へと向かった。

六畳間の和室は、フローリングカーペットを敷いて洋風調にしてある。

簡素ながらもおしゃれな装飾のついたベッドに、ピンクのカーテ

ン、ぬいぐるみ、女の子らしいのはそれくらい。床にはいろいろなスポーツの道具が散乱している。テニスラケットやバスケットボール、リストウエイトやダンベルなどの筋トレ道具。一人練習用の紐付きテニスボール。ドリブル練習用のカラーコーン。押し入れの襖が開いており、その中にも様々な競技の用具が混沌とひしめきあって、いまにも崩れてきそうだ。

全て、いままでに経験してきたスポーツの道具と、その競技に必要な肉体を作るためのトレーニング道具だ。

中一 テニス部

中二 バレーボール部

中三 バスケットボール部

中一の二学期から中二の三学期にかけて、町のソフトボールチームに週一で参加。

さらにさかのぼって小学生の頃は、卓球、ハンドボール、サッカー。

これまでに鈴が経験してきたスポーツだ。

球技自体はやるのも見るのも好き。しかし負けず嫌いとは根性無しとが奇妙な具合に絡まってしまい、こんな現在の自分になってしまった。頑張っても上達しないものだから、すぐ辞めてしまうのだ。

同じ部の、生山里子もころころ部活を変えるタイプらしいが、彼女の場合は「制覇した」という勝利感を持って辞めていくのに対し、自分はどうかまかそうとしても胸の奥に残るなんともいえない敗北感をかかえたまま辞めていく、そこが二人の絶対的に異なる点だ。挫折感を味わうのが嫌だから、「向いてなかったからやめた」、「先輩が意地悪だったからやめた」、と心の中で言い訳ばかりしてしまう。

まずは学校の宿題を片付けよう。スウェットに着替えると、学習机に向かった。

教科書とノートを広げ、シャープペンを手に取ったはいいが、なんだか頭がぼーっとして、ぜんぜん宿題に手がつかない。

「……骨盤が安定してないからかなあ」

なにをやってもダメなのは。

机の本棚から、ヨガや骨盤体操ダイエットなどを特集している雑誌を取って、ぱらぱらとめくりはじめた。

本棚には学校で使う教科書と、最低限の参考書、あとはいままでやってきたスポーツ関連の指導書と、健康関連の書物、自己啓発本など。

ふと気がつくとき、時間ばかりが経過していた。

面倒になって宿題をやめた。

答え合わせのときに、自分がさされそうな問題が分かったら、隣の席のイモツチにノート見せてもらえばいいや。

5

「ほらハナ坊、へらへらしてんじゃないの。葉月を見習え」

王子先輩こと山野裕子部長の怒声が飛んだ。

今日も放課後の体育館、フットサル部は練習を行っている。部活に怒声はつきもの、すぐ横にいる剣道部はまるで関心ない様子で打ち合いをしている。むしろ、全員が絶え間なく叫び続けている剣道部のほうが、遥かにうるさい。

「へらへらなんてしてません！」

梶尾花香はのん気な性格ではあるが、真面目にやっているのに不真面目と取られては面白くない。

「じゃ、やる気が見えないからそう思えるんだよ。真面目にやってんなら真面目にやってますよってアピールしないと、損だろ」

なにいつてんだか、まったく。でも確かに、王子先輩のいうことも一理あるな。真面目といえば……

花香はちらりと九頭葉月のほうへと目をやった。

葉月はただ、暗いだけなんだよ。

でも、練習は人一倍真面目に取り組んでいるよな。確かにその点だけは認める。

塾にはいつてないっていつてたけど、成績だって良いし。きつと遅くまで勉強してんだろうな。……確かに、その点だけは認める。

なにごとに、黙々とひたすら頑張るよな。確かに、その点は……って、結局全部認めてんじゃない。

里子だけじゃなく、葉月にも完敗か。

ま、いいけどさ。先輩たち、なにかにつけて手本にするもんな葉月のこと。実際、偉いと思うよ、葉月は。わたしも少しは見習わないとな。

などと複雑な、ちよっぴり屈折した感情から褒められていることなど、つゆにも気づいていない九頭葉月であるが、もしもいま花香が思ったことを面と向かっていわれてたとしても、「暗い」以外は否定していただろう。

確かに「真面目」「勉強している」は葉月自身も認めてはいる。しかしそれは、自分への自信のなさから来るもの。余裕のなさからくるもの。「黙々と」というのも間違いない。でもそれは、声を出すのが苦手だから。人と会話するのが苦手だから。決まったことをいうだけでも緊張するのに、考えながら喋らなければならないときなど、つかえつつかえで自分でもなにをいつているのか分からなくなってしまう。

葉月は、会話とかコミュニケーション全般はとにかく苦手で、ひとりでいるほうが好きだ。

二律背反だけれども、チームスポーツであるフットサルは、面白いと思っている。ちよつとづつではあるけども、やった分だけ前に進める気がする。頂点目指すなんてもちろん無理だけど、自分なりに、自分に向いているのかも知れない。そうしてフットサルで得たことが、いろんなことへの自信に繋がればいいなと思っている。

そういった思いから来る態度が、結局のところ前向きだと思われるようで、よく先輩たちから「前向きなサジ」とからかわれる。入部した頃はなにをいわれているのかさっぱり理解出来なかったけど、いまはよく分かる。

確かに自分と佐治ヶ江先輩は共通点が幾つもある。

喋らないし。

笑わないし。

前向きか後ろ向きかは、知らないけど。

わたしとサジ先輩との決定的な違いは、フットサルの技術。サジ先輩は、もう本当に凄い。プレーの一つ一つが、新米の自分にとっては神業にしか見えない。見ているだけで、時間がたつのを忘れてしまう。

絶対に真似出来るはずない。そりゃ経験が違うんだから仕方ないけど、そういうことではなく、きつと生まれつきの能力がすでに違うんだ。自分も毎日練習しているから、シュート、パス、リフティング、ドリブル、最低限は出来るようになってきたとは思うけど、いざ実戦となると畏縮してしまってた。練習の成果を発揮出来ない。

なにかにつけて先輩たちが「葉月を見習え」なんていつてくるけど、それってバカにされているみたいで嫌だな。「あいつは無能だけど態度だけは優秀だから」っていわれているようで。裏を返せば、態度が悪かったらなにもないということじゃないか。

じゃあ、どうすればいいのか。決まっている。もっともっと、練習するしかない。

でもそうするとまた、黙々練習してて真面目だ、前向きだ、見習え、ってなるんだろうな。もう人をからかうのも、いい加減にして欲しいよ。

無口だから真面目だなんて、勝手に決めないで欲しいよ。わたし、喋るのが苦手で、気が弱いだけで、そんな真面目な性格でもないんだから。

無口といえば、茂美先輩もとてつもない無口だよな。あまりに喋らなすぎて、どんな声してるのか、よく覚えてないもの。無口だけでも、でも自分と違って、全然おどおどしてなくて、むしろ堂々と自信持ってるように見えて。かっこいいなあ。

……って、他人ばかりが、よく見えるけど、
……結局、わたしは、どうなりたいんだろう。
明るくなりたいのか。

それとも、強くなりたいのか。

単に楽に、自由になりたいのか。

先輩たちは性格こそ色々違うけど、みんな自信もっていて、楽に、
楽しく生きているように見えるけど……悩み、あるんだろうか。色
んな悩み、辛いこと、乗り越えてきて、いまこうしているのだろう
か。

「痛っ！」

バチッという音とともに、顔の右側になにか大きな物が当たった。
驚きと、痛みとに、葉月は顔を歪めた。

足元に転がるボール。

「ごめん、大丈夫？」

そうだ、いま友原鈴とペアになってキックの練習をしているのだ
った。

「あ、あ、だ、だいじょうぶ」

「うぶ」のところまでは多分発音出来ていないと思う。

「もう、葉月ったらばーっとしてんだもん」

「ごめん」

「ほら、葉月の番。いくよ」

鈴はボールを持った両手を、胸の高さに上げた。
投げた。

葉月は鈴の胸目掛けて蹴り返すと、少し横にステップ。戻ってき
たボールをキャッチした鈴は、また 葉月へと投げる。葉月、今度
は反対の足で蹴り返し、先ほどと反対方向にステップを踏む。二十
回ワンセットの練習メニューだ。

「お、葉月、すごいまくなっただじゃん」

山野裕子が後ろで見ていた。

「あ、ありがとうございます」

「もっと上級者になれる練習方法教えてやろうか」

「……どんなのですか？」

「鈴、投げてみな」

鈴は裕子へとボールを投げた。

「北海道！ ナハッ！」

裕子は両肘を曲げて万歳しながら、ボールを蹴り返した。

「埼玉県！ ナハッ！」

また蹴り返した。

「千葉県！ ナハナハッ！ って、こんな感じ。集中力つくぜ。県の名前覚えるし。じゃ、やってみな」

「え、えっ」

慌てる葉月。そんな恥ずかしいこと、急にいわれても。

「おきなわ……」

鈴の投げたボール、葉月の足元に転がった。

「ほら、そこで、両手上げて、ナハナハナハッって、これがキモなんだから」

「そ、そんなこと、いわれても……」

葉月は下を向いて、顔を真っ赤にしている。

「王子先輩、遊んでないで真面目にやってください！」

梶尾花香にぴしゃりとしかれた裕子、

「ごめんなさ〜い」

と小さくなってしまった。

花香はにっこりと笑った。さっきのお返しをしたのである。

葉月はほっとため息。花香のおかげで、先輩の無理難題から、なんとか逃れることが出来た。みんなの前であんなことやらされたら、もう生きていけない。

6

午後六時半。

九月も下旬。暦のうえでは秋というものの、照り付けてくる太

陽の日差しはまだまだ強力だ。暑さ寒さも彼岸までというが、あと数日後に涼しい季節がやってくるなど、とても信じられない。

山野裕子と佐治ケ江優は学校の制服姿で、木々に囲まれた薄暗い道路を歩いている。

グレーのスカートとベスト、白のブラウス、胸元には赤いリボン。佐原南高校の女子用の夏服だ。二人とも大きなスポーツバッグを背負い、手には手提げカバンをぶらさげている。

平日は部活練習があるため、早くても帰宅はこのくらいの時間だ。遅いときには七時半を越えることもある。

二人が歩いているのは、通学路である山林の県道。麓にある駅を目指し、ひたすら下っているとこだ。

今年から増便された市営バスだが、この時間帯は相変わらずの一时间一本ペース。だからタイミングよくバスに乗れるときもあるし、四十分も五十分も待つくらいならばと歩いてしまうこともある。今日がまさにそうで、ちょうどタッチの差でバスに逃げられてしまい、徒歩下山だ。

時折、木々の隙間から、山の下の方の広がった風景が見渡せる。絶景とまではいかないが、気持ちの良い眺めである。駅周辺の町並み、のどかな田んぼに、その向こうを流れている利根川も見える。

二人は歩きながら他愛のない会話をしている。会話といっても、ほとんど一方的に山野裕子が喋っているだけ。佐治ケ江は専ら領き担当で、あとは聞かれたことに答えるくらい、自分から話題を振ってくることはほとんどない。

本当に口数の少ない佐治ケ江だが、去年と比べて相槌打つようになってきた分だけだいぶマシだ。

ようやく山の麓へと辿り着いた。単なる山奥の田舎といった町並みが、がらりと変化した。時代劇のセットかと思ってしまうような、古臭い建物ばかりになった。ここ佐原は小江戸などとも呼ばれる観光地なのである。

歩いている間に、すでに七時を過ぎており、もう日は完全に暮れ

ている。

二人は夜の小江戸を歩いていく。途中、九頭和菓子という看板の店の前を通る。後輩部員である九頭葉月の親が営んでいる店である。

「こんばんは」

入り口のガラス戸が開いており、カウンターの向こうに葉月のお父さんが座っているのが見えたので、裕子は挨拶をした。

「お、裕子ちゃん。こんばんは。葉月頑張ってる？」

「うん。頑張ってるよ。じゃあね。今度お菓子買いにくるね」
裕子たちは歩き続ける。

「買うなんて水臭い。今度学校に持ってくよ！」
背後からお父さんの声。

「葉月が困るから、やめたほうがいいって」

裕子も後ろを振り返って、大きな声を出した。

「面白いおじさんだね」

佐治ヶ江は頷いた。

夜の小江戸を歩き続ける。平日の夜だから、観光客と思われる人の姿はほとんど見られない。

裕子と思うのだが、この時間になると、心なしか、外国人観光客の比率が高くなるような気がする。

向こうから、若い女性が歩いてきた。渋谷原宿かと思わせるくらいに服装が派手。巨大なサングラスを、目の上にあげている。

「お、あの姉ちゃんすげーボディ。腰くびれてっし、おっぱいでっけー！」

人目はばからない大声とその内容とに、佐治ヶ江は顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

「あたしもサジもぺったん胸だからさあ、うらやましいよねえ」
そういうと裕子はわははと笑った。

「あ、あたしは、別に、どうでもいい」

「またまたあ。そうだ、セカンドキッチン寄ってこうよ。腹減った」
「いきなりいわれても。買い物があるけえ」

佐治ケ江は広島出身。目立つのも嫌だからこちらでは広島弁を使わないよう注意しているが、油断していると出てしまう。

「スーパーカートリでしょ、付き合ってあげるよ。だからちょっとだけ、電車一本遅らせてさ。おごってあげるから」

今度来る電車が約十五分後なので、一本遅らせれば四十分以上の時間が作れる。なにせJR成田線は三十分一本しか電車がこないから。

「それじゃ寄ってこうか。お金は自分で出すよ」

セカンドキッチンというのは弱小ながら全国展開しているファーストフードのチェーン店。佐原駅すぐそばにはこの店しかないので、この駅を利用する中高生たちは重宝している。

裕子としてはモスバーガーがあると嬉しいのだが、贅沢もいってられない。千葉県に三店舗しかないというセカンドキッチンの一店舗が佐原にあるというだけでも奇跡だ。

セカンドキッチンの店内は中高生で賑わっている。

席がちょうど二人分しかなかったので、裕子が場所取りをして、

佐治ケ江が二人分の注文をした。

裕子が座席について待っていると、しばらくして佐治ケ江がトレイを持ってきた。

裕子の分はハバネロダブルバーガー、ピリ辛甘ダレチキンバーガー、コールスローサラダ、アップルパイ、クリームチーズシェーキ。佐治ケ江はアップルパイと烏龍茶。

佐治ケ江はテーブルに、運んで来たトレイを置いた。

「ありがと。サジ、ちゃんと注文出来るようになったじゃん」

「まだドキドキするよ」

はじめて裕子と佐治ケ江が一緒にこの店に入ったのは半年前。その時の佐治ケ江は緊張してしまっ言葉がつかえつつかえ、しかも声が小さなものだから、なかなか店員に注文を理解してもらえず、裕子の助けでなんとか注文することが出来た。

「よくそんなんでもつねえ」

裕子は佐治ヶ江の、アップルパイと烏龍茶しかないトレイに目をやった。

「家に帰ってからおばあちゃんとお母さんと食べるから」

「あたしだって帰ったら食うけど、それまで腹減んじゃない。帰り道に食べる予定のパン、買うの忘れてちゃってさあ」

「そういう時くらい、我慢すればいいのに」

「そーいやサジって、おばあちゃんとお母さんと女三人で暮らしてんだっけ」

「お父さんだけ仕事で広島に残っているから。でもあと、おじさん夫婦も一緒に住んでいるよ。だから、五人」

佐治ヶ江優は三年前、中学二年生まで広島に住んでいた。小学高学年の頃からいじめを受けるようになり、中学に入ってもいじめはおさまらず、むしろエスカレートし、それが原因で祖母のいる千葉に越してきたのだ。

「関サル、対戦相手はやく決まんないかな」

「予定では来週発表だっけ？」

「そう。去年はもうとつくに決まっていたけど、今年は遅いんだよね。茂原藤ヶ谷をどこと当てるかで揉めてんじゃないの？」

裕子はそういうとガハハと笑った。

関サルというのは、関東高校生フットサル大会の略称。ここ数年、注目を集めている大会である。

去年の千葉県地区予選、佐原南の初戦の相手が、その茂原藤ヶ谷商業高等学校だったのだ。体格にものをいわせた荒っぽいプレーで有名な高校である。

「試合日程はやく分かったほうがモツベーションにも繋がるしさあ」
「モチベーション」

「そうそう、頭いいね君イ」

裕子はクリームチーズシェーキをストローで吸い込んだ。ちょうど一年前に期間限定で販売されたことのあるシェーキで、一年ぶりに復活したのである。

「一年生で、誰が戦力になりそうかなんだけど、サジどう思う」

「みんなよく頑張ってるから、誰がどうかはいえない」

「サジ、それ優しいんじゃないかって気が弱いだけだぞ。誰かを持ち上げたからって、誰かを落とすことになんかならないって」

「そんなこといわれても」

「じゃあさ、サジから見たあいづらのいいところあげてみてよ」

「ハナはちょこちょこ動き回れるタイプ。久樹先輩と似たところがあるかな。葉月は全体的に無難にこなしそう、あと意外と視野が広い。鈴はあたしなんか比較にならないくらい体力がある。王子並。どちらかといえば、守備に向いていると思う。里子は足元の技術が凄い、でも周囲が見えなくなるところがあるかな。もうちょっとコツを覚えれば、一対一は相当によくなる。でも周りを使うことを覚えないと、対応されちゃうね。咲はグレイロだから、あたしにはよく分からない」

「うーん。それ聞くと、誰か選べなくなってくるな」

「だからいったでしょ。結局決めるのは王子と晶だよ。部長と副部長なんだから」

「晶にも聞いてみるかあ。……あ、やばい！ 時間！」

裕子の言葉に佐治ヶ江も慌てて店内の時計を見る。そして立ち上がった。

トレイをゴミ捨てコーナーに持っていき、分別しはじめる佐治ヶ江。

「ほっときや店員がやってくれるよ」

しかし佐治ヶ江、まったく聞かないので、しょうがなく裕子も一緒に作業する。

「よし終わった。いこうぜ」

スポーツバッグと鞆を持ち、店を出た。

駅に向かって、走る。

すでに電車がとまっており、発車ベルが鳴っている。

二人は、定期券をかざし改札を抜ける。いや、裕子だけ、自動改

第二章 それでも私は悪くない

1

九頭葉月と生山里子是一对一で向かい合った。

葉月は大きく足を伸ばし、ボールを奪おうとする。

里子は軽い跳躍でそれをかわし、続く前方へのステップで葉月の横を風のように通り過ぎる。

振り返った葉月が見たのは、ドリブルをする里子の後ろ姿。あの動きの中でいつボールをコントロールしたというのだろう。いやそんな疑問は後だ。葉月は慌てて里子の背中を追った。

生山里子、今度は真砂茂美と向き合っていた。茂美はベツキという守備的ポジションでスタメンを張るくらいだから、簡単には抜かせてくれないだろう。しかし里子は余裕の表情。難しい分だけ攻略の過程が楽しめるというだけの話、自分には無理だなどつつめにも思っていない。しかし……

「はい、茂美、サジとメインを代わって」

ラインの外から山野裕子の指示が飛ぶ。

里子は脱力。でもサジ先輩のほうがりがあるか、と気を持ち直す。

現在行われているゲームは、一見するとゴレイロを入れない四対四の紅白戦だ。通常のそれとは大きく異なる点がひとつあり、チームではなく個人のための紅白戦だということ。

四人のうちの一人がボールを持ち、ドリブル、味方とのワンツーなどで前へ進んでいく。その者のゴールのみが得点と認められる。この「一人」がメイン、残りの三人がサブと呼ばれる。

サブは相手メインのボールを奪ったり、味方メインからのパスを受けて返すのが役割。

山野裕子考案の、先週から実験的に取り入れている練習方法だ。生山里子、今度は佐治ヶ江優と向かい合うことになった。

里子は右足でボールを踏み付け、佐治ケ江の出方をうかがう。他の相手は痺れを切らせて自ら動いてきたのでそれに対応するだけでよかったが、佐治ケ江はぴくりとも動かない。軽く、右に、左に、とフェイントをかけてみても、まったく力むことなく、少しもぐらつかず、そよ風に吹かれる柳のごとくにただ立っている。里子は少し不気味に思ったが、しかし動ぜず立ってるなんて誰でも出来ること。相手が動かないなら、自分から動けばいい。里子は単純なフェイントを仕掛けた。右、左、と見せて、右へ。ボールをちゃんと蹴り、佐治ケ江の横を抜けた。さっき梶尾花香を抜いたときとまったく同じ方法だ。

花香同様、佐治ケ江もぴくりとも動けない。
勝った。

その満足感、優越感は、ほんの一瞬しか持続しなかった。自分の足元にあるはずのボールがないのだ。後ろを振り返ると、ボールは佐治ケ江の足元にあった。

いつの間に……

でも、サジ先輩の能力値が高いことなんてとくに知っている。想定範囲内。何度でも、奪い返せばいい。

さっと寄ってくる春奈と鈴に背を向け、佐治ケ江は再び里子と向き合うことになった。今度は里子がボールを奪う立場だ。

春奈が佐治ケ江の背後からぴったり体を寄せて足を出し、ボールを蹴り出そうとする。

「手ェ出すな！」

里子は叫んでいた。

「サジと勝負したいみたいだ」と春奈は小声で鈴にいった。二人は里子たちの勝負を見守ることにした。

しかし里子は、佐治ケ江に一对一の勝負を挑んだ方がいいが、その佐治ケ江からまったくボールを奪い取ることが出来ない。佐治ケ江と他の部員との練習を見て、クセは読み取ったはずなのに。足を付き入れてもそこにボールはなく、体を入れても軽くかわされ、水を

殴っているかのように手応えがなく体力だけ消耗していく。

……だんだんと、イライラしてきた。

ボールは佐治ヶ江の右踵のすぐ後ろにある。突き飛ばしてでも奪ってやる、と思っていたら、唐突に佐治ヶ江は走り出し、里子の脇を抜けていく。

なんでボール放棄？　と思ったら、先程までボールがあったところにボールがない。振り返し、佐治ヶ江の背中を見る里子。宙から落ちてくるボールをトラップした佐治ヶ江は、そのままドリブルに入った。

かつ、と里子の頭に血が上った。ヒールリフトだか、なにかをやったんだ。しかもそんな動きまったく見えなかった。死角を計算して、足を動かしたんだ。あたし、完全に遊ばれてる。バカにされている。

里子は佐治ヶ江に走り寄ると、ユニフォームの背中を掴み、袖を掴み、真横に投げ倒していた。

「ボールは！」

自分が焦っているからか、佐治ヶ江が倒れたまま巧みにボールを隠しているのか、なかなか見つからない。すでに誰かにパスを出しているのかも、と周囲を見回すが誰も持っていない。

やはり佐治ヶ江が持っていた、倒れたまま踵で梶尾花香へとパスを出した。

花香は前方へとパスを出す。メイン、つまり佐治ヶ江に対してしかパスを出してはいけないのに……いや、いまのいままでここに倒れていたはずの佐治ヶ江が、いつの間にか前を走っている。花香からの長いパスを振り向きもせず、背を向けたまま、軽く片足を上げてボールを受けとった。

里子はすっかり頭が混乱してしまい、ただ茫然と立っているしかなかった。

葉月とのワンツースで鈴を抜くと、佐治ヶ江はゴールネットの中にボールを流し込んだ。

「はい、終了。みんな集まれ」

紅白戦メンバーの八人、裕子の元へとやってくる。

いきなり裕子は里子の鼻を力任せにつまみあげた。

「里子オ。手エ出すんじゃないかねえだろコラ、春奈先輩に対して一年坊主が何様のつもりだよ」

鼻をつまんだまま里子の顔をぐりんぐりん回してから、手を離れた。里子はそれでようやく興奮状態から覚めたようで、

「あたし、そんなこといっちゃいました？　どうも済みませんでした、先輩」

「あたし全然気にしてない」

春奈はへらへらと笑っている。

「気にしなきゃだめなの！　しかし里子さあ、今年からとはとても思えないくらい、凄くいい動きしてたけど、クラブ荒らしたのめ分かるくらい。でも、まさかサジの優ちゃんにガチンコ挑むとはねえ。で、どう、フットサル部辞められそう？」

「ご心配なく。絶対、年内にはサジ先輩を追い抜きますから。あと、あたし、荒らしじゃないです。制覇したぞって自信持って、次の部活にチャレンジしたいだけですから」

「分かった分かった」

えらい一年がいたもんだ。山野裕子は苦笑するしかなかった。

2

ぎん、と音だけは勇ましいが実際の打球はボテボテのゴロ。北川明美はしまったと思いつつも一塁に向けて走る。ピッチャーだってソフト部なんだ、ボテボテだって仕方ない。

佐治ケ江優は走り寄り、屈み腰になりグローブを広げる。しかしボールは虚しく股の間を抜けていく。トンネルのエラーだ。慌ててボールを追い掛ける。

「ラッキー」

北川明美は一塁ベースを蹴り、二塁を目指す。

佐治ケ江はようやくボールを拾い、二塁へ向けて送球するが、ボールは五メートルも飛ばずに地面に落ちてしまった。

北川明美は二塁ベースも蹴った。

二塁手の山岸陽子が走り寄って、落ちたボールを拾い三塁に送球。だがぎりぎり間に合わず、北川明美の三塁打となった。

北川明美は両腕を上げて喜んだ。

「ごめん」

「優ちゃん、気にしないでいいから」

ピッチャーの近藤直子、女子ソフトボール部の副キャプテンで、後輩の面倒見がいいので知られている。北川明美と異なり、ソフトボールが全然出来ない者にも理解がある。

水曜日の四時限目、体育の時間、今日は校庭でソフトボールだ。

「サジ、ドンマイドマンイ。明美は、このあたしが絶対に生かしてホームに還させやしないから大丈夫」

センターを守る山野裕子の叫び声が轟く。

「物騒ないいかたすんな！ あんたバカだけあってバカ力だから、背中に当てられそうで怖いんだよ！」

三塁から北川明美もいい返す。

「頭にブチ当たったって、それ以上悪くなりようないだろ」

「バーカ！ バカ裕子！」

「オマエガナー」

さて、続いて田畠秀美の打順である。体格が良いので力はある。うだが如何せん運動音痴。近藤直子は多少手加減気味の投球をしてあげるが、しかしそれでも空振りしてしまった。スイングの高さがおかしいどころかタイミングも大幅に遅れている。

その次も、どうぞ打って下さいというようなボールを空振り。佐治ケ江優のときとまったく同じだ。しかし佐治ケ江と異なるのは、三球目で奇跡が起きたこと。

田畠秀美の一振り、ジャストミート。ボールは天高くぐいぐいと飛距離を伸ばしていく。打球は北川明美が恐れる山野裕子の守備範

囲へとゆっくり落ちていく。

いや、大丈夫そうだ、右中間を抜けそうだ。北川明美は素早く二歩後退して三塁ベースを踏み付け、タッチアップ、本塁目掛けて走り出した。これでまずは同点だ。

雄叫びをあげてボール落下地点へと走る山野裕子。それは北川明美の予想を遥かに越える速度だった。裕子の野生的な走りは、田畠秀美のささやかな奇跡をむざんにも蹴り碎いた。ボールの落下地点へ間に合ってしまったのだ。見事なダイビングキャッチを見せ、これでツーアウトだ。素早く立ち上がり、三塁に向けて送球。

北川明美、周囲の指示に慌てて戻る。しかし、あと一秒、あと五メートル、というところで、三塁手のグローブがズバツと豪快な音をあげた。

北川明美もアウト。スリーアウトで四回の裏終了。授業時間の関係で、これで試合終了だ。裕子たちのチームが、4－3で勝利だ。

裕子たち外野の三人は、小走りで戻ってくる。

北川明美は裕子に話し掛けた。

「あんたほんとバカ力。ソフト部に入んなさいよ。バカでもそこまで腕力ありや役立つでしょうから」

「無理だよ。フットサル部の部長なんだから」

「もう。今日は、あんた一人にやられたよ」

二人は、手をパシッと叩きあった。罵りあおうと試合が終わればノーサイド。

「そういや裕子フットサルだったね。頭悪いくせによく部長つとまるね。技より力のあるたに難しいんじゃないの」

「大丈夫、技の担当ならあちらにおわす」

前方をとぼとぼ歩いている佐治ケ江を手のひらでさした。裕子は北川明美の肩を叩くと、佐治ケ江へと駆け寄った。

「サジ、一緒にいこっ」

佐治ケ江の横に並んだ。

「さっきのトンネル、あれ凄い受けたあ。遠くから見てて、笑っち

やったよ」

「運動苦手なんだから、しょうがないじゃない」

「運動が苦手って……なにおっしゃってんのこの人はもう」

裕子は、佐治ヶ江の頭を肘でゴツンゴツンと小突く。

「異色なコンビだなあ」

北川明美は思わず呟いていた。

3

「ダメダメじゃん」

生山里子、教室の窓枠に組んだ腕をかけて、その上に顎をのせている。

社会の時間なのだが、先生の都合により急遽自習時間になった。

里子は、校庭に佐治ヶ江優の姿が見えたものだから、勉強そっちのけでずっと外の様子ばかりを見ていた。

「なんだ里子、知らないの？ サジ先輩っていつもああだよ」

梶尾花香、彼女は里子と違いちゃんと自習している。ただし社会でなく古典の宿題だが。

「フットサルは凄いの、でもさあ、そういう不器用なところかわいいよね」

「確かにフットサルは凄いやなあ」

里子はしみじみと呟いた。

「お、里子が相手を褒めるなんて珍しい。早くも降参か」

花香は里子のほっぺたをつついた。

「そんなわけないでしょ。絶対、抜かしてやるから。あたしにクリア出来ない部活はない」

北校舎三階の廊下、静まりかえっていたのが足音と談笑とで騒々しくなってきた。

階段を上って、一人の女子生徒が廊下へと飛び出してきた。

「まったく動き足りねー！」

山野裕子だ。

「王子、まだ授業中だから」

大声を佐治ケ江優に注意される。

終業のベルが鳴った。

「授業終わったからいいだろ。おりゃあ！ メシじゃー！」

「わざわざ叫ぶことないのに」

ぞろぞろと、クラスの他の子たちも階段をのぼり、廊下へとやってきた。

「うるさいよ、バカ。まだ終わってないクラスあんだよ」

北川明美にも注意された。

裕子たちの隣の教室の前で、両手にバケツ持って立たされている女子生徒の姿。フットサル部副部長の武田晶だ。

「うわ、バケツ持って立たされるなんて、漫画だけかと思っていたよ。なにやらかしたん、今日は」

ただ立たされたり正座させられたりは、ほとんど毎日な裕子だが。「今日は、って自分と一緒にすんな。ゴーレムの時間に居眠りしたのがバレたの、三回目なんだよ」

「ゴーレム居眠りすると立たせるんだ。あーよかった。たまたま、まだ一度もあいつの授業で眠ったことねーや。ありがとね、教えてくれて。お礼に、もう少しそこにいていいよ。まだ授業終わってないんでしょ。よければ昼休みも立ってていいから」

晶は、目の前の畜生を転ばせてやろうとひよいと足を突き出すが、裕子は猿のように身軽に飛びのいてよけた。

「ごめんね」

なぜだか佐治ケ江が晶に謝る。と、その瞬間、佐治ケ江は、びっくりと驚いたように後ずさりをした。晶が顔を歪めてなんだかタコミたいな表情になっていたからだ。

「お、お買い上げ、あ、あり、ありが、ございました、また、また

おこし、くだ、くださいっ」

九頭葉月は深く頭を下げた。

お客さんが扉を開けると、扉に付けられた鈴がちりんちりんとう鳴った。ちりん、さらに小さく音が鳴り、ゆっくりと扉が閉じた。

葉月一人きりになった。

ようやく、頭をあげた。

椅子に腰を下ろした。

左胸に手を当てる。まだ、ときどきしている。

ため息。

どうすればいいんだろう。

この前はボロが出ないようになるべく余計なことを喋らないようにしてみたのだが、失礼な対応と思われたかと不安になり、やはり心臓のどきどきがなかなかおさまらなかった。かといって今日のようになにか喋ろうとしても、つかえつつかえで全然思うように言葉が出てこない。

もどかしさと、恥ずかしさとで、なんともいえない気持ちになる。

九頭和菓子店。佐原駅周辺の、江戸情緒ある町並みの中にひっそりと建っている和菓子屋で、創業百三十年年の、歴史のある店だ。

葉月の父親が子供の頃までは、代々ここに住んでいたらしいが、現在は完全に店舗と倉庫。住居は線路を越えて利根川土手近くにある新興住宅地に構えている。

葉月は店のお手伝い。父親が配達に出かけている間の店番を頼まれている。

本来、配達は早朝、もしくは従業員のいる昼に行うのだが、今日は臨時に夜の配達をしなければならなくなったのだ。

机の上の、横にどかしておいた教科書とノートを取り、勉強を再開した。もうお客さん来ないといいんだけど。お客の少ない店でも困るけど。どうせならお昼にじゃんじゃん来てくれればいいのに。

お店の裏側から耳慣れたエンジン音が聞こえてきた。お父さんが帰って来たようだ。

「ご苦労さん。配達終わったから、もういいよ。ありがとう」

ちよっと小太りの、ちよっと頭のとっぺんの寂しい中年男性が、裏口から入ってきた。九頭葉月の父親、九頭祐介である。年齢四十九歳。

「お疲れ様、お父さん。もうすぐ閉店時間でしょ。このまま宿題やってるよ。一緒に帰ろう」

お客さんと話すのは苦手だが、この店自体は大好きなのだ。

「了解。そういや、いまそこで裕子ちゃんとおったよ」

「王子先輩と？」

「そう、お前らのいう王子先輩と。冗談ばかりいって、面白い子だよな」

「面白すぎるよ、あれは。度を越してるよ」

「それだけじゃなく、真っ直ぐでさ、いい子だよ」

「うーん。でも、ボール蹴って、ナハナハなんて叫べっていうんだよ。そんな恥ずかしいこと、出来るわけないじゃん」

お店の宣伝のためか娘の応援のためかは分からないが、父祐介は以前、フットサルの試合会場に姿を見せたことがあり、部のみんなと面識があるのだ。

まあ、確かに、お父さんがいい子だというのも分かるけどね。明るいし、裏表もないし。口は悪いけれども面倒見はいいし。あんなふうに生きられたら、毎日気持ちがいいだろうな。それに比べて自分は、気弱でなにもいえなくて、嫌なことを嫌ともいえず、そのくせ裏では、うじうじ悩んだり、恨んだり、ねたんだり、まるでいいところがない。家族以外と話そうとすると、あがってしまっただく会話にならないし。

「お父さん、あたしってダメかな」

「なんだ、いきなり。ああ、裕子ちゃん褒めたことか。彼女には彼女のいいところがたくさんあり、お前にはお前のいいところがたくさんあるんだ。自分の良いところを磨け」

「気が弱くてなんでもハイハイ聞いちゃうとことかあ」

「バカ。でも、そういうのもいいんだぞ。コンプレックスがあるってことは、同じような悩みを持ってる人の気持ちが分かるってことなんだよ。優しくなれるんだよ。お父さんだって、足が短い人や禿げてる人には優しいぞ」

「その理屈を持ち出したら、短所のある人なんて誰もいなくなっちゃうでしょ。そうじゃなくて、文句なしのあたしの長所を見つけたいんだよ。0点取ることと0点の人の気持ちを知らりたいんじゃないで、百点、までいなくても良い点を取りたいの。王子先輩はお父さんがいったようにとにかく性格が魅力的だし、サジ先輩はフットサルが信じられないくらいに上手。そこまで凄くなくていいから、自分もなにか一つくらい持ちたいんだよ、自慢出来ること。自分のなにがいいのかさっぱり分からないから、伸ばしようがない」

「別に他人様に自慢するものなんかなくても、お前は充分に魅力的で、お父さんお母さんにとって自慢の可愛い娘だぞ」

「お父さんにそんなこといわれてもあんまり嬉しくないなあ。……あのさあ、可愛い娘と思っているなら、もう試合の日に会場に来ないでよね。凄い恥ずかしいんだから。お菓子配ったり、王子先輩と叫んだり歌ったり、試合中もひっきりなしに叫んでるし。太鼓ドンドン叩いて、旗振って」

「あったつけ、そんなこと」

「あたしが試合に出てるならともかく、控えにも入ってなくて、ただ座ってるだけなのに、ずっとあたしの名前叫び続けてて、ほんっとに恥ずかしかったんだから」

「分かった分かった。じゃ、そろそろ帰ろうか」

5

「必殺くすぐり攻撃！」

生山里子は健の全身をこちょこちょしはじめた。健は四歳の男の子で、梶尾花香の弟だ。笑いながら身をよじる健。

「喜んでるけどやり過ぎると急に泣き出すから気をつけてね」

梶尾花香が注意を促す。

「あたし不器用だからそんな加減出来ないよ。だから健ちゃん泣くなよ、君は男の子なんだからな」

いう通り、くすぐりの手はいっこうに緩むことがない。

「里子、子供好きなんじゃん」

梶尾花香はずっとノートと向き合ってたまま。自分で書いた字ながら、なんと書いたのか判別に困るところがあり、時折渋い表情を浮かべている。モキチ先生、黒板消すのが無駄に早いんだよ。と心の中で愚痴をいう。

「別に好きでもないよ。花香の子だから可愛いだけ」

「あたしの子じゃない！」

「あ、そうか。実質お母さんみたいな感じだからさあ、ハナが。お母さんがお父さんで」

「うち母子家庭だってだけなのに、なんだかややこしい家庭のようにはいかないでよ」

ここは梶尾花香が住んでいるアパートだ。

本日、学校で大変な出来事が起きた。モキチの現代国語、オカマ貴族の数学、と二科目も宿題を出されてしまったのだ。しかも示し合わせているのではないかと思えるほど、今日はどちらも難題。花香は里子に対し、運動では全面的に負けを認めているが、勉強面ではライバル、宿題見せ合うような仲ではない。しかし事情が事情、今日だけは共同戦線を張ることにしたのだ。

でも、里子はある程度進めたところで、休憩といって梶尾家三男坊の健と遊んでばかり。まわりついてくるから仕方ないのだが。

「お姉ちゃんたち忙しいんだから、向こうの部屋で子供たちだけで遊んでなさい！」

「はい」

健はすっと立ち上がると、兄の啓太と亮太を連れて奥の部屋へ移動した。

梶尾家の男子は、啓太九歳、亮太七歳、健四歳。末っ子の健が一

番しっかりしている。

「ね、啓太ちゃん、亮太ちゃんときて、なんで健ちゃんだけ太がつかないの？」

「太って普通は長男に付けるものなんだって。健も本当は健太の予定だったんだけど、お父さん、生まれる直前に誰からかそう聞いて、名前を変えたらしい」

「へえ、知らなかった。太って長男に付けるものなんだ」

「太郎次郎なんていうでしょ。……いけない、お鍋忘れてた。ちょっと見てくるね。里子も晩御飯食べてく？」

「せっかくだけど、遠慮する。家でやりたいことあるから、もうそろそろ帰るよ。宿題の残りは、別々にやろう」

帰るということを聞きつけ、また梶尾三兄弟が隣の部屋からあらわれ、里子にまわりついてきた。

里子は五分ほど遊んであげると、梶尾家を後にした。

食事の準備は出来た。その前にまずお風呂だ。

ここはボロアパートだけど、お風呂があるだけいい。一昨年まで住んでいたところなんて、お風呂がなかったのだから。近所の銭湯が潰れてしまったことがきっかけで、このアパートに引っ越してきたのだ。

お風呂には、まず啓太と亮太の二人が入り、二人が出て花香が体を拭いてやり、それから花香と健が入る。いつもそういう順番なのだが、でもよく、花香たちが入っていると、啓太と亮太が飛び込んて来ることがある。今日もそうだった。

「こら、あんたらもう入ったでしょ！」

「いいじゃん。健だけ姉ちゃんとズルイ」

「せっかく拭いてあげたのに、もう」

啓太と亮太は姉の言葉などまったく聞かず、湯船の中に入ってきてしまう。

花香もなんだかんだいいながら、ぎゅうぎゅう湯船を楽しんで、

はしゃいでしまう。

ほんとにこいつら子供なんだから。……でも自分だって子供だよな。幼い弟がいるから、大人の真似事だけしているけれど。

花香は湯船の中に顔の半分ほどを沈めた。気づくと弟三人も同じことをしている。

「真似しないの!」

そういうと、すかさず啓太が良太に、

「真似しないの!」

亮太が健に、

「真似しないの!」

健は言葉を回す相手がおらず、きよろきよろ首を振る。その仕草がなんともおかしくて、花香は爆笑してしまった。

食後の後片付けをしていると、電話のベルが鳴った。どうせ母親からだ。帰りが遅くなりそうだという連絡だろう。出てみると、果たして本当にその通りだった。

こっちはもう、母からいわれている時間に三時間を足して予定を組んでいるから、そんな連絡は必要ないというのに。

平日は朝も夜も、ときには休日ですら、弟たちは母親の顔を見ることが出来ないのだと、とうに分かっていることなのに。

しかし、今日の電話の用件はそれだけではなかった。

「なんで」

花香は少し語気を荒らげた。

今度の日曜日、啓太と亮太の通う小学校で運動会がある。急な仕事が入り、それにいかれなくなってしまったというのだ。

「分かるよ。分かるけどさあ。仕事大切だよ。いつも感謝してる。

でも、そういう時間くらい作って欲しくて、でも、でも、仕事大変なものも分かるからっ、だから家事を全部やってるのに」

父親に死なれ、母親が一人で生活費を稼いでいる。花香としては、部活どころか学校を辞めてでも働いて家計の足しにしたい気持ちで

いる。自分は女だからまだいいが、弟たちが、いきたい学校にもいけないなんて、あってはいけないと思うから。

母は、四人の子供たち全員とも、自分の働いたお金で絶対に高校までは出させるといつている。でも例え公立高校だってそれなりのお金はかかるのだ。しかし現在、学資保険などもかける余裕のない完全な自転車操業。本当に弟たちを、望む学校にいかせてやる事が出来るのか。花香は、自分が学校を辞めて働けばその貯金が出るのに、と思っている。そのことを母に話すと必ず、高校くらいは絶対に卒業しろといわれる。それならばせめてアルバイトくらいしたいが、それすらも禁止されている。学校の授業に、部活に、友達との会話に、と高校生ならではのことを全て堪能して欲しい、というのが理由である。

だから花香は、遊ぶということをまったくせず、学校関係以外はとにかく家事に専念している。母親に心置きなく働いてもらいたいということと、母と弟たちの最低限のふれあいの時間くらい作ってあげたかったから。

なのに、せっかく作ってあげた貴重な時間にまで、仕事を入れてしまうなんて……

「いいよ、仕事してなよ。日曜はあたしがいくから。じゃあね！」
受話器を叩きつけるように置いた。

「姉ちゃん、なんでおっきな声出してんの？」

すぐそばに、長男の啓太と次男の亮太が立っていた。

亮太のその何気ない問いに、花香は一瞬頭の中が真っ白になった。そして、

「あんたたちがいるからでしょ！」
叫んでいた。

我に返った花香が見たのは、びっくりした亮太の顔。みるみるうちに目に涙がたまり、そして大声をあげて泣き出してしまった。

連鎖反応で啓太も泣き出した。

おろおろとうろたえる花香、心になにか込み上げてくるものがある。

ったのか、ついには彼女まで声をあげて泣き出してしまった。
座り込み、弟たちの頭を抱え、一番の大声で泣いている。

お互いの泣き声が胸の奥の防ぎようのない部分を刺激して、次々やってくる悲しい気持ちに、三人はいつまでも泣き止むことを知らなかった。

三男の健がちよこちよこと歩いてくると、花香の頭をなでた。まるで、親が子をあやすかのように。

花香は健も抱きこみ、三人の頭をぎゅっとおさえた。

「ごめんね。酷いこといっちゃってごめんね。お姉ちゃん、みんなのこと大好きだから。誰よりも大切に思っているから」

6

一瞬の隙についてするりと抜け出した佐治ヶ江優、ためらいなく右足を振り抜いていた。

至近距離からの鋭いシュートに、相手ゴレイロはブロックの体勢にすら入る間すら与えられず、気づくとゴールネットが揺れていた。「よっしゃ、追いついた。サジ、やったね」

山野裕子が佐治ヶ江に走りより、背中を叩いた。二人とも青い上下のユニフォームを着ている。胸には「県立佐原南高校」の文字。佐原南高校フットサル部のユニフォームだ。

現在行われているのは、我孫子東高校との練習試合。この高校は、フットサル大会で毎回のよう上位進出している強豪校だ。ユニフォームは真紅の上下。

現在青いユニフォームを着てピッチに立っているのは山野裕子、佐治ヶ江優、真砂茂美、梶尾花香の四人。ゴレイロの武田晶はFPと区別がつくようグレーのユニフォームだ。

ここは我孫子東高校の、体育館。

我孫子東高校の女子フットサル部には、三十人以上の部員がいるが、本日出場しているのは、公式戦に出ていないような、いわば二軍選手のみ。その条件ならば、と練習試合を受けてくれたのだ。

でも、ピッチの外では、我孫子東の主将である中島祥子が腕を組んで、試合を観ている。別に構わない、と裕子は思っている。主力の戦いを観られて困るものでもないし、確か今年の関サルからは、我孫子東とは地区予選のエリアが異なるため、奇跡が起きて勝ち進まない限りはまず対戦することはないからだ。レベルの高い相手と戦えて、佐原南のほうにこそ利益が大きい。

二十分二セットと、最後に十分一セットの変則試合で、現在一セット目だ。得点は一对一の同点。佐原南は開始早々に単純なミスから失点してしまったが、その後は粘り強い守備で、ボールは回されるもゴールは許さず、そして九分、佐治ヶ江のゴールで追いついたばかりである。

佐原南のベンチには、篠亜由美、衣笠春奈、九頭葉月、生山里子、友原鈴、梨本咲、の六人。

二年生の篠亜由美と衣笠春奈の二人は、声を出して選手たちの気持치를盛り上げ、そしてピッチ内の部長に代わって戦術面での指摘や修正の指示を出している。

一年生で声を出しているのは友原鈴だけ。葉月は小さく口は開いているものの、まったく声になっていない。

咲が不機嫌そうに腕を組んでいるのはいつものことだが、今日は咲と並んで生山里子まで不機嫌そうに沈黙している。実際、面白くないのだ。

これまでは、二年生と三年生だけが試合に出て、一年生はベンチ入りすらされていないかった。このように遠征に来て、ただ見学して、勉強するだけ。しかしもう三年はいないし、一年生だってメンバー登録されている。試合に出ていい身分なら、自分こそがスタメンであって然るべきではないか。それが何故、自分がベンチスタートなのか。花香のごときが試合に出ているというのに、それより遥かに優秀な自分がなんで出られないのか。

相手ファールでプレーの止まった間に、山野裕子は選手たちに声をかけた。

選手交替だ。

山野裕子 アウト 篠亜由美 イン

梶尾花香 アウト 友原鈴 イン

アラ、つまり両翼のポジションを二枚替えだ。選手は、交替ゾーンで手を叩き合い、入れ替わった。

「お疲れ、花香」

里子は花香の肩を叩いた。不機嫌な顔を隠しもしない。隠せるようなタイプではないし、隠す気もさらさらない。

篠亜由美は技術的な能力は高くはない。しかし相手との力関係から組織のバランスを取る能力はそこそこ優れており、また、最後列の真砂茂美とのコンビネーションも相性がいい。親友同士で、普段からいつも一緒にいるからだろうか。

友原鈴もまた、能力は高いとはいえない。ただ子供の頃からずっと何らかの運動をやってきているので、単純な体力はある。技術より体力という点では部長である山野裕子と似ている。鈴と裕子とで決定的に違うのは自信だ。山野裕子には、自分にはちょっとやそつとの技術差など吹っ飛ばすくらいの体力がある、とそんな自信に溢れている。実際、それくらいやれるから、部長にもなれたのだろう。鈴にはそこまでの自信がないどころか、並にやれる自信すらない。

現在十四分。得点は1―1のままだ。

佐原南は交替によって個人能力の平均値はぐっと下がったが、はなから自分の技術の平凡さを理解して中盤での舵取りに徹している亜由美と、技術がないから必死に走り周りチームプレーに徹する鈴、これはこれで面白い効果をチームにプラスしている。

うちの面子を考えれば、主力でないとはいえ強豪校を相手にこれまで一失点は充分に及第点だ。このチームワークによる守備力は、木村前部長が残してくれた宝物だ。

と、部長である裕子はどうすればチームがより強くなるのか、そればかりを考えている。

「花香や鈴が出て、なんであたしが出られないんですか。花香がス

タメンだったのにあたしが控えてどういふことですか。次、交替してくれますよね」

結局、里子は黙っていらなかった。

語気こそ荒らげてはいないものの、あきらかな不満を裕子へぶつけている。

「それじゃ、交替」

佐治ケ江優 アウト

衣笠春奈 イン

「おかしいじゃないですか」

「おかしくないって。だってこれ練習試合だけど、あたし、勝ち狙ってるもん。意地でも全員使う必要はない」

「あたしが役立たずっていつてんですか？ 花香や鈴より下ってことですか？ 先輩、普段、練習全然見てないんじゃないですか？ 遅刻ばかりしているから」

「うるせえなドアホが！ お前はおとなしくここから、みんなのこを見て勉強してりゃいいんだよ！」

「分かりましたよ！」

里子はアップをやめ、激しい勢いでパイプ椅子に腰を降ろした。見る目無しの無能部長が。

いや、見る目がないんじゃない。意地が悪くて臆病なだけだ。私がかここで活躍するのがいやなんだ。私が、部で一番になってから辞めると常々いつているから、そうなたら屈辱的な敗北だと思っているんだ。無能のくせに頑固で臆病な最低部長！

「里子」

花香が声をかけてくる。

「ごめん、黙ってて」

花香はいわれた通り、口を閉ざした。親友にそういう態度をとられること、別にショックではない。里子の性格はよく分かっているから。ただ、よく分かっているからこそ、気の毒で、なんとかしてあげたかった。

第一セットは1―1のまま終了した。

「お疲れ。我孫子東に1―1なんて上等だよ」

去年行った練習試合では、1―9でボロ負けしたのだ。余談だが佐原南唯一の得点者は、まだ一年生だった山野裕子だ。

佐原南は全員車座になった。裕子、晶、春奈、亜由美の四人が中心となり、反省点を出し合い、次のセットでやるべきことを話合った。

第二セットが始まった。

FPは、衣笠春奈、梶尾花香、九頭葉月、真砂茂美。そしてゴレイロは武田晶に代わって、梨本咲。

裕子はピッチの外から指示を飛ばしながらも、時折紙になにやら書き込んでいる。勝ちにいくことはもちろん大切だが、この試合を今後来る大会へと繋げなくてはいけないからだ。

隣では、パシッ、パシッ、と里子が手で自分の膝や腿を叩いている。イライラして仕方ないのがよく分かる。裕子は心の中で笑った。苦笑とか嘲笑といったものではなく、それは微笑みのようなものだった。

佐原南、最後のところで茂美が踏ん張ってくれるため、なんとか失点せずに済んでいるが、葉月、花香の動きがたどたどしく、たまに嫌なボールの取られかたをしてピンチを招いている。

「下手だな、もう。なにやってんだか」

里子、睨み付けるような視線で、ぶつぶつ文句をいつている。

「葉月は最近になって基礎もしっかりしてきたし、あとは気が小さいのさえ直ればいいんだけどな。なんか去年までのサジを見ているみたいだよ」

隣の佐治ヶ江に話している裕子の、そんな気持ちが届いたのか、単なる偶然だったのか、負けて当然の強豪校が相手であることから吹っ切れたのか、葉月が仕掛けていた。相手に近づいたかと思うと、急遽、ボールを大きく右に蹴り出し、自らもそのボールを追う。相手も素早い反応でボールを奪いにかかる。

葉月の技術力では、簡単には相手を抜くことは出来なかった。二人の身体はぶつかりあい、ボールがこぼれた。

それを衣笠春奈が拾い、ためらわずドリブルでゴールへ直進する。直線上には相手のベッキ、そしてゴレイロ、その向こうにゴールだ。春奈はベッキをかわしてシュート、と見せかけ、踵で後ろへとボールを流した。そのままシュートを打っていても相手の上げた足に当たっていただろう。

後ろから走り込んで来ていた梶尾花香がボールを拾い、ドリブル。ゴレイロと一对一。冷静にゴール左隅へと流し込んだ。

佐原南、逆転だ。

「ハナ、ナイスシュート。しっかり守って、追加点狙ってくよ」

ダン、と激しく床を踏み鳴らす音。

生山里子だ。

裕子は里子の顔をちらりと見る。

里子に、睨みつけられた。

裕子はがりがりと頭を掻くと、立ち上がった。

「里子、次、春奈と交替するよ」

けだるそうな口調で、いった。

「え……どうして」

「なにいつてんだ。試合、出たいんだろが」

「当たり前じゃないですか。あたし以外、一年生みんな出て。花香がゴールまで決めて。レベル低い連中の底上げのための練習試合ならいいですよ。勝ちにいくって言ってましたよね。それじゃあなんですか、あたしが一番レベルが低い、少なくとも先輩にはそう見えるってことですよ。また、さっきみたいに怒鳴りたきゃ怒鳴ればいいですよ、でもやっぱり先輩、練習見てませんよ」

「だからさあ……お前はね、技術的なレベルは、もの凄く高いんだよ。あたしなんかよりもずっとね。でも、レベルが高いだけなんだよ」

「意味が分かんない」

「そりゃ分かんないだろうよ。ずっとみんなのプレー見てて、分かんかったんだから、経験させてやるしかない。もうこの試合、どうなっても構わないから、思い切りやってこい」

「はあ？ なにをいつてんですか先輩。サジ先輩みたいなものばかりならともかく、このメンバーにあたしが入って戦力ダウンすると思つてんですか？」

「普段ぶすつとしていくせに、カッとなるとまあ喋ること喋ること。話はあとで聞いてやるから。春奈、里子と交替だ」

里子は足を踏み鳴らしながら交替ゾーンへと向かった。

「里子、頑張つてね」

春奈は右手を上げた。

「いわれなくたって、ばんばん点取りますよ」

里子是不機嫌そうな顔のまま、春奈と手を打ち合わせた。

衣笠春奈 アウト

生山里子 イン

練習試合とはいえ、里子にとって初めての対外試合。ゲーム運びだのそういうことはよく分からないが、一对一の勝負なら関係ないだろう。全員を抜けばゴール出来る。ただそれだけのことだ。

里子はピッチに入るや否や、あわやファールかというくらいに我孫子東の選手に向かって激しく突っ込んでいき、勢いのままボールを奪っていた。相手もさすがに意表をつかれたようだ。里子はドリブルするが、しかし、一人、二人と取り囲まれて、ボールを奪われてしまった。

葉月と茂美が巧みな連携でパスコースを塞いで、再度、奪い返した。葉月はすぐに花香へとパスを出した。

花香はうまくボールを受けたものの、出しどころに困り、ドリブルしようとしたところをカットされてしまった。慌てて相手の背中を追いかけたが、勢いあまってぶつかって、転ばせてしまった。

笛が鳴った。

「花香、ためらってないで、抜こうとしなよ。もたもた考えてつか

ら取られるんだ」

相手選手を助け起こしている花香の後ろから、里子が声をかけた。「無茶いわないでよ。あたしそんなテクニクない。それより里子が受けて戻ってきてよ。春奈先輩みたいに」

「ハナ、里子、とっとと壁作れ！」

裕子の叫び声に、二人は葉月たちと一緒に壁を作った。

我孫子東のFKは壁を越え、ゴールへと落ちていく。咲が両手で弾いた。高く舞い上がって落ちてきたボール、茂美が跳躍してヘディングでクリアした。

クリアボールを拾った里子、ドリブルで上がる。我孫子東の選手と一対一になった。里子はフェイントを仕掛け、バランスを崩す相手のわきを通り抜ける。しかし、横から伸びてきた足にボールを奪われてしまった。

葉月がそのボールを奪に返そうと走り寄るが、ワンツースでかわされ、簡単に突破を許してしまった。

佐原南は、明らかに前線のプレスが弱くなっていた。そのため相手が自由に動けるようになり、さすがの茂美もワンツースで簡単に突破を許してしまった。しかしその瞬間、勢いよく飛び出した咲が、スライディングでボールを弾き飛ばした。

「いいよ、咲」

晶、ベンチから咲のファインプレーを褒める。だが、咲は表情一つ変えない。

ボールは我孫子東の選手が頭でトラップし、足元に収めた。だが、次の瞬間には背後から回りこんでいた葉月が奪い取っていた。

葉月はドリブルで駆け上がるが、すぐ相手にマークにつかれてしまう。フェイントで突破をこころみようとするが、ぴったりとマークされて抜くことが出来ない。もたもたしている間に、さきほど葉月がボールを奪った相手に、同じことをやり返されてしまった。背後からボールを奪われたのだ。

あっという間に佐原南ゴール近くまでボールを持ち込まれ、そし

てシュートを打たれた。

咲はブロックの体勢をとった。茂美がコースを切っていたためブロックするのは簡単だったが、しかし、そのこぼれ球を拾われて再びシュートを打たれた。

鈍い音がした。

ボールが咲の顔面を正面から直撃したのだ。ボールは宙に舞い上がった。咲は苦痛に歪んだ表情で、天井を見上げると、落ちてくるボールをなんとかキャッチした。

「みんな、さっきまでより一段と下手になっていないか？」

里子の何気ない言葉。

佐原南の選手たちは、みな一緒に、里子の顔を見つめていた。

里子はその視線の意味に、まったく気づいていない。

みんな、ほんとに下手になっている。さっきまでは、上手くはないながらもボールを回して、守備をして、ときには決定的な得点チャンスだってあったというのに、いまのこの状況、何失点してもおかしくない。なにやってんだ、こいつら。

「あたしが入ったから、手を抜いてんじゃないよね」

みんなで示し合わせてるんじゃないだろうな。王子先輩が、「ほら、お前が入るとダメだろ」といいたいばかりに。

「バカなことやってないで里子こそちゃんとやってよ」

「やってるでしょ、ちゃんと。みんなもつとあたしにパス出せばいいんだよ。この中で一番点が取れそうなの、あたしでしょ」

バチン、という音とともに、里子は頬を引っ叩かれるような痛みと脳を揺さぶられるような衝撃を感じた。

足元にボールが落ちた。

梨本咲が投げつけたのだ。

「誰が手を抜いてるって？」

咲のユニフォームの袖や胸は、血で汚れていた。さきほどのブロックで顔面を強打し、鼻血が出たのだ。

「どうでもいいんだよ、本当は。あたしも自分のことしか考えてな

いタイプだからさ。でも、ハナと葉月が可哀想だよ。あたし、こん中で一番子供だっと思ってたけど、違った。二番目だわ。あんたさ、一人でチームをグチャグチャにしちまつてることに気付けよ、バカ」

「点取りやいいんでしょ、要は！ フットサルってのは！ いまあたしがピヴォなんだから、あたしにパス出すの当然でしょ。あたしが点を取るの、当然でしょ。あたしは技術だってあるんだから。じゃあ、協力すりゃいいじゃない。チームのこと、点取って勝とうということ、考えてないのはあんたらじゃないの？」

「そんなこと」

花香がいいかけた時、

「そんじゃ、里子のいう通りにしましょうか。みんな、どんどん里子にボール預けて。……ま、どんどん預けることが出来るんならね……試合ぶった切っちゃって、済みませんでした。はじめてください」

裕子は審判役の顧問教師と、相手選手たちに頭を下げた。
試合再開だ。

咲は前方遠くへとボールを放り投げた。

里子はそれを受けようとするが、後ろから飛び出してきた相手のベッキにヘディングで弾き返されてしまった。

相手ピヴォと競り合った茂美、上手くマイボールにすると、すぐ、花香へとパス。

しかし出しどころなく、茂美に戻してしまう。

茂美に相手のピヴォが襲いかかる。茂美は、紙一重でかわすと、今度は左アラの葉月へ。

葉月、やはり出しどころなく、振り返ったところ、茂美には相手のピヴォがしっかりとついており、バックパスも出せない。

ピヴォがベッキをマークするなんて普通逆だよ。葉月はそう思ったが、思ったところでどうしようもない。

葉月はボールを奪われた。

茂美についていたピヴォは素早く後退して、パスを受けた。葉月からボールを奪ったアラは、そのピヴォを追い抜いていた。素早いパス交換、アラに、ボールが渡る。見事な連携で、佐原南の守備陣を、一瞬にして突破した。アラの選手はシュートを放った。

ゴレイロの咲は、なんとか手に当てて、弾いた。落ちてくるボールに素早く駆け寄り、キャッチした。

咲はロングスロー、最前線の里子へと投げた。

ようやく、里子へとボールが渡った。里子の背後に相手のベッキが密着する。里子は迷わず振り返り、ベッキを抜きにかかった。だが、ベッキは粘り強い守備で簡単には抜かせてくれない。また、簡単には飛び込んでこない。焦らされ、勝負そのものをさせてもらえないうちに、我孫子東の最終ラインにアラが一人戻ってきて、里子は挟まれてしまった。一気に勝負をつけてしまおうと、里子は強引に二人の間に割って入って突破しようとしたが、ベッキの肩を突き飛ばしてしまい、ファールを取られた。

相手にFKを与えてしまった。

FKは茂美が大きくクリアした。

こぼれを葉月が拾った。里子にパスしようとするが相手のポジションニングが巧みで、迷っているうちにカットされていた。

相手のボールタッチが大きくなったのをうまく狙って花香が奪い返したが、すぐ二人に取り囲まれてしまい、前線の里子へと送ることが出来ない。

里子は一人、前線で孤立してしまっている状態だ。彼女は仕方なしに、下がってボールを受けにいった。ボールを回すためではなく、単にボールを貰うために。フットサルはピヴォもボール回しに参加しなければ、すぐに数的不利になってしまう競技だというのに。

里子がせっかく中盤に下がってボールを持っても、一枚、また一枚、と防火壁がどんどん閉じて自分の進むべき道を塞ぐ。

里子をフォローしようと、葉月はサイドを駆け上がったが、里子の視界にはまったく入っていないかった。いや、見えていたとしても

里子はパスを選ばなかっただろう。

里子は攻めるべき立場であるはずなのに、火事場で退路を塞がれるような、じわじわと追い詰められるような、そんな焦燥感に全身を支配されていた。

こんなはずじゃあ。

里子は、自分の全身から血の気が引いて、さっと冷たくなっているのを感じていた。

「里子！」

花香の叫び声。自分に向かってボールが転がって来ていた。足で受ければいいだけの、やさしいパス。それなのに、里子は受け損ない、それどころかボールの上で足を滑らせてバランスを崩し、転んでしまっていた。

我孫子東はその隙を見逃さなかった。ゴレイロを除く全員で攻め上がる。魔法陣の軌跡のように、縦横斜め、複雑なパスが次々と繋がりが、佐原南は完全に翻弄された。ゴレイロの咲がスライディングクリアを試みるが、我孫子東のピヴォはボールを浮かせながら小さくジャンプでかわすと、空中でボールをちゃんと蹴った。ボールは無人のゴールの中に入ってしまった。

2―2。佐原南は追いつかれた。

ズレた歯車は、どうやっても噛み合うことなく、そして逆転された。

第二セット終了の笛が鳴った。

「どうしたの、全然ボール回せなくなっちゃって。守備も、最初は凄くいい感じだったのに」

篠亜由美がいう。

「だって、パスの出どころがなくて、すぐ奪われちゃうし」

花香、しょんぼりとした表情。

「失点はゴレイロが晶先輩じゃなかったからでしょ。あたしが入ったからやられたようなこといわないでよ。だいたい、いわせてもらみなまでいい切らないうちに、里子は咲に胸倉を掴まれていた。」

「なに、その手？ あんたが二失点して、なんであたしが締め上げられなきゃなんないの」

「ごめんね。バカなピヴォのフォローも出来ない無能なゴレイロで」
二人は睨み合った。

里子は、咲の手を掴むと、ねじ上げた。

「よし、仲間割れタイム終了。じゃ、三セット目だけど、とりあえずFPはこのままでもいいや。ゴレイロは、里子の望みどおり、晶で」

裕子はてきばきと早口でいった。

「いいわけ出来なくなったなって、喜んでんでしょ」

里子はまだ咲を睨んでいる。

「そんなこと思ってないよ。あたしどうやら、あんたほど性格悪くないみたいだから」

咲はもう普段の顔に戻っている。まあ、普段の顔というのは不機嫌そうな仏頂面のことだが、少なくとももう睨んではいけない。

「里子だって性格悪くないよ！ ちょっと不器用で子供なだけなんだから！ 里子、見返してやる。ね。チームプレーでさ。頑張ろ」

「花香、横からうるさいよ！」

里子は怒鳴っていた。

しばらく沈黙した後、

「ごめん」

小さな声で、里子は謝った。

第三セットが開始された。

里子の動きはまったく改善されず、チーム全体の動きも最悪な状態のまま、さらに追加点を許すことになった。

五分経過。佐原南、ここで選手交替だ。

生山里子 アウト

篠亜由美 イン

亜由美はアラの位置に入り、葉月がピヴォへとチェンジした。
「一人替えたって。守備陣みんなへたばってんのに」

交替させられた里子、あえて裕子の隣にたって、小声でぶつぶつといている。

しかし、目の前で起きた光景は、里子の予想を完全に裏切るものだった。佐原南のパスが繋がるようになった。力関係が均等に、いや、若干だが佐原南が押すようになっていた。

相手は主力でないとはいえ、強豪校の選手。個人技の能力も高い。それに比べて葉月のピヴォとしてのプレーはそれほど上手とはいえない。しかし球離れよく、ボールを受けては即座に右に左にと捌いていく。その流れの中から、亜由美のクロスに花香が飛び込み、触れれば得点という惜しい場面も作った。

だが結局、追加点を奪うことは出来ず、佐原南は2―4で敗北した。

里子は呆然とした表情で、突っ立っている。葉月や花香たちのことを見つめている。

自分がいなくなった後、明らかにチーム全体が変わっていた。

しかし、

亜由美先輩や葉月なんかより、自分のほうがずっと技術はあるはずだ。自分に替わって亜由美先輩が入っただけで、あんなにチームが変わるわけがない。自分に替わって葉月がピヴォになったからって、あんなにチームが変わるわけがない。

私は悪くない。

当然でしょう。普段の練習だって、サジ先輩以外の誰にも負けてないんだから。サジ先輩の背中だって、もうすぐそこ。私は、誰にも劣ってなんかいないんだ。

私は……

「はい、勉強になったねー」

裕子は里子の後ろに立って、子供をあやすかのように頭をなでた。両校、あらためて全員ピッチ上に集まると、それぞれ横一例に並んで挨拶をした。

そして、用具の後片付けを始めた。

里子は足元に転がっているボールを拾い上げた。
そして、激しく床に叩きつけていた。

第三章 二人三脚

1

それからというものの、生山里子は常にぶすーとした顔をしている。

なにを考えているのかは聞くまでも無い、もう表情の通りだ。不満いっぱい面白くないのだ。イライラして仕方がないのだ。

花香と一緒に通学バスや電車に揺られている間も、モキチの授業中も、お昼休みの食事時も、絶えずこんな顔、部活の練習中ともなればなおさら当然のこと。むしろより以上、その顔は陰しさを増す。何故ならばこのフットサル部での様々な出来事が原因で、身体の内側から大暴発しそうなほどのフラストレーションを溜めてしまうことになったのだから。

そのイライラに直結する人物が近くにいると、もう抑えられない抑える気もない、顔はさらに凶悪凶暴になり、睨みつけるようなその視線は、触れただけで物が爆発しそうなほどだ。そのイライラに直結する人物というのは、山野裕子、佐治ヶ江優、そして、

「あたしのこと睨んでこられても困るんだよね。やめてよね、ムカムカしてくっからさあ。ほんつとに、精神構造がガキかよ」

梨本咲が練習用にボールを四つ、胸に抱えて、里子の前を通り過ぎていく。

里子の髪の毛が逆立ったが、咲は平気な顔で晶の待つ方へと歩いていく。

「ムカムカしてっからって、あたしのこと睨んでこられても困るんだよね」

武田晶、咲の口調を真似、そういった。

「ああ、ご心配なく。あたし、晶先輩にはいつもこんな顔してますから」

咲は晶の前まで来ると、抱えていたボールをどさっと落とした。

フットサル用のボールはほとんど弾まない。一つだけ、転がっていきそうになったのを、咲は足で引き寄せた。

「まあ、確かにね。って里子のこといえないじゃんか。どっちの方がガキなんだよ」

「この前の一件ではつきりしましたが、里子のほうがちょっとだけガキでした」

他愛のない軽口のようなだが、二人はこれっぽっちも笑っていない。楽しい冗談として本人たちが会話していかないせいもあるが、もとからして、晶はほとんど笑みを見せたことがないし、咲にいたっては皆無、と、そんな二人だから。

「うおっす、里子ちゃん元気い？」

フットサル部の部長、山野裕子が体育館に入ってきた。里子の視線などどこ吹く風で、里子の後ろに回りこんで背中をばしんぼしんと叩いている。

まったく、今日も遅刻してるよこの先輩。どうせさあ、宿題忘れたかなにか知らないけど、放課後に教室に残って勉強させられていたんだろ。

「いや、参ったね、宿題やってくるのすっかり忘れちゃってさあ」と、副部長の晶に、遅刻したい訳をしている。

はあ、やっぱりだ。里子は心の中でため息。

里子は佐治ヶ江のほうに歩いていく。もっと色々と教えてもらって、早く技術を盗まないと。

背後では、先輩方がまたくだらないやりとりをしている。

「勉強出来ないのはいいけど、せめて宿題くらいはちゃんとやって来いよ。おバカな頭がおさら……」

「こないださあ！ 廊下で、バケツ持って立た」

晶は慌てて裕子の口を手で塞いだ。

と、その瞬間、ぞくつと身体が総毛だち、反射的に手を離していた。手のひらに、なんだかナメクジのようにぬるりとしたものを感じたからだ。

「手え舐めたる！ 気持ち悪い。ほんと下品な奴だな。バカ王子！
うわ、腕に鳥肌立ってるよ」

「そんなことより、みんな、どう？ ちゃんとやってる？」

「いきなり話変えて。普段通りだよ。……里子のご覧の通り。なん
だか、もともとのトゲトゲしさに拍車がかかった感じだ」

二人は里子のほうに視線を向けた。

里子は、佐治ヶ江と花香と三人で練習している。フェイントのか
け方について、佐治ヶ江が二人に指導しているようだ。

「しっかり教えて下さいよね。どんどん技盗んで、絶対に追い抜き
ますから」

里子、腕組みして、どっちが先輩だか分からない。

「分かってねえなあ、あいつは。技はもう充分なんだよ」
裕子は自分の頭をガリガリとかいた。

「この前ハナに聞いたんだけど、里子が中学の時にやってた部活つ
て卓球、バドミントン、剣道だって」

晶は喋りながら、リフティングをしている。足の甲、腿、頭、放
り上げて背で受けたり、と、ゴレイロだというのに、裕子より遙か
に上手だ。

「はあ、個人競技ばかりか。にしてもさ、なんかあんじゃないの、
そういう世界にだって、自分だけじゃあ出来ませんよ成り立ちませ
んよ、っての」

「王子だって去年は自分自分だったじゃんか。王様プレーならまだ
しも、単なるバカ殿の暴れ馬が走り回ってるって感じで」

「バカ殿の、さらに馬かよ。いや、まあね、自分でも分かってはい
たんだよ、チームプレーが大事ななんてことくらいはさ。でもほら、
あたしバカじゃん。やろうとはしていても、全然出来なくてさ。今
年に入ってようやくだよな、分かってきたの。里子ならあたしと違
ってそういうセンスは賢そうだし問題ないと思っていたんだけど、
やっぱり性格かなあ。賢いけどもバカなんだなきつと。もの凄い戦
力になりそうなのに、ほんと惜しいよなあ」

「惜しいじゃなくて、ちゃんと溶け込ませろよ、部長なんだから」
「お前だって副部長だろ！」

「だから、ちゃんとやってんじゃんよ。王子がいつもいつも遅刻ばかりしてっから。王子、朝練だって一回たりとも寝坊せず来たことないじゃんか」

晶は表情ひとつ変えることなく、リフティングを続けている。

「里子の話してて、なんであたしの話になってんだよ！」

「王子がしっかりしなきゃ、部長として里子の面倒を見られないだろっていったんの」

「じゃあさ、クラス違うけど、おんなじ内容の宿題が先に出たら、そのノート見せてよ」

「やだよ、勉強なんだから自分でやんなきゃ意味ないでしょうが」

「ケチ。つうか、デタラメ書いて、ただ提出してるだけなんだろ」

「なんで分かった？」

晶、ボールを受け損なって床に落としてしまった。

ボールはコロコロと、篠亜由美のほうへ転がっていった。

亜由美は晶へボールを蹴り返した。

佐治ヶ江たちと同様に、亜由美は九頭葉月と友原鈴と三人で組んで練習をしている。

「ここはこう、インサイドでボールを受けて、で、その瞬間に逆足を前に出してその爪先を軸に、ターン。ね、簡単っしょ」

亜由美は二人の顔を見る。しかし、二人とも露骨に渋そうな表情だ。

「そういわれても、先輩はもうそれが出来るから、簡単そうにいうけど」

鈴の言葉に、葉月は無言で頷いた。

「うーん。なんとご説明すればよろしいのでしょうかねえ」

篠亜由美は困った様子で腕を組んでいたが、結局、

「春奈、ちょっとお願いカムヒア！」

真砂茂美とパスアンドゴーの練習をしていた衣笠春奈、呼び声を

聞いて亜由美のもとへと駆け寄って来た。

亜由美は春奈に、いま後輩たちに教えているターンテクニクのコツを、分かりやすく説明してあげるよう頼んだ。

フットサル歴は亜由美の方が長いが、五ヶ月ほどの違いしかない。亜由美は高校入学と同時に、春奈は九月の終わりからだ。一年生は六月くらいまではほとんどボールを蹴らせてもらえないので、ボールを裁く技術には実質のところ三ヶ月ほどの経験差しかない。技術的にはほぼ同格の二人だが、人に教える能力は、比較しようのないくらい圧倒的に春奈が上だ。

亜由美は、自分ではなんとなく出来るプレーも、他人に説明するのは非常に苦手。

対して春奈は実に器用で、自分の技術力以上の領分を指導することが出来てしまう。本やビデオで勉強した理論が頭の中に入っているのだ。その理論を、目の前で見える部員のプレーに照らし合わせ、このようにしたほうがよいのではという回答を即時に言語化出来るのだ。自分よりも遥かに上級者である佐治ヶ江優の動き方について指導したこともあるくらいだ。佐治ヶ江は先天的に体力がつきにくい体質なのだが、春奈の助言のおかげで無駄な動きが減って、最近、疲れにくくなってきたようである。

さて、春奈の手助けにより亜由美先生のターン講義はなんとか終了した。

現在、一年生みんなが集まって、守備の戦術練習を行っている。

コーチは二年の真砂茂美だ。

「えっと、その場合、どうシュートコース切れればいいんですか？」

茂美は花香の質問を受け、すぐさま動きを実践してみせる。

動きは滑らかで、見る者に「なるほど」と思わせかけるものの、終始無言なものだから、やはりいまいち理解出来ない。もごもごとなにか喋っているようにも思えるが、あまりに小さく、風の音と区別もつかない。

「ん、なにになに？ どうしたって？」

亜由美、ついに自分の出番だといわんばかりの嬉々とした表情で小走りに寄ってきた。

「茂美、もう一回やってみな」

真砂茂美は、先ほどの動きを繰り返した。

「ああ、分かった。茂美、もう一度、ちょいスローでお願い。……そこに葉月立ってるでしょ、その場所、そこからこう斜めに、こう体を入れて、すると相手はつられてそっちに動いてしまうはずだから、ほら、この時にこう動けば、もうここしか相手のシュートコースがない。……っていつてんだよ」

亜由美は先ほどの名誉挽回とばかりにぺらぺらと喋る。

ビンゴ、とばかり指をぴっと立てる茂美。

「なるほど、茂美先輩の動きと亜由美先輩の通訳でよくわかりました」

花香、ようやく納得出来た。

いまのはベツキの動きの説明だが、アラの位置でも応用出来そう。茂美先輩のように身体が動くかは別だけど。

「つうか、茂美！ てめえ、もっとでっけえ声で喋れや。何度もいつてんだろ。そんなんじゃあ彼氏なんてぜってーにできねえぞ！」

と、向こうから、山野裕子が叫んでいる。そこまで大きな声出さなくても聞こえるというのに、無駄にうるさい。

「え、王子知らんのか？ 茂美、中学の時からずっと付き合ってる彼氏いるよ」

亜由美の言葉、佐原南フットサル部の部員たちにとって、まさに青天の霹靂たる衝撃を与えるものであった。

「えーっ！」

ほとんど全員が一樣に驚きの声をあげていた。

他人のプライベートに無関心な佐治ケ江ですら、きょとした表情のまま立ち尽くしてしまっているほどである。

ドドドドドドドド、外なら間違はなく砂煙の上がりそうな、けたたましい足音とともに、裕子は走り寄って来た。茂美の目の前で

ブレーキをかけ立ち止まった。そして茂美の顔を前から横から後ろから斜めから下から、と訝しげな表情で散々と視線をぶつけまくった挙げ句、

「うええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！っ！」

と、改めて絶叫した。

実に失礼極まりない部長の姿であった。

2

「うおっす」

篠亜由美は、二年四組の教室に入るや出くわした去年のクラスメイト新田香穂子に声をかける。

「なに、亜由美また来たの？　ほんと好きなんだねえ、真砂さんのことが。それじゃねえ」

香穂子は級友二人と教室を出ていった。

亜由美は教室の中央でポツンと席についている真砂茂美のもとへ向かった。

知らない子の椅子を拝借して、向き合うように座る。

茂美の机の上に、カバンから取り出したパンとオレンジジュースの紙パックを置いた。茂美も自分のバッグからパンと飲み物を取り出した。今日のお昼はパンにしよう、と今朝自分たちの地元駅のコンビニで買っておいたものだ。

高校に入ってからというものの、残念ながら去年も今年も二人は違うクラス。しかし三年間同じクラスだった中学時代と同様に、二人は相変わらず仲良しで、なにかにつけては一緒に行動している。もっとも「仲良し」「親友」を公言しているのは亜由美だけだが。茂美が否定しているわけではなく、単に無口な茂美はなにも喋ってないというだけの話。もちろん二人の態度を見ていればわざわざ茂美本人から聞くまでもなく、仲の良いことなど分かるのだが。

今日は学食、明日はコンビニのお弁当、明後日はコンビニのおにぎり、となにを食べるかはその日によってまちまちだ。学校の近く

に渋い定食屋があり、そこに食べるにいったこともある。

自宅でお互いのお弁当を作り合って持ってきたときには、さすがに周囲が引いたものである。「あんたら、そういう仲間じゃないのお?」田中美代にそうからかわれた亜由美は「バカ、同じ中学なんだから、茂美がタツ君と付き合ってるの知ってるでしょ。……でも、あたしのほうは、そういう仲間でもいいかにゃあ」その言葉に身をのけぞらせて思い切りたじろいだ田中美代。それ以来、彼女は亜由美にほとんど話し掛けてこなくなった。

「ああ、あとちょっとで体育祭だ。嫌だなあ。茂美、種目決まった?」

首を横に振る茂美。

「あたし足速くもないのに百メートルに選ばれちゃってさ。障害物にでも、とっとと立候補しときゃよかったよ。短距離ってさ、ビリになることよりなにより、スタートの時の緊張感が嫌だよ。遅い子をぐいぐい抜けるような速い子は、スタート適当でもいいじゃない。むしろわざとちょっと遅れたりしてさ。カッコつけて劇的に抜いたりしてさ。あたしみた遅いのは、いかに少しでも前の子と引き離されないようにするかだから、スタートの時がもうとにかく緊張するんだよね。ああもう、いまから鬱だよ。鬱モード全開。クラス対抗じゃなくて、好きなもん同士組めたらいいのにね。そして茂美と二人三脚でも立候補してたよ。茂美が引き抜かれて空いてなかったら、王子を誘うかな。怪力だから、あたしが眠ってもゴールまでかかえて走ってくれそう」

と、たらたらと喋り続ける亜由美に、茂美は唐突にコッペパンを差し出してきた。ハマサキ製パンのコッペパンシリーズ新商品だ。

「そーいや茂美、新商品買ったよね。でもそれ、ただの小倉マーガリンでしょ」

いいながらも、受け取って少しちぎって食べてみた。

「あら、おいしいわ。なんだこりゃ。配合かな、材料かな。いままで他のメーカーが出してたようなのと、なにが違うんだろ。ハマサ

キパン、あなどるべからずだな。うん、ほんと美味しい。よし、あたしも今日の帰りに買って、あ、そうだ、ダイエツトしてっから食べられないんだ。パンは食べても一日一回までなんだった。茂美、なんつーもん食べさせてくれるのさ。帰りにコンビニ寄らないようにするの大変じゃなか。苦行か。んじゃ、いまお返しにあたしのジヤムレーズンサンド食べる？　あまりおいしくなかったけど、茂美は好みそうな気がする。いや、絶対好きだよ茂美は。まったく根拠ないけど」

茂美は慌てたようにペットボトルを掴んで、キャップをくりくり回して外すと、さっと亜由美に差し出した。と、ほとんど同時に、亜由美が喉を詰まらせたのか片手で自分の胸をどンドン叩きはじめた。もう片方の手で、差し出されたペットボトルを奪い取るように掴み、飲んだ。

「ありがと。……というかさあ、なにその、『ナイスタイミングだったでしょイエイ！』みたいな顔。逆でしょ。無表情で黙ったまま、ちくちくとペットボトルいじりはじめて、それがおかしくて喉詰まらせたんでしょが！」

怒った顔で一氣にいい終えんと、今度は一人けらけらと笑いはじめた。

「ほんと無口なんだからなあ。あ、いいんだよ。茂美はそのままでもいいの。むしろそれがいいの。たぶん、だからあたしとの相性もいいんだろうからね。タツ君も、あたしほどじゃないけど結構お喋りじゃん。中二の冬からだっけ、もう三年近くも続いてるじゃん。相性が合ってたんだよ。もしも茂美があたしみたいにペラペラ喋ってた、多分あたしともタツ君とも噛み合わなかったと思うな」

でも確か、家族全員茂美みたいに無口だよな。お父さんお母さんお姉さん。お喋り同士はぶつかるけども、無口同士は相性いいのかな。にしても、茂美の買ったコッペパンおいしいわ。あたしも明日、絶対に買おっと。そういやコッペパンのコッペってどういう意味だろ。どーでもいいけどふと気になった。ほんとどーでもいいけど。

篠亜由美は頭の中でもお喋りであった。

3

午後六時。部活練習も終わり、後片付けの時間。同じ屋内で練習していた剣道部や男子フットサル部はもう三十分前に引き上げており、体育館はがらんとしている。

コーン、ビブス、ボール、ゴールネット、と一年生を中心に片付けを進めている。

ゴレイロはゴールネット担当だが、一年生は梨本咲だけで、さすがに一人では持てないため、二年生の武田晶と一緒に運んでいる。

生山里子は今日もまた練習中に周囲と揉めてしまい、不機嫌そうな顔でボールを次々と大きなネットに叩き込んでいる。

「かわいそうな性格」

梨本咲は、ちょうど里子のすぐ脇を通るときに、そうぼそと呟いた。里子がきくと睨みつけてくるが、そよ風に当たっているかの如く済ました顔だ。

里子は立ち上がると、手にしていたボールネットを床に落とした。落としたというより、わざと両手で持ち上げて叩き付けたのだ。咲に向かって一步踏み出し、そして口を開きかけたその瞬間、

「ほら、咲、そうやっていちいち挑発してんじゃないよ！ この、お子様が」

晶は咲のことを叱り付けた。

里子は結局なにもいうことなく、自分の作業へと戻った。なににもいえなかったのだ。晶にああいわれた以上、なにをやっても咲の仕掛けた挑発という計算に乗ることになってしまうから。咲に、してやったりと思われるなんて、こんな癪に触るものはない。

「しょうがないじゃないですか。あたし、子供なんですから。先輩の仰る通りですよ。ま、どこかの誰かさんほどじゃあないけど」

「子供つつうか、わけ分かんね。里子のことばっかり嫌いすぎだよ」

「そんなことない！ 里子ばかりだなんて。……晶先輩のことも

嫌いですから」

「ふーん」

そのまま双方無言になった。

五秒ともたず沈黙を破ったのは、晶のほうだった。

「そりゃよかった、な！」

晶はそういうと、ゴールネットを咲の方へと強く押した。

咲はぐっと足踏ん張ってもちこたえると、すぐさま押し返していた。晶、ととつとよろけた。

「危ないな、怪我したらどうすんだよ！ あと、床に傷つくだろ！」

「こっちの台詞ですよ。そっちが先に押してきたんじゃないですか」

「ここでそういう常識論持ち出す奴が、さっきみたいなこというかね」

「ゴールネットの片付け、あたし一人でやりますから、晶先輩とつとと帰っていいですよ」

「だったら、あたし一人でやるから、そっちこそいっちなまえよ」

「ありがとうございます。じゃあ、お言葉に甘えて」

咲はゴールネットの、自分の持っていた側を床に降ろした。いきなり晶の肩にずしりと衝撃的な重さが加わった。我慢しきれず、晶もゴールネットを床に置いた。

去っていく咲の後ろ姿を呆然として眺めていると、ドタドタと足音。山野裕子が走ってきた。

「お、喧嘩？ 喧嘩してんの？ 晶怒ってる？ 怒ってんだろ？」

タコみたいな顔しないの？」

「そんな変な顔、したことないっつーの！ あっちいけよ！」

「じゃあ、ネット運ぶの手伝ってやるよ」

「いいよ。ていうか、じゃあの意味が分かんないんだけど」

「一人じゃ運べないって。引きずっちゃうよ。ほらそっち持って」

裕子はゴールネットの片方を担ぎあげた。

「ありがとう」

晶はとりあえず素直に礼をいうと、自分もネットの片側を担ぎあ

げた。

「咲、どうよ」

裕子が尋ねる。

「難しいわ。押せば逃げて、引いても逃げて。かと思うところちが押そうというタイミングで向こうも押してきたりするし。相手が大人の対応するとますます殻に入るタイプかなと思って、さっき演技で子供っぽく振る舞ってみただけどさ、あたし。そしたらいつのまにか、演技じゃなくて本気で頭来てた」

「でも好きなんだよな、ああいうの」

「まあね」

4

ゴールネットが揺れた。

佐治ヶ江が放ったシュートのこぼれだまを、生山里子が押し込んだのだ。

ゴレイロの梨本咲は、床を拳で何度も叩いた。よりにもよって、里子に決められるなんて。

0―4、咲のいる側が大差でリードされている。

「もうやめた！ 負け負け。うちの負けでいいですから、やめましょ！」

咲は拾ったボールを放り上げると、遠くへと蹴飛ばした。

「お前なあ、なにを勝手なこといつてんだ。紅白戦くらいでカリカリしてんじゃないよ。みんなの迷惑を考えろ」

山野裕子も、叱るべきかなだめるべきか困り顔だ。

「だって、あたし一人で失点してるみたいじゃないですか。向こう、サジ先輩がいるんだからずるいですよ」

「そっちだって、ベツキは茂美でバランス取れてるだろ。向こうのFPはピヴォはサジだけど、あとは里子に鈴にハナ。鈴がベツキだぞ。そっちは茂美に亜由美に春奈に葉月。ほとんど二年生。充分だろが！」

「それじゃ、やっぱりあたしのせいで負けてるっていつてるようなもんじゃないですか！ でも実際は、その貧弱守備陣から一点も取れないから負けてんですよ！」

「だって、向こう晶がゴレイロなんだからしょうがないだろ！」

「ほら、やっぱりあたしのせいじゃないですか！」

「お前、縦のジグザグパスワークみたいな理屈こねるのやめろよ。頭痛くなる。とにかく、晶の方が先輩なんだし、そりゃ能力差くらいあるだろ」

「そこだけの問題で負けているように思われているのが癪なんですよ」

「んなこと思っていないって」

「絶対思ってるくせに。でも、あたしと晶先輩、そこまでの差があるとは思いません」

「だったら勝負してみろよ！ はい、紅白戦中止！ いまから晶と咲でPKデスマッチをしまいす」

「王子、なに勝手なことやってんだよ」

武田晶は、個人と副部長のどちらの立場からも制止しようとする。

「だってあたし部長だもん。権限あるしい」

裕子は両手を頭の後ろで組んで、とぼけたような表情を浮かべている。

「PKなんてのは運もあるし、能力見るのに役立たないって。役立たないというか、そんなの能力の一要素でしかない。試合は判断力やいろいろなものが必要なんだから」

「いいのいいの。なんか面白そうじゃん。咲、もちろん受けるよな。晶からの挑戦状」

裕子は咲に、ぴつと、挑戦状カードを投げる仕草。

「そんな挑戦状出した覚えはない！」

晶はどんと床を踏み鳴らした。

「いいですよ。勝てないまでも、圧倒的な力関係じゃあないってこと証明してみせますよ。その挑戦、受けてたちます」

「だからあたしは挑戦状なんて送ってないって。……じゃ、やってもいいけど、あたしはそんな肩肘張らずにやるからね。負けたって構わない」

「いまから弁解ですか、晶先輩」

「そういうことでいいよ。で、ルールは？」

晶は裕子に不満そうな顔を向けた。

「簡単。全員が順番にボールを蹴る。全員終わったら、ゴレイロ変更。そんだけ。後攻、咲にしてやっから、みんなの蹴り方の癖を見て研究しとけ」

「じゃ、あたし先でいいですよ」

そんなこといわれてしまったら、後攻で勝っても評価が薄くなってしまうじゃないか。

「だめ。晶、先攻、咲、後攻。それじゃはじめるよ。まず、サジがキッカーね」

咲を先攻にしたら、後攻の晶に対して失敗しろ失敗しろという念を送るばかりになってしまい、晶の止め方を勉強しようという気がなくなってしまう。

「ほんとにいいの？」

といいながらも、佐治ヶ江はペナルティマークにボールをセットする。

「いいのいいの」

裕子の言葉に、佐治ヶ江は小さく頷いた。こんなギスギスしたムードでボール蹴るのは嫌だけど、仕方ない。

晶はゴール前に立っている。

「準備完了」

両腕を大きく広げ、佐治ヶ江を威嚇する。

裕子は笛を吹いた。

佐治ヶ江は素早く踏み込むと、右足でボールを蹴っていた。蹴った瞬間、晶の体は水平に動き、そして、右上隅、枠を捉えたボールを見事弾いていた。

弾道を見切ったのか、いや、だとしたら反射神経が常人離れしすぎだ。佐治ヶ江の蹴り足から瞬時に弾道を予測したのか、癖を知っていて当たりをつけてバクチを打ったのか。とにかく素晴らしいセーブだった。裕子もさすがに感嘆の声をあげた。

次は茂美の番だ。

結果は、×。ポスト直撃だった。

「あんたン時もポストだといいねえ」

裕子は咲の顔をちらりと見る。

「それじゃ勝負の意味ないでしょ。茂美先輩、あたしの時はちゃんと蹴ってくださいね！」

「次、あたし」

裕子、ボールをセットした。

ぐいぐいと後方に下がったかと思うと、突如走り出した。長い長い助走をし、そして奇声を発しながらボールを力任せに蹴飛ばした。バチン、と音がし、晶は身をのけぞらせていた。ボールは真上、宙高く跳ね上がっていた。落ちてきたボールを両手でキャッチ。

裕子も失敗だ。

晶はボールを床に叩きつけると、肩を怒らせながら裕子のもとへズンズンと歩いて来た。

手を差し出した。

「ティッシュ！」

晶の鼻から、つうと血が流れてきた。

裕子はズボンからポケットティッシュを取り出して晶に渡した。

「……わざとやっつたろ」

「ごめんね晶ちゃん。本当にごめん。この際だから普段の恨み晴らそうとブツ殺すつもりで蹴ったら、まさかあんな見事に顔面直撃するなんて」

そういうと、裕子は作った真顔を意地出来ずにぷつと吹き出してしまった。

晶はティッシュを鼻につめると、相変わらず肩怒らせたまま、「

普段恨みがあるのはこっちのほうだよ」とぶつぶつ呟きながらゴール前に戻っていった。

次、亜由美の番。キックが弱く、晶に反応され、蹴り出されてしまった。

春奈も失敗。キャッチされた。

里子は力みすぎたか、宇宙開発。

そして花香。蹴ったボールの勢いはそれほど強くはなかったが、晶は逆をつかれ、隅に決まった。

晶はようやくにしてセーブ失敗した。

両膝を付き、床を拳で打ちつけて悔しがっている。

「なんだかんだ本気なんじゃねーかよ」

と、裕子は呆れ顔。

鈴の番。真っ直ぐだが勢いのあるシュート。晶は体に当てて弾いた。

葉月、晶は右腕に当てたものの、そのままゴールイン。

そして次が最後の一人。

キッカーは咲。

「いきますよ！」

咲はボールを踏みつけ、晶を睨んだ。

晶は腕を突き出し、人差し指でおいでおいでの仕草。

「運良くセーブ連発してるもんだから、あいつ、すっかりハイになってるよ」

裕子、苦笑。

咲は助走を付けて、つま先で思い切りボールを蹴った。

バズン、と凄い音。咲の全力を込めて蹴ったシュートはその瞬間に、突き出した晶の両手の中に、見事収まっていた。

「すご……」

花香、思わず感嘆の声を漏らしていた。

晶は突然に腰を落とし、片膝をつくと、顔を下に向けた。

そしてそのまま動かない。

裕子は素早く静かに晶のもとに走り寄った。腰をかがめ、晶の顔をのぞきこんだ。

「晶ちゃん、自分でも信じられない奇跡的なセーブに、顔がニヤけちゃってまーす」

亜由美と春奈と花香、思わず大爆笑だ。

「ち、違う、ニヤけてなんかないよ！　ぶっ続けだから、疲れて下向いてただけだって！」

晶、顔を上げて猛然と抗議する。

「真実かどうかは皆様のご想像にお任せしますが、クールなイメージ壊されたくないこの必死な抵抗、これは本物かと思っています」

「適当なことばかりいってんだから」

晶は立ち上がった。

「んじゃ次、咲が防ぐ番ね。キッカーの順番はさつきと同じで」

佐治ケ江、今度は難なく成功。逆をつかれた咲は、瞬時に足を横に投げ出したがボールはその上を通り越えてゴールイン。

茂美、またポストに当ててしまった。

「手加減いらないっていつてんでしょ！」

咲は激しく床を踏み鳴らした。

裕子、成功。

亜由美、成功。

春奈、成功。

里子、オーバークションで大きく振り上げた足を豪快に振りぬいた、と思わせて、弱く小さく蹴った。虚を突かれた咲の足の間を、ころころとボールは転がり、ゴールの中へ。成功。

晶、成功。

花香、失敗。ブロックされた。

葉月。咲はキャッチし損ねて、ボールは真上へ。落ちてきたボールを、再びキャッチし損ね、両手の間をすりりと抜けたボールは頭にバウンドして、ゴールイン。

これで全員が二回とも蹴り終えた。

勝負終了。

文句なし、晶の圧勝だ。

咲は床の上に倒れこんだ。

しばらく仰向けで大の字になっていたが、やがてごろんとうつ伏せになった。両腕で作った枕に自分の顔を埋めた。

「勝負あったな」

裕子が咲の元へ近づいていく。

咲は動かない。

「おい、聞こえてるか」

「聞こえてない！」

「咲の負け。おとなしく認めろ」

「運が悪かっただけ。實力じゃない」

「どう見たって負けてたろうが。子供みたいなことってんじゃないやねえよ」

「子供なんだから、しょうがないじゃん！ まだ生まれて十六年しかたっていないんだからしょうがないじゃん！」

半分泣き声になっている。

「練習すればいいんだよ。しっかり晶について、どんどん色んなことを盗めばいいんだよ。頑張ればすぐ抜けるって。あんなジャガイモみたいな変な顔の、性格の悪い奴なんて。頭も悪いしペチャパイだし」

晶はボールを手に取り、手を振り上げた。ターゲットロックオン。と、その時、

「そんなことないです！ 晶先輩、凄すぎる。最初からかなうわけなかったんです。分かっていたんです」

咲は顔を上げた。

目が真っ赤にはれている。腕の中に顔を埋めながら、何度も何度も袖で拭ったようだ。

咲は上体を起こすと、あぐらを組んだ。顔はしゅん、と下を向いているまま。

「急に素直になりやがって。だからいまいったろ、晶から、どんな盗めってばよ。あたしら二年生は、来年の夏で引退しちゃうんだよ。晶もいなくなるんだよ。咲には立派なゴレイロになってもらわないと困るんだよ。フットサルっつーのは、ゴレイロの質が試合の相当な部分を左右すんだから。晶は顔だけじゃなくて性格もブスだから咲を褒めるようなことけっしていわないけど、裏では咲のこと、優秀だ、伸びしろある、絶対負けられない、ってよくいつてんだから。顔も性格もブスだから黙ってっけどさ」

裕子は後頭部にボールの直撃を受け、床に沈んだ。

「適当なことばかりいいやがって、まったくもう」

晶は両手を叩いて払うと、咲のほうに視線を向けた。

「咲さあ、今日のこと、あんまり気にしないでいいから。こんな座興にしかないって。それでも気になるっていうなら、バカ部長のいう通り、練習すればいいんだからさ。付き合うよ、いくらでも」

「二人とも、なに真面目に喋ってんですか。くっだらな。水飲んでこよっと」

咲はいきなり立ち上がると、体育館を出ていってしまった。

「ちよっと、なにそれ……」

裕子と晶のちよっと虚しいハーモニ―。

5

「やっぱりすげえなあ、あいつは。足速え」

山野裕子は素直に感心していた。

一年生の女子百メートル走、生山里子は二等を大きく引き離してのぶちぎりの一等賞だ。

「ま、あたしのほうが速いけどね」

裕子は短距離走なら誰にも負けない自信がある。

秋の体育祭。

空は青く、雲がほとんどない。見事な晴天だ。気温も湿度もほど

よく爽やかで、絶好の運動日和である。

「え、青いハンカチ？ ごめん、持ってない」

学年対抗借り物競争で、一年女子のペアが裕子のところに来たのだ。裕子は今日に限らず、そもそもハンカチを持ち歩く習慣がない。一年女子の二人は裕子にお辞儀すると、他を探し始めた。

「青いハンカチ持っている男子、いませんかー！」

裕子は前方につんのめって、生徒たちの椅子をガラガラと倒しながら地に倒れこんだ。

「ひょっとしてわざとか、あいつら！」

白いシャツに青い短パンという、男女同じ運動着なので、裕子が男子と勘違いされてしまうのも仕方ないのだが。髪を短く刈り込んでおり、裕子より髪の毛の短い男子など野球部員くらいのものである。

「お父さんとおじいさんが見に来ている人いませんか？」

「ご家族が犬を連れて来てる人、いませんか？」

ごみごみした間を縫って、ペアが目的の借り物を探して歩いている。

「赤い時計、持ってる人いませんか？」

三年生は木村梨乃と畔木景子のペア。最近フットサル部を引退した者同士だ。二人とも笑顔で、とても楽しそう。

二人はこっちのほうへと歩いてきた。

なんだ、梨乃先輩たちは時計か。ありきたりだな。まあ学校に持ち込めるものなんて限られてくるから仕方ないか。

「あ、王子、赤い時計持ってない？」

「持ってますけど。すごい女子っぽい赤い腕時計。女子のあたしのでよければ、貸しますが。女子のあたしのでいいなら」

「またなんか傷つくようなこといわれたの？」

裕子はこっくりと大きく頷いた。

梨乃は裕子の肩をぽんぽんと叩いた。

「もっとしっかり慰めてくれたら、貸してあげますよ。無利子で」

「どうすりゃいいのよ」

「肩揉んで」

「それ、慰めるといわないと思うけどなあ」

「いいつつ、裕子の肩を揉んでやる梨乃。」

「おー、きくう。先輩、上手！ 気持ちいい」

「オヤジじゃないんだからさあ」

「そ、そこもっと、きゅーっと強めで、強めでお願い」

「はいはい」

と、二、三分もたった頃、

「はい、ご苦労さん。それじゃ、貸してあげますか」

裕子は小走りで、自分の椅子のところへ向かった。椅子の下に置いてある自分のバッグを開けて、がさごそと探る。

「あ、家に忘れて来ちゃった。いつもカバンに入れてんですけど、今日カバンじゃないから」

「んだとてめえコラ！ つーか、いつもカバンの中じゃあ腕時計の意味ねーだろ！」

「うわ、久々の男言葉だ」

「王子、今度ハナキヤのイタリアンジェラートおごれよ」

「ひじょうにキビシー！」

「嘘だよ」

梨乃は笑った。

「ああよかった。あたし金欠でピンチなんですから。漫画も買っていないんですから」

「帰りに買い食いばかりしているから。」

「梨乃、あったよ。赤い腕時計、貸してもらえた！」
向こうで景子が叫んでいる。

「景子、ありがと！ それじゃ、王子、またね」

「梨乃はそそくさと景子の方へと走っていった。」

「梨乃先輩、相変わらずだなあ」

でも借り物競争って、なんか似合わないよな。確か中学時代、陸

上部とかいってたのに。

裕子の参加する競技は二つ。一つは八百メートルリレーで、これはもう終えた。アンカーの裕子が三人ごぼう抜きで、奇跡の逆転一等賞。

もう一つ出場する競技が二人三脚で、こちらはもうそろそろ予定時刻だ。

「野田コージの物マネ出来る人ゝ、いないっすかゝ」

裕子のクラスメート、遠藤慎太郎が近づいてきた。そういえば、こいつも借り物競争に出てるんだったっけ。

「あ、山野、野田コージの物マネ、この前やってなかったっけ？ お前出来ない？」

「出来るよゝ」

という裕子、下あご突き出して、腰落として腕をだらりと下げて走り回りながら、

「おい、ぷりぷり小学校五年三組のケンタ君、ヨシオ君、マナブ君、サトル君、筋肉、切れてるう？ ナーイスバルク」

「うまい、お前天才！ つーか、バカ」

と、手を叩いて絶賛する遠藤慎太郎。

「女子二人三脚に出場する方は、朝礼台前に集合して下さい」
場内アナウンスが流れた。

「あ、呼ばれちゃった。ごめん、遠藤。いかなきゃ」

「えー。なんだよもう」

「サジ、いくよ」

裕子は佐治ヶ江優へと視線を向けた。佐治ヶ江は自分の椅子に腰を下ろし、少し前かがみに小さくなっている。

「どうした？」

「あ、あの……緊張、しちゃって」

「この間の練習通りやりゃあいなんだよ。そもそも二人三脚なんて、楽しんだもん勝ちなの。フットサルの合宿の時だってそうだったろ」
春休みにおこなった合宿で、レクリエーションと試験的な意味合

いをかねて二人三脚ドリブル競争をやったことがあるのだ。

まあ、そんなこといってもサジにはちっとも慰めにはならないかも知れないけど。フットサルの合宿は、十人ちよいの顔の知った者同士だったからな。と同情しつつも、裕子は佐治ケ江の腕を強く引っ張り容赦なく立ち上がらせると、集合場所へと歩き出した。佐治ケ江はおとなしく、裕子について歩いていく。

集合場所である朝礼台前に到着した。

運営委員の女子生徒がヒモを配っている。裕子はそれを受け取ると、自分の左足と佐治ケ江の右足とをきつく結んだ。

佐原南高校体育祭の二人三脚は、少し距離が長い。トラック一周四百メートル、通常ならばリレーで走るような距離だ。

競技が始まった。

スターターの鳴らす鉄砲の合図に、次々とスタートしていく。

みんな、速い。タイミング合わず、転等してしまうペアもいる。

佐治ケ江は後ろからそれを見ていて、自分のことのように思い胸が痛くなった。

そしてついに、裕子たちの順番が来た。

隠しようもないほどに、佐治ケ江は緊張してしまっている。顔が青ざめている。ぎゅっと結ばれた足から、震えが裕子に伝わってくる。

「サジさあ、人前でおならぶっこいたことあるか？」

「ない」

即答した。こんな時にそんなふざけた質問するな。いや、こんな時だけではなく。

「だよね。もしもそんなことがあったんだったら、もう恥ずかしくて恥ずかしくてとつくに自殺しちゃったりとか、学校に来らなくなってたんじゃない？ 真面目真面目で笑って誤魔化すことが出来ない。ゆとりがない。カッコいいところ見せるつもりはないけど、カッコ悪いところ見られるのも嫌。だから、緊張しちゃうんだよ」

確かに裕子なら、大切な面接の時に、そういった事態になっても

平気で笑ってそうだ。でも、

「あたしは、王子じゃない」

佐治ケ江は呟いた。

「そうだね。でもさ、今後も生きてりゃあ、来るよ。緊張すること。どうしようって思うこと。恥ずかしいってこと。みつともないってこと。今後、いくらでもあると思うよ。あと六十年も七十年も人生続くんだぜ。もっと、楽にならなきゃ。自分なりの向き合い方、探していかないと、辛いよ」

緊張くらい誰だってある。もちろん裕子だって緊張もする。それが悪いことと思わない。だけど佐治ケ江の場合、はたから見ている。緊張がマイナス面にばかり働いている。本当に苦痛そうな表情を作る。それを見ているのが辛かったから、裕子はこんな場所ではあるがこんな話をしたのだ。

「位置について！」

裕子と佐治ケ江、肩を組んだ。

他、三つのペアが並ぶ。

銃声。

パン、と爆発する火薬の音に、四組は一斉にスタートした。

裕子佐治ケ江ペア、思いのほか良いペース。全組ほとんど差はないとはいえ、二位につけている。しかし、

トラックの第一カーブに差し掛かったところでバランスを崩し、足をもつれさせ、転んでしまった。

「王子、ごめん」

起き上がりながら、謝った。もつれ、また転んでしまった。

「こっちこそごめん」

先に立ち上がった裕子は、佐治ケ江の手を掴んで、引っ張り起こした。

他の三組は、もう遙か先、第二コーナーを曲がっているところだ。大勢のいる中で転んでしまったことが佐治ケ江にとってどうしようもなく恥ずかしかったのか、二人の動きは非常にぎくしゃくとし

たものになり、思うように走れないどころか、真っ直ぐ進むのも大変な状態になってしまった。歩調がまったく合わず、そのせいでバランスを取れず、右に左にふらふらとしながら進んでいく。

佐治ケ江は、ふと裕子の顔を見た。薄笑いを浮かべている。

「なに？」

視線に気付き、裕子も見返した。

「そんなニヤニヤと笑わなくなつて。……それでも、精一杯頑張ってるんだから」

「バカ。サジのことなんか笑ってないよ。さっきいったろ、二人三脚は楽しんだもん勝ちなの。そうだ、合宿の時にやった二人三脚ドリブルしよう。透明ボール使つてさ。ほら！」

裕子はボールを放り投げる仕草をした。

裕子は強引に走り出した。

引つ張られる佐治ケ江。そして彼女は、宙に浮くボールを見た。

ボールは地面に落ちると、低くバウンドした。

二人はボールを追い、走り出した。ボールを蹴り、また走る。

もう他の三組はとくにゴールしている。

やがて、二人の前にもゴールが見えてきた。

「王子」

「ん？」

「どうもありがとう」

「なにがだよ。変な奴だなあ」

裕子は、にっと笑った。

ゴール。

文句のつけようのない完全なビリ。

しかし、二人にはなんともいえない奇妙な達成感があった。

裕子は、ガッツポーズを作った。

第四章 悪夢

1

コーンがわりに並べた拳大の石の間を、ジグザグにドリブルで抜けていく。

脳内に映っている敵――野木春江か浜虫久樹か自分でも分からな
いが――をかわし、そして右足でシュートを放った。壁に跳ね返っ
たボールが大きな弧を描いて戻って来る。軽く跳躍して、今度はヘ
ディングでシュートだ。

これはさすがに我孫子東の正ゴレイロ田中姫子でも防げないだろ
う。ボールは見事、ネットに突き刺さった。
って、そう都合よくいくわけないか。

苦笑。

木村梨乃は、ボールを拾うと今度はリフティングを開始した。

使用しているボールは、サッカー用の四号球。

梨乃はサッカー経験はないけれども、一人練習用にはサッカーボ
ールのほうが具合がいい。フットサルのボールはローバウンド球、
とにかく弾まないからだ。

梨乃のボール扱いは実に器用なもので、頭、足、腿、胸、肩、背、
と身体のだの部分でもボールを受けてしまう。受ける能力だけでな
く、真上に蹴り上げる能力も相当に高い。ボールの中心をほぼ正確
に捉えているからだ。だからほとんど立ち位置が動くことなく、い
つまでもリフティングを続けていられる。そして時折壁に向かって
強いボールを蹴っては、その跳ね返りを頭や胸で受けている。

土曜日の朝、七時。

利根川河川敷。香取市に海はないが、隣は銚子市、海が近いだけ
あって川幅は広い。利根川は県境を流れており、対岸は茨城県であ
る。

木村梨乃は現在高校三年生、二ヶ月前まで佐原南高校のフットサ

ル部に所属していた。

現在は引退し、受験勉強に専念している。大学に進学したら、またフットサル部に入るつもりでいる。もし自分の入ることになる大学にフットサル部がなかったら、仲間集めて同好会を作ってもいいかなと考えている。

さて、朝練終了。これから家に帰って、受験勉強の時間だ。

フットサル練習に割くことの出来る時間はぐっと減ってしまったが、その分自分で色々と考えて密度の濃いメニューをこなしているつもりだ。少なくとも受験が終わるまでの現状レベル維持は出来るだろう。

以前の梨乃ならば、休日にフットサル部の朝練がないときなどは、朝ずっと布団とお友達なのは当たり前、昼過ぎまで寝ていることも多く、たまに早く起きてもぼーっとしてグダグダ、という感じだったので、それにくらべれば現在は実に引き締まった生活を送っている。

ボールの汚れを軽く払うと、スポーツバッグに入れた。

髪の毛を縛っていたヒモをほどくと、はらりと髪が背中まで垂れた。以前はショートにしていたのだが、部活引退の少し前から伸ばしはじめたのだ。「彼氏が出来てから、ずっと伸ばしたかったんだろう」親友の浜虫久樹に、そうからかわれたことがある。その通りなので否定しなかった。

人目も憚らず手を繋いで歩くほどに、恋人との関係は良好。しかし三年生になってからは会う回数を減らしている。お互い受験生であり、勉強に専念したいからだ。

帰り支度を整えると、改めて周囲をゆっくりと走ったり、ストレッチを行ったり、と五、六分ほどクールダウンを行った。

バッグを背負うと、早足で河川敷を後にした。

梨乃の自宅は、店舗兼住居。

豆腐屋である。

以前は両親夫婦で働いていたのだが、母は梨乃がまだ小学生の頃に病気で亡くなった。代わりに従業員を一人雇い、現在は父親とその従業員の二人で仕事をしている。梨乃もたまに店番や配達を手伝うことがある。

世の中は相変わらずの不景気であるが、営業努力の賜物か、最近若干売り上げが回復して来ている。

帰宅した梨乃は、シャワーで軽く汗を流すと、昨夜のうちに用意して冷蔵庫に入れておいた果物皿を持って二階の自室へ上がった。

果物を摂るのは脳への栄養のため。これから朝食の時間まで二時間、ずっと勉強するのだから。

朝食の後も勉強だ。

普段ならば、昼食の後も夕食まで、夕食のあとも寝るまで、とにかくくひたすらに勉強勉強なのだが、今日は午前だけで終了。午後から豆腐配達の手伝いだ。たまにはフットサルの自主トレ以外でも身体を動かさないと、体が錆びれるどころか脳まで腐ってしまう。本当はデートの予定だったのだが、彼氏の都合で急遽キャンセルになってしまったのだ。

軽トラックの中。

助手席の梨乃は、シートを少し後ろに倒し、ぐたっとしている。ぶるぶると中途半端に質の悪い振動が、シート越しに伝わってくる。もう、十年近くも使っている軽トラックだ。いっそのこと、もっとガタが来ていれば、マッサージ機みたいで気持ちいいかも知れない。

このトラックも、すっかり原価償却済みだ。もって来年か、再来年といったところだろう。母がよく運転していた車であることを思うと、なんだか寂しくもある。

「梨乃さん、大丈夫ですか？」

運転手のヒデさんは、さっきからそればかりいつている。ヒデさんとは、前述した豆腐屋の従業員だ。

一件目の配達を終えて、次の場所へと向かっているところだ。

「だから、だいじょおぶだって。今日は一日の勉強ノルマのほとんどを午前中にやっちゃったからさあ。頭が死んでるだけ。体をハードに動かせば、すぐよくなるから」

「どんな体ですか」

それからしばらく車内は沈黙が続いた。

景色だけが変わっていく。でも梨乃は目を閉じていて、見ていない。

おもむろに、梨乃は口を開いた。

「豆腐運びと領収書切りだけじゃなく、車の運転もしてみたいなあ。この軽トラが無事なうちに」

「まず、免許取らないとですねえ」

「そうなんだけど、今年が取れないな。あたしが全然時間割けないし、時間があってもお金がないでしょ。大学入ったらこつこつアルバイトでもして、夏に免許取るよ」

「そういうのは親に頼っちゃっていいのに。未成年なんですから」
梨乃の、親に負担をかけまいとする気持ちは立派だが、それが過ぎていて、ヒデさんにはどうにもはがゆく感じられてならない。

「ね、ヒデさん、次どこだっけ」

「香取の飲食店を三件。今日はそれで終わりです」

香取市の面積は相当に広く、ここという香取とは、香取駅近辺のことだ。

残りの三件、特に問題もなく配達は完了した。

そして帰り道。梨乃は、トラックの助手席に座っている。先ほどのまでのぼーっとしていた頭も、肉体を動かしたことで、いまはかなりすっきりしている。倦怠感と一緒に英単語まで抜けてしまっただけな気分になり、幾つか思いつくまま、単語熟語を口に出してみる。
よし、大丈夫だ。たぶん。

「お疲れ様でした、梨乃さん」

「いえ、ヒデさんこそお疲れ様でした」

「また走って帰るんですか？」

「うん。そうしたい。香取くらいなら近いし、丁度いい」

今日のように配達の手伝いをしたあとは、よほど遠かったりよほど疲れていない限りは、途中で降ろしてもらって自分の足で帰るようにしている。身体を鍛えるためであり、また、慣れない道を通るのが楽しいからでもある。

梨乃は香取駅近くで軽トラックを降りた。

走り去る軽トラックを見送ると、利根川のある方向へと歩きはじめた。

いつも香取から佐原へ帰る時には、利根川土手の遊歩道を利用するのだ。

「そういえば、確かこのすぐそばにスーパーがあるよな。香取駅を越えたところ。走る前にアミノ酸飲料でも飲んでおくか。どうせなら余計な脂肪燃やしたいしな」

梨乃はぶつぶつひとりごとを呟いた。

高校入学と同時にフットサル部に入り、鍛えに鍛えた身体、筋肉はしっかりとついていて脂肪はさほどないという実に引き締まったものであるが、引退してからというもの、なんだか脂肪がうつすらとついてきたような気がする。「恋愛太り？」などと久樹にからかわれる前に対策しておかないと。

香取駅の駅舎前を通る。

「あれ、なんか駅の建物が変わってる」

以前は古臭い電車の形の駅舎だったのだが、数年振りに来てみれば、いつの間に建て直したのか神社のような形になっている。

確か、王子やサジって、香取だよな。……王子、きっとここでいつも、遅刻遅刻叫びながら電車に飛び乗ってんだろうな。サジに電車のドア開けて貰っていたりして。

2

佐治ヶ江優はカゴを乗せたカートを押しては立ち止まり、押して

は立ち止まり、メモを片手に食材の値札と睨めっこしている。

地元である香取駅近くのスーパーで、夕飯のための買い物をして
いるのだ。

だぼっとした大きな目のスエット姿という楽な服装。地元とはいえ、
しゃれっ気の欠片もない。

「あれ、サジじゃん」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこには高校の先輩である木村
梨乃が立っていた。

「梨乃先輩！ あ、あれ、なんで、ど、どど、どうもご無沙汰して
ます」

佐治ケ江は頭を下げた。

「なにうろたえてんだよ。他人じゃないんだから」

梨乃は佐治ケ江の脇腹を人差し指でつついた。

「どうも済みません。いきなりだったもんやけ」

「そういやサジ、香取だもんね。なにしてんの、って買い物に決ま
ってるか。あたしのほうこそなにしてんだって話だよ。店の手伝
いでこっちまで来てて、終わったんで、これからジョギングでもし
て帰ろうかと思ってさ。飲み物買いに寄っただけ」

「そうなんですか。どうもお疲れ様でした。あたしは、夕ご飯の買
い物です」

「えらいなあ」

「いえ、お店の手伝いをしている先輩のほうがよほどえらいです」

佐治ケ江は、梨乃と雑談をしながら買い物続けた。雑談といっ
ても、梨乃が話を振っては佐治ケ江が応じるというだけだが。

買い物も終わり、二人は店を出た。

梨乃はアミノ酸飲料を買うのを忘れていたことに気付いたが、わ
ざわざ引き返すのもなんだし、二、三十円高くなるが途中の自販
機でもいいやと諦めた。

二人は並んで、香取の街中をゆっくりと歩いている。

そろそろ別れようかな、と、梨乃が思った時、佐治ケ江は梨乃の

まったく予期しなかった言葉を発してきた。

「あの、うち、ここから近いけ。よかったら、遊びに来ますか？」

梨乃は驚いた。佐治ケ江が、自宅に人を招こうとするなんて。

誰とも打ち解けようとしなかった一年前の佐治ケ江ではないこと、充分に分かっているつもりだったのに。

王子のおかげだろうな、きつと。

今年に入ってからというもの、王子こと山野裕子と佐治ケ江は妙に仲がいい。自宅の最寄駅が同じであることを知って、一緒に通学するようになったかららしい。

裕子のあの底無しの明るさは、佐治ケ江の性格にすら影響を与えてしまうのだろうな。もちろん良い方向にだ。

「いいの？　じゃ、お邪魔させてもらおうかな。せっかくだし。ちよつと興味あるしね、サジの家」

ほんと、あのサジが積極的になったもんだな。

などと思っていると、隣で突然に佐治ケ江のぎゃつという悲鳴。

佐治ケ江は両手に持ったスーパ－の袋を落としそうになり、手をもつれさせながらも、奇跡的に掴み直して事なきを得た。何事かとびつくりした梨乃だったが、すぐに起きている状況を理解した。目の前を歩いている中年男性、手に握られている鎖の先には犬が繋がれている。小柄な日本犬、おそらく秋田犬だろう。これが、佐治ケ江が悲鳴をあげた原因だ。

「なんだ、犬かあ」

梨乃は声をあげて笑い出した。

そうだった、佐治ケ江は犬が大の苦手なのだ。

彼女の犬嫌いは、いじめられた経験からくるもの。以前のままの彼女だったならば、とても笑うことなど出来なかったが（なにも知らなかった去年、犬から走って逃げる佐治ケ江をみんなで笑ってしまったが）、しかし佐治ケ江は一年前と比較して随分と成長して、芯も強くなっている。だから梨乃は平気で、いや、あえて笑ったのだ。

「あんな犬でも取り乱さないなんて、成長したじゃん。去年はマルチーズからも逃げてたのにさ」

「いきなりだったから逃げる間もなかっただけですよ。気づいていたら、細い道に逃げ込んでました」

「そっか。笑っちゃったお詫びってわけじゃないけど荷物、片方持とうか。両手でそんな、重いでしょ」

「先輩に荷物持たせるなんて、とんでもない！」

「ほんと真面目だなあ。A型でしょ」

「いえ。Bです」

「えー。確か王子がAだよ。まったく逆じゃんか」

「関係ないですよ、血液型と性格なんて」

「晶みたいなことっちゃって」

梨乃は、同じ三年生の浜虫久樹、畔木景子と仲が良い。三人ともバラバラの血液型なのだが、三人ともがそれぞれ世間一般にいわれているような血液型別性格。なので、血液型別性格というのは例外もあるにしろそれなりに科学的根拠もあるのでは、と考えている。だから佐治ヶ江の血液型を聞いて驚いたのだ。以前に山野裕子の血液型を聞いた時の方が、遥かに驚いたが。

「着きました」

佐治ヶ江は足を止めた。

「もう？　ほんと駅から近いね」

梨乃の家など、佐原駅から小江戸を抜けて山を上った中腹にあるというのに。まあ、学校はそこからさらに山登りしたところにあるから、おかげで通学が楽なのではあるが。

目の前には、堀に囲まれた広い敷地。その中には、いかにも昭和といった古びた雰囲気、でも広くて立派そうな平家建て住宅。

梨乃は佐治ヶ江の後をついていく。

開け放しの門から庭に入り、飛び石の上を歩き、玄関前についた。横開き扉を開けると、長い廊下が奥まで続いている。その廊下途中の、襖の開いている部屋から、四十歳くらいの女性が、可愛らし

くひよこりと顔を見せた。

「ただいま、お母さん」

「あ、優ちゃん、お帰り。お買い物ありがとうね。その方は、お友達？ 珍しいね、裕子ちゃんしか連れて来たことないのに」

「こちらは木村梨乃先輩。スーパーでばったり会ったものやけえ、遊びに来てもらった」

「木村です、はじめまして」

梨乃は会釈をした。

「ああ、あなたが梨乃さん。娘からよくお話うかがってますよ。なんでも、凄い先輩だそうで。娘の恩人だそうで」

「あ、いえ、そんな」

梨乃はどう返したのか、しどろもどろになってしまった。佐治ケ江の耳元に口を寄せ、ちよつと語気荒めに囁いた。

「あんた、あたしのことなんて話してんのよ？」

自分のなにがどう凄い先輩なんだよ。わけ分からん。

「すみません」

謝る後輩に、さらに梨乃がなにかいおうとしたとき、

「あら、お客さん？」

と背が真っ直ぐで元氣そうな、和服を着た老婆が姿を見せた。

「あたしのおばあちゃんです。おばあちゃん、こちら学校の先輩」

「こんにちは。よくいらっしゃったわね。こんな古い家ですけど、どうぞお楽に」

「はい。ありがとうございます」

梨乃はまた、頭を下げた。

佐治ケ江はこの家で祖母、母、そして母の兄夫婦と暮らしている。玄関での挨拶もほどほどにして、梨乃は家の中へと案内された。

「お母さんにもお婆さんにも、あまり似てないね。サジって」

佐治ケ江に誘導され、廊下を歩いていく。

「お父さん似なんですよ」

「へえ、どんなんだろ。見てみたいな」

まったくもって、想像もつかない。どんな可愛いお父さんなんだ。もちろん男女の差がある以上まったく同じ顔のはずないが、どうしても佐治ケ江の顔そのままに背広を着ているところしかイメージ出来ない。それじゃ、単なる佐治ケ江の男装だ。

廊下は、思っていた以上に長かった。外からの見た目通り実際に古い家のように、延々と続く廊下を歩いていると、所々、ぎいぎいと音を立てる。

前を歩く佐治ケ江がそろそろほとんど音を立てずに歩いているのを見ると、自分、デブなのかな、とちよつとショックを受ける。いや、佐治ケ江は慣れているから、床のきしまないポイントを歩いているだけなんだ、たぶん。

「しかしさあ、平家でこんなに廊下が長くてたくさん部屋があって、どんだけ広い敷地なんだよ。実家、凄いお金持ちじゃん」

庶民の娘は、しみじみとそう呟いた。うちはしがない豆腐屋だというのに。共通点は家が古いということだけじゃないか。この家は古さが魅力的に思えるけれど、うちはただ古くてボロイだけ。こんど大きな台風でも来たら、飛んでなくなるんじゃないかな。あとかたもなく。

「いえ。昔から住んでいるとこなので土地があるというだけです」

「おじさん以外は全部女か。家の修繕とか、力仕事は大変だね。お父さんって、まだ広島だっけ？」

「はい。前々から関東への異動願いを上げていたんですが、どうも無理みたいっていつてます」

「そうなんだ。さびしいね。まあ、お仕事だから自由にいかないのはしょうがないのかも知れないけど」

この不景気に仕事があるだけ感謝しないと。などと、えらそうなことを思ってみる。

「全部あたしが悪いんです。両親をバラバラにしちゃって。お母さんだけでも広島に戻っていいからっていつてるんですが、あたしのことを心配して戻ってくれないんです。おばあちゃんたちもいるし、

こっちの学校では楽しくやれているし、なにも心配いらないのに。……あたしが頼りなく見えるからでしょうね。本当に、申し訳ないと思ってます。お父さんにもお母さんにも」

「あのさ、サジはとても優しくて良い子だと思うけど、そうやって自分だけを責めるところは直したほうがいいな。もうちょつと凶太くなんなきゃ。生きてりゃいろんなことが身に起きるわけで、いまのサジのままじゃ、辛い思いするだけだよ。そんな繊細じゃ」

「前に王子にも同じようなこといわれました。それと、あたし別に優しくなんかないです。気が弱くて、そのくせ強情なだけです。……着きました、ここがあたしの部屋です。狭いですけど、どうぞ」

佐治ヶ江は襖を開けた。

六畳の和室。木目調のフローリングカーペットが敷かれており、隅には勉強机とベッドが置いてある。それ以外はなにもない。無駄な物のまったくない、殺風景な部屋だ。

押入れの中には色々と入っているのかもしれないが、まさか見せてくれともいえない。

いきなり訪問して、この状態なのだから、きっと普段からこういうのだろう。

ベッドに腰をかけてお互いの近況について話をしていると、やがて、襖の向こうから祖母の声。佐治ヶ江が襖に近寄り、開くと、祖母が果物皿を持って立っていた。

うちのお父さんなら、声などかけずにいきなり開けて入ってくるよなあ。と梨乃は思った。

「ね、梨乃さん。せっかくだから夕食食べてきなさいよ」

佐治ヶ江の祖母は、笑みを浮かべながら、そういった。

「え、そんな、悪いですよ」

突然の申し入れに慌てる梨乃。

「そんなことない。賑やかなほうが楽しいもの。それとも迷惑？」

「いえ、そんなことは」

「なら食べてきなさいな」

「はい」

佐治ヶ江の祖母はあらためてニツコリと笑うと、襖を閉め、孫娘の部屋を後にした。

「ごめんなさい。おばあちゃん、ちょっと強引なところあるんです。先輩、なんか予定ありますか？ 迷惑なら、やっぱり断ってきますけど」

「予定は特にないし、迷惑なんかじゃないよ」

「よかった。それじゃ、大丈夫ですね」

「なんだかんだいって、サジにもおばあちゃんの血、結構流れてるよ」

「そんなことないですよ。年齢をとるならああなりたいたいとは思ってますけど。それじゃ、あたし夕食のお手伝いしてきます。先輩、楽にして下さい。部屋の物なんでもいじっていいですから」

佐治ヶ江はそういうと、梨乃を残して出ていった。

「好きに、といわれてもなあ」

と、独り言。

なんにもないじゃないか。本当にここは女の子の部屋か。

部屋には、それほど大きくないベッドと学習机、それだけだ。六畳しかない部屋なのに、とても広く思える。

飾り気がないということでは、梨乃の部屋も似たようなものではあるが、多少は趣味のものだって置いてある。何冊かだけ漫画本だって持っているし、床の上にはトレーニング道具も置いてある。しかしこの部屋は、学者の書斎かと思うほど遊びが皆無だ。フットサルやサッカーの本くらいあるかと思っただけでも、それすら見当たらない。

あの超高校級の凄まじいボール捌き、子供の頃から一人でボールを蹴っていて覚えたといっているけど、もしかして一度も技術指導書を読んだことないのだろうか。まさか、と思うものの、でも佐治ヶ江ならば充分に有り得ることだ。

学習机の上に写真立てが置かれていることに気付いた。

そこには、二枚の写真が飾られている。

一枚は、小学校低学年の頃のものだろう。遠足での写真だろうか。佐治ケ江、顔が現在とあまり変わっていないのですぐ分かった。みんな楽しそうにはしゃいでいる中で、佐治ケ江一人だけがむすっと口を閉ざしている。でも、こうして机に飾っているということは、佐治ケ江にとっては楽しかった思い出ということなのだろう。

もう一枚の写真は、今年の三月に開いたフットサル部合宿での集合写真だ。当時の部長である梨乃を中心にみんな集まり、それぞれVサインなどのポーズを取っている。山野裕子がおそろしくふざけた表情をしている隣で、佐治ケ江、やはりむっとしたような顔をしている。もともと表情の硬い佐治ケ江であるが、カメラを向けられると緊張してより硬くなってしまうらしい。

この二枚が飾ってあるということ、さしたる意味はないのかも知れない。しかし梨乃は、胸の締め付けられるような思いを感じた。理由は分からないが、何故だか悲しい気持ちになった。小さな頃に酷いいじめを受けていたことを、聞いて知っているからかも知れない。

一枚目の写真から二枚目の写真までの約十年間、きっと佐治ケ江にとって非常に辛い日々だったのだろうと思う。

机の下にボールが転がっていることに気付いた。椅子の脚に隠れて目立たなかったのだ。

小さなボールだ。

手にしてみると、それはサッカー用の三号球のようだ。

どのくらい使ってきたのだろう。洗っても落ちそうもないくらいに、汚れが染み込んでいる。傷だらけの表面、ところどころ皮が剥がれてしまっており、ボロボロである。

「こんなの使って、練習してるんだ」

思わず呟いていた。

「先輩、夕食出来ました」

襖の向こうから佐治ケ江の声。突然だったので、梨乃はびくつと

反射的に飛び上がった。

佐治ヶ江に連れられ、またぐねぐねと長い廊下を歩いていく。

案内された部屋は、十畳以上もあるかという和室。

中央には、長い食卓。座布団が綺麗に敷かれている。

まるで旅館だ。梨乃はそう思った。

食卓の上には、ご飯、味噌汁、魚の煮付け、筑前煮、その他、細かいものが沢山。地味なものばかりだが豪華な食事だ、梨乃はそんな印象を受けた。

佐治ヶ江の祖母と母、そして初めて会うがおばが座っていた。

「優のおばです。はじめまして。いつも、優ちゃんがお世話になってます」

「木村です。こちらこそはじめまして。……あの、ほんとうにご馳走になっちゃっていいんですか。なんだか申し訳なくて」

「そんな気にしないで。普段の食事だから」

母はそういうと、軽く笑った。

「そうですか。それでは、遠慮なくご馳走になります」

佐治ヶ江と梨乃も食卓についた。

土曜は大抵はおじさんもいるのだが、今日は仕事が入っており帰りが深夜近くになるとのことだ。

「それでは、いただきますようか」

祖母の号令のもと、食事を開始した。

「あ、この味噌汁、とっても美味しい」

まず手をつけた味噌汁を一口含んでの、思わず口をついて出た梨乃の感想である。

「それね、優が作ったものなの」

佐治ヶ江の母はいった。

味だけでなく、具の切り方も丁寧だ。

お椀も木製の、しっくりと手になじむもので、味覚との相乗効果でまるで高級料亭にいる気分になる。まあ、高級料亭など一度もいったことはないのだが。

「ほんとうに美味しい。見た目はとてもシンプルだけでも、味にとっても深みがあって。あたしも一年前からまめに料理するようになったんだけど、とてもこんな味出せないや。ね、サジ、今度出汁のとり方教えてよ」

「はい」

「優は広島にいた頃からよくお手伝いしてくれたから、料理、結構得意なのよ。助かっちゃう」

母が自慢気だ。

「こんなことくらいしか、親にしてあげられることがなかったし」

「話変わるけど、よくね、娘が梨乃さんの話をするんですよ」

「お母さん、やめてよ、先輩の前で、そんな」

「サジ、じゃなくて優ちゃん、あたしのどんな話を話しているんですか？」

玄関での挨拶の時には面食らった梨乃だが、少し時間がたったことで、恥ずかしさよりも自分がどういわれているのかの興味のほうが大きくなってきたのだ。

「部活でこんな練習したとか、声小さくて叱られたとか。いまは受験生だけど、大学でもサッカーだっけ？ 続けるのかな、とか。合宿から戻ってきたときに、一番色々と話してくれたなあ。あんなに喋る優を見たの、初めてだったかも。優は本当におとなしい性格の子だけど、なんだかはきはきしてきたというか、主張すべきところはするようになったというか。本人はまったく自覚ないみたいだったの。でいつだったか聞いてみたことがあって、そうしたら、自分では全然そうは思わないけれど、もしそう見えるんだとしたら、きつと梨乃先輩のおかげに違いない、って」

「ええ、あたしなにもしてないですよ」

梨乃は目を見開き、ちよつと驚いたような表情を作った。

「いえ、先輩が部活であたしのこと見捨てないでくれたからです。性格や態度が変わったかどうかなんて、そんなこと自分では分かりません。でも、気持ちちは、色々と楽になりました。みんなでフット

サルをやるのが、面白くなりました。……それ以外は全然ダメですけど」

一年前までは、ボールを蹴っていらればそれでよい、とチームの輪にまったく入ってこようとしなかったのだ。

「そういつて貰えるなら、それは素直に嬉しいけど。でもきつと、サジが変わったのって、王子の影響が大きいと思うよ」

「それもあると思います」

佐治ケ江が答えたその瞬間、母が口を手でおさえてプツと吹き出した。

母は、山野裕子とは何度も顔を合わせている。裕子の言動の数々を思い出して笑ってしまったのだ。

「ほんとひょうきんな子だものね、王子ちゃんて。あの子と一緒にいたら、優もそのうちバカ騒ぎするようになったちゃうかも」

「お母さんもそう思います？ 面白い子ですよ。それに彼女、ぐいぐいと人を引きずってくもの凄いパワーがあるんですよ。口は悪いけど、ひねたとこのない真っ直ぐな性格で」

フットサル部の部長を引き受けてくれて、本当によかったと思っている。

一度裕子の話が出ると、もう話とまらずすっかり盛り上がってしまい、梨乃は気付くと相当な長居をしてしまっていた。

おいとましたのは、もう夜の八時半だった。

今日は午前だけの勉強予定だったから自分としては問題ないものの、佐治ケ江の家には迷惑をかけてしまった。

でも、楽しい部長のもとで楽しく部活をやっているということをお母さんたちに伝えられたし、まあよかったのかな。

梨乃は佐治ケ江と二人、利根川河川敷へ向かって歩いている。

街灯のろくにない、暗くて細い道だ。

「今日は寄っていただいて、どうもありがとうございました。勉強忙しいというのに」

「そんな。こちらこそどうもありがとう。皆さんによろしくいついてよ。サジ、今度はうちに遊びに来なよ。といたいところだけど、うちボロくて狭くて汚いから。……でも豆腐は大豆たっぷり美味しいから、それじゃ、今度また配達でこっちに来たときに、持つてくるよ。その時に、お味噌汁の作り方、教えて」

「はい。じゃけえ、あれお口にありました？」

「うん。ほんと美味しかった」

「よかった。家族以外の人に食べてもらったことなかったから」

利根川までたどり着き、そして、二人は別れた。

佐治ヶ江は、来た道をそのまま引き返していった。

梨乃は土手の階段を上った。

利根川河川敷の遊歩道に立つ。

見上げれば満天の星。視線をおろしても、漆黒の河に揺らめく星。呼吸が気持ちいい。

梨乃はストレッチで身をほぐすと、ゆっくりと走り出した。

3

木村梨乃先輩を見送って帰宅した佐治ヶ江優は、すぐに庭に出て普段通りの日課を始めた。

ボールを使つてのトレーニングだ。ドリブル、フェイント、壁や、大きな置石の跳ね返りを使ってパスやトラップ。そしてシュート。

日課といつても、単に小さい頃から習慣になってしまっているだけ。一日でもやらないと、どうにも気持ちが悪いだけ。要は好きでやっているのだ。幼い頃から毎日毎日、飽きがこないから続けているというだけだ。

ボールはサッカーボール。それも、少し小さい。小学低学年生用の三号球だ。

幼い頃に、ここ実家に暮らしているおじからサッカーボールを貰ったことがきっかけで、リフティングなどをして遊ぶようになった。一緒に遊ぶ友達がいなかったせいもあるだろうが、サッカーボー

ルでの遊びは自分に向いていたようで、飽きも来ず、親に止められるまでいつまでも蹴っていられた。

一人でボールを蹴っているだけで、サッカーやフットサルといった競技は、中学校で部活に入るまでやったこともなかった。特にフットサルなど、ルールどころか名前も聞いたことがなかった。

小学生の頃は両親と広島に住んでいたのだが、たまにこの香取の実家に遊びに来ると、よくおじさんがボール遊びの相手をしてくれた。現在はもうやめてしまっているが、二十代の頃は、会社のサッカー部に入っていたらしい。

おじから貰ったボールは、毎日蹴っていたせいで、中一の頃にダメにしてしまっており、現在二個目だ。おじから貰ったボールも現在のボールも、サッカー用三号球。買い直す頃にはもう身体も大きく成長していたし、四号球にしようか迷ったが、お店で比べてみたところ三号球の方がしっくりと来たので、そのまま同じサイズの物を買って直した。すでにフットサル部に入部していたのにサッカーボールを選んだのは、その方がフットサル用に比べて格段に弾むので壁に当たっての練習がしやすいから。ちなみにはあるが通常、競技では、サッカーは五号球、フットサルはローバウンドの四号球を使用する。

足元の練習を一通り終わると、続いてリフティング練習を始めた。まずは基本中の基本、足の甲でちょんちょんと軽く蹴り上げるリフティングから。

右足だけ、左足だけ。続いて交互に。

高く蹴り上げると、今度は腿。さらに高く蹴り上げた。頭上を通って背後に落ちてきたボールを、後ろに振り上げた右足の裏側で蹴り上げる。左足裏。右足裏。左足踵で高く上げ、身体を反転させて、大きくボールを蹴った。置石に当たり跳ね返ってきたボールを、胸トラップ。腿で上げ、小さくヘディング。落下したボールを足の甲で軽く跳ね上げると、再び置石目掛けて蹴った。真っ直ぐ伸びたボールは、五メートルほど離れた置石に当たると、今度は虹のような

軌跡で戻ってきた。頭で受けてするりと落とし、腿で受けて落とし、足の甲で跳ね上げた。

見世物でやるようなアクロバティックなことをしないせいもあるが、とにかくボールを地面に落とすことがない。素晴らしい技術力である。彼女の尊敬する先輩の一人、浜虫久樹からも、「ボール捌きじゃサジにゃ勝てないなあ」などとよくいわれていたものだ。

でも久樹のその言葉、謙遜も相当にあったはずだ。あと半年もせずに高校を卒業する久樹であるが、将来のJリーグ入りを目指している熱海エスターテというというサッカークラブが静岡県にあり、来年新設予定のレディースチームに誘われているのだから。

久樹がやりたいのはあくまでフットサルなのだが、選手としての幅を拡げるためにも、その話には前向きらしい。

そんな遠くの地から声がかかるなんて、久樹先輩は本当に凄い人なんだ。

佐治ヶ江は素直に感心している。

満天の星空の下で充分に汗をかいたところで、練習を切り上げて家の中へと入った。

「お風呂入っちゃいなさい」

廊下で母と出くわした。いわれなくても、空いてれば入るつもりだった。もう十月で涼しい季節になってはきたけど、運動して汗だくなのだから。

佐治ヶ江はお風呂で体を洗うと、湯舟でお湯につかりながら自分の足をマッサージした。

先ほどまで浜虫久樹のことを考えていたり、先ほどまで木村梨乃と会っていたためか、両先輩の顔が頭に浮かんできた。

二人とも、お互いを認める反面、競争心が凄まじかった。表面には出していなくても、態度は隠しようもなかった。

あの人たちと比べると、自分にはそういうところが決定的に欠けている。

競争心や闘争心のないことについては、部活に限らずよくいわれ

る。

でも、そもそもそれって、そんなに必要なものなのだろうか。

自分は自分、そのなにかいけないのだろうか。

抜かしたい、負けたくない、そう思わなければならないものなのだろうか。

後輩の生山里子も、自分のことを抜かすと公言しており実際にあの手この手でしかけてくる。

競争心を強く持つということは、頑張り抜くことにも繋がるし、本来よいことなのかも知れない。しかし、自分に矛先が向かってくるとなると、どうにも煩わしい。

こっちは、部活だから真面目にやっているだけなのに、里子はすぐに、バカにされたなどとムキになって。もしもこっちが適当にやったら、それはそれできつと怒るくせに。

それと、前々から気になって仕方がないのが、みんなが九頭葉月の特徴として挙げる「前向きなサジ」。なんなんだそれは。そもそも、前向きじゃないのって、そんなにいけないことか。

こんなくだらないことをだらだらと考えているなんて、自分、まだまだ子供なんだろうか。

あと半年もしないうちに三年生になるというのに。

ちよっと前まで中学生だと思っていたのに、もう高三か。

進路……どうしよう。もうすぐ、三者面談だよ。

お風呂から上がると、パジャマを着て、ドライヤーで頭を乾かした。

自分の部屋に向かおうと長い廊下を歩いていると、曲がり角の向こうから母の声が聞こえてきた。

誰かと電話で話をしているようだ。

「……うん。でも、優がいるから。そう。だって、あたしたちが気付いてあげられなかったから、優をあんな目にあわせちゃったんだからね。償いとかそういうの関係なく、やっぱり優が最優先だよ。ね。そんなの分かってるって。ま、そっちも大変だと思うけど、最後に

電話するようにするから。たまには、そっちに帰るようにするから。頑張つて。うん。それじゃ。体には気を付けてね。またね」

母は受話器を置いた。

昔ながらのダイヤル式黒電話だ。といつても大昔からずっと使っているというわけではなく、古い物好きのおじがわざわざ中古で購入したものだ。

「誰？ お父さん？ どうかしたの？」

「あつと、優か。いつの間にいたの？ びっくりした。そう、お父さんと話してたんだよ。そんなたいしたことじゃないよ。仕事がいりろ忙しいんだつてさ。まあ、単なる愚痴だよ」

佐治ケ江は「ふうん」といったきり、それ以上は聞かなかった。少しだけ聞こえてきたいまの会話から考えて、母が嘘を付いていることがよく分かったからだ。

父の愚痴は愚痴で間違いないのかも知れないが、おそらく仕事で、ちょっとした愚痴では済まないような、とても大きなものを抱えてしまっているのだろう。会社そのものが大変な事態になっているのかも知れない。

そして母は、出来ることならば父の元へ帰り、支えになってあげたいと思っている。でも、自分がここにいるものだから、そして過去のことがあるものだから、それが心配で広島に戻ってあげることが出来ないのだろう。

もうあの時みたい、いじめられているわけじゃないのだし、お母さんだけでも戻ってあげればいいのに。

その夜、佐治ケ江優は夢を見た。

広島にいた時の中学の制服を着ている。

同じ制服を着た、数人の女子に取り囲まれている。

顔はのっぺらぼうのようにつるんとしていてなにもない。でも佐治ケ江には、彼女らであることが分かっていた。

なにをされているわけでもなく、ただ取り囲まれているだけ。

それだけなのに、それがどうしようもない恐怖だった。

なにをされているわけでもなく、ただ取り囲まれているだけなのに、佐治ヶ江の精神は耐え切れず、狂いそうになった。

脳が崩壊しないようにという防衛本能が、佐治ヶ江を夢の世界から覚醒させた。

跳ね起きた。

真っ暗な、自分の部屋。

机上の小さなデジタル時計のLEDによる数字が、真っ暗闇の中でほのかに浮いている。

午前三時二十四分。

息が荒くなっている。

頭の中になにかが無理矢理に入り込んでこようとしているような不快感。

両手で頭を抱えた。

4

放課後。今日も体育館ではフットサル部の練習が行われている。

男子部員は今日は外でのトレーニング。だから体育館が広く使えていい。他には剣道部が練習しているのみだ。

いま行っているのはペアを作ってボールを使つての練習だ。

生山里子は、梶尾花香とのペア。グラウンダーのパス交換練習を一通り終え、今度は浮き球を蹴り返す練習。

花香は両手に持ったボールを、里子の足元に落とすように投げる。

里子は右足で花香の胸の高さへと蹴り返す。花香は、少し横にずらした位置へとまた投げる。里子は素早く横に動いて、今度は左足で蹴り返す。この単純な繰り返しだ。

毎日の基本メニューで、もう体が覚えているから、なにも考えなくたって出来る。というわけで、里子の注意はついつい余計なところにいってしまう。佐治ヶ江優のことが気になって仕方がない。気になるのはいつものことだが、今日はなんだか佐治ヶ江の様子がお

かしいように感じるのだ。

佐治ケ江は二つ隣で、九頭葉月とペアになってボールを蹴っている。どうおかしいのか一目すれば瞭然で、集中力不足だ。まともにボールを蹴り返すことが出来ず、キャッチする葉月が大変そうだ。

普段の佐治ケ江は、精密機械のように正確なキックで、だから葉月がどんな適当なボールを放ろうともきっちりと返せるはずなのに。怪我しているようにも見えないし。

サジ先輩、どうしたんだろ。

「あいた！」

里子の蹴ったボールが、花香の顔面を直撃したのだ。

「あ、ごめん」

「里子、ぼーっとしてよそ見しないでよ！」

花香は涙目で鼻をさすっている。

「そっちこそぼーっとしてるから、受けそこなうんだよ。いや、本当にぼーっとしてんのは、サジ先輩だよな」

あらためて里子は佐治ケ江のほうへと視線を向けた。

「里子も気づいてたんだ」

「当然。あたしサジ先輩のことしか見てないもん」

「それで顔にボール当てられちゃたまらないよ」

「だから謝ったでしょうが」

山野裕子部長の大声が飛び、次の練習メニューへ。ボールキープと奪取の練習。先ほどまでのペア同士で、四人組を作った。里子花香は、葉月佐治ケ江ペアと組むことになった。

開始早々、佐治ケ江がキープするボールを全力で奪いにかかる里子。現在の實力差では、まず奪えないと思っている。それで構わない。どんどん距離が縮まってきていることは実感しているし、いか必ず追い越せる。それは遠い先の話ではない。だが、

里子は妙な脱力感、というか消失感を覚えた。

佐治ケ江から、実に簡単にボールを奪うことが出来てしまったからだ。

奪ったというのに満足感でも達成感でもなくて、消失感。里子は戸惑った。

やっぱりサジ先輩、変だ。

佐治ケ江は一瞬、いや二瞬三瞬ほど遅れて、自分の足元にボールがないこと、里子に奪われたことに気付いた。里子から奪い返そうと詰め寄るが、里子は身体を反転させて花香へとパス。

しかしそのボールは花香へは届かず、葉月にカットされた。里子は佐治ケ江のことばかりに注意がいつて葉月の存在をすっかり忘れていた。

葉月はすぐさま佐治ケ江へとパス。

佐治ケ江は右足でボールを受けると、向かってくる花香をかわし、葉月へとパス。

そしてまた、ボールは佐治ケ江へ。

「花香は葉月お願い」

里子はどういうと、佐治ケ江に向けて身体を突っ込ませた。パスコースは塞いだ。これで一対一だ。

佐治ケ江の動きを予想し、足を突き出した。だが、里子の攻撃は単に床の埃を吹き飛ばしただけだった。佐治ケ江がボールを軽く浮かしたのだ。

浮かせたボールをまたぐようにして、踵の裏側に収めた佐治ケ江は、里子の様子を伺っている。

なんだかんだいっても、やっぱり抜群に上手だ、この先輩。華奢な体つきからは信じられないくらいに。

里子は右足、左足、と休みなく繰り出し、ボールを奪おうとする。だが、ボールに触れることも出来ない。

里子は足払いのようにボールを奪おうとした。これはフェイントで、佐治ケ江がまた宙に浮かせて逃げようとすることを期待したものだ。そして、里子の読みは当たった。

奪った！ と確信した瞬間、里子は信じられないものを見た。

宙に浮き上がるボールの表面を舐めるように佐治ケ江の足がボー

ルを追い抜いて上がり、里子に奪われるよりも先に、ボールを引き戻したのだ。

あまりに離れた技術の差を見せられた里子は瞬間的に逆上してしまい、佐治ケ江の胸を突き飛ばして、ボールを奪っていた。

佐治ケ江は足をもつれさせ、倒れ、尻餅をついた。

「先輩、真剣にやってください！ 突き飛ばされた程度で、あたしごときから奪われるはずないでしょう！」

里子は怒鳴るようにいった。

「里子、そんなムチャクチャな」

花香は佐治ケ江を引っ張り起こしながらいった。

佐治ケ江は、少しおどおどしたような顔で里子を見た。

「ごめん、里子。でも、あたし、真面目にやってる」

「さっきだって、あたしなんか簡単に奪われて。バカにして、手を抜いているとしか思えない」

「バカになんかしてない」

「なら真面目にやってください。少なくとも、ぼけーっとしてんのやめてくれませんか。失礼です」

もしかしたら、考えごと、迷いごとがあり、集中力に欠けているのかも知れない。体調が悪いのかも知れない。里子はなんでもズケズケというくせに、こういうことに関しては性格上とても直球で聞き出すことが出来ない。探るように聞き出す器用さも出来ないし、このように激しく当たることしか出来なかった。

5

二人の女生徒が、山林の道を歩いている。佐原南高校の制服姿。二人とも、大きなスポーツバッグを背負っている。

山野裕子と武田晶だ。

もう夜の七時を過ぎている。十月中旬の太陽は、完全に山の向こうへと沈んでおり、見上げれば木々の間から幾つかの星のまたたきが見える。

山林を抜けるこの通学路、通る自動車の量は非常に多く、うるさい。しかし、木々の枝に囲まれているために夜は実に鬱蒼とした、徒歩で進むにはさびしい道になる。これで交通量が少なかったら、あまりに不気味で、怖さにとっても歩けないところだ。

部活練習の後、二人残って今後出場予定の大会に向けて話し合っていたところ、下校時間が遅くなってしまったのだ。しかも、この時間帯一時間に一本しかないバスにタッチの差でいかれてしまい、仕方なく徒歩で駅に向かっていくというわけである。

「晶、なんかくたびれた顔してんじゃない。副部长なんだから、こういう遅い日もあるって」

裕子はいった。

「副部长っつーより、ゴレイロが疲れるんだよね」

「ゴレイロというか、咲担当がだろ」

「まあね」

「相変わらずだからな。ま、晶が全然突き放してないから疲れるわけ。がつり付き合っているから疲れるわけで。いいんじゃないの」

「他人事だと思って」

「こっちだって、里子、かなり疲れるんだぞ」

「里子に疲れてんのはサジでしょうが」

「だから！ サジ今日もご苦労さんって、肩叩いてあげんのに疲れるんだよ。サジくよくよすんなよって慰めたりさ」

「そりゃご苦労さん」

二人は、それきり口を閉ざして黙々と歩き続けた。

五分ほどして、今度は晶から口を開いた。

「一年って難しいよなあ。上級生になってみて分かるけど。関サルも近いってのに。……去年のほうが、もっとチームになってたよな」

「あたしのせいだよ」

「そうはいってない。一年生たちの性格のことだよ」

「消極的なのと反乱軍みたいなのと、完全二極化してるからね」

つい先日までは、問題児認定を受けているのは生山里子一人だけだった。木村梨乃前部長から、くれぐれもよろしくと頼まれたのも。里子の影響か、部に慣れてきたからか、最近、梨本咲が里子の対抗勢力として台頭してきた。

この二人が扱いづらいのは事実だが、負けん気の強いところは頼もしい。

なんだかんだとこの二人の扱いに慣れてしまうと、今度は、残りの者の消極性が目につくようになってきた。

そこが、裕子も晶も不安に感じている点だ。

みんな、献身的なプレーをしてくれる。チームプレーに徹してくれている。それは素晴らしいことだが、しかしそれは、自信のなさをごまかすためではないのか。

実際見ていると、強気にいってもいいところでパスを選択することが多いのだ。

だから、怖さが出ないのだ。

今年の一年生はフットサル未経験者ばかりなので、あれこれ求めるのは酷かも知れない。

ただ、現在気になる点は経験より性格。

「みんな、優しすぎるんだよな。優しいというか、気弱」

「王子の百分の一でも傲慢なところがあればいいのにね」

「そうそう。って、それちょっといい過ぎじゃないか」

さて、いつしか山を降り終えて、佐原を佐原ならしめている江戸情緒の町並みの中に入っていた。佐原は小江戸などと呼ばれる、一応の観光地である。

小さな川の上、赤い木の橋を渡っているところ、裕子は川沿いの道のベンチによく知った女の子が腰かけているのを発見した。なにやら下を向いている。学校の制服姿で、すぐ横には大きなスポーツバッグが置いてある。

「ねえ、あれサジじゃんよ。とっくに帰ったと思ったのに。おい、サジ！ なにしてんの！」

裕子が遠めから大きな声を出す、佐治ヶ江優は無反応だ。

二人は橋を渡りきると川沿いの道へと折れ曲がり、佐治ヶ江のいるベンチへと近寄っていった。

裕子は腰をかがめ、佐治ヶ江の顔を覗き込んだ。

「すっかり眠っちゃってるよ」

その可愛らしい寝顔に、裕子は笑みを浮かべた。

「最近、練習の時もフラフラしてたからなあ、寝不足なんじゃないの？ 名前の通りの優等生だからな、勉強疲れで」

と、晶がいう。

「里子疲れだろ。起こしちゃっていいのかな」

「そりゃ、夜にこんなところで眠ってちゃダメでしょ」

「そうだよな。サジは我々と違って女の子だからな」

と裕子、一人で頷いている。

「我々って、王子だけだろ、男の子は」

「お前だけだ！」

「やり返されて怒るなら、最初からそういうこというなよ！ 我々とか複数形でいうなよ！」

「ムキになっちゃって、晶ちゃん可愛い」

「アホか。……ともかく、起こそうよ。でも、普通に起こすのも面白くないな。なんたって眠ってるサジなんて滅多に見られるもんじやない。授業中の王子が眠ってんのはいつものことだけど」

「お前だって居眠りでバケツ持って立たされてたくせに。……スカートめくりあげてやれば飛び起きるんじゃない？」

「変態エロ親父か」

晶、呆れ顔。

「あ、そうだ」

裕子はさも名案といった表情を浮かべると、小さな寝息を立てている佐治ヶ江の耳元に自分の口を持っていた。

「犬だ！」

唐突に叫んだ。

脊髄反射かのような一瞬の間もない時差で、佐治ケ江は「うわ！」と声の裏返った悲鳴をあげて立ち上がった。

夢の中で、大嫌いな犬に脅えているのか、両手を振り回し、あわてふためいている。

その様子を見て、裕子は腹を抱えて大笑いだ。

だが……

「殴らないで。ごめんなさい。ごめんなさい！」

佐治ケ江は犬に脅えているのではなかった。きっかけは、裕子の発したその言葉かも知れないが。

「おい、ちよつとサジ、様子が変じゃない？」

ほとんど表情を変化させることのない晶だが、予期せぬ突然の事態に、さすがにうろたえてしまっている。

佐治ケ江は狂乱したように、なおもなにかから逃れようと腕を振り回し続けている。裕子はその背後に回り込むと、羽交い締めにした。

「サジ、しっかりしろ。どうしたんだよ。寝ぼけてんのか、おい！」

もとの筋力が、裕子のほうが桁違いに強いため、佐治ケ江を抑え込むのは容易だ。しかし、普段の様子からはとても考えられないような力で暴れる佐治ケ江に、裕子はただ驚くばかりだった。

「なんだよ、もう犬ネタOKじゃなかったんかよ」

誰にともなく叫ぶ裕子。

「知らないよ、そんなこと。サジ、なにもいないから。誰も、殴ったりしないから」

裕子に羽交い絞めにされている佐治ケ江の腕を掴んで、晶は必死に呼びかけた。

「サジ！ サジ！」

何度、その名を叫んだだろう。

唐突に、佐治ケ江の動きが止まった。

乱れておでこにかかった前髪の奥で、なにかに脅えているような、なにかを悲しんでいるような、怒っているような、そんな、なんと

もいえない眼をしていた。しばらくすると、催眠術からとけたかのように、はっと目を見開いた。

裕子は佐治ケ江を解放すると、彼女の前に立った。

佐治ケ江は、首をゆっくり左右に振って、周囲を見回している。

「王子、晶……。なに、してるの？ ……ここ、どこだ」

「なにしてんのじゃないよ。こんなところで寝ぼけやがってさあ」

裕子はようやくその顔に安堵の色を浮かべた。

「え、え、あたし、なんか変なことしちゃった？ ごめんなさい」

「ごめんって、それあたしらのいう台詞だよ。すっかり眠ってたからさ、ついからかっちゃって、ごめん。つうか、だいたいこんなとこで眠ってたら危ないだろが」

「ごめん。色々と考えごとをしていたら、つい」

「なんか知らんけどさ、疲れてんだよ。疲れるのは肉が足りてないからだ。よし、セカンドキッチンのミート百パーセントスパイシートリプルスタック照り焼きバーガー、おごってあげる！ 晶が。いこっ」

裕子は有無をいわず佐治ケ江の腕を掴んで歩き始めた。

晶は軽く頭をかくと、二人の後を追った。

もうすぐ夜の八時になるというのに、セカンドキッチンの主役は相変わらず中高生。大学生やOLの姿もあるにはあるが、少し肩身が狭そうだ。

セカンドキッチンとは佐原駅のすぐ近くにある雑居ビル一階の、ファーストフード店だ。

夕方と比べるとやや客も減って、狂ったような喧騒もだいぶおさまって幾分か落ち着いた感じになっている。

店内奥の隅っこの四人テーブルに山野裕子、武田晶、佐治ケ江優の三人はついている。

注文したものがテーブルの上、それぞれの前に置かれている。

「よし！ 肉だ！ サジ、食え！ おごりだ！」

裕子は単語ぶつ切りで叫びながら、佐治ヶ江の前のトレイをぐいぐいと押し付けた。そのトレイに乗っているのは、スパイシートリプルスタック照り焼きバーガー二つ、ポテトグラタンパイ、烏龍茶、少食の佐治ヶ江に全部食べられるかどうかという量。裕子が勝手に注文したのだ。

裕子は佐治ヶ江と同じものに、さらに加えて、ピリ辛チキンライスパークーと、セカンドキッチンスペシャルストロベリーシェーキ。晶はやはり佐治ヶ江と同じものに、焼きおにぎり大サイズを二つ。もう時間も遅く、しかも帰って家でも夕ご飯を食べるであろうというのに、色気より食い気の勝る裕子と晶、十七歳。

「肉ってもジャンクフードじゃないかよ。おごるけど、王子も出せよな」

晶がバーガーの紙袋を剥きながら、ぶつぶつ呟いている。

「せこつ。もとはといえは、ただ起こすのも面白くないなんて晶がいうからじゃんかよ。晶ミート百パーセントお」

「あんなこといえなんて誰もいってないだろ。それと、最後の部分、意味が分かんないんだけど」

「あの、やっぱり自分の分は出すよ。いくらだっけ」

二人の醜い争いを見てというわけではないだろうが、佐治ヶ江はそういうとカバンから財布を取り出した。

「いいのいいの！ ほら、晶がみみっちいこといってっから！」

「どっちがだよ！」

また始まった。

「あ、あの、じゃあ、せっかくだし悪いから、ご馳走になるね。かわりに今度、なんかおごるから」

「悪いからと思ってんなら、今度おごるなんていってないで、おとなしくご馳走になってりゃいいんだよ」

「バカ王子、悪いと思わなきゃならないのはあたしたちのほうだろ。バーカ」

「確かにあたしはバカだけどお前にいわれっど頭に来んな！」

「だってバカじゃん。救いようのないほどのバカじゃん」

「うっせえな、でかい声で恥ずかしい言葉叫ぶぞ！」

「叫べるもんなら叫んでしろよ！」

「おっばい！ おっばい！ キ〇〇マ！ おっばい！」

周囲の客たち、当然ながらびっくりしたような視線を裕子たちのほうへと向けていた。

「うわ、ホントに叫んだよ。信じらんない。こいつ、赤の他人。ていうか誰、この人？ 短髪のくせに女子服着てて、男か女か分かんないんですけど。気持ち悪い。サジ、他の空いてる席にいこう」

佐治ヶ江は恥ずかしさに顔を真っ赤にしてカチカチに硬直してしまっている。

「晶ちゃん、あたしたち親友じゃないのよ」

裕子は晶の制服の袖を引っ張った。

「気色悪い声出すな。お前なんか知らん」

「そうだ、関サルの対策練ろう。さっきの続き。サジもいることだし。部長命令！ 試合、来週なんだから。ね、生涯大親友の晶ちゃんに優ちゃん」

「まったくもう。誰が親友だよ」

晶は座り直すと、前髪をかきあげ、ため息をついた。

晶を少し知る者は誰も、彼女の性格をクールだと評価する。物事への感心が薄く、会話にしても振られて返す程度で自ら乗って行くことはほとんどない。本人にはクールを気取っているつもりはまったくない。単に普通にしていただけ、感情の向くまま楽にしていただけなのだが、そういった点が冷たく思われる要因かも知れない。

しかし、山野裕子の前では調子を狂わされっぱなしだ。嫌だと拒絶しようとも、自分の領域にズカズカと踏み込んで来るのだから。

でも最近、それも悪い気はしないな、と思っている。悪い気がしないのなら、狂わされているということそのまま受け入れればいいだけ。とにかくこだわらず、それが自分のモットーなのだから。

そもそも裕子の前で調子を狂わさないなんていられるなんて、真砂茂美くらいのものだ。

さて、関サルの話である。

関サルとは、関東高校生フットサル大会の略である。毎年秋冬に開催される、関東地方の高校フットサル部を対象にした大会だ。

フットサル部のある高校はそれほど多くないため、最初の数年はろくに参加校が集まらない実に知名度の低い大会だった。だがここ数年、年々注目度が増してきており、この大会に出場したいがために生徒がフットサル同好会を発足させたという高校もあるほどである。

今年は、都県地区予選を一日で行う。地域にもよるが、三、四試合を行って、一位突破した高校のみが、各都県内の決勝大会へと進める。各決勝大会で一位になった高校のみが、都県の代表として代々木で行われる関東大会に出場し、関東ナンバーワンの座を争うのだ。

五日後、今度の日曜日に関サル千葉県地区予選が行われる。

どうせなら大きく関東制覇を目指したいところだが、そのためには、まずは地区予選の対策だ。

裕子は自分のバッグから、大学ノートを取り出して、テーブルの上に広げた。

「まずはさ、これを見てよ」

裕子は真剣な表情になった。部長の顔だ。

「見てっていわれても、読めないよ。字、下手過ぎ」

「レベルの低いケチつけてんじゃねえよ！」

部長の顔は五秒ともたなかった。

「ホントに読めないんだって！　じゃ、王子、自分で読んでみるよ」

「印材木下高校の、この二年間の戦績、個人データについて」

「凄いな。王子、考古学者になれるんじゃない？」

「意味分かんねえし。で、要するに印材木下っつーのはさ」

部長と副部長は、ようやく作戦会議を開始することが出来た。始

まっしてしまえばフットサルが好きな者同士、あれやこれやと熱く議論して、着々と戦術、対策を打ちたてていく。

ときおり佐治ケ江に意見を求めてみるものの、どうにも参考にならないかった。佐治ケ江は個人技術も試合時の戦術理解度も格段に高いのだが、机上で戦術を云々するのは大の苦手なのだ。自分の考えもまとめられないし、相手が色々語ってきて、なにをいわれているのかさっぱり理解出来ない。

「いや、晶さあ、だからそれはさっきの攻め方でいいんだって。きつと梨乃先輩でもそうするぜ」

意見の衝突。裕子は折れず、ノートをバンバンと叩いた。

梨乃先輩は佐原南の三年生で二ヶ月前にフットサル部を引退したばかり、前部長である。個人技が優れているばかりでなく、統率力もあり、なんといっても戦術眼が卓越していた。

「いや、あたしの梨乃先輩なら、そうはしないだろうなあ」と晶も譲らない。

「悪いけど、わたしはあなたの梨乃先輩じゃありません。わたしはあなたの裕子先輩です」

「いつあたしの先輩になったんだよ。そういえばサジさ、梨乃先輩が遊びに来たんだって？ 香取に来たとき」

佐治ケ江は頷いた。

「え、なんだよ、香取来たならうちにも遊びに来ればよかったのに」裕子はぼやく。

「部屋が汚すぎて嫌だってさ。そもそもあんたん家の場所知らんでしょうよ」

「お前こそあたしの部屋がどれだけ凄まじく汚いか知らんでしょうが。そもそも、なんで知ってんだよ汚いって」

「想像つくってば。で、梨乃先輩とどんな話したの？」

晶の問いかけに、佐治ケ江はしばらく考え込んで、

「とりたててなにか、という話はしなかったけど。王子のこととか、お味噌汁のこととか。フットサル部のこと色々気になっているみ

たい。受験勉強でまったく見られなくてごめんっていった」

「そういや受験生だもんな。ね、ね、彼氏との話なんか出なかった？」

裕子、興味深々に身を乗り出す。

「全然、そういう話は出なかった」

「うまくいってないんじゃないの？　なんかそんな雰囲気におわせてなかった？」

「ワイドショーのレポーターかよ」

晶が突っ込みをいれる。

「さあ。勉強が忙しそうだし、それで会う回数減らしてるだけだと思っけど」

「そっか。希望の学校に受かるといいねえ。よし、それじゃ作戦会議再開。あたしらには勉強よりも恋愛よりもフットサルだもんねえ」

裕子は「ね〜」のところで可愛らしく首を大きく傾げた。

「あたし最近、彼氏欲しいな」

と、晶の予期せぬ言葉に、裕子はテーブルにおでこぶつけた。

「和を乱すこというんじゃないよ」

「もとから和なんかないだろ」

「だもんね〜、っていわれたら、サジと二人で声合わせて、ね〜って返しときゃいいんだよ」

「昭和末期の女子高生かよ」

「それでも上等だろ。このジャガイモ顔が。明治時代の白黒写真みたいな顔してるくせに」

「いいからはやく作戦会議再開しろよ！　バカ王子！」

6

その名は屁こき刑事！

腸にガスある限り、おれは平和のラッパを奏で続ける

ぶぱーーお

お！ お！ ならならゝ デ・カ！
お！ お！ ならならゝ デ・カ！
ダダッダッダッダッダッダッ

愛する人を守るため

肉食ってメタボ

全開ターボ

屁はくさい

ファイトオン ダダー

立ち上がれ

ファイトオン ダダー

君もこけ

平和を奏でるこのメロディ

ブッ ブッ ブッ ブッ ブッ ブー

「チェインジ！」

七文字隼人はおならパワー全開ハイパーブリーフに履き替えた。
わずか三秒の早業だ。

テンガロンのつばを指で軽く上げると、不敵な笑みを浮かべた。

「平和の音色、奏でるために、地獄から戻った男。屁っこーき デカ！（デカ デカ デカ とエコー）」

さあ、戦いだ。

覚悟しろ、地獄軍団の戦闘兵よ。

山野裕子は、ぬおーうと叫びながら飛び起きた。

朝の五時。窓の外は、淡い陽光の気配はあるものの、まだ暗い。

裕子は、両手で頭を抱えた。

「関サル予選の大事な日だってのに。なんつー夢を見ちまったんだ。なにがおならパワー全開ハイパーブリーフだよ畜生。……悪夢だ」

第五章 弾丸ジェットボーイ

1

「違う、こうやってかわすんだよ」

山野孝は両の握り拳を合わせたまま、腰をかがめて、すっすっと素早く左右に体を振った。

「こう？」

妹の裕子は、兄貴の仕草を真似してみる。

「そうそう！ それそれ。ま、そんな感じ。違うけど」

母親が朝食を作り終えるのを待つ間、裕子はお手伝いをするわけでもなく、兄とボクシングごっこに興じている。兄の孝は茨城の大学に通っており、そこでボクシング部に入っているのだ。

ボクシングは中学の頃からやっているものでそれなりに強いらしいが、裕子の前では優しく、そして時折大ボケをかます、良い兄貴である。

午前、七時半。

平日ならば眠くて眠くて仕方ないといった時間帯だが、休日朝の裕子はいつも元気いっぱいだ。そう、今日のような特別な日でなくとも。

ここは香取駅近くにある、小さな分譲マンション。最上階である四階の3LDKに、山野一家は暮らしている。

父はこの近辺が地元で、実家がここから徒歩数分のところにある。仕事の関係で裕子が生まれるずっと前から横浜暮らしだったのだが、四年前、千葉県銚子事務所に転勤になったのを幸いに、実家近くにマンション購入したのである。

「ご飯よ」

ダイニングで、母がテーブルに食器を並べている。

すでに父が食卓について、新聞を広げている。父も今日は仕事が休みで、本来ならまだ布団に入っていたいところだが、騒ぐ裕子た

ちに叩き起こされてすっかり目が覚めてしまったのだ。

「うわーい♪」

孝と裕子は、ドドドとけたたましい足音を立てて走ってくると、飛び跳ねるようにして食卓についた。

「ドタバタすんじゃないの！ 分譲でも下に聞こえるんだからね」

「気をつけますー」

孝は小さく頭を下げた。

「お、スクランブルエッグだ。やった！」

裕子、まったく聞いていない。

母は、裕子の頭をステンレスのお盆で殴った。

そもそも目の前に食事の並んだ空腹時の裕子に、他人の話を聞けというほうが無理な話だ。裕子は人一倍食欲旺盛で、胃も非常に頑丈である。試したことはないものの、平日早朝の眠くて死にそうな状態だろうとも脂身たっぷりのカツ丼を何杯でも平気でおかわり出来る自信がある。

「ほらお父さんも。行儀悪い姿勢で新聞読んでないで、しまってください」

片足あぐらかいて新聞を読んでいる父に、母が注意する。

「イヤですー」

「お父さん！」

「はい」

しょんぼりしたような表情で、新聞をテレビ台横のマガジンラックに入れると、あらためて姿勢をただして座り直した。

「お父さんさあ」

裕子はテーブルに両肘付いて身を前に乗り出す。

「前からいおうと思ってたけど、とりあえず一回だけはむかってみるっての、やめたほうがいいよ。勝てるわけない。女はね、強いんだから」

父は完全に黙ってしまった。裕子たちの賑やかな姿に、羽目はずすことの憧れを覚えるものの、眼鏡をかけた中年サラリーマンの

イメージ通りで基本は寡黙で真面目な人間なのだ。

「じゃ、裕子も彼女が出来たら大変だな」

と、兄貴がからかう。

「そうそう。尻にしかれちゃってね、ってなんでやねん！　なんであたしに彼女が出来るんじゃ！　彼氏でしようが。……しかも、スラッと長身の、笑顔が素敵な、ちよつと日に焼けてて、笑うと歯が白い。でも今はね、部活が恋人なのよ」

乙女モードに入っている裕子の姿に、ふーん、と味噌汁をすする孝。

『言い訳が出来てよかったな』

孝と裕子の混線合唱。

二人は少し見つめあった後、どちらからともなく笑い出した。

今日はその恋人との特別な日なのだ。

関サル。関東高校生フットサル大会の、千葉県大会地区予選が行われるのである。

去年は、珍しいことに体調を崩してダウンしてしまい、せめて応援だけでもと会場に同行した。と、そのような立場だったし、まだ実力もなく、どのみち試合で使ってもらえるかも分からなかったし、だからそれほど緊張はなかった。

結果は、地区予選二回戦敗退。残念には思うものの、さして悔しさは感じなかった。どこか他人事だったのだ。

今年はどうだろうか。自分は欠かせない主力であり、なんといっても部長なのだ。

いまはまったく緊張していないが……いや、しているのだろうか。だからこんな、意味もなく楽しい気分になっているのだろうか。自分の弱さを、隠すために。

「裕子、遅刻しないようにしなさいよ」

母があらためて注意する。

「分かってる。八時二十分にサジと駅で待ち合わせ。だから余裕だよ」

「とかいってて、この間も練習試合の時、一本乗り遅れたっていったじゃない。サジちゃんに悪いでしょ」

「今度は大丈夫だって。ごちそうさま」

娘は日々成長しているんだぞ。いつまでも子供じゃないんだ。

「歯、ちゃんと磨くのよ」

「分かってるってばあ！」

すっかり忘れてた。

2

JR成田駅からバスで二十分、周囲ぐるりを果てなく取り囲む田園風景。そんな中に成田市立山陽台中央公園はあり、その広い敷地内にある第一体育館が、いま目指している場所である。

バスの正面ガラス越し、先ほどから遠くに見えていた体育館の屋根が、だんだんと、近く、大きくなってきた。

関東高校生フットサル大会千葉県地区予選、佐原南高校は去年と同様、ここが試合会場だ。

去年の予選はミニトーナメント方式で、三戦全勝の一チームのみが千葉県決勝大会に進むことが出来た。今年は、四チーム総当りのリーグ戦形式。決勝大会へ進出出来るのは一チームのみという点では去年と同様だが、勝ち点式であるため戦略上の違いというものは少なからずあるだろう。

千葉県内での参加校が去年よりも増えたため、エリアが細分化されて予選会場が増えた。

運がよいというべきか、おかげで優勝候補の一角である我孫子東と地区予選では当たらずに済む。去年は、我孫子東はシード校として予選は免除されていたものの、本来ならば同じ地区だったからだ。今年は、我孫子東高校の会場は柏になった。

去年、この成田で、熾烈な激戦を行った印西木下高校と流山はとがや高校であるが、こちらもまた会場が分かれることになった。印西木下はここ、成田会場で、流山はとがやは柏会場だ。流山はとが

やとしては、印材木下への雪辱の機会を失ってしまったわけだが、しかし優勝候補の我孫子東と対戦するわけだから、これに勝てば実質、印西木下への雪辱も果たしたと考えていいだろう。我孫子東を破ることの出来る高校など、そうはないのだから。

雪辱の機会ということであれば、佐原南にも与えられている。去年の二回戦で、印西木下になす術なく敗れたのだから。

印西木下は確かに難敵だ。しかし、今年の予選、トータルで考えると相当に対戦相手に恵まれているかも知れない。と山野裕子は思っている。もちろん油断するつもりは毛頭ないが、柏会場と比較すれば楽なはずだ。

印西木下は堅守が売りのチームで、崩すのは難しいだろう。だが、去年直接対決した経験と今年あらたに収集した情報とで、対策はしっかりと講じてあるつもりだ。

他の二校、成田不動岡高校と北央館学園高校だが、どちらも今年初参加。北央館学園高校などは、まだ部の創設二年目と聞く。

だからきつと弱いだろう、などという根拠はまったくないし、ろくに情報がないというのが逆に不安なところだ。しかし、相手を意識するあまり無駄な緊張感に悩まされることがない、ということもまた確かであろう。

木村前部長が、フットサルを通じたある親友から聞いた下馬評では、印西木下が固いところとのこと。でも、去年の大会で茂原藤ヶ谷を破った佐原南もそれなりに評価は高い。

中でも佐治ヶ江優の知名度は相当に高く、それ故、かなり警戒され、研究されている。スタミナに難ありという弱点も知られている。かなり激しいマークも受けるだろう。もう一人、攻撃のキーマンがないと厳しいのでは。梨乃の親友は、梨乃にそういったそうである。

それを聞かされた裕子は、確かにごもったものなことですと思ったが、いわずとも前から気になっていたところだ。

裕子自身はキーマンとなるようなタイプではない。単なる切込み

隊長であり、かく乱役。そう自己分析している。

候補は一人、いる。

しかし彼女はまだ、目覚めていないのだ。

公園前の停留所にバスが到着した。

佐原南の生徒たちは、次々とバスを降りていく。

全員、黒いジャージ姿だ。背中には、「県立佐原南高等学校」と銀の刺繍。それぞれ、大きなスポーツバッグを持っている。

乗客が一気に降りて軽くなったバスは、軽快なエンジン音を上げて去っていった。

「サジ、なんかフラフラしてない？」

会場への道を歩きながら、篠亜由美は心配そうに佐治ヶ江の顔を覗き込んだ。

「大丈夫。なんともないから」

「ならいいけど」

敷地内の曲がりくねった道を何分か歩き、競技場へと着いた。

裕子は、大きな観音開きのガラス戸を開いた。

しん、と静か。人はいるが、フットサルコート二面分、と会場があまりに広い。十人や二十人程度では少なすぎて空気は寂しく反響するだけだ。

この人数の少なさは、関係者しかないからであるが、プロスポーツでもなければ優勝決定戦でもないし、中高校の競技大会はこんなものである。

佐原南の生徒たち、壁際にバッグを下ろすとジャージを脱いでユニフォーム姿になった。

ユニフォームは、シャツもパンツも、ソックスも、濃い青色だ。裕子の指示のもと、二列縦隊を作り、アップを開始する。

体育館内、壁際を軽いペースで二周。そして動的ストレッチ。歩きながら腕を回し、足を振り上げ、腰を捻る。肩、足首、膝、股関節、腰、首、を試合に向けて念入りにストレッチしていく。

足を回すように振り上げては前に進み、なんだか、踊っているよ

うにも見える。裕子が部長になってから取り入れた、ブラジル体操という有名なウォーミングアップの方法だ。

先頭の裕子は後ろを振り返った。すぐ目についたのが、佐治ヶ江優だ。

いつものことながら、佐治ヶ江優の関節は異様に固い。集団の中で、ひと際目立つ。ろくに身体を捻ることが出来ないし、足も高く上げられない。それなのに、試合の時にはと軟体動物のようにぐにゃぐにゃとして見えるのは、何故だろう。ハイレベルなプレーの連続に思わず錯覚させられてしまうだけなのか、さもなければ本番になると何故か突然に身体が柔らかくなるのだろうか。

さて、ストレッチも終わり、続いてボールを使つてのウォーミングアップに移った。

「しっかり準備しとけよ。今日は全員に出るチャンスあんだからな」裕子は手を叩きながら、声を張り上げた。

今日の試合スケジュールは過酷だ。ぶっ続けに三試合が行われ、しかも間には三十分の休憩時間しかない。

いかに体力温存しながら戦うかが重要になってくる。しかし印西木下は手を抜いて勝てる相手ではないし、他の二校にしても能力未知数であるためなんともいえないところだ。何度でも選手交替が出来るルールなのだから、それを活用して手探りで様子を見ていくしかないだろう。

「では第一戦を開始します！ 選手の方は準備をお願いします！」大会係の一人である黒いスーツ姿の中年女性が、体育館中に響くような大きな声を出した。

これから、各校総当り三試合、二つのコート使つて同時に二試合づつ行われる。

裕子は佐原南の全員を集め、円陣を組んだ。

ゆっくりと息を吸い、そして叫んだ。

「佐原南、勝つぞ！」

「おう！」

「三戦三勝！」

「おう！」

「全魂全走！」

「おう！」

「燃えろ、青い弾丸！」

最後の一言に、二年生たちは一瞬の躊躇、苦笑いの後、威勢よく、「おう！」と応えたが、一年生たちは、「はあ」とか「お、おう？」などとちぐはぐだ。

円陣解除後、花香が裕子に尋ねた。

「先輩、なんです最後の？」

「勝つためのおまじない」

裕子はむふふと笑った。

梨乃先輩から聞いた話では、かつての先輩は、試合前にこの言葉を唱えて、千葉県決勝大会の準決勝まで進んだことがあるという。

とはいえ、それはまだ参加校が少なかった頃の話だ。実際、木村梨乃前部長も去年この言葉を叫んでみたものの、地区予選一勝が精一杯だったし。と、まあ、そんなことはどうでもよくて、単に裕子はこの言葉を叫んでみたかっただけだ。

「よし、いくぞー！ 待ってろや幕張！」

裕子は右手を天に突き上げた。

幕張、千葉県決勝大会の会場である。

3

やはり上手い。さすがサジだ。いつも練習でよく見ているはずなのに、公式戦で改めてその技を目にすると、本当に驚きのあまり硬直してしまう。見とれてしまう。

美しいプレーというわけではない。ただひたすら、上手なのだ。おっと、感心している場合ではない。山野裕子は相手の脇を抜けて、前へと抜けた。

佐治ヶ江優から、柔らかなパスが来た。

裕子は左足の内側で受けると、そのままスムーズにドリブルに入った。

佐治ヶ江が一人いるだけで、チームの全員がテクニシャンに見える。受けやすい位置に、受けやすいパスを出してくれるからだ。

裕子からのパスを受けた佐治ヶ江、二人に取り囲まれて、ベツキの茂美へと戻すことになった。

後方から、組み立て直した。

ただいま、第一試合。佐原南の対戦相手は、県立成田不動岡高校。この市民体育館から徒歩数分の距離にある高校だ。

現在、前半八分。両校ともまだ得点は無い。

試合時間は十五分ハーフ、計三十分で行われる。去年は二十分ハーフであったが、試合間隔が詰まっていることもあり、変更された。東京代々木で行われる、関東の頂点を決める最後の一戦のみが二十分ハーフで行われる。

実際に当たってみて分かったことだが、成田不動岡には特筆すべき能力を持った選手はいない。ただ、主将の岡田浅海を中心に、粘り強い守備を見せるチームだ。フットサルでは当たり前の考え方である、「全員攻撃、全員守備」これを、過剰なまでに徹底している。

ただ守るだけではなく、そこからどう得点するかについてもかなり練習をしているようで、時折見せる鋭いカウンターには、この八分間で何度かひやつとさせられている。自分たちに技術の無いことなど百も承知で、それ故に戦い方が徹底しているのだろう。とにかく約束事を決めておくことで、個人のセンスに任せるシーンをなるべく作らないようにしているのだ。

裕子はガンガン攻めていきたい気持ちをこらえている。要は一点差でも勝てばいいのだ。もちろん最終的には得失点差勝負になるかも知れないが、いま相手をみくびって、強引に点を取りにいく必要もない。あっさりカウンターで失点しても勿体ない。先ほども危ないシーンを作られ、ゴレイロ武田晶の果敢な飛び出しでなんとか難

を逃れたが、それはもちろん晶の判断が素早く的確だったこともあるが運も良かったのだ。

成田不動岡のフォーメーションはボックス型。

佐原南のフォーメーションは木村前部長時代を踏襲してダイヤモンド型だ。山野裕子がピヴォ、つまり最前線の選手として身体を張る。アラ、つまり両サイドだが、右アラが佐治ケ江優、左アラが篠亜由美。最後列、ベッキは真砂茂美。そしてゴレイロは武田晶。

成田不動岡はすでに二人、選手交替を行っている。

対する佐原南はまだ一人も交替はしていない。二年生だけで構成されたスターティングメンバーのままだ。

全体としては佐原南が押し気味ではあるものの、相手の必死な頑張りもあって、なかなかゴールに結びつかない。

だが、前半終了間際、ようやくスコアが動く。

成田不動岡の左サイドを破った佐治ケ江、ゴールラインぎりぎりから、地を這うマイナスのクロス。

ゴール前の裕子、シュートを打つふりをしてスルー。後方から走りこんで来ていた篠亜由美が右足を振りぬぎ、ボールを豪快にゴールネットの中に叩き込んだ。

成田不動岡のゴレイロは、裕子のシュートに心身構えたものの、直後のスルーに混乱して、ブロックの体勢を作ることすら出来なかった。

佐原南の先制弾に、ベンチの衣笠春奈、梶尾花香が歓喜の声を上げた。ピッチ上でも、亜由美と裕子がハイタッチをしている。

「サジ、さすが絶妙のアシスト!」

裕子は佐治ケ江に近寄り、背中を叩いた。

成田不動岡のキックで試合再開したが、それから程なくして、審判の長い笛が鳴った。

前半戦終了。

佐原南、一点のリードで折り返した。

裕子は後半戦に向け指示を出した。

指示は単純明快。しっかり守って、相手のカウンターに注意。チャンスがあれば追加点も狙っていこう。

そして、後半戦開始。

佐原南、選手交替。裕子は審判の許可を貰った。

一般的なフットサルルールでは、許可など得ずとも、インプレー中に勝手に交替して構わない。だが、この大会のローカルルールとして、地区予選までは審判に許可を得なければならない。素人審判があまりに多く、通常のルールだと交替時間など正確な記録が残せなくなる可能性があるためだ。

佐治ヶ江優 アウト 生山里子 イン

山野裕子 アウト 衣笠春奈 イン

佐治ヶ江の交替は、戦術云々というよりは単純なスタミナ対策。一点リードしているし、前部長の築き上げた守備は多少メンバーが変わろうとも崩されるものではない、裕子はそう信じている。

裕子自身が抜けたのは、外から冷静に状況分析をしようと思ったから。体力だけなら、何試合ぶっ続けだろうと平気な自信がある。

里子を入れたのは、ただ単に試してみたかったから。リードしていることと、対戦相手を考えると、いまが試す絶好の機会だと思っただけから。

その冒険の結果であるが、果たして裕子が予想していた通りになった。

先日行なった我孫子東との練習試合、結局、あの時となんら変化がなかったのである。

里子には前への意識しかない。自分が点を取ることしか考えていない。相手を個人技でかわすことしか考えていない。自分がナンバーワンになることしか考えていない。つまり、足元の技術は優秀かも知れないが、「集団競技においてのナンバーワンとはなにか」を考える能力においては、悲しいまでに無能者だった。

ほんと、去年のあたしと同じくらいバカかもなあ。

裕子の胸の中に、なんともいえないおかしみが込み上げて来た。

なんとも里子が可愛いらしく思えて来た。

里子が入ったことにより、佐原南に乱れが生じていた。役に立っていないだけならば、一人少ないとでも思えばよいが、里子の存在は明らかに一人分以上の損害をチームにもたらしていた。

しかし、相手にカウンター以外の有効な攻め手がないため、茂美を中心とする守備陣はしっかりと守っている。

後半八分、佐原南、選手交替。

生山里子 アウト 山野裕子 イン

真砂茂美 アウト 九頭葉月 イン

里子を引っ込めた。これ以上チームをかき回されてしまったら、さすがに持ちこたえられるか不安だったからだ。

茂美を下げたのは、体力の問題。裕子ほどではないが、茂美も相手にスタミナのあるほうだ。でも、あと二試合もあるのだし、少し休ませてあげたい。茂美の代わりに裕子がベツキのポジションに入る。裕子は通常、ピヴォかアラだが、経験の少なさは気力と体力でカバーだ。

そして、ピヴォの位置に入ったのが葉月。

「里子、いいな、葉月のことよく見てるんだぞ」

裕子はピッチの中からベンチに下がった里子を指さし叫んだ。

「なにを見てりゃいいのか具体的に教えてくれませんか。あたし、バカなんで」

「自分で考えろ！」

フットサルの守備は全員での守備。守備を免除されているポジションなどは存在しない。前で守備するのがピヴォ、後ろで守備するのがベツキ、というだけの話だ。とはいっても、やはり、FPで守備の要はベツキである。失点に直結するポジションであるため、相当な集中力や忍耐力を必要とされる。裕子の性格を考えると、まったく対照的な役割にも思える。しかし、意外というべきか、裕子はベツキというポジションをそつなくこなしていた。カバーリング。コーチング。攻め上がり。状況を冷静に判断してのロングフィード。

先日、真砂茂美講師の授業を篠亜由美通訳を介し、友原鈴と一緒に受けたのだが、その成果が出たようだ。だがそれも付け焼刃だったか、相手のピヴォとアラの連携で抜かれそうになったところ、ピヴォからボールを奪おうとして足を引っ掛けて倒してしまった。

審判の笛が鳴った。

裕子にイエローカードが出された。

成田不動岡に、絶好の位置でのFKを与えてしまった。

裕子は手を差し出して、自分が倒してしまった選手を引っ張り起こした。

「王子、無駄なファール貰ってんじゃないよ！」

武田晶の罵声が飛んだ。

「ごめん。FK防いでね、よろしく」

裕子は晶に向かって軽く敬礼の仕草を取った。

ほんとお気楽な奴だな。と、晶は普段以上のむっとり顔になっている。

FKは主将の岡田浅海が蹴るようだ。ボールをセットしている。

佐原南のFP四人は、壁を作った。

笛が鳴った。

岡田浅海は短く助走すると、ボールを蹴った。

蹴り損ねた。勢いはよいが、大きく枠の上を超えていくような急角度の弾道になってしまった。しかし……ボールはジャンプした山野裕子の頭に当たってしまい、真上へと跳ね上がった。軌道は鋭い放物線を描き、佐原南ゴールへと向かって落ちていく。少し前に出すぎていた晶、慌てて後退しながら、そして高く跳躍、両手でボールを弾いた。そのクリアボールを成田不動岡の選手に拾われてしまったが、処理を誤り、サイドラインを割った。

佐原南のキックインだ。

「王子、頭に当てんなら、しっかり跳ね返せよな！ 危ないな、もう」

「お前なら取れるだろ、いちいちうるせえ！」

やべ、里子にしめしつかねえ……

裕子はぼりぼりと尻をかいた。

衣笠春奈のキックイン、亜由美がそのボールを受けようとするが、しかし相手に突き飛ばされてバランスを崩してしまい、受け損ねた。完全にファールだが、微妙な角度で両審判から見えなかったのか、笛は吹かれなかった。

ボールを奪った成田不動岡のピヴォ香田恵は、ちょっとボールを蹴り出してドリブルに入ろうとしたが、山野裕子に行動を読まれており、真横からボールをかつさらわれてしまった。

裕子は、前線で張っているピヴォの葉月へと長いパスを送った。パスが通った。後ろ向きでボールを受けた葉月は振り向いてシュート、と見せて真横へとボールを転がした。

後方から走って来ていた衣笠春奈はボールを受け取ってそのままドリブル。そして今度こそシュートだ。ゴール右下の隅を狙った。

ゴレイロの亀田恵理、必死のブロック。ボールは爪先に当たって宙高くに浮き上がった。落ちてくるボールをキャッチしよう構えたキャッチしたのと、飛び込んできた衣笠春奈がそのボールに頭を叩き付けてくるのは、同時だった。

春奈と亀田恵理は衝突。二人の身体はもつれ、絡み合い、ボールごとゴールネットの中に倒れこんでいた。

佐原南の二点目か。

いや、春奈のファールがとられ、ゴールは認められなかった。

「春奈、ナイスファイト！ 葉月もその調子！」

裕子は激しく手を叩いて、チームの雰囲気盛り上げていく。

葉月は決して技術の高い選手ではないが、自身それを理解して、身の丈にあった堅実なプレーで、とにかく献身的にチームのために尽くしてくれる。普段の性格の通りに、プレーもおとなしいのが残念だが、しかし一年生の中では一番計算が出来る選手だ。

もう少し、自ら仕掛けることもして欲しいが、技術的というより、性格的に難しいのだろう。今年の一年生は一部の例外を除いておっ

とり型が多いし、仕方がない。

そして試合は進み、時間は流れ、タイムアップを告げる笛が鳴った。

佐原南高校、1―0で勝利だ。

4

やはりうち以上に守備がかたいぞ。

まだ試合開始から二分とたっていないというのに、もう裕子はそう実感していた。苦戦を覚悟していた。

第二戦、印西木下高校との対戦だ。

去年の関サル地区予選で一度戦っており、その時には、佐原南が0―3で敗れている。

敗因は明確だ。佐原南はただでさえ選手の人数が足りず、第一試合で疲弊しきっていたこと。その試合での退場や怪我で、浜虫久樹、木村梨乃、夏木フサエ、佐治ヶ江優が出られず、さらに層が薄くなってしまったこと。そしてなによりも、印西木下の守備がかたすぎたのだ。

去年とは選手の半数が入れ代わっているが、チームカラーは健在なようだ。とにかく寄せが早い。マンマークが執拗なまでに徹底している。「それらはすべて守備のため。守備をやり抜いた先に、得点がある」と、自分たちでもそう公言しているくらいだ。攻守の選択を迫られれば、全員即決で守を選ぶだろう。戦術だけでなく、意識付けの根底部分から徹底されているのだ。

佐原南のスターティングメンバーは、第一戦のそれとほとんど同じ。

ピヴォが佐治ヶ江優。左アラが一年生の友原鈴、右アラが山野裕子。ベッキが真砂茂美。そしてゴレイロが武田晶。左アラだけが第一戦と異なるところだ。

裕子は中央の少し下がった位置で茂美からのパスを受けると、相手が寄せてくる前にすぐさま佐治ヶ江へパスを出し、そのまま相手

の脇を抜けて駆け上がった。「ここでサジからのリターン」、と練習の通りにボールを受けようとしたが、しかしリターンが来る気配が一向にない。振り返ると、佐治ケ江は二人の相手に取り囲まれて苦戦していた。

フェイントでタイミングをずらし、ボールを軽く浮かせ、なんとか包围をかわした佐治ケ江、ようやく裕子へとパスを出した。

なんであのタイミングで、二人に囲まれるんだ。サジともあろうものが。普段なら、相手が寄るよりも先にボールを捌いているか、囲まれたってすぐに抜いてしまうのに。

「サジ、ぼけっとしてんな！」

後方から晶の声が飛ぶ。やはり、佐治ケ江の様子がおかしいと思っているのは、裕子だけではないようだ。

あらためて注意して見ると、集中力がないばかりか、動きのひとつひとつが妙にぎこちない。しかしそれは最高の佐治ケ江を知っているからであり、ボールを持てばやはり上手い。二人掛かりでも、簡単には取られない。

印西木下の選手たちは、相当に佐治ケ江を警戒しているようだ。

F Pが四人しかいないフットサルで常に一人を複数人でマークするわけにはいかないが、しかし、いつでも数人がかりで佐治ケ江を取り囲むことが出来るように巧みにポジション取りをしている。

佐治ケ江も無理はせず、なるべくボールを持ちすぎないように、出しどころさえあればパスするようにしている。嫌な奪われ方をしないように、リスクは極力避けている。最近どうにも彼女がやつかいに感じていることなのだが、自分がボールをもつと仲間が信頼して状況を考えずにとにかく上がってしまうところがある。だから変なところでボールを奪われでもしたら、たちまち失点の危機を招くことになるというプレッシャーがある。

とはいえ、攻めもまた守備、勝負にいくときはいく。印西木下のベッキ安藤彩子がボール処理を誤りもたついている隙を見逃さず、素早く詰め寄りボールを奪取した。そのままドリブルで駆け上がる

と、角度のない位置からシュートを放った。しかしボールはサイドネットを揺らしたただけだった。

両者無得点のまま、前半終了の笛が鳴った。

「サジ、なんか顔色悪いように見えるんだけど、大丈夫？」

晶、相変わらずの仏頂面ではあるが、佐治ヶ江のことを本心から心配していた。

「別になんでもないよ。いつも通りだから」

「いや、晶のいう通り、やっぱりなんかおかしいって。今日に限らず、最近さ。印西木下にだけは、ほとんどフル近く出てもらいたかったんだけど、誰かと交替させようか？」

裕子は、佐治ヶ江のおでこに自分のおでこをくっつけた。

「熱はないようだな」

「大丈夫、なんともないから。このままやらせて」

「分かった。でも、交替させたほうがいいと思ったら、すぐ交替させっからな」

裕子は、佐治ヶ江の両肩に手を置いた。

「ありがとう」

そして、後半開始。

開始早々に得点が動いた。

先制したのは佐原南だ。

ゴロイロである晶が、パワープレーで飛び出したのだ。本来、パワープレーはこういう場面でやるものではない。点差は均衡しておりまだ時間もあり、無理に点を取りにいく必要がないからだ。だがそれ故にその行動は、まさに相手の意表を付くものだった。物理的に一人多いだけでなく、印材木下の心理を乱すことにも成功、さらに運が手助けをしてくれた。茂美↓晶↓亜由美↓裕子↓佐治ヶ江↓晶↓茂美とショートパスが見事に繋がり、そして茂美のシュートがゴレイロの手を弾き、ゴールネットに突き刺さったのだ。

「イエエエエイ！」

裕子は茂美のもとに走り寄ると、上下に両の手のひらを叩き合っ

た。

次いで踵を返して晶のもとに走り、駆け抜けながらラリアットをぶちかました。

吹っ飛ばされて尻餅をつく晶。

「てめえ、勝手なことやってんじゃねえよ！」

「点取れたんだから、いいじゃん」

「ま、そうだけどさあ。……でもこの後が怖いよな、去年のことと思うと」

裕子は手を伸ばし、晶を引っ張り起こした。

「出てなかったくせに」

「しょうがないじゃんか」

去年の地区予選で、裕子は印西木下の試合を二回見ることになった。

流山はとがや高校との試合、それと自分たち佐原南高校との試合だ。裕子は体調不良のためメンバー入り出来ず、見ていただけだった。

裕子のいう「去年のこと」というのは、印西木下対流山はとがやのことだ。攻撃の流山はとがやと、守備の印西木下という対称的な二校の対戦は、流山はとがやが先制して均衡を破った。しかしその後、印西木下は豹変し、なりふり構わぬかのような怒濤の攻めに出て、あっという間の四得点で逆転勝利したのだ。

果たして、裕子の予感は的中した。

ほどなくして、印西木下の第二の顔が出た。守備をかなぐり捨てたかのように、勢いよく、ゴレイロ以外の全員が攻め上がって来た。この対策についても、充分に打ち合わせ、練習をしたつもりではいたが、想像を遥かに上回る激しさに、佐原南は防戦一方になった。相手のワンツーにベツキの茂美が突破された。シュートを打たれたが、運よくサイドネットに助けられた。

佐原南、耐える時間だ。しかし、はやくペースを取り戻さないと失点は必至だ。

裕子、暴風雨のような激しい攻撃に耐えながらも、じっくり相手を分析している。印西木下は、ただがむしゃらに上がってきているわけではないようだ。きちんと統率されている。こういう練習もしているということか。

しかしピンチはチャンス。統率されていようが、前がかりになるということは、こちらの得点も生まれやすいということだ。それに、統率されているように見えるということは、行動に規則性があるということ、それを読めればこちらのペースに、いやせめてイーブンに出来るはずだ。

晶が大きくクリアしたボールを、相手の最後列が拾った。

そして、その数瞬後には、印西木下は大津波のように全体で攻め上がって佐原南を飲み込んでいた。

一人一人の技術は高くなっても、戦術だけでこうまでチームとして迫力のある攻撃が出来るものなのか。裕子は素直に凄いと思っていた。

相手のドリブルの少し大きくなったところを、亜由美は見逃さず、素早く走り寄り、クリアしようとした。しかし慌てて蹴り損ねてしまい、転がったボールを印材木下の主将、尾野香に拾われて、抜け出された。

ゴレイロの武田晶との一対一。尾野香は、迷わず蹴り足を振り抜いていた。

思い切りの良いシュートは、枠を完全に捉えた。

しかし、晶は素晴らしい反射神経で、両手でパンチングし、跳ね返した。

ボールは床に落ち、小さくバウンドした。

印西木下のピヴォがねじ込もうと駆け寄って来るが、紙一重の差で佐治ヶ江が先にボールを拾った。

その瞬間には、ピヴォが佐治ヶ江に襲い掛かり、次の瞬間には尾野香が加勢していた。

佐治ヶ江へのマークは異常なまでに厳しい。印西木下にとっては

こちらは対戦相手側の陣地であり、ミスが簡単に失点に繋がるものではなく、そこまでガツガツと当たっていく必要はないはずだ。それがここまで執拗にマークをするのは、やはり佐治ケ江にボールを持たせると何をされるか分からない、という不安があるからだ。そしてその不安は、数秒後に現実のものとなった。

佐治ケ江は二人に押し潰され、三人もつれあって倒れた。

印西木下のファール、審判は笛を口にくわえたが、吹くのを躊躇した。なぜなら……

もみあう三人の中からボールが飛び出してきた。佐治ケ江が倒れながらもボールを爪先で浮かせ、逆の足で大きく蹴り出したのだ。

綺麗な虹の弾道、山野裕子だけがそれに反応していた。追い掛け、右足を前に伸ばして爪先でボールを受けると、そのままドリブルに入った。

ファールを受けた側が直後にチャンスを得たというアドバンテージに、審判は笛を吹くのを控えたのだ。

ドリブルで駆け上がる裕子。地平線の遙か向こうにポツンと相手ゴレイロがいるだけの、完全に独走状態、無人の野。裕子、猿のような、なんとも不格好な走り方だが、とにかく速い、速い。まさに青い弾丸といった様子で、後を追う印西木下の誰も、追い付くことが出来ないばかりか、むしろ引き離されていく。

一瞬でトップスピードに乗る能力は佐治ケ江に負けるが、単純な足の速さならば裕子の方が遙かに速い。

相手ゴレイロはゴールネットにべったり張り付くようにし、突進してくる裕子に構えている。なんとかシュートをブロックして、戻ってきた味方に拾わせたいのだろう。

ゴールが近づいて来た。裕子はほとんどトップスピードのまま、ドリブルをゴールの方向へと微調整。ゴレイロまでの距離、五メートル。

シュートを放った。

爆音があがった。

シュートは枠を捉えていたが、ゴレイロは見事な反応を見せて、片手で弾いた。いや……弾かれたのはゴレイロの腕だった。ボールは大砲のような破壊力で障害物をぶち抜くと、ゴールネットに突き刺さった。

「うおっしや！」

裕子はしゃがんで、右拳を床に叩きつけるゴールパフォーマンス。
佐原南 2―0 印西木下

これで二点差だ。

裕子は佐治ヶ江の元へ走り寄った。

「いいボールくれたよ。ありがとう」

印西木下相手にまさかの二点先行。

サジ対策は充分したんだろうけど、そっちの不運は、去年、サジと戦えなかったことだね。と、裕子は心の中で呟いていた。佐治ヶ江は、直前の試合で負った肩の負傷により、印西木下戦は欠場している。

このまま逃げ切ることが出来れば、勝ち点で首位だ。三試合しかないのだから、決勝大会行きに向けて一番有利な立場になれる。

予想外ともいえる二点のビハインドを負った印西木下は、先ほどの怒濤の攻めに加え、ついにゴレイロまでが攻撃参加してきた。

裕子は、相手が自暴自棄になったとは思っていない。充分に計画の練られた「やけくそ攻撃」であること、身に染みて分かっていたし、それにゴレイロの攻撃参加はフットサルでは珍しいことではない。むしろ、どうしても得点したい場合には、行うのが普通だ。

残り時間十一分。印西木下は、意地でも引き分けに持ち込むつもりだろう。引き分けになれば、印西木下と佐原南はともに一勝一分けの勝ち点四。そうなれば得失点差により印西木下が佐原南を二点上回る計算になる。だから佐原南としては、追いつかれることだけは絶対に避けたい。

裕子は指示を出し、フォーメーションをボックスに変更させた。前が佐治ヶ江と友原鈴、後が山野裕子と真砂茂美。茂美の守備負担

分散のための布陣変更だ。去年、木村前部長が使った手である。

しかし裕子、いきなり抜かれてしまう。相手の連携に崩されたのではなく、印西木下のピヴォ橋田由紀との一対一の勝負に負けて、突破を許してしまったのだ。

橋田由紀はドリブルで一気にゴールへと迫っていく。この後の、シュートまでの展開はもちろん考えていたのだろうが、一瞬の驚きから、完全に狂わされることになった。ゴレイロの武田晶が、猛然と飛び出してきたのだ。まだゴールとの距離があるのに飛び出してくると思ってもせず、それが判断の遅れに繋がったのだ。

ほんの一瞬の隙、晶にはそれで充分だった。橋田由紀にぴったりと密着していた。

橋田由紀は抜こうとするが、晶は文字通りに張り付いて突破を許さない。

真砂茂美がゴール前にカバーに入ったことを確認すると、晶は勝負に出た。わざと隙を作って相手を誘導し、ボールを奪った。すぐさま裕子へとパスを出した。

裕子は右足の裏で踏みつけるように受け、前線の佐治ヶ江目掛けて浮き球のロングパス。

相手は相当に前がかりになっている。このパスが通れば絶好の追加点のチャンスだ。

だが……

佐治ヶ江は立ちつくしたまま、ぴくりとも動かなかった。

裕子の蹴ったボールは、そのままゴールラインを割った。

「サジ……」

背を向けたまま、まったく動く様子がない。

「サジ！ どうした？」

裕子は不安な面持ちで、早足で近寄っていく。

「おい、サジ。サジってば、聞いてんのか、こら」

裕子は佐治ヶ江の正面に立った。佐治ヶ江はうつろな表情を浮かべている。裕子は必死に呼びかけるが、まったく反応がない。

突然、がくつと力が抜けたように、佐治ケ江は両膝をついた。続いて、両手をついた。

「サジ？」

佐治ケ江の呼吸が荒く、乱れていた。いや、乱れているところではない。ひゅうひゅうと音がなるばかりで、まともに呼吸が出来ていない。

右手で、胸を抑えた。

苦しそうに、顔を歪めている。

「どうしたんですか？」

二人の審判員が、佐治ケ江の元へ早足で寄って来た。

「露骨な時間稼ぎですよ！ 遅延行為です！」

印西木下の主将、尾野香が猛烈に抗議する。

「時計は止めているから」

第二審判の男性は、ピッチの外にいるタイムキーパーを指さした。時計を止めているからいいとか、そういう問題ではないのだ。相手のペースにまんまと乗せられているようで、それが我慢ならないのだ。

だが、尾野香の顔から怒りの色が消えていく。佐治ケ江優の苦しそうな表情が、演技に思えなくなってきたからだ。

佐治ケ江は、ごろりと仰向けになった。

うつろな視線を天井へ向けたまま、ぜいぜいと苦しそうに喘いでいる。

「サジ！ 大丈夫？ 医者！ 病院！ サジ、診てもらわないと！」

裕子はすっかりうろたえてしまっている。

審判の指示で、数人の係員が担架を運んで来た。佐治ケ江の身体を担架へと乗せる。

「サジ！ しっかり！ サジ！」

「王子、落ち着いて。試合中なんだ。みんなを動揺させちゃってどうすんだよ」

晶は裕子の両肩に手を置き、なだめた。

「試合なんかどうでもいいんだよ！ サジが！」

「王子！」

晶の突然の怒鳴り声に、裕子のはっと我に返った。

「……試合、どうでもよくなんかないよ。試合のことも、サジのことも、どっちも、どうでもよくなんかない。……この場を王子に抜けれちゃ困るし、あたしが付き添いで病院いつてくるよ。副部長だし」

「あたしもいく」

「ダメ！ 副部長命令！」

泣きそうな表情でおろおろとしている裕子、晶にぴしゃりといわれるとそれきり黙ってしまった。

晶は係員に、自分が病院に同行する旨を伝えたと、続いて、梨本咲に声をかけた。

「任せたよ、ゴレイロ。信じてっから」

「そんな、急にいわれたって」

「いつもの、無駄に強気なところはどうした？」

咲の肩をぽんと叩いた。

「やりやいいんでしよう！」

「そ。思い切りやりやあいなんだよ」

「偉そうに」

むくれた顔をそむける咲。

晶は、もう一度、咲の肩を叩いた。

担架で運ばれていく佐治ケ江。

「じゃ、あたしもいくから。王子、よろしく頼むよ」

佐治ケ江優と武田晶の二人は、会場から姿を消した。

「みんな、ごめん。試合どうでもいいなんていっちゃって」

裕子は頭を下げた。

「サジが倒れたんで、なんだか頭ん中が分かんなくなっちゃって。おろおろしちゃって。あたし、どうかしてた。部長失格だ」

「謝らなくていいよ。親友ならそうなるの当然だし、気にすること

ないってば」

衣笠春奈はそういうと、にっこりと微笑んだ。

「そうそう。あたしが部長でサジの親友だったら、もっと取り乱してたって。茂美が倒れたらと思うと、ゾッとするもん」

と篠亜由美。

裕子は目にうっすら浮いた涙を自分の指で拭った。

「ありがとう。……よし、絶対に勝とうぜ。この試合も、次の試合も。必ず決勝大会に進んでさ、そこでサジと一緒に戦おう」

試合再開。

佐原南のメンバーだが、佐治ケ江優に替わって生山里子が入った。そしてゴレイロは、武田晶に代わって梨本咲だ。

佐原南側の状況は大きく変化したが、印西木下側は相変わらず。次々に人が人を追い越して、ボールが人を、人がボールを追い越し、攻め上がっていく。佐治ケ江優がいなくなった分、その勢いはより増したといっている。選手交替を上手に利用して、とにかく走る。相手がボールを持てば迷いなく激しいプレス、自らがボールを持てばなんの迷いもなくただ前へ。佐原南の脆いところ脆いところを、容赦なく執拗に攻め続ける。ゴレイロを含めたチーム総動員で、まさに大津波のごとく攻めあがり続ける。

印西木下としては、この試合を落とすと自力での決勝大会進出が出来なくなる。第三戦で勝利し、なおかつ佐原南が敗れてくれないければならないからだ。しかしこの試合、勝てないまでも追いつけさえすれば、一転して得失点差で有利な立場になる。佐原南は佐治ケ江優がいなくなった以上、攻撃力は大幅ダウンするだろう。自分たちは第三試合目は、ただ勝つだけでいいのだ。だから印西木下としては、この試合、なんとしても追いつきたいところだ。いや、絶対に追いつかなければならない。

交替で入ったゴレイロの梨本咲は、ゴールにべったりと張り付いて、試合の様子を窺っている。

いきなりこんな大事な場面で出場することになってしまったプレ

ツシャーからか、味方の選手が小さく、相手選手が大きく見える。それどころか、相手の方が一人二人多くすら見える。

攻撃参加のタイミングなど、まったく分からない。理論の上では学んでいるはずだが、そこまで全然頭が回らない。とにかく点を与えないことだけを考えよう。いまは後半戦、二点もリードしているんだ。それを守り切ることを考えよう。

なんだか頼りなく見える味方の選手だが、なかでも酷いのが山野裕子だ。ベンチから見ていると、運動神経抜群に思えるが、同じピッチ上に立って見ると、それほどでもないのだろうか、それとも自分のこんな心理状態で見ていからだろうか。いや、違う。王子先輩、本当に動きが悪い。疲れ？ 急造ベッキだから？ サジ先輩？ ああ、きつとそれだ。サジ先輩のことが気になっちゃって、地に足が付かない状態になっているんだ。

裕子は、印西木下のピヴォ長戸恵理の単純なフェイントにあっさりと引っかかり、抜かれてしまった。

まだ少しゴールまで距離はあるが、長戸恵理はシュートを放った。強烈なシュートだ。

咲は反応し、横に移動しながら身体全体でボールを受けた。胸に当たる瞬間、しっかりと両腕で抱え込んだつもりだったが、しかしボールは腕の間からこぼれ、床に落ちた。それを逃さず、長戸恵理が詰め寄ってきたが、咲は倒れ込むようにボールに飛びついて、なんとかゴールを死守した。

「咲、ありがと。助かった」

と、裕子は笑みを見せた。

そして裕子は、審判に選手交替を申し出た。

山野裕子 アウト 篠亜由美 イン

自ら退いた理由だが、咲の予想通りだった。裕子は佐治ヶ江のことが気かりで、まったく試合に集中出来ていなかったのだ。

裕子の手短な指示で、亜由美はアラとして入り、アラの位置にいた友原鈴がベッキをつとめることになった。

鈴は、裕子同様に器用とはいえないタイプだが、裕子同様に体力がある。とにかく走り回って、相手に食らい付いてくれればいい。ちよつと守備が不安だけど、あたしがいるよりは遥かにマシだ。なんとか試合終了まで持ちこたえてくれ……

しかし、裕子の願いは届かなかった。

佐原南の守備が崩壊してしまったのである。

鈴の投入は関係ない。原因は、前線であった。

理由はただひとつ。里子は里子だったということだ。

裕子にいわせるならば、「お前は葉月のことをまったく見ていなかった。葉月からまったく学ばなかった」ということだ。

里子は、今年このフットサル部に入部するまではサッカーもフットサルも経験したことがないというのに、ボールを扱う技術が抜群に高い。里子の技術を目の当たりにした人間が、その経験の少なさを知ったならば、まず驚きを隠すことが出来ないだろう。

しかし、性格というか、集団競技における考え方に問題があり、ボールを持った瞬間に、もう敵も味方もなくなってしまう。前しか見ない。相手を抜くことしか考えない。

ボールを扱う技術が高くて、それが単調では対応してしまうだけだ。

本人以外の誰も知らないことであるが、実は、里子はそのことに気付いてきてはいた。ならばどうすればいいのか。それが分からない。

ならば、とにかくゴールを決めればいいのだ。結果を出せば、自分がどんなであろうと、文句をいわれる筋合いはない。

亜由美は好き勝手に動く里子のフォローのため、行動がかなり制限されてしまっていた。二人は印西木下にとって、単なる置石のような存在になってしまっていた。

チームワークで大津波を何度も食い止めていた佐原南だったが、防波堤の一部破損はあつという間に完全決壊という結果をもたらした。これ以上はない絶妙なタイミングで、印西木下のFP四人全員

が上がって来た。佐原南の前二枚が無効化していることで実質的に二対四という状況。佐原南は相手のパス回しに、なす術なく突破されてゆく。幾重の堤防が、次々と破壊されてゆく。

ゴール前五メートルの距離から尾野香の放ったシュート、梨本咲の腰をかすめて、ゴールネットを揺らした。

佐原南 2―1 印西木下

咲は悔しそうに地団駄を踏んだ。

一点を返した印西木下。得点を決めた尾野香はまったく喜びの色は見せず、むしろ怒りの形相、早くリスタートさせるべく自分のポジションへと駆け戻る。まだリードされている状態なのだ、自分が得点したからといって、喜べるはずもない。

「咲、気にすんな。まだリードしてるんだ。もう時間ないし、みんな、前目から守備して！」

ピッチの外から、山野裕子は手を叩き、声を張り上げた。

試合時間、残り三分。

裕子の指示もむなしく、佐原南はその後も全体がちぐはぐなまま。一向に修正が出来ず、相手の猛攻を運と気力だけで食い止めている。里子を葉月に替えるか。

いや、勝利の瞬間にピッチにいる喜びを、里子に教えてあげたい。周りを囲む仲間たちの表情から、勝利はみんなで勝ち取るものなんだということを感じてもらいたい。

生山里子という個性ある非凡な能力を育てたいというのもあるが、それはほんの一要素。裕子は単に、里子のような人間が好きなのだ。そんな里子と思う存分にフットサルをやってみたい。もっと、フットサルを好きになって欲しい。

そんな裕子の気持ち、この試合結果に関していえば、完全に裏目に出ることになってしまった。

個人技でキープしようとしていた里子だが、パスを出せるところを出さず、結局ボールを奪われ、そこからの流れで、また尾野香にゴールを許してしまったのである。

ここではじめて印西木下の選手たちは喜びを爆発させ、抱き合い、肩を叩き合った。

佐原南は、二点のリードを守り切ることが出来ず、追い付かれてしまった。

試合終了の笛が鳴った。

佐原南の選手たちは全員、呆然と立ち尽くしている。

梨本咲はゆっくりと腰を下ろすと、ゆっくりと後ろに倒れた。

大の字になり、無骨な骨組みの天井を見上げた。

鼻をすすった。

5

勝点 得点 失点 得失点

印西木下 4 5 2 3

佐原南 4 3 2 1

成田不動岡 3 5 1 4

北央館学園 0 0 7 7

第二戦終了時点での戦績表である。

現在、三校に決勝大会進出の可能性が残されている。

佐原南の選手たちは、体育館の端に集まり、輪になって床に腰を降ろしている。輪の中央に立っているのは山野裕子。

「みんな、ごめん。あたし、やっぱりダメで、試合、上の空になっちゃって。もっと、バンバン点取るつもりでいたんだけど、ガツガツ守るつもりでいたんだけど。なんか、自分で自分分からなくなっちゃって。部長がこんなんでする、って自分でも情けなくなる。ほんと、ごめん」

裕子は頭を下げた。

「実際のところ、あたしが防ぎ切れなくて失点したんだっていうのに、そんな潔く頭下げられたりすると、かえって落ち込むんですけど」

梨本咲は床の上にあぐらかいて、ふて腐れた表情。飲み物の入ったボトルを右手へ左手へと、意味もなくいたり来たりさせている。「いや、咲はよくやってる。何度も助けられた。あたしのミスから奪われたのだって、しっかり防いでくれたし」

やりとりを傍らで聞いている生山里子は不意に立ち上がると、近くのボールをわざわざ拾い上げてから、思い切り床に叩き付けた。

「あもう、二人とも、そんな本質はぐらかすこといってないで……正直に、里子が入ってグチャグチャになったっていえばいいじゃん！」

「そんなこと誰も」

梶尾花香が咄嗟に親友を庇おうと口を開くが、被せるように裕子、「思ってるよ。……こいつ、やっぱりムチャクチャにしやがったって。……でも里子、凄い能力持ってるし、いや、だから活躍しろってことではなくて、あたしは、そんな凄い個人技を持ってる里子が全然フットサルを楽しんでないのが癪なんだよ。本当の楽しさ、面白さを知ってもらいたい。だから、試合に出した。ピッチ上で、印西木下に勝って、みんなで掴んだ勝利を味わって欲しかったから。……あたしたちのやってるのって、たかが高校の部活じゃんか。プロスポーツでもなんでもない、高校の部活じゃんか。楽しいって思わなかったら、面白いつて思わなかったら、意味ないじゃん。勝手な言い草かも知れないけど、あたしが部長になったからには、全員にそういうことを分かってもらいたいと思ってる」

「あたしには無理ですね」

里子はさらりといった。

「なにもしないで決め付けてんじゃねえよ、ドアホ！ いっぺんくらい騙されてみりゃいいだろが！」

「山野さんて方いますか？」

体育館の事務員らしい老人が近づいて来た。

「はい。わたしですけど」

裕子は手を上げた。

事務員は、持っていた電話の子機を裕子に手渡した。

電話の相手が誰だか分かれると、裕子は不安そうな表情になったが、それはすぐに安堵の笑みに変わった。

通話を終わると、子機を事務員に返し、お礼をいった。

「晶から。サジ、大丈夫だって。いま病院で横になってるけど、意識はしっかりしてる。緊張のあまり、過呼吸になったんだろうって」それを聞いて、みんなの顔にも安堵の色が浮かんた。

「今日は、試合は無理だけど。いま、サジのお母さんが病院に向かっているってさ。落ち着いたら、お母さんと一緒に家に帰ると思う」病院に付き添った晶からの報告に、とりあえずほっとした裕子ではあるが、あらたなる不安が脳裏をよぎっていた。

あれは、単なる緊張なんかじゃない。

たぶん、パニック障害とかいうのが出たんだ。

以前、佐治ヶ江本人から聞いたことがある。広島に住んでいた頃、いじめを受けていたことが原因で、嘔吐したり過呼吸になったりと、苦しんだということを。なんでもないのに、いきなり不安な気分になって、脈や呼吸がどんどん早くなってきて、思考がまったく回らなくなると、ということが頻繁に起こり、酷いときには道で気を失って倒れてしまったこともあるらしい。

これは、春の合宿の時に、こっそりと裕子に打ち明けてくれたことだ。

広島を遠く離れたおかげか、高校生になって自分が成長したおかげかは分からないけれども、もう大丈夫だと言っていた。

その症状が再発しているということは、サジ、まさか……

「王子先輩、どうしたんですか？」

梶尾花香の顔面ドアップ。裕子の顔を、心配そうに覗き込んでいた。

「なんでもないよ。どうもしやしない」

「なんか渋い顔してましたよ。サジ先輩無事だったのにい」

「渋い顔にもなるってば。次の試合のこと考えてたんだよ。印西木

下、多分勝つだろうから、こっちは大量得点で得失点を大きく稼がないとならないからな。いやあ、ほんと困っちゃうね」

そういうと裕子はガハハと笑った。

「あの、あたしを試合に出してください」

みんなが生山里子の言葉にこれほどまでに驚いたことがあっただろうか。

試合に出せというオーラはいつも発しているが、それはなんともピリピリとトゲのあるものであり、こんなふうに懇願するものではなかったからだ。

「ピヴォじゃなくていいです。独りよがりなプレーしてたら、叱ってください」

「え、おい、急にどうしたんだよ。熱でも出たか」

裕子でなくても、誰だって不安になるだろう。里子にこんなことをいわれたら。親友の梶尾花香ですら、あんぐりと開けた口を閉じることを忘れてしまっている。

「ま、騙されてみたくなっただんですよ」

「かっこつけちゃって」

「うるさいな。というか、予選突破しないと、サジ先輩、見られないじゃないですか！ ガチの試合からじゃないと、サジ先輩の本当の技術を盗めないじゃないですか」

と、里子は顔を赤らめてつつけんどんにいった。でも、本当はそんな理由からじゃない。

部長が自分のことやたら気にかけているのは気付いていた。実におせっかいで、うざったいと思っていた。フットサル部をあっさり辞められたらみっともない、自分の立場がない。どうせ、そんなとこだろう、と。

しかし、この大会の中で感じた、裕子の佐治ヶ江に対する清く優しい思い……裕子という人間を信じてもいいと、ちよっぴり思うようになった。そうしたら急に、いままでの自分の言動の数々が恥ずかしくてたまらなくなってしまったのだ。

「よし、じゃあ、里子には右アラやってもらおう。変なプレーしてたら、ケツを蹴飛ばすからな。もしくはカンチョの刑」

「分かりました！」

「疲れなんかを考えて、スタメンは大きく変えるから。フォーメーションはダイヤモンドに戻す。ピヴォは葉月。右アラが里子ちゃん、左が花香。ベッキは鈴だ。もちろん、ゴレイロは咲」

「一年生ばかりじゃないですか！」

花香は思わず驚きの声を上げていた。

「一年だからって、それがなんだよ。あたしより、経験半年の里子の方が遥かに技術あるぞ！」

「威張っていうことじゃないと思うなあ」

篠亜由美、思わず苦笑が顔に浮かぶ。

「とにかく、次の試合、必ず勝とう。勝って、幕張にこうぜ」

佐原南、全員立ち上がると、そのまま円陣、肩を組んだ。

6

なんなんだ、あたしは。こんな不器用だったのか。相手を抜くプレー以外、なんにも出来ないじゃないか。チームプレー、なんにも出来ないじゃないか。能力はあるけどやる気がないだけ、などと本気で思っていた過去の自分を締め殺してやりたい。タイムマシンがあったら、本当に過去の自分殺しにいつてるよ。それほど、いま、恥ずかしい気持ちだ。

生山里子、自分自分だった時にはなんにも見えてなかったのに、一歩退いたらまあ自分の酷いところばかり見えてくる見えてくる。

里子は、鈴からのパスを受けた。

ボール受けたらすぐさま空いてる味方にパスと……って、誰に、どう出せばいいんだ。

あたふたして、つい適当にボールを蹴ってしまい、相手にプレゼントしてしまった。

「里子、てめえコラ！」

山野裕子の怒声が飛ぶ。

いちいち怒鳴んなくなつて分かつてんだよ！

隣のコートで、審判の長い笛。印西木下の選手たちが肩抱き合つて喜んでゐる。

どうやら隣では、先制して欲しくないほうのチームが先制してしまつたようだ。

それに引き換え佐原南はまだ無得点。それどころか、全体がギクシャクとしていてチームになつていなかった。

一年生ばかりで、ゲームを落ち着かせ、ゲームをコントロールする人物がいけないということと、ご存知生山里子がみんなの足を引っ張っているのだ。

しかし、これまでの里子と決定的に違うところは、自分の欠点を正直に認識したところ、必死に学ぼうとしているところ。里子は、敵と味方、双方のプレーに触れて、いま急速に成長していた。

現在佐原南が対戦しているのは、北央館学園高等学校フットサル部。同好会から部に昇格したばかりとのことで、まだ部員数も少なく、八名しかない。ゴレイロが一人、FPが七人。

個々の能力、全体的な戦術の浸透度、お世辞にも高いとはいえない。

佐原南の実力からすれば、楽に勝てるはずの相手。だが前述したような佐原南側の理由と、三戦全敗は避けたい北央館学園側の意地とで、試合は非常に拮抗したものになっていた。

それでも佐原南がやや押し気味ではあったが、北央館学園も必死な粘りを見せ佐原南に自由にボールは回させなかった。

北央館学園のベッキ根岸奈美江が前線へとパスを出したが、里子は軌道上に素早く駆け込み、ボールをインターセプトした。

「ハナ！」

左サイドの梶尾花香へとパスを出した。

花香は前方へ走りながら、ほとんど速度を落とさずにボールを受けて、そのままドリブルに入った。それだけ、見事なパスだったの

だ。

出来た……半分偶然とはいえ。パス、出来た。……パスって、うまく繋がると、気持ちいいもんだな。花香のドリブルする姿を見ながら、里子はしみじみとそう感じていた。いままでは相手のボールをカットしたら、自分で持ち込んでシュートということしか頭になかった。

いかん、うっとり花香なんかのドリブルを眺めてる場合じゃない。里子は前方へ走り出した。

相手のベッキ根岸奈美江が花香の前に立ちはだかった。花香は迷わずピヴォの九頭葉月へとパスを出した。葉月にも一人マークがついていたが、彼女はすっと下がって巧みにマークを外し、ボールを受けた。相手ゴールに背を向けたまま、ポストプレーでボールキープ、素早く首を左右に振り周囲の状況を確認する。

サイドを走る里子へと、葉月はパスを出した。

里子はボールを受け取ると、なおもサイドを駆け上がっていく。はあ、ピヴォって、そうやんのか。上手だな、葉月は。技術ないくせになんて思っていた自分が恥ずかしいよ。

里子はゴールライン際から、グラウンダーでマイナスのクロス。ボールの軌道上で葉月、シュート体勢。しかし、そのボールをスルー。

シュートを打ったのは花香だった。

ボールはするすると床を転がり、ゴールネット左下へと吸い込まれた。いや、その直前に、ゴレイロの谷野早苗が自分の足に当てて弾いていた。ボールは真上、腰の高さほどに跳ね上がった。それをなんとかねじ込もうと、九頭葉月が詰め寄るが、間一髪、谷野早苗はキックで大きくクリアをした。

クリアボールは根岸奈美江がヘディングし、さらに前線へと送った。

佐原南のベッキ友原鈴がそのボールを追うが、落下地点の目測を誤ってしまい、足に収めるのにもたついている間に、ピヴォの吉本

美緒にボールを搔つ攫われてしまった。

しかし次の瞬間、ボールは弾かれ、宙高く舞い上がっていた。ゴレイロの咲が走り寄り、スライディングでボールを蹴飛ばしたのだ。

だが……

その弾いたボールは前方どこかむしろ逆方向、佐原南ゴールへと落下していった。

小さくバウンドすると、そして、ゴールへと入った。

佐原南、失点。

誰も予想もしなかった形で、相手に先制点を与えることになってしまった。

北央館学園の選手たちは手を取り合い、肩を抱き合って喜んでいゝる。それはそうだろう。もう決勝大会進出の望みはなくても、いや、望みがなくなったからこそ、せめて一勝はしたい。そして、三試合目にしてついに初得点そして先制点を奪ったのだから。

「ごめん」

怒ったような、悲しいような、複雑な表情でうつむいている咲。両肩を、いきなり強く掴まれ、びっくりして顔を上げた。

「絶対、点取るから！ あたしたち、絶対に点取るから！」

なんだよ、この暑苦しく叫んでる奴は。生山里子は胸の中でぶつぶつ呟いている。次の瞬間、驚愕に目を見開いていた。叫んでいるのは自分だったのだ。

びっくりしたのは他のみんなも同じだったようだ。みんな、今まで見たことのない里子を、呆然と見つめていた。

「はい、切り替え切り替え！ いまのは事故！ みんなよくやっている。里子のいう通り、点取ろう！」

山野裕子はピッチの外で手を叩き、選手たちが落ち込まないように励ました。

だが、その後も佐原南の状態は相変わらずだった。刻々と、前半の残り時間が少なくなっていく。

焦りから、里子、いや全員のプレーが雑になっていく。

どこに出しゃいいんだ。パスコースを探しているうちに、里子は野沢香奈にボールを奪われてしまった。

ああ、また取られた。

やっぱり向かないのかな、こういう集団競技って、あたし。

結局、全然変わってないもんな。

……って、バカかあたしは。みっともない。いまさらなに泣き言
いってんだよ。

変わってないじゃない！ 変えるんだ！

里子は振り返り、野沢香奈の背中を追い、猛然と走り出した。
ベッキの鈴と挟み込むようにして、ボールを奪い取っていた。

右サイドを真っ直ぐドリブルで駆け上がる。

いままでの里子ならば、自分だけで強引に相手ゴールまでドリブルすることばかりを考えていた。そして、結局どこかで奪われていた。

ベッキの根岸奈美江が里子へとプレスをかける。

里子は抜こうとする素振りを見せつつ、鈴にヒールパスで戻した。
そのまま根岸奈美江の横を通り抜けた。判断に戸惑う根岸奈美江の頭上をボールが通り越し、里子はそれを受けて、再びドリブルに入った。浮き球を使って縦のワンツー。実は、鈴は狙って蹴ったのではなく、蹴り損ねからの偶然の出来事だったのだが、結果として芸術的に見事な連携プレーになった。

「葉月！」

里子は叫んでいた。

呼应するように、葉月はマークをかわし、ゴールに向かって走り出した。

里子は、サッカーのように宙高く、センタリングを上げた。ゴールとの間に、北央館学園の選手の姿があったからだ。ボールは相手選手の頭上を飛び越えた。

葉月は落下地点へと駆け寄りながら、タイミングをうまく合わせて

右足を振りぬいた。

ゴレイロの谷野早苗、ぴくりと反応したものの、そのときすでにボールは脇を抜けて、ゴールネットに突き刺さっていた。

ネットの中でボールは床に落ち、小さくバウンドした。

「葉月、やったね。里子もナイスアシスト！　里子、よくなってきたよ！」

裕子の叫びに、里子は点が入ったこと、実感した。

そして、それは自分のアシストによるもの……

あたしの、アシスト。

得点。

なんだ、この、身体の奥から湧き上がってくる、ぞわぞわとしたもの。

なに、この感覚。

自分が得点を決めたわけじゃないのに。

なんだか凄く、

気持ち……いい。

里子は、大腿で葉月の方へと歩き出した。

花香と鈴に背中や肩を叩かれ、手荒い祝福を受けている葉月。里子が近寄ってくるのに気づいた。

一瞬、見詰め合う二人。

「葉月、ナイスシュート！」

里子は突然そう叫ぶと、葉月のことを抱きしめた。

うわ、なんなんだ、あたし。青春ドラマじゃあるまいし、くさいことして。こんなん、あたしじゃない、あたしじゃない！

「里子が、いいクロス、上げてくれたから」

「ひとがわけ分かんなくなって妙な精神状態になってるってときに、地味に淡々と喋りやがって！」

里子は葉月の頭を抱え込んで、もう片方の手で髪の毛をぐしゃぐしゃにかき回した。嫌がろうがなんだろうが知ったことか。葉月は今日、髪がグシャグシャになる運命だったのだ。

アシストなんて日影仕事と思っていたのに、この前練習試合でゴール決めたときよりも、ずっとずっと気持ちが悪かった。それじゃあ、みんなで連携で崩して得点なんて、どれだけ面白いのだろう。そういう練習、まったく真面目に取り組んでこなかったからな。こんど教えて貰おう。王子先輩の、してやったりみたいなニンマリ顔を見るのはシャクだけど、どうでもいいや、そんなこと。

「里子！」

鈴から長いパスが来た。

里子は右足の内側で受け、ドリブルに入った。葉月が相手のマークを外して移動しているのが見える。

なんだか、周囲が見えるようになってきた。

葉月へとパスを出し、そのまま駆け上がる。

相手を背負った葉月は溜めを作り、里子へと戻した。

相手ゴール前、里子とゴレイロの対一。

迷わずシュートを放っていた。だが、バーに嫌われてしまった。

跳ね返ったボールを、葉月が頭で押し込もうと飛び込んだ、枠の上、大きく外れてしまった。

ここで前半終了を告げる笛が鳴った。

山野裕子を中心に輪を作り、後半戦に向けての作戦会議。

「後半戦は、大きくメンバーを入れ替えるから。左アラが亜由美で、右があたし、ベッキは茂美、ゴレイロは咲」

「ピヴォは？」

篠亜由美が尋ねた。

「里子」

裕子は、そう短くいった。

「せっかくアラに慣れてきたのに……」

里子は不満そうに、そして不安そうにいった。もともとピヴォの選手だというのに、おかしい話なのだが。

ハーフタイムも終わり、北央館学園側のキックオフで、後半戦が始まった。

裕子の指示に従って、次々と交替ゾーンから、選手交替をしている。

前半戦ではFP全員一年生だったが、今度は、里子以外の全員が二年生になった。

里子はちょっと不安に感じていた。アラはなんとなくやりかたを掴みかけて来ていたけど、ピヴォなんてどうすればいいんだ。葉月のプレーをずっと見ていたけど、あんなこと、すぐやれなんていわれても、出来ないよ。

チームプレーというものを考えれば考えるほど、わけが分からなくなってくる。それだけ、いままで自分のことしか考えていなかったのだ。

いや、いまだってあたしはあたしだ。自分のことしか考えちゃいない。でも、だからこそ、しっかりしたチームプレーというのをやってみたい。みんなのチームワークで勝つということを、味わってみたい。それがいま、自分の考えていることなんだ。

北央館学園は、前半に比べ、前がかりになって攻め込んでくるようになった。一勝という土産をどうしても持ち帰りたいのだろう。

主将の山田栄美がスピードに乗ったドリブルで上がってくる。

茂美は受けに回らずむしろ前進し、簡単にボールを奪い取った。素早く篠亜由美へ。篠亜由美、ワンタッチで里子へ送る。

スムーズな流れでボールを受けたはいいが、しかし里子は困ってしまった。

いわゆるピヴォ当てという形でボールを受けたのだ、ということまでは分かる。しかしこの後、どうすればいいんだ。

右サイドを駆け上がる裕子が見えた。

ええと、あっちはさっきまであたしがいたポジションで、いまあたしがいるのが葉月のいた場所で……

混乱の最中、しかし無意識に足は動き、裕子へとパスを出していた。

無意識に身体は動き、前を向き、走り出していた。

ゴール前へと駆け込む里子。

裕子からのグラウンダーのクロス、里子は合わせようと足を振り上げたが、しかしその前に、ゴレイロにクリアされてしまった。

クリアボールは茂美が競り勝って拾うと、強く蹴り、里子へと送った。

ボールを受けた里子、再び、サイドを駆け上がってくる裕子へとパスを出していた。

裕子は進行方向を変え、斜めから切り込むようにゴールへと向かうと、シュートを放った。しかし枠を捉えることは出来ず、ボールはバーの遥か上を飛んでいった。

「ごめん里子。せっかくいいパス出してくれたのに」

ああ。

そうか。

こういうふうにやればいいんだ。

あたし、とづくに理解していたんだ。あとはただ、チームのためについて思えばいいだけだったんだ。

簡単なことだったんだ。

北央館学園ゴレイロ谷野早苗のゴールクリアランス、山田栄美が受けた。

山田栄美からピヴォの吉本美緒へのパスを、裕子がインターセプト。そして、里子へ送る。

里子はポストプレーでベツキの根岸奈美江を背負いながら、叫んだ。

「亜由美先輩！」

左サイドを駆け上がってくる篠亜由美へとパス、と見せてパスは出さずにターン。予想通りバランスを崩している根岸奈美江をかわし、力強くシュートを放った。

ボールはゴレイロ谷野早苗の腕に当たり、跳ね上がった。

跳ね上がったその瞬間には、山野裕子が飛び込んで来て、ボールに頭を叩きつけていた。

谷野早苗は反応出来なかった。

ボールは裕子の身体ごと、ゴールネットの中へと入っていた。

佐原南、逆転だ。

裕子は腕を高く突き上げた。

がくりとうなだれる、北央館学園の選手たち。

「ごめん、おいしいところ貰っちゃったね」

裕子、里子の肩を叩いた。

「いえ、決めてくれて、ありがとうございました」

隣のコートも騒がしい。あちらも、印西木下が成田不動岡を突き放すゴールを決めたようだ。向こうがこのままの点差の場合、佐原南はあと二点取らないと、得失点差で一位になれない。向こうが追加点を上げたら、あと三点……

でも、きつといける。

根拠はまったくないが、里子はそう確信していた。

「王子先輩、あたしが邪魔だったら、容赦なく外してくださいよね。勝つことが最優先なんですから」

「くだらねーことってんじゃねえよ」

裕子はいきなり里子の頭部を両手で掴むと、おでこに頭突きをした。きた。

「いたあ。なにすんですか、もう！」

本当に行動の読めない先輩だな！ あたしがなにか悪いこといったかよ！

むっとした顔の里子だが、なんだか急におかしくなってきた、つい声を上げて笑ってしまった。

北央館学園は前がかりには攻めてこなくなった。ボールを回してじっくりと隙をうかがっている。勝ちたいのならば、のんびりボール回ししている時間はないはずなのだが、堅実に攻撃をして堅実に守備をするように意識を切り替えたようだ。

だが佐原南には時間がない。

悪いけど、付き合っではいられないよ。最前線で張っていた里子は、勢いよく駆け戻ると、野沢香奈の背後から身体を突っ込ませ、

ファールすれすれ、いや笛を吹かれてもおかしくないような強引なプレーでボールを奪っていた。ドリブルで上がろうとするが、しかし、ちょっとタッチが大きくなってしまい、もたつく間に根岸奈美江と野沢香奈の二人に囲まれてしまった。

空いたスペースを駆け上がる裕子は、パスを要求する仕草をしなから叫んだ。

「いつもの里子で！」

里子は仕掛けた。裕子へパス、と見せかけて、急遽方向転換、慌てる二人をさらに左右へのフェイクアクションで揺さぶると、一気に二人の間を突き抜けた。

この見事な個人技突破に一番驚いたのは里子自身だった。

すぐ、理由が分かり納得した。これまではバカの一つ覚えで相手を抜くことしか考えていなかったから、相手も対応しやすかったのだ。緩と急の、急しか自分にはなかったのだ。

ベッキを遥か後方に置き去りにし、ゴレイロの谷野早苗と一対一になった。

心に多少のゆとりが出来ていた里子は、ゴレイロの位置や姿勢を確かめると、冷静に、ゴールの中にボールを流し込んでいた。

ゴールネットが揺れた。

佐原南の選手たち、相手突き放すこの一点に、そして、里子の得点したことに、どっと沸いた。

え……

なに？

ゴール……決めたの？

……あたし？

そっか……

里子は大きく息を吸った。

やっぱり、

ゴールはゴールで、

「超気持ちいい！」

里子は天高く両腕を上げ、絶叫した。

「里子、やったじゃんかよ」

裕子や亜由美が寄って来て、背中をバンバンと叩いてくる。なんと茂美までが近づいてきて里子のことを叩きはじめた。もちろん無言のままだが。

公式戦初ゴールの、みんなからの、手荒い祝福。

結構痛いけど、でも、嬉しい。

裕子は、里子の頭を抱え込んでヘッドロック、ぐいぐいとしめつけた。

「いてて！ 痛い、ほんとに痛い！ あ、いつときますけど、さっきのところでパスを出すのが今後の『いつもの里子』ですからね。さっき先輩のいつてたのは、昔の『いつもの里子』ですから」

「さっぱり意味分かんねえ、もっかいプリーズ」

「いいです、面倒くさい。それより離して、痛い！ 泣く！」

北央館学園のキックオフで試合再開。

二点差をつけられて一勝あげることが絶望的になったせい、北央館学園はまた方向性を転換したようで、がむしゃらに攻めてくるようになった。何点取られてもいいから、せめて一矢は報いたい、というところだろう。

悪いけど、そうはさせないよ。里子は心の中で呟いた。佐原南にとっても、一点でも多くのゴールが必要なだから。里子自身にとっても、サジ先輩と共に戦うために絶対に落とせない試合なのだから。

相手は相当前掛かりに攻めて来ているが、最後の最後でベツキの真砂茂美が、鉄壁の如く、冷静に処理をしては跳ね返している。茂美は個人技にそれほど優れているわけではないが、集中力とその持続力が並外れて優れている。

無言実行、ちょっと不気味なところもあるけど、本当に凄いい先輩だよなあ。いつの間にか、里子は人の良いところを素直に認めるようになっていた。

守りは完璧、相手は前掛かり、ならば佐原南の進む先にはゴールしかない。

里子は駆け出した。

亜由美が山田栄美と競って、浮き球になったボール、里子は二人の間を駆け抜けながら頭でボールを受けた。腿で軽く蹴り上げて、身体を反転、足元へ落下してくるボールを蹴りながらそのままドリブルに入り、また二人の間を駆け抜けた。山田栄美はびっくりしながらも反射的に足を伸ばしたが、里子はボールをちゃんと浮かせて難なくかわしていた。

「みんなは守ってればいい！」

自分勝手な無謀な策とは思わない。相手が攻撃攻撃で、組織的な守備が失われているいまだからこそ、個人技での強引な突破は有効なはずだ。

相手のアラ野沢香奈と向き合う。が、それは一瞬。右に左に揺さぶって、一気に抜けていた。

里子は、ゴールまでの長い距離を、ドリブルでぐんぐんと上がっていく。

北央館学園の陣地には、ゴレイロの谷野早苗と、ベッキの根岸奈美江の二人。

根岸奈美江は里子へとは向かわず、むしろゴレイロと二人体勢でゴール前を固めた。

ゴールが近づき、里子はドリブルの速度を緩めた。後方から、北央館学園の選手たちが全力で戻ってくる。

ゴール前に張り付いていたベッキの根岸奈美江は、援軍が間近まで駆けつけたことで、突然、里子へ向かって飛び出してきた。

その行動、読めていた。

読めていたから仕掛けるゆとりがあった。

サジ先輩の真似じゃあないけど、ヒールリフト。

ふくらはぎに沿ってを滑らすようにボールを浮かせて、かかとで蹴り上げ、自身の頭上を通す高度な技だ。

里子はその通りに、ボールを蹴り上げていた。そして頭上を通して落ちてくるボールを見上げ……いや、ボールは目の前には落ちてこなかった。後方へとすっ飛んでいた。

上空から落下してくるボールを奪おうと、山野裕子は、野沢香奈と山田栄美の二人と激しく競り合った。勝ったのは裕子。タイミングよく、高く跳躍すると、ヘディングで前方へと送った。

里子は頭上を越えていくボールを追いかけ、身体を横に倒すようにしながらボレーシュートを放っていた。

ゴレイロの谷野早苗、片手で弾こうとしたが、ボールはそのままゴールネットに突き刺さった。

里子は倒れたままの姿勢で、ゴールしたことを確認すると小さくガッツポーズを作った。

満足気な笑みを浮かべ、ゆっくりと、立ち上がった。

「里子オオオ！」

両手を大きく広げて、裕子が走り寄って来る。

里子もゆっくりと、両手を広げた。

こういう喜び方も……悪くないかもね。

と思ったのも一瞬、王子先輩の広げた両手に容赦ないモンゴリアンチョップを食らった里子は、もんどり打って倒れた。

「ヒールリフトなんて出来るわけねーだろ、バーカ！」

「バカにバカバカいわれたくないです！」

「晶かおめーは。それに、みんな守ってなじゃねえよこの一年坊主が、何様だ、てめえ、このバカ！ かあちゃんデベソ！」

「うるさいな、点取ったんだからいいでしょ！」

そして審判の長い笛が鳴った。

試合終了。

佐原南、4―1で勝利だ。

向こうのコートでも試合が終了した。電光掲示板の表示に目をやると、

印西木下 2―0 成田不動岡

得失点一差で、佐原南は千葉県決勝大会進出の権利を手に入れた。

「やったあ！」

裕子と里子は、抱き合って喜んだ。

亜由美、春奈、花香らも、裕子のもとへと集まってきた。

「茂美、咲！ 和を乱すんじゃないよ！」

亜由美は残った二人を手招きした。

全員で輪になり手を繋ぐと、ぐるぐると回り出した。奇声を上げたり、急ブレーキかけて逆回転になったり、みんなでおおはしゃぎだ。

「よっしゃ！ 決勝大会なんか余裕で突破して、目指すは代々木！
関サル優勝だ！」

裕子は叫んだ。

第六章 初めてうなぎを食べました

1

「え、なんでなんで？ ゴールこの線でしょ」

木の枝で地面を引っ掻いて作った線を、梨本咲は指さした。

「違うって、これはさっきのラインだろ。修正したっていったじゃん」

と、シンゴ君。小学生の男の子だ。

「うわあ、そうか。って、じゃあ消せよ、もう」

咲は靴の裏で地面をこすり、線を消していく。

利根川河川敷にある小さな児童公園。咲の家のすぐ近くだ。

咲は、ブランコや滑り台がひしめき合っているこの狭い敷地の真ん中で、近所の男の子たちと遊んでいる。

ゴールネットの代わりに地面に線を引いただけの簡単なサッカー遊びだ。人数の関係上、ゴールキーパー無し。シュートばかり狙う雑な展開にならないよう、サイドネットの内側にボールを当てないと得点にならないルール。

咲を入れて五人。三対二だ、咲以外は小学生なので、もちろん彼女は二の側。

しかし、咲はドリブルなど足でボールを扱うのが大の苦手。フットサル部ではゴレイロをやっているせいもあるが、それにしたってある程度は足元の技術も必要だ。ペナルティエリアを出ての、果敢な攻め上がりもゴレイロには求められるからだ。でも、一人、どうしても追い抜きたい先輩がいて、ついキャッチやセーブの練習ばかりを熱心にやってしまう。みんなでボールを蹴る全体練習を、いつも適当にしてしまう。と、そのような理由で、咲のドリブルはなんともギクシャクとした滑稽な動きに見える。ほとんど素人同然の技術なのだから、仕方ないのだ。

だが滑稽ながらも、まぐれも手伝い、フェイントで相手の子をか

わすことに成功、そしてもう一人をシンゴ君とのワンツーで突破すると、最後にボールを横に蹴って転がし、ネット横面へのゴールを決めた。

「やったあ！」

咲は飛び上がって喜んでいる。

舞い上がったテンションが、一瞬にして絶対零度まで下がった。

公園の入り口に、武田晶が立っており、こちらを見ていたのだ。

目が合った。合ってしまった。

晶はまったく表情を変えることなく、こちらをじーっと見ている。ジーンズにジャンパーという格好。ボールネットを肩に担いでいる。

なんだよ、なんでここに晶先輩がいんだよ……

「よし、咲姉、頑張ってもう一点取ろうぜ！」

シンゴ君は咲の背中をバンと叩いた。

無理……咲姉、頑張れない……

果たしてそれからの咲は、まさに蛇に睨まれた蛙。歯車の錆びたロボット人形よろしくまともに動けなくなり、相手にゴール量産を許して、あっさりと逆転負けしてしまったのだった。

疲れたから誰かの家でテレビゲームでもやろうかという話になり、子供たちは咲と別れ、公園から姿を消した。

晶は、まだ公園の入り口に立っている。

周囲に誰もおらず、この空間はただ二人きりになった。

咲は、晶の方へと歩き出した。

「なんでいるの」

咲は尋ねた。

「家近いし。帰り道。黙って去るのも他人行儀かなと思って」

「面白いと思って見てたんじゃないですか？」

「ま、それもある」

学校では決して見られないような、もの凄いはしゃぎっぷりだったから。

「あの子たちと遊んでいるときは、あたし、いつもあんなですよ。一番見られたくないのに見られちゃったけど」

咲はベンチに腰を降ろした。

「あたし子供だから、自分がどんなふうに見られているとか、自分がどんなキャラなのかとか、そんなことばかり気にしちゃうんですよね。これでいいぞと思っていてるわけじゃないのに、不本意な自分のキャラを崩せなくて勝手にモヤモヤ抱えちゃって。ま、いつでも、いろんな顔があるわけじゃありません。さっきの子たち以外には、先輩のよく知っている梨本咲ですから、そっちが本当の自分ってことなんでしょうけど。ハナミたく、もっとふにゃーっとしていたほうが楽かな、とも思うし、晶先輩のように鉄仮面みたくなったらほうが楽かな、とも思うし。って、あれ、なんか支離滅裂なことばかりいっちゃってんな」

「好きにすればいいじゃん、そんなの。たぶん、どっちも本当の咲だよ。あたしだって表情見せないだの冷たいだの、色々いわれるけど、ただ自分が楽なようにしているだけで、だから泣くときや泣くし、笑うときは笑うよ。こんなふうに」

そういうと、にーっとな顔を作って見せた。

見慣れぬ表情であったことと、それがあまりに奇妙な顔だったのだ、咲は込み上げてくるおかしさを腹の中で押さえておくことが出来ず、ぶっと吹き出してしまった。そして、声をあげて笑い始めた。「先輩のそんな顔、はじめて見た！」

「そっちだって。咲のそういう顔、はじめてだよ。変な笑い顔」

晶も、作り顔ではなく本当に笑いはじめた。咲の顔を指さして、片手でお腹を押さえている。

「どっちがですか！　なんですかその面白い顔は。分かった、変顔を見られたくないから、だからいつもむっつりとしてるんだ！」

「失礼なこといな！」

二人とも、もうお腹が痛くて痛くて限界だというのに、お互いを見ては吹き出してしまい、いつまでも笑いを止めることが出来なか

った。

2

どう考えても、ぶつかって来たのは中野麗子のほうだった。

「邪魔だよ。つか、ぶつかってくんじゃねえよ。ボケ」

九頭葉月はうつむいたまま、

「ご、ごめん、なさい」

頭を下げ、謝った。

中野麗子は、仲良しの寺田美奈と歩いていく。

「あいつ声小さくて、なにいつてんのか分かんねえよな」

「どんくさいし、ほんと名前の通りクズだよ」

「うまくねーよ、それ」

二人は大声で笑っている。

葉月は小さくため息をついた。

いつものことだ。気にしてたらやっていられない。

教室後ろにある自分のロッカーからバッグを取り出すと、教室を出て、女子更衣室へと向かった。

三時限目は体育の授業。今日は校庭で、百メートル走の計測をするらしい。

陸上競技ってあまり好きじゃないけど、フットサルのスタミナつけるにはいいのかな。と、好きじゃないなりに前向きに考える葉月。白シャツ青パンツの体操着に着替えると、バッグの中からハンカチを取り出そうとし、入っていないことに気付く。

そうだ、洗濯したことをすっかり忘れてた。通学カバンにも入れてあるから、そっちを持っていこう。

葉月は教室へと引き返した。

自分の教室へ戻ると、ドアが少し開いており、そこから女子の話し声が聞こえてきた。誰かまだ残っている者がいるようだ。

「……ずくね？ さすがにさ」

寺田美奈の声だ。

隙間から覗き見ると、中野麗子と寺田美奈の二人。まだ制服姿のまだ。

「あいつ調子に乗ってっからさ、これくらいなんてことないって」
中野麗子は奇声のような甲高い笑い声をあげながら、誰かの机の中に手を入れている。

確か、稲田恵里子の席だ。

「あのバカ、ちょっとはおとなしくなりやいいんだ」

「退学になっちゃったりして」

「それ受けるんだけど！」

中野さんたち……なに、やっているんだろう。

葉月は胸に手を当てた。

心臓の鼓動が速くなっている。

息が、苦しくなってきた。

「ミナ、早く着替えないと、ノツチンにまた怒られるよ」

「最近あいつ、うるさいからな」

葉月は慌ててドアから離れた。

足音を殺しながら、足早に立ち去った。

ゴクリと唾を飲む音、聞かれてしまったかも。

中野麗子と寺田美奈は、普通に体育の授業を受けていた。その前にノツチンのお小言を食らったが。

普通でないのは葉月のほうだった。

心臓がドキドキ、頭はグルグル。まったく授業に集中が出来ず、百メートル走の計測結果は惨憺たる有様だった。体育の成績を付けるためのテストも兼ねているというのに。

体育の授業も終わり、直後の休み時間。

「あたしの財布がない！」

中野麗子は大声を張り上げた。

「え、よく探しなよ。カバンの中は？」

自分の机の中に両手をつっ込んでいた中野麗子は、寺田美奈の言

葉に、今度はロッカーに入れてあるカバンを取り出し、開いた。

「ないよ。畜生、誰かに盗られたんだ」

「誰に？」

「知るわけないでしょ！ あ、ひょっとしたら」

教室内は男女ともに静まり返り、みな、二人の会話に耳を澄ませていた。

中野麗子はカバンをしまうと、稲田恵里子の席へと向かった。

「あんたじゃないの？」

そういうと、稲田恵里子のことを睨んだ。

「はあ？ なにいつてんの、バカじゃないの」

稲田恵里子は、中野麗子のことを睨み返した。

「最近生意気だったじゃんか。あたしの悪口ばかりいつてきて。だから財布盗んだんだろ」

「悪口って、そっちが突っかかってくるからでしょ。ふざけたこといつてんなよ」

「とにかく、一番怪しいんだから、調べさせてよね」

「見てみりやいいじゃん」

また、葉月の心臓は大きな鼓動をはじめていた。

財布、出てくるに決まっている。

だって……

「ほら！ 見つけた、あたしの財布！ こいつ、泥棒だ！」

中野麗子は赤い財布を頭上にかざした。

「盗るわけないでしょ！ どうせ、あんたが自分で入れたんでしょ！」

葉月は両手で左胸をおさえた。

呼吸が荒くなってきた。

また、息が苦しくなってきた。

座っているのに、視界がぐるぐると回って倒れそう。

葉月は、思わず立ち上がった。

中野麗子と目が合った。

葉月は、ちよつと口を開いたが、すぐ閉ざしてしまった。

中野麗子がゆっくりと近寄って来た。

胸倉を、強く掴まれ、引き寄せられた。

すぐ眼前に、中野麗子の顔が迫っている。

「なに？ クズちゃん」

「あ、あの、あの、あ、あたし……」

「だから、なんだってんだよ」

「あたし、入れるとこ見てた！」

葉月は金切り声のような、裏返った声で絶叫していた。

「さ、さっき……さっきの、休憩時間、中野さんと、寺田さんが……」

……

「嘘ついてんじゃねえよ！」

「嘘じゃない！」

葉月は、視界がふつと消失するのを感じた、振り回されて床に叩きつけられていたのだ。

激しい痛みが襲った。叩きつけられたばかりでなく、お腹を爪先で蹴られたのだ。

込み上げる嘔吐感に口を押さえる葉月。涙目になっている。

「ふーん。だから、体育の授業、遅れて来たのかあ」

稲田恵里子は、ニヤニヤと笑っている。

「なにいつてんだよ。財布盗んどいて！」

中野麗子は、稲田恵里子に掴みかかった。

自分へと浴びせられるクラス全員の視線に気付き、ゆっくりと手を下ろした。

「はいはい、そうですよ。あたしが自分で入れただけです。まったく、ちよつとした冗談に決まってるじゃん。稲田が最近生意気だから、ちよつと懲らしめてやろうとからかっただけだよ。……ジロジロ見てんじゃねえよ、文句あんのかてめえら！」

中野麗子は近くの子の机を蹴飛ばすと、大股に歩いて教室を出ていってしまった。寺田美奈も、慌てて後を追った。

「やること小学生か、あいつら」

稲田恵里子は苦笑した。そして、九頭葉月のほうを見た。彼女は上体を起こしてはいるが、まだ痛そうにお腹をおさえている。

「余計ことしないでよね」

稲田恵里子は葉月の前に立った。

葉月はなんといっているのか分からず、黙っている。

「ま、でもありがと。九頭さん、勇気あるね」

手を差し出した。

「そんなことない」

本当に勇気があるなら、なんであんな死にそうなくらいにドキドキするものか。

葉月は差し出されたその手を掴んだ。力強く、引っ張り起こされた。

「とはいえ、しばらくは、あいつらに狙われるかもねえ。共同戦線張ろ。なんかあったら助けあおうよ」

稲田恵里子は笑みを見せた。

葉月は黙ったままだった。

3

「ほら、いわんこっちゃない」

これは衣笠英樹の、娘への口癖のようなものだ。なにかにつけて「いわんこっちゃない」、いい加減辟易としてくるというものだ。

でも、テストの成績が良くなかったときには、別になににもいわれない。夜更かした翌日に体調を崩したり、風邪が治ってすぐ登校してぶり返したり、あくまで健康上の問題に関してだけ。その点だけは、一貫している。しかし、鬱陶しいことになんの変わりもない。確かに幼い頃は身体が弱かったから、仕方ないのかも知れない。生まれたときだって、あまりに貧弱で半年もたないかも知れないなどといわれていたらしいし。

でも、もう充分に普通の生活を送れるのに。これまで軽い運動す

ら禁止されていたから、その分、普通以上に活発に動き回りたいのに。そうした娘の気持ちを、まったく分かってくれない。

衣笠春奈は、山口県の生まれ。

小学三年生の頃に、父親の転勤のため静岡に移り住んだ。

そしてまた、父親の転勤でこの千葉へと越して来た。ちょうど一年前、高校一年二期のことだ。

なんとか父親を説得して、転校と同時に運動部へ入る許可を貰った。快諾ではない。娘があまりにしつこいので、渋々認めた格好だ。入部したのはフットサル部。実はフットサルを知ったのは、その数日前。テレビのスポーツニュース番組で、たまたまあるフットサル選手を特集しており、それで初めてそのような競技が存在するのを知ったのだ。

運動するのなら、こういうのが面白そうだな。小さなコートの中で、わいわいとやれて。屋内で雨の心配いらないから、その点はお父さんも安心だしな。でも、こんな聞いたこともないスポーツ、高校の部活なんかじゃないだろうな。ま、バスケットでもハンドボールでも、なんでもいいんだけどね。

佐原南高校への転入手続きを終え、校内を部活動見学で歩き回っているとき、

「あれ、体育館でサッカーやってるよ。でも、なんか違う……これってもしかして、フットサル？」

思わず独り言を呟いていた。

普通にあるんだ、フットサル部って。ビーチバレー部なんてあるのか知らないけど、そんな感じに特殊なものだとばかり思っていたのに。

実際、これはまったくの偶然というもので、フットサル部のない学校のほうが圧倒的に多い。

この学校のフットサル部も、何年か前に、同好会から部に昇格したとのことだ。サッカー部が現在廃部になってしまっただけで存在していないため、この佐原南高校は、サッカー部はないがフットサル部は

あるという珍しい高校なのだそう。案内してくれた教頭先生から聞いた話だ。

運命かも。

去年の春から、お母さんに頼んで、お父さんに内緒でこっそりジョギングやストレッチなどの体力作りをしてきたのは、このためだったのかも。

この部活に、決めた。

と、そのような経緯で春奈はフットサル部に入部することになったのである。

成り行きはともかく、親公認で運動をはじめて、もう一年にもなるというのに、いまだに父親のいるところで柔軟体操などしようものならすぐに、「そんな激しい運動しちゃダメだろ！」なんだから本当に、あの人のいう通りにしてたら、かえって不健康になってしまう。そうしたらますます、いつまでも親から自立が出来なくなってしまう。

突き放せ、とまではいわないけど、もう少し分かって欲しいものだ。

さて、今日は日曜日。部活もなく、朝からお昼までずっと勉強していた。

さすがにお尻が痛くなってきたので、一休みすることに。

春奈が両親と暮らしているのは、分譲タイプのマンション三階。そこを賃貸している。

居間にいくと、父、英樹がテレビを見ている。ゴルフ中継だ。

ゴルフになんか、まったく興味はないくせに、他に面白い番組がないと、よくゴルフ番組をつけている。

父の仕事は、土日は完全休日。どこかに遊びにでもいけばいいのに、といっても決して聞かない。春奈のことが心配で、なるべく様子を見ていたいからだ。それはもう本人も公言している。春奈がクラスの友達と遊びにいった先、ついてこようとしたこともあるくらいだ。

春奈は大きく伸びをし、腰に手を当てて捻ってみた。

「そんな運動しちゃダメだろ、弱いんだから」
やっぱいいわれたよ。

「伸びただけだよ。勉強してずっと座ってたんだから。お父さんのいう通りにしてたら、ガチガチに身体がこっちゃうよ」

「ごめん。でも春奈は弱いんだから、お父さんの心配する気持ちも分かってくれよな」

「弱くなんかないよ！ 部活で試合にだって出ているし。ほとんどフル出場したことだってあるんだから」

春奈は最近、弱いという言葉に過剰に反応する。いまでもそれをいわれて、ちよつとカチンときてしまった。

「それだって本当は心配なんだよ。なにかあったらどうしようかと」
「なにかあったらそんなときはそんなとき。気にしてたら、なんにも出来ない。家の外にも出られない」

「そのときはそのときなんて、そんな無責任なこと。自分ひとりで生きてんじゃないんだぞ」

「無責任って、そっくりそのまま返すよ。あたしはお父さんの人形じゃないんだよ！」

怪我しないよう閉じ込めて置くのが親の責任だとも思っているのか。子の成長阻止、こんな無責任な育て方があるか。こんな親、一発レッドだ。

春奈は父の反論も聞かず、自分の部屋に戻ってしまった。父が後ろでなにか喚いていたが、まったく耳に入ってこなかった。

春奈はベッドに横になった。

天井を見上げた。

ため息をついた。

また、喧嘩してしまった。

つくづく自分が嫌になる。

身体の弱かった自分を、両親がどんな思いで育ててきたか、よく分かっているつもりだったのに。

夜、電話をかけた。相手は、高校の先輩である木村梨乃。春奈の抱えているこの父親との問題について、事情を知っているのは梨乃先輩だけだったからだ。

悩み相談や、東京に遊びに行く用件などで、何度かかけたことがあるが、今回、実に久しぶりの電話だった。

悩みを話すには話したものの、結局、結論は出なかった。

でも、梨乃は丁寧に話を聞いてくれ、色々と考えてくれた。実際の行動への提案よりも、心の在り方について多くアドバイスしてくれ、それが春奈にはなるほどと思うものばかりであり、おかげでとても気分が楽になった。

春奈は居間にいった。相変わらず、父がテレビを見ている。

「お父さん」

目が合った。

春奈は笑みを見せた。

「さっきは、ごめんね」

ちよつと度が過ぎていたとはいえ、自分を愛してくれているのだ。まずはそのこと、感謝しないと。

父、英樹はきまり悪そうに首をすくませ頭をかいだ。

「お父さんこそごめんな。さっき、お母さんの職場に電話かけて相談したら、お母さんにも怒られちゃったよ。春奈がいうのももっともだって」

「そんな。自分のこと思ってるから色々いつてくれるんだ、って、本当はとても感謝しているんだよ」

あんなモヤモヤとイライラと、怒り、悩んだというのに、そんなあっさりと自分のこれまでの気持ちを肯定されてしまうと、春奈のほうこそ拍子抜けだ。

「今度、その部活の、試合を観にいつてもいいかな」

「心配だから？」

「違うよ。頑張ってるどころ、強くなったところ、見てみたいから」「いつでも来てよ」

「でも本当は、ちょっとだけ、心配してるけど」
二人は笑った。

4

友原鈴は、よく学校帰りに一人で練習をする。

佐原駅に向かう途中にある、小さな児童公園だ。

学校以外の場所で一人で練習をするのは、他人に見られたくないから。下手だというのを、知られたくないから。

リフティング、ドリブル、パス、フェイント、基本の基本は、だいたい出来ていると思う。しかし、部の同輩が色々な技を覚えていつているというのに、自分は基本止まり。日数が経過すればするほど、みんなとの距離が離れていくようで、気ばかり焦る。

やはり自分には、フットサルは向いていないのだろうか。センスがないのだろうか。

腿で蹴り上げたボールが、変な方向に飛んでしまい、慌てて足を伸ばして甲に当てるが、それもまた予期せぬ方向に。咄嗟に両手を出してボールをキャッチ。

ふう。と、ため息。

「あれ、やっぱり鈴じゃんか」

「わーーーーーーーっ！」

背後からの声に心底驚いて、絶叫してしまっていた。

恐る恐る振り返ると、そこには浜虫久樹が立っていた。同じ高校の三年生、先日フットサル部を引退した先輩だ。

彼女も学校帰りのようで、佐原南高校の制服姿だ。

「すごい驚き方だね、あたしのほうがびっくりしたよ。なに、ここでもよく練習してんの？」

「はい。……あの、このことは、みんなには是非ご内密に」

秘密練習しててその程度か、などと笑われたくない。

「了解了解。隠れて練習したい気持ちはよく分かる」

「ありがとうございます」

「礼いわれる程のことじゃない。家で椅子に座つてるときなんか、裸足でボール踏んでコロコロ転がしてるといいよ。そういや、あたしもこの公園でよく練習したな」

「え、先輩もですか？」

「梨乃と景子と三人でさ。入部したばかりでボール蹴らせてもらえなかったから、ここでこっそりとね。もう二年以上も前になるんだな。まあ、コツコツやれば絶対に上達すっから。梨乃なんて、てんでなっちゃいなかったけど、見違えるほどに成長したからね」

「はい、見てて本当に凄かったです。梨乃先輩も、久樹先輩も。あたしには、どんなに練習しても絶対に真似出来ない」

「なんで真似する必要があんのさ。あたしはあたし、梨乃は梨乃で、鈴は鈴だろ」

「それはそうですけど」

鈴は天然パーマのチリチリ頭を掻き回した。

「……今度はフットサル部を辞めようと思ってるでしょ」

「まだ、そこまでの気持ち。でも、あたしにはやっぱり向いてないのかなあと。みんながどんどん上手になっていくから、なんかあたしだけ、取り残されているみたいで」

鈴は暗い表情を作った。

中学時代、色々な部に入っては退部していること、みんなに知られている。

久樹先輩に限らず、誰もが、「どうせまた退部するんだろう。逃げ出すんだろう」と思っているに違いない。

まだそのつもりはないけど、でもどうせそうなるに違いない。鈴は、そう他人事のように考えていた。

「もちろん辞めるのもいいと思うけど、本人の自由だし」

「やっぱりそう思います？ 向いてないって」

「いや、あたしは全然。というか、そんな判断つけられるくらいに、なにかに打ち込んだことあるの？ 多分ね、向いてるの向いてないのってのが分かるより前に、自分で諦めちゃっているだけなんだよ。」

たかが、半年一年程度で」

「それは確かにそうなんですけど。辛いんですよ、自分が劣ってるって思っている中で練習することが」

「いいこと教えてあげるよ。ひとつさ、これは得意っての、作ってみな。誰にも負けないなんて、そこまでじゃなくてもいいから。これ、どんなスポーツにも通用する考えだと思うよ。あれもこれもって欲張るからいけないんだよ。鈴って、本屋で勉強の参考書選んでいるときは、これで頭よくなるぞってワクワクして買い込んで、結局まったく開かずに埃かぶっちゃうってタイプだろ」

「はい」

つい先日、まさにそのようなことをやってしまったばかりだ。

「あたしだってさ、戦術眼じゃ梨乃の足元にも及ばないし、単純なボールコントロールの技術もこれまたサジの足元にも及ばない。体力は結構自信あるけど、でも、王子のあの底なしにやてんでかなわない。亜由美のように、全体を明るく盛り上げていく能力もない。でも絶対に点を取ってやるぞって気持ちと、ゴールへの嗅覚にはそこそこ自信あってさ、じゃ、逆に考えると、梨乃たちになかなないってところが、浜虫久樹というプレーヤーの個性になってんだなあって思う。十年以上やってるからどんな些細なことでも負けるのはすっごく悔しかったけど、でも最近になって、そう思えるようになってきた」

「はあ、なるほどです。劣るところも個性って、参考になります。

……でもそれやっぱり、なにかの能力に秀でたところのある人の言い分ですよ。得意なことのある人の言い分ですよ」

「だから、なんでもいいから作りゃいいじゃん。得意なの」

「無理ですよ」

能力のある人は、本当に、能力のない人の気持ち分からないな。

「よし、じゃあちょっと練習してみようか」

久樹は足を伸ばすと、鈴の足元にあったボールを引き寄せた。

「そんじゃ、これやってみる？ ボール持って、こう直進して、こ

こでぐるつと右回りしつつ、相手の懷に飛び込んで、腕押し上げて肩入れちゃう感じで、こう。十時の方向に、さっと抜け出る」

「ルーレットじゃないですか。そんなのあたし、実戦で使えない」

「やるだけなら、たいした技じゃない。やり込んでないから使えないんだよ。じゃ、実戦でなくていいよ、ここで、いまの技であたしを抜いてみな」

「無理です」

「もう。やる前から分かんないだろ。チャンス二十回やるよ」

「じゃ、ちよつとやってみますよ」

こんなんで、自信なんかつくのかなあ。

鈴はボールを持った。ちゃんと蹴り、久樹のすぐ前で止めると、ぎこちなく足踏み。肩が久樹の胸にぶつかった。

「回り方、なんかギクシャクしてんな」

そういうと、久樹は簡単にボールを奪い取った。

「練習でもやってないし、こんなの」

鈴は、久樹からボールを返して貰うと、もう一度チャレンジした。

「違う。こうステップ踏んで、ここでこっちの足を、こうだって。

もう一回」

久樹はボールを返した。

「違う違う。だから、ここで、ステップ踏んで、こう。こっちに抜けるのかと思わせないと、意味がないだろ」

ボールを返す。

「違う違う」

「久樹先輩、これ、練習して、意味があるんですか？　ますます、

自信を、なくしていくだけなんですけど」

「意味があるかないかは自分で考えな」

チャレンジ十九回目。久樹は、目の前の鈴の背中が奇麗にすっと消えたことに、調子を狂わされてよろけた。

「そう、いまの！　いいよ！　完璧じゃん！」

久樹の言葉に、鈴は思わずにっと笑みをこぼした。

「なんだか、とても気持ちよかったなあ。抜けた瞬間。でも、手を抜いたでしょ、先輩」

「あたしが勝負ごとで、そんなことするわけないだろ」

「あれ、練習じゃなくて勝負だったんですか」

「どっちでもいいんじゃない。もしもさ、フットサル辞めるにしても、いま感じたっていう気持ちよさ、それだけは忘れるなよ。そうすれば、どんなスポーツだって楽しめるところから。じゃ、あたしもういくわ。景子との待ち合わせに遅れちまう」

浜虫久樹はベンチに置いたバッグを取ると、走り去っていった。残された鈴は、しばらくぼーっと突っ立っていたが、やがてまたボールを蹴りはじめた。

「こう直進して、ここで、ぐるっと、こう……あれ、違うな。ここです、こうして、右足の内側でボールを覆うようにして、ぐるっ。よしよし、いまのいい感じ！」

鈴は久樹の前で十九回行ったことを、一人で何度も反復練習。いつしか日も暮れ、すっかり夜になっていた。

街灯が地面に作り出す鈴の影法師。ちよっとギコチナクはあったけれども、それでもくるくると回る姿は、まるで妖精のようだった。

5

暖房があまりきいておらず、少々肌寒いが、それがかえってちょうどいい。おかげで頭がはつきりしている。三年前に佐原南高校を受験したときは、暖房があまりにききすぎて、暑がりな自分には脳が茹で上がるようなまさに灼熱地獄だった。そのときも今回のようなマークシートだったので、もしかしたらそのおかげで合格したのかも知れないが。

木村梨乃は、また一問、マークシートの解答欄を塗り潰した。

ここは千葉澤陽大学校舎の一室。

大学入試のための模擬試験である。

以前は自分のことをバカのおちこぼれだと思っていたし、実際に

通信簿の評価も低かったし、中間期末テストはいつも赤点ぎりぎりという有様だった。それがまさか、こんなレベルの高い大学を目指すことになるとは。今回は模試だが、二ヶ月後、ここで今度は本番だ。

まあ、受験するだけなら誰でも出来る。合格しなければ、話にならない。

でも、梨乃には合格する自信がある。あんなに勉強を頑張ったのだから。今日の試験も、これまでのところ、分からなかった問題がほとんどない。自信を持って解答欄を塗り潰している。合っているのかどうかも自信のなかった高校受験のときとは大きな差だ。

と、いきなり鉛筆の芯が折れた。

不吉な……

梨乃は折れた先端を呆然と見詰めた。

いやいや、油断をせずに気を引き締めていけという戒めの啓示、むしろ吉兆。と、良い方へ自己暗示。

自己暗示侮るなかれ、万物全般、決定づけるのは我が脳なり。

そう心に呟くと、替えの鉛筆を取り出し、試験を続けた。

その後も、順調に解答欄を埋めてゆく。

すでに終了した世界史Bと英語、そしていまやっている現代文、と自信はあるが、まだ半分残っている。どんな結果が出るかはまだ分からない。……でもたぶん、大丈夫。そしたらもっと、自分に自信がつく。

ここまで来ることが出来たの、間違いなく景子のおかげだな。来年になったら、なんかお礼をしなきゃ。

畔木景子は、梨乃の親友である。彼女から効率の良い勉強方法を教えて貰って、それから梨乃の成績は劇的に向上したのだ。

景子も受験生だ。来月、まだ十一月だが早速どこかの大学入試を受けると聞いている。

もう一人の親友、浜虫久樹は、進学はしないらしい。静岡県にあるサッカーチームから誘いの声がかかっており、そこでサッカーを

するといっていた。勝利給くらいしかお金は貰えないし、それも小遣い程度だから、現地でアルバイトをするか、運がよければクラブの親会社で契約社員として雇ってもらえるかも知れないとのことだ。

そんな遠いところから声がかかるなんて、本当に凄いよな。と、梨乃は素直に感心する。

佐原南フットサル部は、以前からの方針でサッカーにも対応出来るような練習を多く取り入れている。ドリブルやリフティング、ハイボール処理、浮き球のクロスなど。梨乃が部長になったあとも、それを踏襲して、サッカー用五号球を使った練習メニューを試したこともある。

それらのおかげで久樹がサッカーにすぐ溶け込めて活躍してくれるのなら、こんな嬉しいことはない。本当は、フットサルに戻って来て欲しいなと思うけど、彼女の人生、決めるのは彼女だ。

よし、解答欄、全部埋めたぞ。

あとは、見直すだけだ。

腕時計で時間を確認。まだ十分近く残っている。

梨乃は持ち上げた手を、そのまま胸ポケットへと当てた。

去年、彼氏（当時はまだ付き合っていなかったが）から貰った四つ葉のクローバーの押し花が入っている。

彼氏は、いま別の大学で模試を受けているはずだ。

お互い、絶対、合格しようね。

そう心の中で呟くと、答案の見直しを始めた。

6

生山里子は突然、だははははと大声を上げて笑い始めた。

すぐ横で、マグロとカツオとどっちのお刺身がよいか考えていた梶尾花香は、親友のいきなりの笑い声に飛び上がって驚いた。

「ちよっと、なによ里子。王子先輩のキャラが移ったんじゃないの？ 意味なく笑わないでよ、恥ずかしいなあ」

ほら、やっぱり他の買い物客がちらちらとこっちを見ているよ。もう。

「いや、これ見てたらさあ」

と、指さしたのは、刺身用のタコの足。

花香は一瞬きよとした表情を浮かべたが、次の瞬間には、ぶつと吹き出していた。

「晶先輩だあ！ 晶先輩の足のお刺身だ！」

「先輩、こんな姿になっちゃって可哀想に」

ほんとうだらないと思いつつも、なんだかおかしくて、堪えきれなくて、二人でいつまでも爆笑していた。

今日の朝練の後、梨本咲が「晶先輩、前々から気になってたんですけど、先輩がよくやってるこの顔、なんなんですか」と、タコみたいに口を突き出して見せた。「そんな顔したことないよ！」と晶はまさに茹でダコのように顔を真っ赤にして怒っていたが、

「いやいや、よくやってるよね」

「あれさあ、ひょっとして本人は自覚ないのかなあ」

「多分ね。あの怒り方からすると」

二人はあらためて刺身用タコに視線をやると、またぶつと吹き出した。

「もう里子やめてよ！ お腹痛くて限界なんだから」

「じゃ、早くお刺身買っちゃいなよ」

「うーん。お刺身はとりあえず保留。他、見てみよう」

花香は地元のスーパで夕食のための買出し。里子はその付き合いだ。

カートに乗せたカゴには、まだなにも入っていない。

「今日は月に一度の贅沢デーだから、かえってなにをかうか迷っちゃって決ままないよ」

「だから、好きな買えばいいじゃん」

「それが難しいのだ。……里子もうちに來て一緒に食べてく？」

「いいよ。その分贅沢しなうて」

「弟たち喜ぶのにな。来るならそのかわりに、よさそうな物を選んでもらおうと思ったのに」

「そんなことしなくても選ぶの手伝うって。お、これいいんじゃない？ 十月三十日 本日丑の日 国産ウナギ大特売」

「普通ウナギって、夏の丑の日だね。でもパス。あたし、ウナギ嫌い」

「というか食べたことない。生きてるときのウナギの見た目が気持ち悪くて、どうしても食べられない。梨乃先輩は、スタミナがつくし、ネバネバのある食べ物は走り回るスポーツの膝関節保護にいいんだよなんてよくいつてたけど……でも……」

「啓太ちゃんたち、ウナギ食べたいなんてこの前いつてたよね」

「よく覚えてんね里子」

夏のある日、里子が花香のアパートに遊びに来た帰りにみんなで散歩していたところ、弁当屋の前で丑の日のウナギ弁当を宣伝しており、弟たちはそれに非常に興味を持ち、食べたい食べたいと駄々をこねていたことがあったのだ。

「とにかくパス。なんか他のにしょ」

テーブルの上に並ぶ丼四つ。

ほかほかご飯の上に乗っかっているのは、ウナギである。

「やったー」

弟たち、両手をあげて喜んでいる。

それほどのものか、ウナギなんか。

花香のこれまでの人生、ウナギを食べることの出来る機会は何度かあった。しかしウナギという存在がなんとも生理的に嫌で、ことごとく逃げてきた。

今日、結局買ってしまったのは、弟たちに喜んでもらいたいと思えばこそだ。

弟たちだけに買ってあげればいいかな、とも思ったが、普段から弟たちには好き嫌いをするなといっているくせに、姉弟で一番の年

長者である自分だけ好き嫌いして逃げるわけにはいかない。そう思い、覚悟を決めたのである。

と思っではみたものの、このなんともいえないグロテスクさはなんだ。なんで弟たちは平気なんだ。どうしてこの見た目にたじろがないんだ。自分は、によるよろヌルヌルのあの姿を知っているから、なおさらそう見えてしまうのだろうか。

きっと弟に限らず、いまどきの子はウナギがどんな生き物かなんて知らないんだろうな。知るにしても、それより先に蒲焼きを食べてるんだろうな、みんな。先にあんな姿を知っちゃったら、とても食べられないよ、こんなの。

「いただきます！」

四人で食事開始のご挨拶。花香だけ元気ない。

「おいしい」

「ほんとだ」

買ってきた物をレンジで温めたんだけど、喜んでもらえてよかった。

啓太、亮太、健、胃袋小さいはずなのに、信じられないような食欲で、みるみるうちに丼のご飯が減っていく。

花香は、ちよっとお吸い物に口をつけただけ。ウナギには全然手をつけていない。

やっぱり、だめだ。

弟たちに食べてもらおうかな。

とっとおいて、弟たちの明日のご飯にしよう。

「お姉ちゃん、食べないの？」

「美味しいよ」

「あ、あの……」

どんな味覚してんだか、こんなの美味しいわけないじゃん。食べたことないけどさ。

いや、美味しいのかも知れないけど、でもあたしには無理。口に入れた瞬間に吐く。絶対吐くか分からないけど、きっと五分と五分。

テーブルの上に、井と箸を置いた。

明日で十月も終わりだというのに、額からどっと汗が出てきた。ご飯の上のウナギを見つめる。

ため息。

こんな自分の姿を見て、弟たちが食べ物への好みばかりするようになったらどうしよう。

いやいや、ウナギ嫌いってのがバレなきやいいだけじゃんか。「そんな美味しいなら、お姉ちゃんの方も食べていいよ」そういえばいいだけ、簡単じゃないか。優しいお姉ちゃんにもなれて一石二鳥だ。

でもやっぱり……それは、ズルイよなあ。

自分は好き嫌いのない振りして、嫌いな物をひとに食べさせて、ひとには好き嫌いしちゃダメなんて。

やっぱり、逃げちゃダメなんだ。

よし！

花香は再び井と箸を手を取った。

箸でウナギの身を少しつまみ取った。

心臓、どきどきしてきた。

数秒の躊躇の後、一気に口の中に放り込んだ。

目をぎゅっと閉じて、口の中に入れたものを噛んだ。

早く、早く咀嚼してしまいたい。と急ぐが、やがて不思議そうな表情で、目を開いた。

ごく、と嚥下した。

しばらく自分の手の中にある井を見つめていたが、やがてまた箸を伸ばした。

今度はもうちょっと大きな塊、下のご飯ごと、口の中に入れた。

噛んで、噛んで、飲み込んだ。

井を、テーブルの上に置いた。

花香は十秒間、身動きひとつしなかったが、突然、素早く立ち上がると、狭い部屋の中、走り出した。小走りで、隣の四畳半へと駆

け込むと、たたんで隅に置いてある布団の上を「きゃほー!」と叫びながらでんぐり返しで転がった。

立ち上がると、もう一回、布団の上をでんぐり返し。

弟たちがやってきて、一人で遊んでいてズルイとばかりに、自分たちもでんぐり返しをはじめた。

四人の子供たちは、下の住民から苦情がくるまで、いつまでもはしやぎ続けていた。

最終章 みんな、走れ！

1

JR京葉線海浜幕張駅で下車をした。

人込みや、不慣れな都会的雰囲気不安の中、佐原南高校女子フットサル部の部員たちは、どうにかこうにか出口まで辿り着いた。

ICカード定期券をかざし、自動改札を抜けた。

「ついに来たぞ、幕張！」

山野裕子は迷惑なくらい大きな声で、雄叫びを上げた。

今日はオジイこと顧問の北岡先生に引率されている。男子部が二敗一分で予選敗退したおかげで手が空いたということもあるが、なにより成田での地区予選で、佐治ヶ江が倒れてしまったことが来ることになった大きな理由だろう。もしかしたら男子部が決勝大会に出ることになっていたとしても、女子部を引率していたかも知れない。引率といっても、とりあえずついて来ているというだけで、実質いてもいなくても変わらないのだが。

ここは幕張埋立地。香取市と違って海に面した街だ。いま立っている場所から徒歩数分で海だというのに、潮の匂いをあまり感じない。

実際に嗅覚で感じているわけではないかも知れないが、裕子には人工建造物の匂いばかりが漂っている気がする。

香取市近郊に慣れていると、ここは高層建築物に囲まれていて、まるで大都会だ。

同じ千葉県でも、こうも違うものなんだなあ。当たり前といえば当たり前のことなのだが、裕子はしみじみとそう感じた。

都会的というものの、グレー一色といった広大で人工的な景色は、人間が少なくて寂しい感じ。催し物で賑わう街であるため、当日の催事内容により混雑具合が相当に異なるのだ。まだ朝九時前だからというのもあるが、イルミネーションスポットとおぼしき風

景も、なんだか冷めた、味気ない感じに思える。

でも、この幕張でこれから、熱い戦いが始まるのだ。

一行の先頭に立つ裕子は、力強く拳を握った。

拳を握ったまま、目の前の道路を通り過ぎていく無数の自動車の流れを見つめている。

首を右に左に向けると、また視線を正面へと向けた。
頭をかいた。

「王子さあ、ひょっとして、体育館へのいきかた、分かってないだろ」

裕子は、くると晶の方へ体を向けると、自信満々に頷いた。

「なんだよ、任せとけなんていって。まったくもう。分かってたら、あたしが調べたてたのに」

「いや、だいたいのは位置は頭に入れて来たつもりだったけど、こんな高い建物びっしりと思ってなかったから」

「幕張が田んぼだらけだとも思ってたって？　なにが、あたし小学生までハマっ子だったから、だよ」

「横浜の山奥だったし」

東京どころか横浜駅にすら、ろくにいったことがない。

「はいはい、分かった分かった」

晶は裕子の胸を手の甲で二回叩いた。

「北岡先生、知りませんよねえ」

裕子は北岡先生に擦り寄った。まさか調べてないわけないだろう。「知らん。自分たちで調べて行動するのも社会勉強というものだよ」屁理屈いってんなよこのジジイ！　引率役ならしっかり引率しろや！　裕子はそう思ったが、もちろん口には出さなかった。いや、少しくらい口から出てしまったかも。

「駅に周辺案内板あるでしょ、それで探そうよ、春奈、サジ。うちの部長様じゃあ役に立たん」

佐治ヶ江は晶にいわれた通りに案内を見つけようと、駅の方を振り返った。そして、

「晶、あれ……」

「見つけた？」

「そうじゃなくて」

佐治ヶ江の視線の先を追うと、駅の改札を抜けて出て来た白いジャージ姿の女子生徒たち。みな、大きなスポーツバッグを肩にかけている。

関サル優勝候補といわれている、県立我孫子東高校の部員たちだ。引率の女性教師とともに、こちらへと歩いて来る。

何度か練習試合を行ったこともあり、佐原南の部員たちは、彼女らの顔をよく覚えていた。

「王子」

晶は裕子に声をかけた。

「分かってるよ。対戦すっか分からないけど、挨拶しとかなきゃ」
裕子たちは、近づいてくるエリート集団を見つめていた。

まったく見た記憶のない顔が一人いる。主力級の二年なら、まず顔を知っているはずだから、おそらく一年生だろう。

背は小さく、痩せていて、童顔。可愛い顔をした小学生の男の子のようにも見える。不敵、と思われてもおかしくない明らかな笑みを浮かべている。

先頭に立っているのが主将の中島祥子。向こうも裕子たちに気付いたようで、軽い会釈をしてきた。

中島祥子と山野裕子は軽く言葉をかわした。

「もし当たることになったら、そのときはお手柔らかにね」

中島祥子の社交辞令。我孫子東相手に本当に手柔らかに挑んだ日には、何百失点するか分かったものではない。

「きっと、いい試合になるよ」

と裕子は返した。

二人は握手した。

さきほどの背の小さなおそらく一年生が、ぷっと吹き出していた。裕子は別に気にしなかった。

我孫子東の部員たちは、また、それぞれに小さく会釈しながら、会場に向けて歩いていった。

「王子、余裕発言じゃんよ」

晶は裕子の背中を肘でつついた。

「いや、勝ち負けは分からんけど……つうか、こっちが虐殺される可能性圧倒的に高いと思うけど、でも、思い出に残る、いい試合にはなるよ。きつとね」

そう。いい思い出にしまさなきゃいけないんだ。サジのためにも。

だって、サジと一緒に戦えるのは、たぶんもう……

「なんかさあ、こうして優勝候補とぼったり会っちゃうと、現実味が出てきて緊張感が増すね。決勝大会なんだあって」

と、春奈。亜由美と無邪気そうな顔で笑いながら話しているが、これがこの二人なりの気持ちの高めかたなのだろう。

地区予選はリーグ戦方式だったが、この決勝大会からはトーナメント方式である。佐原南と我孫子東が対戦出来るとすれば、お互い勝ち上がった最後の試合以外にない。

我孫子東とは、練習試合での手合わせ経験はあるものの、公式戦ではまだ一度もない。目標とすべき、遥か彼方の存在だった我孫子東だが、裕子は自分たちが決勝大会という舞台へと進んだことにより、なんだか、あとちょっとで手の届きそうな位置まで来た気がした。

「そうだ、あと追おう。せっかくだから、道案内してもらおうよ」

そうだった、考えてみれば向かう先は同じなのだ。その向かう先へのいき方が分からなくて立ち往生していたのだった。

晶の提案に、みんなあたふたとバッグを拾い上げ、すっかり小さくなった我孫子東部員たちの背中を早歩きで追いかけはじめた。若者の足についていかれず、北岡先生がどんどん引き離されていく。

佐治ヶ江が一人残って、先生を引率してあげている。

「我孫子東、やっぱり凄く貫禄があるけどさあ、さすが強豪というべきか、高校生のくせに妙に落ち着いていて大人つつうか。でもさ

っきのあいつ、あの、久樹先輩よりちっちゃそうな奴、なんかふてぶてしい感じでちよっと腹立ったよ。とくに、サジのこと見てニヤニヤ笑っててさあ。吹き出したりなんかしちゃったりして。わざとあんな態度とって心理戦に持ち込もうとしてんだよ、きつと。チビで自分に自信がないもんだから。補欠じゃないの、どうせ。で、王子、誰よあいつ」

篠亜由美、重い荷物を持って早歩きをしているが、しかし足以上に舌のほうが遥かによく回っている。

「補欠どこじゃないよ。背番号見てみないととはつきりとは分からないけど、多分、林原かなえ、前の部長の妹だよ。まだ一年生だけど、秘めている能力は半端じゃないってさ。久樹先輩みたく自分のちっちゃなことを徹底的に利用して、ちょこまか素早く動くし、意外に馬力もあるし、ボール扱いもムチャクチャ上手だし、試合でのかけひきも上手。でも性格悪くて和を乱すところがあるから、姉ちゃんには徹底的に嫌われていた。って、梨乃先輩のお友達情報」

裕子はすらすらと答えた。今日、対戦する可能性のある相手のデータは、完全に頭の中に入れてある。勉強もそれくらいやればいいのに、とよく晶にいわれるが、人間向き不向きがあるのだ。

「ええっ、そうなんだあ。うへえ、そんなのが出てきたら嫌だなあ。いまの部長にも嫌われまくって、ずっとベンチにいればいいのに」

「そんな気にしないでいいよ。どの選手も同じくらい凄いから」

亜由美は、むむ、と複雑な表情を浮かべた。

「一年生で実力あるけども性格悪くて和を乱す、って、うちにもいるよね。誰とはいわないけど」

と、梨本咲がみんなに聞こえるようにいった。

「そこまで自己分析出来てるんならその性格、直せばいいのに。ねえ、花香」

生山里子は、隣を歩く梶尾花香に、バカでかいヒソヒソ声で耳打ちをした。

咲がむっとした顔で、また口を開きかけたとき、

突然ビルとビルの間から、大きな建物の屋根が姿を見せた。

「なんだ、すぐじゃん！」

「ほんと役に立たない部長だよなあ」

「王子先輩を責めるのやめましょうよ。先輩信じてたあたしたちが救いようのないバカだっただけなんだから」

「晶、亜由美、里子、てめえら、ちよつと道が分からなかった程度で、いいたい放題好き勝手抜かしやがって。だいたい今日はオジイがいるだろが！ あたしにばっか頼ってんじゃねえよ！」

裕子、顧問の先生をついあだ名で叫んでしまい、慌てて口をおさえた。後ろを振り返ると、信号待ちの間に追いついてきたか先生が二十メートルほどの距離まで近づいて来ていた。しかし、いわれた本人は、まったく気付いていないようだ。

「頼るなものにも、あんたが、あたしに任せなさいって胸を張って自ら役割買って出たんでしょうが。貧弱な胸を張ってさあ」

と、晶。

「おっぱい貧弱なのと今回の件となんの関係もねーだろ！ お前の胸だって、あたしよりはマシだけどそんなたいしたことないじゃんかよ、バーカ」

「……なにどうでもいいところでムキになってんだか。なっさけない部長」

「晶もほんと大変だねえ、副部長」

亜由美は、晶の肩に手を置いた。

「せんせえ〜、女子たちがいじめますうう」

裕子は後ろを振り返ると、先生の方へ向かって走り出した。

一行はさらにビルの間を三分ほど歩き、千葉県国際グラウンドへ到着した。

様々なスポーツ施設が存在する、海沿いの広大な敷地だ。

この敷地の中に、先ほどから屋根が見えていた千葉国際アリーナという体育館がある。遠くから眺めていたときは、とてつもなく巨大な体育館に見えたが、実際には西館と東館、双子のように対になっ

た二つの建物だ。それぞれ、二階観客席は二千五百席。バレーボールやバスケットなどの大会でよく利用されている。

この西館と東館、二つの体育館を使って、これから関東高校生フットサル大会の千葉県決勝大会が行われるのだ。

千葉国際アリーナは、裕子たちが地区予選を行った成田市立山陽台中央公園第一体育館より遥かに近代的な建物に見える。実際には、こちらのほうが古くからある体育館なのだが。

裕子たちは、体育館の東館へと入った。

参加校は全て、東館の事務室で手続きを行う必要があるのだ。

試合自体も、佐原南は東館で行う。もしも最後の第三戦まで進めた場合にだけ、西館を使うことになる。

観客席には、すでに結構な人が座っている。三百人以上は、いるのではないか。収容人数二千五百人なので、一見かなりまばらに見える。プロスポーツしか見たことない者には少なく思えるかも知れない。しかし、高校のフットサル大会ということを考えれば、三百人は相当な人数だ。成田での地区予選のときなど二十人ほどしかいなかったのだから。

裕子は、中学時代ソフトボール部にいた頃に、県大会決勝でこのくらいのギャラリーの前で試合をしたことがある。フットサル部では初めてだ。おそらくうちの部員全員そうではないだろうか。

さすがに決勝大会ともなると注目度が違うということだろう。

試合開始までまだまだ時間があるというのに既にこの状態だから、試合開始までにはもっと増えるだろう。

裕子と北岡先生は係の人を探し、事務室に連れていってもらい、手続きを行った。

裕子が戻ってくると、全員、ジャージを脱いでユニフォーム姿になっていた。それぞれにストレッチを行っている。

裕子もジャージを脱いだ。

シャツ、パンツ、ソックス、全て深い青色のユニフォームだ。

真砂茂美は、篠亜由美の袖を引っ張った。

「なに？」

茂美は、二階にある客席を指さした。

その指の向く先には、フットサル部の先輩である木村梨乃が座っていた。

ブラウスに長いスカート。こざっぱりと、おしゃれに着こなしている。

亜由美は左右に大きく腕を振った。

梨乃も小さく手を振り返してきた。

「なになに、お、梨乃先輩じゃん」

裕子も梨乃が来ていることに気付き、袖をまくって力コブを見せて付けるようにガッツポーズを作った。続いて、いきなり股を広げてコマネチのポーズ。そして、晶に頭をぶん殴られた。

「いったいわねえ、もう。おバカになったらどうしてくれるのよ。」

……梨乃先輩、受験終わったのかな。試験早いつていつてたもんね」
「まだでしょ。十一月だし。決勝大会だから、勉強の合間をぬって時間作って応援に来てくれたんだよ」

「そっか。おうおう、可愛らしく手なんか振っちゃってさあ。あのガサツで凶暴な木村の梨乃ちゃんが、まあ色っぽくなったもんだよね」

「オヤジか。でも、確かに性格、変わったよね。明るくなったというか」

「いや、明るくはあったんだけど、ギスギスしたところが結構あったんだよ。それが最近すっかり抜けたんだな。なんか、女の子っぽくなった」

「そうそう、女の子っぽくなった。私服姿ほとんど見たことないからよくは分からないけど、でもなんか、おしゃれになった気がするよな」

「そりゃ、彼氏もいるんだし、オシャレにもなるでしょ。って、晶、何様だお前コラ。せっかく応援に来てくれた先輩つかまえてさっきから好き勝手、ガサツだなんだって」

「王子がいい出したんじゃん」

二人の漫才も落ち着き、ウォーミングアップを始めようとしたところ、

「葉月！ 頑張れよ！ 葉月く！ そして、佐原南のみなさん！」
みんなびっくりして、声のほうを見る。二階観客席、梨乃の座っているすぐそばで、九頭葉月のお父さんが「佐原南」と書かれた大きな旗を振っている。

「葉月ィ！」

旗を置いて、足元の太鼓を手にとって、バチで叩き始めた。

ドンドンドンドン さわくらみなみ！

ドンドンドンドン さわくらみなみ！

ドンドンドンドン はくくずき！

周囲にいる観客の人たちも、驚いてその様子を見ている。

注目されている当の本人の娘は、顔を真っ赤にして俯いていたが、我慢限界に達したか顔を上げて、

「お父さん！ 来ないでっていったでしょ！」

葉月は泣きそうな顔で、声を裏返らせて怒鳴っていた。

彼女は普段とてもおとなしくて口数少なく声も小さく、人前で叫ぶような性格ではない。つかあつとなって叫び声をあげてしまい、あまりの恥ずかしさに、ただでさえ赤くなっていた顔が、さらに真っ赤になった。

それを見て、裕子たちは大笑いした。

穴があったら飛び込んで死んでしまいたいくらい恥ずかしかった葉月だが、なんだか急におかしくなってきた、声をあげて笑い出していた。本人は気づいていないが、葉月が家族以外の前で声を出して笑ったこと、これがはじめてだった。

葉月のお父さんは木村梨乃の隣に座った。梨乃と挨拶をかわしている。二人の対面はこれで三度目だ。一度目は今年の五月、学校周辺をランニング中、バンから降りて来たお父さんが、葉月をよろしくとお菓子を配り出したとき。二度目、これも五月。練習試合会場

に現れた。ベンチにも入っていない葉月に旗を振っての大声援、そのときも葉月は死ぬほど恥ずかしかった。

佐原南の部員たちは、山野裕子の指示のもと、ウォーミングアップを開始した。

まずは、体育館の内側を軽いペースで二周。そして、踊りのような、前後に動きながらのストレッチでフットサルの試合に適した身体へとほぐしていく。ブラジル体操という名で知られている動的ストレッチ方法の一つである。

前進、後退をしながら、腰を捻り、右足を上げ、左足を上げ。みんなで動きが揃っていて、見ても奇麗で面白いが、一人調和を乱しているのが佐治ヶ江優。足が腰までしか上がらない。足を上げるのに精一杯で、その後の捻りもおろそかになってしまっている。関節がとても硬いために、これでも入部したときに比べれば相当にまともになったのだ。

「試合開始十分前です」

場内アナウンスの女性の声が、会場中に響きわたった。

佐原南の部員たち全員が、山野裕子の前に集まった。

初戦の相手は決まっているので、この一週間でさんざん対策を伝えているし、そのための練習も行っているが、裕子はあらためて簡単に作戦を伝えた。

そして、全員で円陣を作り、肩を組んだ。

「佐原南、勝つぞ！」

2

市原豊桜のベッキ浜地小夜莉は、味方の攻めあがりで守備が薄く分が悪いことを瞬時に悟ると、素早くボールをタッチラインの外へと蹴りだしていた。

佐原南ボール、山野裕子のキックイン。ボールは佐治ヶ江優に渡り、再び裕子へ。だが、動いて受けたつもりが、読まれており、インターセプトを許してしまった。

裕子は心の中で舌打ちした。こいつら、かなりの試合巧者だ。さきほどから、いいようにいなされて、攻撃が空回りしてばかりだ。さすが決勝大会に進出しただけある。市原豊桜は、強い。

私立市原豊桜学園高等学校。千葉県市原市にある臨海の高校で、君津会場での地区予選を二勝一分で勝ち上がり、この決勝大会へと進出した。

突出した選手はいないものの、全体的に個人技のレベルが高い。戦術的にもよく統率されており、攻撃に迫力があり、守備も堅い。経験の長い者が多いので、パス回しも早くて的確。なによりも、相手の長所を消すのが巧みで、牙を立てようとしても牙そのものをふんわりした布で包みこまれてしまう。

そう聞いてはいたけれど……だから、対策を充分練ったつもりだったけど……しかし、まさかこれほどとは。

いや、うちらだって決勝大会に出ているじゃないか。向こうとなにが違うってんだ。自信を持って。自分を、そしてみんなを信じろ。

裕子は心の中で自分を叱咤し、気合を入れた。

だが、裕子の気持ちとは裏腹に、試合は相変わらず市原豊桜のペースで進んでいく。

現在、前半六分、まだ得点は動いていない。

佐原南のピッチ上のメンバーは現在、生山里子、山野裕子、佐治ケ江優、真砂茂美、武田晶の五人。

せっかく茂美がクリアしたというのに、市原豊桜のパス回しに翻弄されて、ボールはあつという間に佐原南の自陣へと戻って来た。

相手の背番号三番、ピヴォの高岡加奈が、茂美をフェイントで揺さぶると、一瞬でトップスピードに乗って、武田晶の構えるゴールヘドリブルで迫る。

高岡加奈は素早く足を後ろに振り絞り、振りぬいた。

晶は至近距離からの弾丸シュートに持ち前の優れた反応速度を発揮し、パンチングで弾いていた。高く舞い上がったボール、市原豊桜の主将である佐々久美子と、茂美とがお互いに所有権を掴み取る

べく、跳躍した。ボールに先に触れたのは佐々久美子。だがそれは頭で跳ね上げただけになった。一瞬先に着地した茂美は、ボールの落下地点に走り寄り、腿で勢いを殺して足元に収めると、佐治ケ江へとパスを送った。

佐治ケ江は、パスの出どころを作るために一人かわそうとするが、佐々久美子が伸ばしてきた足にボールを奪われてしまった。奪い返そうと追いかけて、後ろから強引に体を入れたが、しかしそれは単に相手を転ばせてしまう結果を招いたのみだった。

笛が吹かれた。

市原豊桜のFKだ。

佐々久美子がグラウンダーのボールを蹴った。混線の中、裕子が掻き出してなんとかことなきを得た。

この流れの悪さ自体は、佐治ケ江が原因でもなんでもない。単に相手が強いだけだ。

でも、それはそれとして、やはりどう見てもサジの調子も悪いよな。本来のサジならば、一対一でそうそう負けるものではないし。相手の一人一人が、これまでの対戦相手にくらべて技術力が高いというのもあるだろうけど、でも、やっぱりサジ、成田予選の時からまったく復調していないよ。予想はしていたけどね。だって……

「サジ、後ろ！」

晶の叫び声が響いた。

佐々久美子が、佐治ケ江を追い抜くように体を入れて来た。先ほどと反対の立場だ。そして先ほどと異なるのは、佐々久美子はフアールにならないよう見事に相手からボールを奪っていたということ。ボールを奪うと、彼女はそのままドリブルに入った。

茂美がボールを奪おうと迫るが、佐々久美子は真横にボールを転がした。走りこんで来ていた高岡加奈がシュート。

晶はパンチングで防ごうとしたものの、ボールはその手をすり抜けて、ゴールネットに突き刺さった。

佐原南 0―1 市原豊桜

前半九分、市原豊桜、高岡加奈のシュートが決まって先制だ。手を叩き合い、喜びを爆発させる市原豊桜の選手たち。

佐原南、下を向いてしまう選手はいないけれども、やはり落胆の色は隠せるものではない。

「切り替え切り替え！ まだ一点差。まずは追いつこう！」

裕子は手を叩き、声を張り上げた。

一試合でも多く、一分でも多く、サジと一緒に試合をしたいけど……でもこのままじゃ、ダメだ。

裕子は、意を決して選手交替の指示を出した。

佐治ヶ江優 アウト 衣笠春奈 イン

裕子は、「頼む」と春奈の背中を叩いた。

地区予選ローカルルールでは、選手交替には審判への申請が必要だった。正確な記録を残すことと、審判の質を考えてのことだ。だが、この決勝大会からは、一般的なフットサルルールと同じで申請は不要、流れの中でどんどん交替しても構わない。

春奈は分析能力が高い。ピッチの外から見ていた感想をハーフタイムに教えて貰いたい、いまは時間がない。もう前半のタイムアウトは使ってしまったている。

春奈が入ったことにより、チームとしてのまとまりは若干修正された。しかし市原豊桜の、相手の長所を全部無力化してしまうようなチームワークに変化はなく、佐原南は押され続けた。

そして、裕子のトラップミスを突かれ、そのまま全員に攻め上げられ、再び点を失った。ゴール前の見事なパス交換に、晶一人では対処しきれなかった。

前半十一分。

佐原南 0―2 市原豊桜

得点者は、またもや高岡加奈だ。一発勝負のトーナメント戦、勝利の可能性を大きく引き寄せるゴールに、彼女は飛び上がって喜んでいる。

「みんな、ごめん」

裕子は力無く謝った。

「王子先輩、落ち込まないでください。一点づつ返してきやいいんだから」

里子の予想外な台詞に、裕子は思わず微笑んだ。

しかし、自身の個人的なミスもあるとはいえ、堅守が自慢の佐原南が、前半のうちに流れから二失点とは。

でも、里子という通りだ。くよくよしてても、しょうがない。

前半十二分、選手交替。

真砂茂美 アウト 梶尾花香 イン

基本フォーメーションをボックスに変更。前が衣笠春奈、生山里子、後ろが山野裕子、梶尾花香。裕子がベッキだが状況により柔軟に花香が、または二人がベッキにもなる。ダイヤモンド型以上に、各ポジションの名称が「その時点での役割名」になるフォーメーションだ。

プレーの一つごとに、春奈が短く指示を出していく。それは実到的確だった。その都度、それぞれの動きが目に見えてよくなっている。

入ったばかりの花香はいきなり素晴らしい仕事をした。パスと見せかけて身体を反転させて前を向くと、ドリブル突破で一人かわし、中央へと切り込んだ。相手のベッキとゴレイロに対し勝負にいくふりをし、抜こうとする仕草を見せたその瞬間、ボールを真横へと転がしていた。

後ろから駆け上がった里子が、そのボールを豪快に蹴り込んで、佐原南が一点を返した。

佐原南 1―2 市原豊桜

ピッチの外と中、それぞれで抱き合う佐原南の選手たち。

佐原南はなおも攻め続けた。

市原豊桜の主将、佐々久美子は選手たちが動揺していると判断すると、少し守備的な布陣に変化させ、対応した。

そして三十秒。

前半終了の笛が鳴った。

十分間のハーフタイムだ。両校の選手たちは、それぞれピッチの外へと出ていった。

「里子、見違えた。本当に凄い、よかった。この調子で頑張ってよ」
梨本咲は、戻ってくる里子に声をかけた。

「あ、ああ、ありがとう」

天敵とも呼べる存在に、存在否定どころかお褒めの言葉をいただき、いったいどう返せばいいのかわからず、里子はどきまぎしてしまった。

咲はふらふらとコート隅まで歩いていくと、いきなり、ぷつと吹き出し、笑い始めた。

「からかっただけなのに、あいつ、真っ赤になって照れてやんの」
咲の、なんともおかしくてニヤニヤしてしまっている顔を、武田晶がじーっと見ていた。

「な、なに見てんですか!」

「知るか。ストレッチしてたら、あんたのこうがこっち歩いて来て、ニヤニヤとみっともない顔で笑いはじめたんじゃなかよ」

「おーい、咲、晶、こっち来い。作戦会議やつぞ」

裕子の呼び声に、二人は歩き出した。

市原豊桜と佐原南は、それぞれの主将を中心に輪を描いて立っている。後半戦に向けての作戦会議だ。

「基本的な戦術については、変更するつもりはない。それこそちぐはぐになって、向こうの思うツボだからね。相手個人個人に対しての注意点だけ……春奈、頼む」

「まず、背番号五番、主将の佐々久美子。右アラの選手だけど、彼女に対しては……」外から見ているはつきりと特徴を掴めた市原豊桜の選手について、春奈は一般論と独自解釈を交えての対策を語り出した。「以上。ま、そんな感じかな。とりあえず、この四人が要注意だから」

「だそうだ。注意するように。それと、基本戦術は変えないってい

ったけど、前半までのやり方を中心に、もう少し遊びをいれよう。相手だって、こっちの手が複数あるほうが読みにくくなるだろうしね。でも、仕掛けるときには、他はしっかりとフォローやカバーをすること。あと、一人一人がもう少し判断を早くしていこう。作戦会議は以上で終了！」

と、裕子はきっぱりいいきると、佐治ケ江優へと視線を向けた。「それと、サジさあ」

佐治ケ江は、少し俯き加減だった顔を上げ、裕子の顔を見た。

「あえて、いまこんなところで、いうけどさ……広島に、帰ろうと思ってるだろ」

みんなが一斉に佐治ケ江のほうを見た。視線を一身に浴びる佐治ケ江は、数秒間の沈黙の後、首を小さく縦に振った。

「えー！」

春奈と亜由美が驚きの声を上げた。

「うちからサジ先輩がいなくなっちゃったら……」

花香が不安そうな表情を作った。

里子は、口元をきつく閉じ、黙って佐治ケ江の顔を見つめている。しかし、普段の里子を知る者ならば、それは明らかに動揺している表情であることが分かっただろう。

「なんか最近、試合に出ることに固執しているのも、でもなんだか空回りしちゃっているのも、練習で注意力が乱れちゃっていたのも、成田予選で胸おさえて倒れちゃったのも……全部そのせいなんだ。広島に帰ろうと思ったのはいいけど、昔の嫌な記憶が甦って、正常な精神状態でいられなくなってしまふ。でもどうしても帰りたいから、だから、その抱えている過去、強くなって、乗り越えようと思っっている。……そうだろ」

また、佐治ケ江は黙って頷いた。

裕子は張り詰めていたような顔を少し緩め、笑みを作った。ぎこちない笑みだった。

「バカだなあ。一人で抱えなくなたっていいんだよ。人間なんて、弱

くたっていいんだよ。……それに、広島に戻ったって、どこに住んでたって、あたしたち、仲間じゃん。だから、そんなに気負わなくていいんだよ」

裕子の言葉に、佐治ケ江は何秒か考えてから、ゆっくりと話しはじめた。

「前に、王子がいったでしょう。これからも続いていく人生、自分なりの、楽になれる方法を見つけないと辛いつて。それには、王子がいまいった通り、自分が強くなって、広島に帰ること。それが出来れば、あたしの今後の人生は大きく変わるんじゃないかと思う。今後だけじゃない、これまでの、過去の記憶だって、大きく変えることが出来る。……なにをやってもダメなあたしが、成長を実感出来るのって、フットサルだけだから。だから、この大会を頑張ることとで、強くなったという実感を得たいんだ。……それに、あたしなんかのせいで、いつまでも両親を離れ離れにはしておけない」

佐治ケ江は自分にいい聞かせるように、柔らかな口調ながらも力強くそう語った。

ああ、

裕子はあらためて納得した。

やっぱり、成田で試合中に倒れてしまったのも、そういう決心をしていたからだっただか。子供の頃に受けたいじめのせいで出るようになったパニック障害、千葉に来てから収まっていたというのに……戻る決心をしたことで、過去の様々な思い出が、それをぶりかえさせてしまったのだ。

でもサジは、そんな自分と向き合い、戦い、そんな自分を越えようとしている。

きっとそうだろうと思ってはいたものの、それが真実であることを知ると、あらためて胸の奥が締め付けられるような気持ちになる。「もう一回いぞ。どこにいたって、あたしたち、仲間だからな。自分は一人きりだなんて思うなよ。そのうちにみんなで広島に遊びに行くからな。……でも、サジなら、向こうでも仲間たくさん出来

るよ。優しいし。強いし。そう……サジはもう充分に強いんだから。自信、持ちなよな」

裕子はそういうと、佐治ケ江の背中を強く叩いた。

「ありがとう、王子」

佐治ケ江は、小さな声でそういった。その短い言葉に、気持ちのすべてがこもっていた。

本当に、この部に入ってよかった。梨乃先輩に出会えたこと。王子や、他のみんなと出会えたこと。佐原南に転校してきていなかったら、まだ、自分で殻にこもってしまっていて、一人きりだったかも知れない。いじめられなくなっても、死んだような生き方をしていただけだったかも知れない。

「よし、じゃあ後半、絶対逆転しようぜ！」

全員で肩を組み、円陣を作った。

「よし、佐原南ィ、頑張っていきまー！っしょい！」

「それ、なんて返せばいいの、王子？」

「変なことやってないでいつも通りにやれよバカ王子」

「女子は、ほんとにつべこべつべこべうるせーな。んじゃ、改めて

……佐原南！ 勝つぞ！」

円陣が解かれ、佐原南の選手たちはピッチ内外へと散らばった。遅れて市原豊桜も円陣を組んで、大きな叫び声をあげた。

そして、後半戦が開始された。

佐原南はすぐに選手交替。

生山里子、衣笠春奈、佐治ケ江優、真砂茂美、武田晶の五人になる。

いままで押されていたのは気持ちの問題だったのか、それとも春奈の指示が的確だったのか、前半に比べて佐原南のパスが繋がるようになった。市原豊桜がどう修正してくるか不安だったが、前半終了間近の勢いのまま攻め続けることが出来た。

茂美も、前半途中からピッチの外で試合を見ていたことで、うまく相手の攻撃パターンを読めるようになったようだ。危険の芽を確実に摘み取ってゆく。前半大忙しだったゴレイロの晶が、暇になっ

てしまったくらいである。

前半戦開始直後と比べると、形勢は完全に逆転していた。

要因はいくつもあるだろうが、なかでも大きいと裕子を感じるのが、佐治ヶ江の復活だ。

ハーフタイムにかけられた裕子の言葉により、佐治ヶ江の気持ちは相当に吹っ切れたようだ。いままでの不調が信じられないくらいに、ピッチの上をいきいきと躍動している。

そして、後半七分、佐治ヶ江が二人を抜き去ったのクロスを里子が決め、ついに佐原南は同点に追いついた。

佐原南 2―2 市原豊桜

後半九分、試合の流れが完全に佐原南のものになったところで、篠亜由美がファールで相手を転ばせてしまう。イエローカードが出された。直接FKの対象となるファール、後半で六つ目、相手に第二PKを与えることになってしまった。

キッカーは主将の佐々久美子。

第二ペナルティマークにボールをセットした。

ゴールまでの距離、十メートル。

ボールに走り寄り、爪先で勢いよく蹴った。

ぐんと球は伸びる。その弾道は、ゴールの隅を、完全に捉えていた。

武田晶がパンチング。真上に跳ね上がったボールを目掛け、市原豊桜の選手たちが必死の形相でかけよってきたが、晶はジャンプすると、落下してくるボールを両手でキャッチした。

落胆の色を隠せない市原豊桜の選手たち。

佐原南の選手たちは第二PK阻止により、掴みかけていた自信を確固たるものにした。前半終了間際に見せた怒涛の攻撃が、またはじまった。

市原豊桜は、焦りが焦りを呼び、得意の、相手を包み込むような守備も攻めも出来ず、個人の頑張りでボールを跳ね返すのが精一杯の状態になっていた。

「同点なんだよ！　びくびくしてんじゃないよ！」

佐々久美子がひとり大声を発し、ひとり踏ん張っているが、焼け石に水といった有様だった。

フットサルは基本的にはパスを繋いで侵攻していくゲーム。ドリブルはアクセントに過ぎない。ピッチが狭く、あまりスペースがなかったためだ。だが、この試合は違っていた。佐原南が攻めれば攻めるだけ、市原豊桜は個々の動きが乱れて、いたるところにスペースが生まれてしまってた。

現在後半十一分、スコアは2―2のまま。残り時間を考えれば、一点を争うゲームになる。

佐治ケ江は裕子からのパスを受け取ると、ドリブルで駆け上がった。

滑らかな曲線を描き、まったく速度を落とすことなく吉田千史を抜いた。

佐治ケ江はさらにドリブルで上がろうとしたが、吉田千史に背中を引っ張られて、転倒した。

第一審判の吹く笛が鳴った。

吉田千史にイエローカードが出された。

市原豊桜の直接FKの対象となるファール、これで後半六つ目だ。佐原南は第二PKを得た。

裕子は佐治ケ江に歩み寄ると、手を差し出し引っ張り起こした。

「サジ、第二PK、自分で蹴りな」

佐治ケ江は少しの沈黙の後、小さく頷いた。

第二ペナルティマークにボールをセットした。

ちらりと観客席に視線をやった。

さっきまで梨乃先輩と葉月のお父さんが座っていたあたりに、いつの間に来たのか浜虫久樹先輩と畔木景子も座っているのが分かった。

遠目からではあるが、梨乃が佐治ケ江に向けて頷いたのが分かった。

自分を信じて、ただ精一杯やれ。

佐治ヶ江は、そう受け取った。

審判の笛が鳴った。

佐治ヶ江はゆっくりとボールに近寄っていく。

そして、素早く足を後ろに振り上げると、勢い良く振り下ろしていた。技巧に走らず、ただ真っ直ぐ、力強く。佐治ヶ江には珍しい、トゥーキックによる豪快なシュート。

ゴレイロの灘地有紀は佐治ヶ江優のことをよく対策していただけに、それが裏目に出ることになった。完全に意表を突かれて、判断が遅れてしまったのだ。驚いたその瞬間には、眼の前からボールが消えていた。振り返ると、ゴールネットが揺れていた。

佐原南 3―2 市原豊桜

ついに佐原南は二点差をひっくり返した。

里子、晶、裕子は佐治ヶ江の身体をばんばんと叩いて、この大会初ゴールの彼女を手荒く祝福した。

残り時間はもうほんの数分。攻めなければ負けるというのに、市原豊桜はなにも出来なくなっていた。佐原南のパス回しに、ついていくことが出来なくなっていた。最後のところで守るのが精一杯だった。

パス回しといっても時間稼ぎのためのものではない。攻めのため、点を取るためのパス回しだ。「守備は攻撃、攻撃は守備」前部長である木村梨乃がよくいっていた言葉、裕子はそれを実行していた。

市原豊桜は、攻めねばと思うほどに焦り、守ろうとするほどに焦り、いたずらにファールが多くなるばかりだった。

そして、里子がドリブル突破からのシュートを惜しくも打ち上げてしまったところで、長い笛が鳴った。

試合終了。

佐原南は3―2で決勝大会初戦突破を決めた。

「サジ、やった！」

裕子は佐治ヶ江に走り寄り、飛びつくと、彼女の華奢な身体をぎ

ゆつと抱きしめた。

「……苦しいよ」

「ごめん」

裕子は佐治ヶ江の身体から離れた。

二人は、見詰め合った。

やがて裕子は、柔らかに微笑んだ。

3

振り切られそうになったところ、篠亜由美はつい手を出してしまい倉本慶子のシャツを引っ張って転倒させてしまった。

笛が鳴った。

第一審判がイエローカードをかかげた。

亜由美は前の試合でも警告を受けているため、これで累積二枚目。この試合に勝利しても、次は出られない。

八街富士見台に、FKが与えられた。

「晶、王子、ごめん。……ゴレイロのドリブルをとめられずに倒しちゃうなんて、みっともない」

亜由美は謝った。

「気にすんな」

山野裕子は亜由美の肩を叩いた。

倉本慶子は中学まではサッカーのMFをやっていたと聞く。上手なのは当たり前。ただそれをいっても、経験の差に余計に落ち込むだけかも知れないので、裕子は黙っていた。

FKは武田晶がエリアの外まで大きく飛び出して、ヘディングで大きくクリアした。

現在前半十一分。スタメンの里子と佐治ヶ江が前半六分で交替し、現在のメンバーは九頭葉月、篠亜由美、山野裕子、真砂茂美、武田晶。

対戦相手は八街富士見台高等学校。千葉県八街市にある私立高校だ。

両校とも、まだ得点はない。

力は、一見すると五分五分。

しかし、見るものが見れば、予定の戦術通りやりたいうようにやっている八街富士見台に、不本意ながらもそれを受けてしまっている佐原南という構図がはつきりと分かっただろう。

裕子たちは、守りの硬い相手に苦戦していた。硬いだけではなく、隙を突いては頻繁にゴレイロが攻め上がって来る。ゴレイロの倉本慶子は、FPとしても足元の技術が優秀で、なかなかボールを奪えない。人数をかけて奪おうとしても、あっさりボールを他の選手に渡して、自陣ゴールに戻ってしまう。直前まで倉本慶子にマークが集中してしまっていた分だけ、佐原南は他が手薄になってピンチを招いてしまう。倉本慶子の自由な動きが作り出すペースに、佐原南はすっかり狂わされてしまっている。そのような戦い方がもう、チームの基本戦術として組み込まれているのだろう。

それだけではない。守りが非常に堅く、と思えば突き刺すような鋭いカウンターが来る。

あまり目立たないが試合を影でコントロールしているのは、主将の榎木恵美。あらかじめ梨乃先輩に聞いていたから分かったけれども、確かに倉本慶子の行動がより効果的になるように、またそのリスクをカバー出来るように、榎木恵美はこまめに自身の動きや周囲への指示で調整している。裏方だけでなく、決定力も抜群で、地区予選では茂原藤ヶ谷から彼女一人で三点奪っている。

乱雑ではない計算された大胆さ。裕子は八街富士見台にそのようなものを感じた。さすが、地区予選で巴和希率いる茂原藤ヶ谷に大勝しただけある。

だんだんとその戦法に慣れては来たものの、一失点でもしていたら、前掛かりになったところをたたみ込まれて大量失点していたかも知れない。前もって対策を考えていなかったら、どうなっていたか。

葉月のポストプレーから、裕子はボールを受けた。フェイントで

相手をかかわして、シュート！ うまく枠を捉えたものの、ボールはゴレイロの足に当たり、そのまま大きくクリアされてしまった。

しかし、葉月をここまで使うことになるのは、大会前には思いもしなかったことだ。突出した何かを持っているわけでもなければ、万能タイプでもない、個人技だけ見ればなににおいても「悪くはない」というレベルの選手だ。性格面も実におっとりしていて、フール覚悟でガツガツ当たっていくようなことも決してしない。ただ、自分がどんなレベルなのか、そんな自分になにが出来るかをしっかりと理解しており、チームのために献身的に働いてくれる。以前は、少しは里子のような負けん気の強さを見習ったほうがいいのと思っていたが、現在の裕子はこの選手がいてもいいんだ、こういう選手もいてこそそのチームなんだ、と思うようになって来ている。

真砂茂美 アウト 友原鈴 イン

茂美の体力温存のため、そして茂美には少し外から試合を見てもraithたい。

それと、来年に向けての貴重な選手である鈴に、こういう舞台を経験してもらいたい。

「普段通りやりゃいいから」

「はい」

鈴は緊張した表情で裕子の言葉に応えると、ピッチに入った。

鈴は、基本的にはアラの選手だが、茂美にかえてのベツキというものも何度も経験しているから、連携も問題ないはずだ。裕子はそう思って鈴を投入したわけだが……

八街富士見台の右アラ、横川智佐がドリブルで駆け上がって来た。ピヴォの矢野麻衣子へとパス。そのパスを鈴は読んでいた。軌道上に走り込み、スライディングで奪っていた。

お、上手い！ と、裕子は感心したが、しかし、続く裕子へのパスはコントロールが甘いどころか、まったく違う方向に転がしてしまい、相手へのプレゼントパスになってしまった。

再び横川智佐にボールが渡った。

鈴は駆け出した。自分のミスで相手に渡してしまったボールを自ら奪おうと、横川智佐へと迫っていく。

「鈴、そんな上がなくていいよ！」

裕子は叫んだ。

そんなあちこち好き勝手に駆け回られたら、連携や守備がムチャクチャになってしまう。

決勝大会という舞台にすっかり萎縮しちまってるんだ。そう気付いた裕子は、すぐ鈴とポジションを交換した。ミスが失点に直結するようなポジションでは、焦りで自ら潰れてしまう。鈴が自信を失ってしまう。

だが、ポジションを変えても鈴は相変わらずだった。

八街富士見台の攻撃を、なんとか晶がボールをキャッチし、そして裕子へ送り、そして鈴へ送り。と、せっかく受けたボールを、出しどころを探してもたもたしている間に、またもや横川智佐に奪われてしまった。

横川智佐、自分と同じ一年生なのに、とても自信に満ちた、躍動感のあるプレーで……鈴はますます焦りを感じていた。

負けたくない。

ここで負けたら、せっかく好きになりかけていたフットサルが、また辛いものになってしまう。

鈴は横川智佐を追いかけ、強引にボールを奪おうとするが、しかし、手で押し倒してしまった。鈴にイエローカードが出された。

立ち尽くす鈴の元へ、裕子が近づいて来た。

「王子先輩、すみません。あたし……」

「そんなにあたしらって、頼りにならないかな？」

「え？」

「後ろにあたしや、晶がいるんだから、もっと伸び伸びやんなよ。せっかく大会に出てんだから、もっと楽しんでやろうぜ。勿体無いよ」

裕子は鈴のおでこを人差し指でつついた。

「……はい」

でもここまで来たのにあたしなんかのせいで負けたら、もっと勿体無いじゃないか。……だいたい、なんでこんな大切な場であたしなんか使うんだ。何点もリードしてたり、逆にリードされているならまだしも。

八街富士見台の直接FK、キッカーは主将の榎木恵美。八街富士見台は地区予選で茂原藤ヶ谷と対戦し、六点奪って勝利したのだが、そのうち三点は彼女の得点、さらにそのうちの一点は直接FKを直接決めての得点だ。

佐原南の選手は壁を作った。八街富士見台の選手とで、ゴール前はごちゃごちゃとひしめき合う。

笛が鳴った。

榎木恵美は短く助走し、ボールを蹴った。

佐原南の選手が予期しなかった、ふわっと宙高くに浮かせるボールだった。

身長百六十八センチの矢野麻衣子、裕子と葉月の間に割り込むように入ってきて、長身を跳躍させるとボールに額を叩き付けた。ボールはまるで稲妻のような急角度と速度とで、ゴールネットへと落ちてゆく。

晶は小さく腰を落とすと、バレーのレシーブのように両手でボールを大きく弾き飛ばしていた。

「よっしゃあ！」

咲の叫び声。鈴は宙高く舞うボールを追いながら、先輩のファインプレーに拳を振り上げている梨本咲にちらりと視線を向けた。咲が、あんなに熱くなるなんて。そもそも晶先輩のこと、あんなに嫌っていたのに。

晶が弾いたボールは、葉月が素早く落下地点に駆け寄って胸で受けた。だが、足元に落ちて小さくバウンドしたボールを、横殴りの風にさらわれてしまった。ゴレイロの倉本慶子だった。ゴレイロだ

というのに、ハーフラインにまで上がって来ていた。

倉本慶子は身体を反転させ、ドリブルで駆け上がろうとした。が、動くことが出来なかった。佐原南の選手がぴったりと密着していたからだ。

それはゴレイロのユニフォーム、武田晶だ。そう、晶もハーフラインにまで上がって来ていたのだ。

ボールを奪おうとする晶。倉本慶子はそうはさせじと粘る。そうそう見られるものではない、ハーフライン付近でのゴレイロ同士の攻防、勝利したのは晶だった。倉本慶子からボールを奪い取っていた。

晶は細かいながらもスピードのあるドリブルで駆け上がっていく。お株を奪われた倉本慶子は、怒ったような表情で晶を追いかけた。晶はフェイントで奇麗に榎木恵美をかわした。背後から倉本慶子が全力で突進してくるのを感じるや、ボール保持に固執せず、裕子へとパス。晶は自陣ゴールへと走って戻っていく。

裕子はベッキの中井真子を引きつけると、ひらりとかわして、前方へとパスを出した。

葉月が走りこんで来ており、そのボールを受けた。

倉本慶子のいない無人のゴール。距離、約十メートル。

葉月は素早く足を上げ、振り下ろした。だが、葉月の足がボールに触れたその瞬間、戻って来た倉本慶子に肩をぶつけられた。葉月はバランスを崩し、半回転して、尻餅について転んだ。

ころころと転がるボールは、ゴールポストのすぐ脇を通り過ぎていった。

「ああ、惜しい！」

ピッチの外で悔しがる里子と花香。

倉本慶子にイエローカードが出された。おそらくイエロー覚悟でわざとぶつかったのだろう。そうしていなければ、確実に失点していたからだ。

佐原南に直接FKが与えられた。

キッカーは篠亜由美。ズドン、と力強く真っ直ぐ伸びるボール、上手く壁の隙間をすり抜けてゴールへ向かったが、しかし、倉本慶子の正面。ブロックされた。床に落ちたボールに、葉月は素早く駆け寄るが、間一髪の差でゴレイロの倉本慶子はボールに飛びついてゴールを死守した。

みんな、熱くなっていて、羨ましい。
楽しんでいて、羨ましい。

鈴はなんともいえないみじめな気持ちを感じていた。

ふと、観客席の方を見ていた。

浜虫久樹。

先日、彼女と公園で練習したことを思い出していた。

あのなんともささやかな嬉しさ、気持ちよさを思い出していた。

……そうだな。羨ましいもなにもない、あたしにだって、誰にだって出来ることじゃないか、熱くなって、楽しんでなんて。ただ、一所懸命にやればいいだけじゃないか。ただ一所懸命にボールを追えばいいだけじゃないか。

信頼出来る仲間、先輩がいるんだから。

やってみよう。それでダメだったら思い切り後悔すればいい。

鈴は走り出した。

横川智佐は永台不美江からのパスを受け、ドリブル体勢に入ろうとしたが、その前に友原鈴が立ちはだかった。鈴は奪おうと足を伸ばすが、あっさりとかわされ、ボールは横川智佐から矢野麻衣子へと渡った。

矢野麻衣子がほんの少しトラップにもたついたところ、裕子が横に走り抜けてボールを奪っていた。

鈴は裕子からのパスを受け取った。

正面を向くと、横川智佐が迫って来ていた。攻と守、先ほどと逆の立場だ。

プレッシングをかけてくる横川智佐。

鈴は軽く腰を落とすと、肩や腕、背中を使って相手からボールを

隠し、守りながら、身体を回転させた。無我夢中のままに、ボールをちゃんと前に出して走り出していた。

はっと我に返ると、後方では横川智佐がバランスを失いよろめいていた。

客席から歓声が上がった。

え？

ルーレット、いきなり成功しちゃった……

鈴はドリブルしながら、なんだか不思議な感覚に包まれていた。

なんか……

凄い、気持ちいい……

久樹先輩と練習した、あのときよりも、ずっとずっと。

溶けてしまいそうなくらい、気持ちいい。

鈴は葉月へとパスを出すと、そのまま駆け上がり続ける。葉月からすぐにボールが戻って来てそれを受けたが、ワンツーを読んでいたベッキの中井真子がすぐさま鈴に駆け寄りボールを奪おうとする。鈴は咄嗟に身体を反転させると、中井真子を背負った……その瞬間に再度素早く反転して、シュートを打った。

完全に意表を突いたシュートは運も手伝いジャストミート、ぐんと鋭く伸びて八街富士見台のゴールへと襲い掛かった。

だが、素晴らしいシュートも倉本慶子の反射神経には通じなかった。ワンハンドでキャッチされてしまった。

「鈴、いいよ！ その調子！」

後方から裕子の嬉しそうな大声が響いて来た。

「はい！」

鈴も負けないように返していた。

たかだかルーレットだけれども、一度感触を掴むと色々と応用がきく。途中でとめて後ろにパスしたり、逆方向に戻って相手を惑わせたりイラつかせたり。相手が構えてしまうためか、他のフェイントも通じるようになってきた。

フットサルって……楽しい……

久樹先輩に感謝しないと。フットサルなんか向いてない、って思っていたけど、そうじゃない、自分の通じるところ、自分のよいところ、そういうところを探せばいいだけだったんだ。いままで、頑張っているふりだけして、結局、楽な立場を探して逃げ回っていただけだったんだ。

自慢の爆発的な攻撃力を発揮出来ないことにもどかしくなったか、八街富士見台はピヴォを矢野麻衣子から南山恵美子に替えて来た。矢野麻衣子も身長百六十八センチと長身だが、南山恵美子はなんと百七十五センチもある。ロングボールを徹底的に前線の長身選手に当てるという、サッカー的戦術に切り替えて来た。

実際、百六十センチ前後の選手しかない佐原南に対してはこの戦法は有効だった。この長身のピヴォは、ロングボールの落下地点に走り込むと、軽く跳躍をし、頭にボールを当てては、佐原南の選手たちが競ろうにも決して届かないような高さから味方選手の走りこむ場所へと的確に落としていく。

南山恵美子、高身長ながらほっそりとしており、顔も丸っこく、あどけなさの多分に残る一年生。足元の技術に若干の不安はあるものの、自分の役割は充分過ぎるくらいにこなしていた。

しかし、佐原南も段々とその戦法に慣れて来た。マンマークを徹底させて、ハイボールを簡単に上げさせないようにしたのだ。

鈴が横川智佐を抜いた。右と見せて左、という実に単純なフェイントで。少し前の鈴ならば周囲がまったく見えていなかったところだが、気持ちに少し余裕の出来た鈴は、中央で走りながら前方を指さしている葉月の姿が見えた。そして、その指し示す先へと強くボールを蹴った。

葉月はベッキの中井真子をかわし、全速力でボール落下地点へと走る。

ゴレイロの倉本慶子も慌ててゴール前から飛び出すが、しかし間に合わなかった。

葉月は落下してくるボールに、走りながら頭を叩きつけていた。葉月と倉本慶子は全力疾走で擦れ違った。葉月は勢い止まらず、床に躓いてゴールネットの中に突っ込んでしまった。

笛の音が響いた。

葉月は床に手をつき、上体を起こした。

すぐ横に、ボールの感触。

ゴール……

決まったんだ。

葉月がぼーっとしてしていると、鈴がなにか叫び声をあげながら走りよって来た。

「やった、葉月！」

せっかく上半身起こしたのに、鈴に押し倒されてしまった。

佐原南のみんなが歓声をあげた。

続いて客席からも歓声、拍手が起きた。

観客席がら、ドンドンドンと太鼓の音。きっと葉月のお父さんだろう。

ついに均衡が破られた。

佐原南 1―0 八街富士見台

「鈴がいいボール上げてくれたからだよ。決めるだけだった」

そういうと、葉月は優しく微笑んだ。

「ほら、いつまでもそんなところでこちょこちょやってんじゃないよ。あんたらそういう関係かよ」

裕子は手を差し出し、二人を立ち上がらせた。

「でもほんと、よくやってくれた。二人とも」

失点を喫した八街富士見台はすぐにボールをセンタースポットに置き、キックオフだ。

倉本慶子がまたどんどん上がってくるようになった。

小さな、でもとても大切な自信を得た鈴ではあったが、横川智佐の必死の突破、今度はとめることが出来なかった。

ボールは倉本慶子へ、そして榎木恵美とのワンツーで亜由美を抜

くと、クロスボールを上げた。

ゴールへと迫る南山恵美子、百七十五センチの長身を跳躍させ、裕子に余裕で競り勝ち、高い打点からのヘディングシュート。地に突き刺さるような急角度のボール、晶も反応間に合わず、バウンドしてゴールへ吸い込まれた。

佐原南 1―1 八街富士見台

試合は一瞬にして振り出しに戻った。

先制したことで油断が出たとは、裕子は思っていない。

ただ、運が悪かったただけだ。あんな見事なクロスボール、簡単には防げない。

でも、自分が競り負けて決められたのは事実。葉月がとってくれた得点を守れなかったのは事実。

裕子は、床に座り込んでしまった。

晶は裕子にゆっくり走り寄ると、突然顔面に回し蹴りを浴びせた。「あたしだって防げなくて落ち込んでんだよ！ ぼけっとしてる暇があったら走り回って点を取って来いよ！」

「くそー、いってえええ。悲劇のヒロインごっこしてんのに蹴飛ばしてくんじゃねえよ、アホウ！ 点取りやあいんだろ、点取りやあ」

「分かればいいんだよ」

「ぼんぼん蹴飛ばしやがって。まったくもう」

裕子は立ち上がった。

ありがとうな、晶。

心の中では素直に、晶に感謝していた。本心から、相当に落ち込んでいたからだ。

「よし、点取るぞ。里子、カムヒア！」

選手交替。

九頭葉月 アウト 生山里子 イン

「お疲れ」

里子は交替ゾーンで葉月の肩を軽く叩くと、ピッチへと入った。

「鈴、あたしにどんどんパス出しなよ」

「仕切ってんじゃねえよ。でも、それでいこう。戦術は変えず、ピヴォ当て継続で。どんどん里子に預けてこう」

里子の妙な自信や強気な姿勢が全体に浸透したのか、基本戦術に変更はないというのに、歯車が噛み合いはじめた。

鈴からのパスを受けた里子はフェイントを仕掛けて横川智佐をかわした。だが、少しタッチが大きくなったところを中井真子に大きくクリアされてしまった。

それでも佐原南の攻勢はとまらない。

裕子からのロングパスを受けた里子、迷いのないドリブルで永台不美江を一瞬にして抜き去った。続いてベッキの中井真子かわすいや、かわしたつもりが、肩がぶつかりあってしまった。里子はよろけながらも強引にシュートを打った。

ボールはゴレイロ倉本慶子の腰に当たり、ゴールネットに突き刺さった。

喜ぶ佐原南の選手たち。しかし審判は、先ほどぶつかりあったのを里子の守備妨害とみなし、佐原南のゴールは認められなかった。

FKを倉本慶子が蹴り、裕子が頭で跳ね返したところで、前半終了の笛が鳴った。

これから十分間のハーフタイムだ。

「鈴。いい感じじゃん。この数分で、自信つけたんじゃない？ ルーレットなんかやるとは思わなかったよ」

裕子は、鈴の天然チリチリ頭をかき回した。

「この間、久樹先輩に教えて貰ったんです」

「なに、内緒で特訓してたんだ」

鈴はしまったと思ったが、開き直り、よく公園で練習していること、白状した。

「へえ。鈴、えらいなあ」

「王子先輩、あたしのことは褒めてくれないんですか？」

「里子、だからお前はさあ……」

裕子はいいかけて、すぐ口を閉ざした。里子は相変わらず強引だけれども、それはそれで、なんだかんだと上手くチームに溶け込んで来ているから。強引だけれども、歯車はかみ合って来ているから。里子自身が里子なりにチームのことを考えてプレーするようになってきたからだろう。

里子と葉月という、とことん対照的な二人のピヴォ。それぞれの良いところを伸ばしていったら、来年にはどんなチームになるのだろう。想像すると、楽しみなことではある。ただし、公約通りならば里子は一年生のうちに佐治ヶ江を追い抜いて、そして来年からは違う部にいってしまうわけだが。

裕子は、相手が戦術を変えてくることを予想して、パターン別の指示を出した。

「でも多分、いま最初にいった、あのやり方で来ると思う。マーク、フォローをはつきりして、相手の動きには絶対に惑わされないように。練習通りやれば、絶対に勝てる。つうか、絶対に勝つ！」

そして、後半戦が始まった。

佐原南のメンバーは、生山里子、佐治ヶ江優、山野裕子、篠亜由美、武田晶。

八街富士見台は、基本戦術を変更してきた。

南山恵美子の長身を活かすという前半終わり際のやりかたはそのまま。……だが、ゴレイロのはずの倉本慶子がFPのシャツを着ている。そして、控えゴレイロの橋本多恵がピッチ上に立ち、ゴールを守っている。

やっぱりこの手で来たか。

地区予選で、先制された八街富士見台が使った手だ。

足元の技術も上手な倉本慶子がFPの選手として入り、決められたポジションにはつかずに縦横無尽に駆け回り、対戦相手をかく乱する。空いた穴は、ゴレイロの橋本多恵が状況に応じて上がったたり下がったり、ベッキと連携をとりながら埋める。

ある意味の捨て身戦術である。相手に対応されるようになる前に

点を奪ってしまったという作戦だ。

フットサルはマンマークが基本なので、相手の選手が自由に動くということは、佐原南の得点チャンスも増えるということ。しかし、厄介であることに変わりはない。お互いにリスクが発生するが、それであれば、自分らの意思で仕掛けている側が精神的に有利だからだ。

南山恵美子にハイボールを送る作戦は、それぞれにがちりマークについてハイボールを上げさせないことで封じたつもりだったが、後半になって自由に動く倉本慶子が、どんどんハイボールを上げてくるようになった。

南山恵美子が頭で受けたその落としを、横川智佐や榎木恵美がどんどん拾っては飛び出し、シュートを狙ってくる。

思い切りのよい鋭いシュートながら、二回に一回はしっかり枠を捉えており、ゴレイロが晶でなかったら、何点か決まっていたかも知れない。

八街富士見台、奇襲奇策の引き出しが豊富で、こんな面白いチームもあるんだな。

裕子はそう素直に感心していた。

でもね……こっちも負けないよ！

裕子は倉本慶子の動きを読み、横からボールを奪い取った。ドリブル、そして佐治ケ江へと繋いだ。

ボールを信頼出来る仲間に預けた裕子は、そのまま走り続け、榎木恵美を追い越した。

佐治ケ江も一瞬で横川智佐をかわし、浮き球でアーリークロス。

裕子を感じてくれること、間に合うことを信じて疑っていない。

裕子は佐治ケ江の狙い通りに飛び出した。ボールの落下地点めがけて走る。

前にいるのはゴレイロだけ。あのボールに追いつくことさえ出来れば、決定的な得点チャンスになる。

しかし裕子は、同じように佐治ケ江の上げたボールを追って飛び

出していた里子と肩をぶつけ合ってしまった。里子は倒れ転がり、裕子もバランスを失ってよろめいた。

ゴレイロの橋本多恵は、よろけた山野裕子の姿に、一瞬で決断をし、飛び出した。

裕子は、よろけながらもボールに向かっていくが、落下地点まであと数歩というところでこらえきれずに前方へ倒れてしまった。床に胸から激突して、勢い余って逆エビのような体勢になったところ、その足の裏に、落下して来たボールが当たった。

飛び出した橋本多恵、紙一重の差で間に合わなかった。彼女の頭上を、山野裕子が蹴り上げたボールが飛んでいく。

柀の上を大きく越えていくかに見えたボールは、突如ドライブがかかったように急失速急降下。ワンバウンドし、無人のゴールに突き刺さった。

佐原南 2-1 八街富士見台

後半三分。佐原南は山野裕子のゴールにより八街富士見台を突き放した。

「うしゃあああ！」

飛び起きるや、片手を天に突き上げて叫ぶ裕子。

「王子、やったあ！」

篠亜由美が走り寄って来た。二人はハイタッチをかわした。

武田晶も近づいてきた。

「王子、前から必殺技欲しいって言ってたけど、出来てよかったじゃん。しゃちほこドライブシュート」

晶は面白いのか面白くないのか、無表情のままそういった。

隣の生山里子は、技名がツボにはまったか腹をかかえて大笑い。

「やだよそんなみつともない！ ギャラクシーとかプラズマとかソニックとかそんなんじゃないやだ！」

「出来ちゃったものはしょうがないですよ、王子先輩。もう一点取って、試合決めちゃってくださいよ。……しゃちほこドライブシュートで」

「うるせええええええ！　いまの得点、取り消すぞ！」

裕子は里子の首をしめ揺さぶりながら叫んだ。

「試合再開出来ないから、早く位置について！」

タイムキーパーに叱られてしまった。

裕子と里子は首をすくめて謝った。

八街富士見台のキックオフで試合再開。

まだ一点差。裕子は気を引きしめなおした。

佐原南、選手交替。

篠亜由美　アウト　衣笠春奈　イン

そして、その一分後に、さらに選手交替。

山野裕子　アウト　真砂茂美　イン

佐治ケ江優　アウト　梶尾花香　イン

八街富士見台の選手は点の取れないことに焦り出したか、荒っぽいプレーが増えてきた。

後半九分、花香がボールを受けた瞬間、肩をぶつけられて転ばされてしまった。

直接FK対象のファールがすでに五つを超えているため、佐原南には第二PKが与えられた。

キッカーは衣笠春奈。

春奈は第二ペナルティマークにボールを置いた。

彼女は、去年の関サル地区予選でのことを思い出していた。入部して間もないというのに、ゴレイロとして登録され、途中出場をした。決定的な人手不足で選手が全員疲れていたため、ゴレイロの武田晶をFPとして使うことになったためだ。直前にゴレイロとしての教育は受けたものの、せいぜいルールを覚えたに過ぎず、みっともなくばたばたしたプレーを見せた挙句、第二PKを決められて失点してしまったのだ。

今度は逆に、第二PKを蹴るほうか。

春奈は深呼吸。

ゆっくりと、助走を始めた。

蹴った。

す、と筆で線を引くようにボールは真っ直ぐと伸びる。橋本多恵は片手を当てて弾いた。小さく舞い上がったボール、慌てて処理を間違えたか、両手でキャッチしようとして自分でゴールへと押し込んでしまった。

連続得点に喜ぶ佐原南の選手たち。

佐原南 3―1 八街富士見台

八街富士見台としては、倉本慶子をFPにする攻めの姿勢が、完全に裏目に出てしまった格好だ。倉本慶子はFPとしても優秀だが、ゴレイロとしてはさらに優秀な選手であるのだから。このようなミスは、決してしなかっただろう。

くやしがる橋本多恵。申し訳なさそうに深く頭を下げる彼女を、榎木恵美と倉本慶子は励まし慰めている。

佐原南、選手交替。

生山里子 アウト 九頭葉月 イン

「残り、しっかり守るぞ」

葉月投入により、現在のFPは、九頭葉月、衣笠春奈、梶尾花香、真砂茂美の四人。個人で仕掛けるような選手がいないので、攻撃面での怖さはない。ただ、丁寧なパスを回していくことが目的ならば、これ以上のメンバーはないだろう。

しかし、茂美の体力温存もしたい。試合時間はあと数分ではあるが、その数分でヘトヘトになってしまいうのがフットサルなのだから。後半十一分、裕子は、茂美も交替させることにした。

真砂茂美 アウト 梨本咲 イン

武田晶はゴレイロのシャツの上から、FPのシャツを着た。

「任せたよ、咲」

残り時間四分、八街富士見台の選手たちは失点の危険も恐れず、果敢に上がってくる。あと二点取れば、延長戦に持ち込むことが出来る。

佐原南にはリードしているという心理的余裕はなく、八街富士見

台にも諦めた様子はまったく残り体力を振り絞って怒涛のプレスを仕掛けていく。

激闘と呼んでも過言ではない、気力と気力のぶつけあい、二階観客席はいっしょかしんとなっていた。

残り時間と得点差、どう考えても有利なのは佐原南だ。しかし、八街富士見台に一点入ったら、どう転がるかが分からない。むしろ立て続けの得点で一瞬で逆転しそうな気さえする。観る者にそう感じさせるような、そんな気迫に満ちた戦いが眼下のピッチ上で行われているのだ。

注目すべきは、晶と倉本慶子とのマッチアップだろう。二人の正ゴレイロが、FPのユニフォームを着て戦っているのだから。

前半にもゴレイロ同士攻め上がって対峙した二人、そのときは晶が見事にボールを奪うことが出来たが、基本的な足元の技術はほぼ互角なようだ。今度は倉本慶子が、晶からボールを奪っていた。そして、一瞬の迷いもなく、次の行動へ移っていた。長身ピヴォの南山恵美子を目掛け、ハイボールのアーリークロスを上げた。

南山恵美子は高く跳んでいた。倉本慶子からの絶妙な高さ絶妙なタイミングのクロスボールに、思い切り頭を叩きつけた。いや、一瞬前までそこに存在していたはずのボールが不意に消失し、彼女のヘディングは単に空気をこすただけだった。

飛び出した咲が跳躍し、ボールをキャッチしていたのだ。

そして着地。バランスを崩してペナルティエリアを踏み越えてしまいそうになるのを、ぐっと我慢して、晶へとボールを転がした。

「ナイスキャッチ、咲！」

晶は咲からのボールを受けた。

しかし、咲にあんなジャンプ力があるなんて。凄いな。あたしより、ずっと高いや。……やっぱりもう少しダイエツトしないとダメかな。ボールを受けながら、晶はそんなことを考えていた。

倉本慶子のなりふり構わぬ突進振りが視界に入り、晶は気を引き締める。突進をぎりぎりまで引きつけ、春奈へとパスを出した。

春奈は、晶からのボールを受けた。と、その瞬間、永台不美江が肩からぶつかってきた。タックルというよりボールを奪おうとして、身体を止められずに当たってしまった格好だ。

春奈は足をぐらつかせながらも持ちこたえようと、反対に、永台不美江を肩で弾き飛ばしていた。

笛が吹かれた。

春奈にイエローカードが出された。

「どうした、春奈？」

裕子は心配そうな表情で尋ねた。

「ごめん」

やり返してさえないなければ、永台不美江のほうにこそカードが出たかも知れない。そうなっていれば、二枚目で退場だったのに。

やっぱり子供だなあ、あたしはまだ。お父さんが心配するのも当然だ。春奈は苦笑した。

自分は、身体が弱かった頃の自分じゃない。お父さんが心配するような、弱い自分じゃない。常々思っていた、父親とのいざこざの原因となっていたその気持ち、先日和解したはずなのに、まだ心の奥でくすぶっていて、相手と激しくぶつかり合ったことで瞬間的に心の表層に浮かび上がって反撃をしてしまったのだ。

荒っぽいことすれば強いってわけじゃないのに……。ほんと、バカみたいだ。反省しないと。

お父さん、急に今日、仕事が入って、来られなくなってしまったけど、来られなくてよかったよ。こんなみっともないプレー、見せずに済んで。

直接FK対象のファール、これで後半六つ目だ。

八街富士見台は、第二PKを選択した。

キッカーは主将の榎木恵美。第二ペナルティマークに、ゆっくりとボールを置いた。

ゴール前では佐原南のゴレイロ、梨本咲が構えている。笛が鳴った。

榎木恵美は短く助走し、そしてトゥーキックで足を振りぬいた。ボールは弾丸のごとき速度でぐんと真っ直ぐ伸び、ゴールへと迫る。

右上隅へと突き刺さろうかという、まさにその瞬間、咲はパンチで弾いていた。

ボールはゴールラインを越え、今度は八街富士見台のCK、キッカーは再び榎木恵美だ。

佐原南は裕子の示した対策法通り、長身の南山恵美子を警戒して壁を作った。だが、八街富士見台主将の蹴ったボールは予想に反し、低くて速い。九頭葉月と武田晶の間をボールは突きぬけ、そこに横川智佐が飛び込み、ヘディングシュートを狙う。頭で合わせられるその直前に、飛び出した咲が倒れこみながらキャッチしていた。

だが、しっかりと掴めておらず、倒れ込んだ衝撃でボールをこぼしてしまった。

横川智佐はそこを逃さずボールにさっと走り寄り、蹴った。

咲は倒れた姿勢のまま、横川智佐のシュートボールを真上に蹴り上げていた。落下して来るボールを狙って南山恵美子が走り込んで来たが、咲は素早く起き上がると高くジャンプして、今度はしっかりとボールを両手で掴んだ。

「咲、サンキュー！」

ピッチの外から、裕子が叫んだ。

いまの一連の守備、普通に考えてファインプレーと呼んで差し支えないものだろう。咲は自身がそんなプレーを連発したことに、なんだか気持ちのよい、くすぐったいものを感じたが、恥ずかしくて顔には出さなかった。

咲のゴールクリアランス。

晶はボールを受けると、すぐさま長い浮き球を前線へと送った。

葉月が胸で受けて落とす。しかし、油断していたかゴレイロの橋本多恵に後ろから忍び寄られてボールを奪われてしまった。

今度は橋本多恵がロングボールを佐原南陣地へと送った。

晶は瞬間的に落下地点を計算すると、その場へと走り出した。狙いドンピシャ、と、ボールを胸でトラップ。だが、その刹那、横川智佐に突き飛ばされて、転ばされ、ボールを奪われてしまった。

笛は鳴らなかった。審判からはよく見えず、晶が勝手にもつれただけでも取られたのだろうか。

横川智佐から榎木恵美、矢野麻衣子へとワンタッチでパスが繋がっていく。

完全に佐原南守備陣を置き去りにした矢野麻衣子、シュート体勢に入った。だがその瞬間、スライディングしてきた咲がボールを弾き飛ばしていた。

ボールはタッチラインを割り、二階の客席へと飛んでいった。咲は立ち上がるや拳を作って叫んだ。自身に、気合を入れた。

いまのこの攻撃が、八街富士見台最後の決定機だった。佐原南のパス回しが安定してきたのだ。簡単には八街富士見台へとボールは渡らなくなった。パス回しといっても、後方での引きこもったものではない。前線で回す。前線へと送る。隙あらば得点を狙う。はっきりと攻撃の意図を持ったパス回しだ。守備は攻撃、攻撃は守備。木村梨乃先輩がよくいっていた言葉。佐原南のチームプレーは、いままさにその言葉を体現していた。

ポストプレーでボールを持った葉月。ぴったり背中に密着した中井真子が、強引に身体を入れようとして来た。膝が、葉月の腿に激しく当たってしまい、葉月は前に倒れた。痛みに腿を押さえた。

長い笛が鳴った。

ファールを取った笛ではない。

試合終了の、そして佐原南の勝利を告げる笛の音だった。

客席から、歓声が上がリ、拍手が起きた。

葉月はゆっくりと立ち上がった。

客席から、葉月のお父さんがドンドンと太鼓をかき鳴らしている。

「葉月ィ、やったあ、勝ったあ！ 佐原南ィ！ 葉月〜！」

葉月はため息をついた。

「ほんと、恥ずかしいなあ。あたし、なんにも役立ってないのに」
「謙遜すんなよ。葉月のピヴォ、とても安定していたし、なにより先制点で均衡破ったの葉月じゃなか。相手、茂原藤ヶ谷から大量点奪ってんだよ、あの時間に先制出来てなかったら、焦りからうちらもボロボロにやられていたかも知れないんだから」

裕子は葉月の身体を引き寄せると、背中に手を回して軽く叩いた。
「みんな、こっち集まれ」

裕子は叫んだ。

佐原南の選手全員、輪になって手を繋ぐと、裕子の音頭で勝どきをあげた。

「全員で掴んだ勝利だ。この勢いで、決勝大会、優勝すっぞ！」

裕子は右拳を高く突き上げた。

4

「みんな、本当に凄いよ。ここまで勝ち上がったちゃうなんて」
木村梨乃は二階客席の一番前に来て、柵の下の頼もしい後輩たちと話をしている。

「梨乃先輩たちが育てたチームですよ」

裕子、鼻の頭をかいた。

「王子、ここまで来たからにや、千葉県どうこうなんて、ちんけなことってないで関サル制覇しちまいなよ」

梨乃の隣、浜虫久樹先輩がいった。

「あったりまえでしょ。狙うは宇宙制覇ですよ」

裕子は力強くブイサインを突き出した。

「じゃ、あたしたち、西館に先いつてるから。最後の一戦、相手がどこになろうと自分たちを信じるだけだよ」

梨乃は小さくガッツポーズを作り、去っていった。

「なんかさあ、ポーズのひとつひとつが可愛らしくなったよな、先輩。絶対あれ春奈の影響受けてるよ」

「影響受けてるものにも、まえ一緒に原宿いったとき、尋ねられた

もん。どうすれば女の子っぽい仕草になるか」

春奈の言葉に、裕子は口に含んだスポーツドリンクを吹き出した。

「おい……」

直撃を食らった武田晶。顔面ビショ濡れ。

「あ、ごめんね。……んじゃ、あたしらも荷物まとめて、移動しよつか。晶、ちゃんと足元拭いとけよ」

「わけ分かんないし」

ぶつぶついいながらも、床を拭き始める。

八街富士見台の主将、榎木恵美が近づいて来た。身支度が終わったように、ジャージ姿で、スポーツバッグを手をしている。

「決勝進出おめでとう」

彼女は、裕子の前に立つと、晴れやかな顔でそういった。

「ありがとう」

裕子は応えた。

「次の試合、絶対に勝ってよね。せめて、無様な負け方はしないでよね。あたしらの立場なくなる」

「大丈夫。勝つ！」

裕子は拳を突き出した。

「佐原南、話に聞いていた以上に素晴らしいチームだった。……また、戦いたいな」

「こっちこそ、驚くことばかりで。勉強させられた。戦ってて、ほんと面白かった。……また、どこかで対戦しよう」

二人、どちらからともなく手を伸ばし、握手をかわした。

裕子たちは、西館への移動を始めた。顧問の北岡先生のとれてれ歩きにみんな我慢出来ず、先にいってしまい、また佐治ヶ江が一人残って先生に付き添うことになった。

さて、西館へと到着して、こちらでの試合結果を知ったわけだが、勝ち上がったのは、やはりというべきか我孫子東。二試合とも、無失点で圧勝したらしい。

試合時間が重ならないようならばこの西館で我孫子東の試合も観

ておきたかったのだが、残念ながら二試合とも同時時間になってしまい、叶わなかった。

ここで、いったいどんな試合が行われていたのだろう。

我孫子東は、二試合とも無失点らしい。二戦目の相手は、初戦で大量得点をした超攻撃型のチームだというのに。

そりゃ強ければ失点もしないだろうし、強ければたくさん点も取れるだろう。我孫子東のほうが強かった。ただそれだけだ。裕子はそう思うものの、やはりなんともいえない気味の悪さを感じずにはいられなかった。

我孫子東の選手たちは、すでに次の試合に向けてストレッチを行っている。裕子は彼女らに向かって小走りで近づいていった。

主将の中島祥子がストレッチをやめ、立ち上がった。裕子と向かい合った。

中島祥子は身長百六十九センチ、すらりとした体躯だが、よく見るとしっかりと全身にバランスよく筋肉がついているのが分かる。「うちみたいな、強豪でもなんでもないのがいうのもおこがましいけどさ、悔いのないよう全力で戦おう」

裕子は手を出した。

「分かった。……お互いにとって、いい試合になるように」

中島祥子も手を出すと、裕子の手を強く握った。

「そんじゃあね！」

裕子は走り出し、振り返りながら手を振った。

「決勝に残ってんだから、そっちだってもう強豪でしょうに」

中島祥子はそう呟くと、苦笑した。

「一番当たりたくないということ当たることになっちゃったねえ、祥子」
副部長の寺崎詩緒里は床の上で股関節ストレッチをしながら中島祥子を見上げた。

「そうなんだよなあ。佐治ヶ江優みたいな天才を抱えているし、ゴレイロも反応が物凄いし。それにあそこ、なにをやってくるか分か

んないんだよね。ほんと不気味なチームだよ」

中島祥子は髪の毛をかき上げた。

佐原南と公式戦を行ったことは一度もない。だが、他校との対戦によるデータはしっかり収集しているし、練習試合でなら何度か対戦もしている。

一番読めないのが、あの山野裕子だ。体力だけの選手にも思えるが、しかし彼女には底知れない怖さを感じる。

それは、単に自分の苦い記憶から来る錯覚かも知れない。去年行った佐原南との練習試合でこちらが圧勝したのだが、一点だけ、奪われてしまった。その、佐原南の唯一の得点者が山野裕子だった。中島祥子をフェイントで抜いてのゴールだ。荒っぽいだけの選手だと相手を舐めた結果、奇麗にぶち抜かれ、無様に失点したのだ。

山野裕子には、そんな記憶はまったくないかも知れない。だが中島祥子には忘れられない記憶だ。侮った相手にやられてしまった悔しさ、恥ずかしさ、それがあつたから猛烈に練習に打ち込み、レギュラーの座を不動のものにし、そして部長になったのだから。

我孫子東の主将にそこまで意識されているとは、つゆも知らずの山野裕子、

「よっしゃ、我孫子東に負けちゃいけない、うちらもストレッチ始めるよ！」

「ストレッチで戦つてもしょうがないだろ」

「ストレッチを制する者は世界を制するのじゃい」

裕子は、晶の小言に個性的なようなそうでないような創作格言を返すと、ジャージを脱いでユニフォーム姿になった。

だんだんと、二階観客席の見物人が増えて来た。東館から移って来た人たちや、前の試合に負けてしまった部員たちの分、増加しているのだ。それと、千葉代表を決める最後の試合だけを観たいという新規の観客。

佐原南の選手全員、裕子と晶を先頭に二列縦隊を作り、ストレッチ

チを開始した。ゆっくりと前進しながら、足を高く上げ、腕を振り、肩を回し、腰を捻る。

「よくほぐしとけよう。足りないよ、いきなり走り出して腿の裏ブツチンってなっちゃったりするぞー」

「ストレッチ大事なの分かるけど、もう二試合やってんだから、そんなになるわけないじゃん」

晶はぼそりといった。

「晶ちゃん」裕子はこの微笑みながら、晶の肩を掴んだ。「いちいちうるせえ!」

容赦ない頭突きに、ゴツと鈍い音が響いた。

「悪いことってんじゃねえんだから、黙ってろや!」

「頭突きすることないじゃんか! 石頭!」

と、お腹に肘鉄で仕返し。

「いつてえ! 空手有段者が人を攻撃しちゃいけないんだぞ。逮捕されるぞ」

「そっちが先にくだらないことで攻撃してきたんじゃないか」

「くだらないなら黙っててくださあい」

「そしたら頭突きのやられ損でしょが」

「あのお、先輩たち、我孫子東の人たちが口あんぐりさせてこっち見てるんですけど」

花香の言葉に、二人ははじめてなんともいえない気配に包まれていることに気が付いた。我孫子東選手と顧問、二十六の瞳が、すべて裕子と晶とに集中していたのだ。

「……作戦作戦。油断させるため」

裕子は、手のひらをぱたと上下に振った。

「作戦じゃない! そんなんで頭突きしてくんなよ!」

「しっこつ。男っぽくねえな」

「男じゃないし。……もういいや、こんなバカほつとこ」

グダグダの先頭二人以外はしっかりとストレッチで身体を仕上げ、続いてボールを使って軽いパス練習を行った。その後、もう一度軽

くストレッチ。

そして裕子の前にみんな集まり、作戦会議を開始した。

我孫子東の選手たちは、誰もがすべての能力においてこの年代の平均値を上回っている。誰がどうで、といちいち気にすると、いらぬ混乱を招く可能性がある。ただやはり、その中でも、注意すべき選手はおり、裕子はそのような選手らの特徴を挙げていった。

「まず、背番号1。ゴレイロの田中姫子。反射神経なら晶のほうが上だと思うけど、フットサル経験が長く、素早い読みでとにかく堅実にゴールを守ってくる。ブロックして体に当てたボールは、まず取りこぼさない。それと、背番号4、林原かなえ。今朝、駅でにやにや笑ってたおチビちゃんだ。一年生だけど、とにかくすばしくて、足元の技術も高い、馬力あるから小さいからと舐めないように。次、背番号5、中島祥子。俊敏さは林原かなえには少し劣るけど、とにかく万能で全ての能力が異常に高い。ボールキープされたら、一人ではまず奪えないから、すぐにパスさせるように二人で追い込もう。背番号8、金本陽子、俊足をいかしてかく乱してくるから惑わされないように。9番の羽場繁子とどっちがピヴォで出るかで、チーム戦術変わってくるから。羽場繁子は一年だけど百六十八の長身で、さっきの八街富士見台みたいに高さ活かした戦術を織り交ぜてくるから。……とりあえず、こんなとこかな。で、うちのスタメンだけど、ピヴォが里子、右アラがサジ、左があたし、茂美ベツキ、あと晶で。単純に考えてこれが最強メンバーかなと思うからね。でも体力がもつわけないし、様子見ながら回していく。本当は経験ある二年中心に回したいけど、控えて出られるのが春奈だけだし、一年生もどんどん使っていくからね」

「ごめんね、みんな」

篠亜由美、悔しそうな表情。二試合連続で警告を受けたため、警告累積でこの試合に出られないのだ。

「しょうがないって。その分、応援で盛り上げてよ」

亜由美は王子の言葉に頷いた。

佐原南の選手、全員で肩を組み、円陣を組んだ。

「よっしゃ。佐原南、勝つぞ！」

「おう！」

裕子の言葉に、全員が気持ちをひとつにして、叫んだ。

「全魂全走！」

「おう！」

円陣を解除すると、スタメンの選手は一人ずつピッチへと入っていく。

生山里子。

佐治ヶ江優。

山野裕子。

真砂茂美。

武田晶。

我孫子東の選手たちも、ピッチに入ってきた。

田中姫子、水島茜、中島祥子、寺崎詩緒里、金本陽子。

ピッチ上の十人は、それぞれの思いを胸に抱き、それぞれのポジションへとついた。

どくん。

裕子は、左胸に手を当てた。

どくん。

普段と変わらない心臓の鼓動。なのになんで、こんなにはっきりと聞こえてくるのだろうか。

緊張、しているのだろうか。

反対側サイドにいる佐治ヶ江を見る。彼女はまっすぐ立ったまま、前方を見つめている。

佐治ヶ江は裕子が見ていることに気付いたようだ。目があった途端、何故か裕子は慌てて視線をそらしてしまった。

裕子は鼻の頭をかきながら、口元に小さな笑みを浮かべた。

どくん。

どくん。

胸の鼓動は相変わらずだけど、でもちよつとだけ、それが心地よいものに見えるようになった。

審判が笛を口にくわえた。

試合は佐原南ボールのキックオフで開始される。

ピヴォの生山里子は、右足底でボールをおさえ、笛が鳴るのを待っている。

そして、笛が鳴った。

キックオフ。

里子はボールを蹴った。

5

寄せが早い。

裕子は右サイドで里子からのパスを受けると、すぐにドリブルに入ろうとしたが、その瞬間にはすでに金本陽子と中島祥子の二人に詰め寄られていた。距離を充分に取って、動きながら受けたはずなのに……まるで魔術を見ているかのようだ。

裕子は前を向くことが出来ず、自陣へとドリブル。そしてベツキの真砂茂美へとパスを出した。後ろへ出すのは不本意ではあるが、ボールをキープしないことには話にならない。

茂美からのパス、佐治ヶ江へ。そして、逆サイドの裕子へ。裕子はワンタッチで前方の生山里子へと出していた。だが、里子へは届かなかった。素早く駆け上がって来たベツキの水島茜にカットされていた。

里子は水島茜を全力で追いかけ、そして追い抜いた。しかし、水島茜の足元に、すでにボールはなかった。まさかと思い、後ろを振り返る。ボールを持っているのは中島祥子だった。先ほど二人が擦れ違ったときにパス交換をして保持者が入れ替わっていたのだ。全然見えなかった。里子は再び駆け戻る。

中島祥子は里子の突進をぎりぎりまで引き付けて、そしてボールを蹴った。里子の頭上を越えるループパス、奇麗に水島茜へ渡った。

あたし、バカにされている……

里子は自分の顔がカツと熱くなるのを感じていた。

水島茜はドリブルで前へ上がる。

裕子が正面からボールを奪おうとするが、素早いステップに翻弄されて、簡単に抜かれてしまった。

我孫子東の俊足ピヴォ金本陽子は、ベツキの真砂茂美から少し離れた位置に下がってマークをずらしたと思いきや、その瞬間、持ち前の瞬発力でサイドを駆け上がり、水島茜からのパスを受け取っていた。そして、ゴール前へとクロスを送った。

ボールは、まるで宙を飛んでいるかの勢いのある速度で、すうっと転がる。ゴール前、四メートル。そこに飛び込んで来ていたのは、中島祥子。迷い無く、振り上げた右足を勢いよく振り抜いてボールに叩きつけていた。一連の見事な連携は、まるで鎌首をもたげた毒蛇が獲物を仕留めるがごとくに見えた。弾丸シュート、佐原南ゴールの右上隅を完全に捉えた。

シュートが決まった。

誰もがそう思ったかも知れない。

だが、ゴレイロの武田晶は神懸りの反応を見せ、パンチングで弾いていた。

ボールはゴールラインを割った。我孫子東のCKだ。

こいつら、強すぎる……

裕子は根性で埋めようのない、絶対的な実力の差を感じていた。

なんだか、向こうのFP、七人も八人もいるように感じる。なんで公立高校の運動部に、こんな化け物みたいなのがうようよいんだよ。ま、とりあえずは、晶のおかげで助かった。

「晶、ありがとう」

「まだCKあるから」

「そうだな。みんな、ここしっかり守るぞ。……あと、里子、あんまり熱くなるな。イライラしてんの、一目で分かる」

「はい」

里子は指摘を受けて、我に返った。自分でもそうかなと思っただけ、それ以上、相当に冷静さを失っていたんだ。気をつけないと。

頭は冷たく、心は熱く。里子は、木村梨乃前部長がよくいった言葉を思い出していた。

中島祥子の蹴ったCKは、晶が飛び出してキャッチした。一見、難なく相手のCKを防いだようにも見えるが、我孫子東の選手たちは位置取りや動き方が非常に巧みであり、失点していてもおかしくなかった。

晶はすぐさまボールを蹴った。もたもたと保持していたら、四秒ルールであつという間に相手ボールになってしまう。

茂美はボールを受けると、佐治ヶ江へ繋ぐ。そこから里子、裕子、再び里子。

里子はフェイクをかけて、するりと水島茜の脇を抜けた。ドリブルしようとしたところで初めて自分の足元にボールがないことに気が付いた。振り返るとちょうど水島茜が金本陽子へと浮き球のロングパスを蹴るところだった。

前線へと抜け出し、中央で、胸トラップでボールを受けた金本陽子。そのまま身体をターンさせ、ボールが床に落ちると同時に、前へと走り出していた。

この無駄のない動きに、茂美は完全に対応に入るのが遅れてしまっていた。

金本陽子はゴールラインまで進むとドリブルの速度を落とし、クロスを送ろうとした。佐原南のゴレイロ、武田晶が大きく飛び出して来ていた。そして、ボールを奪おうとスライディングしてきた。

先日の練習試合でも観させて貰ったけど、このゴレイロ、さすがの判断力だ。それに素晴らしい瞬発力。でもね、

金本陽子はボールを浮かせ、自身も軽く跳躍。晶の攻撃をいとも簡単にかわしていた。そして、あらためてクロス、空中でボールを蹴った。山なりの浮き球、無人の佐原南ゴールへと向かう。

中島祥子がクロスに合わせようと走りこんで来た。彼女のすぐ後ろを茂美が追っている。

眼前に捉えたボール、触れさえすれば間違いなくゴールだ。しかし、そのボールは、中島祥子の視界から不意に消失した。素早く戻った晶が、高く、大きく跳躍しながら、回し蹴りで弾き飛ばしたのだ。

ボールは遠く我孫子東の陣地まで飛び、そこでタッチラインを割った。

晶は審判に、いまのプレーは危険だと注意を受けた。たまたまファールにはならなかったけれども、もし相手に足が当たっていたらレッドカードを出していた、と。

晶は表面上は素直に謝ったが、内心、審判に毒づいていた。

……このくらいやらなきゃ、勝てるわけないでしょ。あっちのほうが圧倒的に強いんだから。

山野裕子は、タイムアウトを申請した。

一般的なフットサルルールでは、前後半それぞれ一回づつタイムアウトを取ることが出来る。

「1―3でいく」

ピッチの外、裕子を中心に佐原南の選手たちが集まっている。裕子は彼女らに、そう短く告げた。

「里子が前。あとは、左からサジ、茂美、あたし。あと、もうそろそろ交替してくから、みんな心の準備しといて」

試合が再開した。

佐原南は、裕子の指示通りのフォーメーションになった。

守備的にいけば守り切れるというものでもないが、守備的にいかなかったら絶対に守り切れない。

裕子はそう判断したのだ。

だが、守備的布陣には大きなリスクも伴う。相手がボールを支配することになり、ゴールに近い位置からどんどんシュートを打たれるためだ。守る側としてはより集中力、体力を使うことになる。

前半六分、佐原南、選手交替。

生山里子 アウト 九頭葉月 イン

佐治ヶ江優 アウト 衣笠春奈 イン

個々技術の総合値は下がることになったが、チームとして、なんとか持ちこたえている。

我孫子東の登録選手数は、ルール上最大の十二人。常にキープレイヤーをピッチ上に残しつつも、二年生を中心にフレッシュな選手を次々と投入してくる。その攻めは、だんだんと激しさを増していく。佐原南は怒濤の攻撃を食い止めるのに精一杯で、どんどんと体力を奪われていく。

ただ荒々しく攻めてくるだけではない。ときに壁を砕くがときの激しさで、ときに包み込むような柔らかさで、巧みな緩急のつけかたで、佐原南の選手たちを心身ともに翻弄していく。

佐原南は、いままで積み上げてきた守備力の土台に加えて、個人の気力、そして運に助けられ、まだなんとか無失点を維持していた。我孫子東はごく普通の公立高校だが、実績が人気を呼び、女子フットサル部への入部希望者が多い。わざわざフットサルのために入学する者もいる。三年生が引退したというのに、まだ三十人強の部員がいる。現在ピッチに立っている彼女らは、そんな中から選ばれたのだ。強いのは当然だ。

そんな我孫子東に勝つには、どうすればいいか。

普通に戦わなければいいのだ。ガチンコで勝てるはずないことなど、とつくに分かっているのだから。

裕子は、さらに選手交替の支持を出した。

山野裕子 アウト 梶尾花香 イン

真砂茂美 アウト 梨本咲 イン

武田晶は、ピッチの外の里子からFPのユニフォームを手渡され、素早く着込んだ。先ほどまで茂美が守っていた、最後列中央の位置についた。

晶に替わって、梨本咲がゴレイロとして入った。

「頼むよみんな。ここでもどこまで持ちこたえられるか、すべてはそこにかかってくるんだから」

交替でピッチの外に出た裕子は、誰にともなく呟いた。

「王子、ほんとごめんね」

現在の面子を、後半に備えての主力温存策と見た篠亜由美は、警告累積でこの試合に出られないことをあらためて謝ってきた。

「だから、謝る必要なんてないんだって。頑張っちゃったからカードを貰っちゃっただけ」

「……ありがと。じゃ、精一杯応援しますか。この試合に勝てば、まだ次があるんだしね」

勝てば次は代々木で都県代表同士、関東一を決定する試合が待っているのだ。

あと一勝するだけで、その大会に出ることが出来る。

亜由美は声を張り上げ、ピッチ上で頑張る仲間を応援し始めた。

応援が届いているのかいないのか、圧倒的な我孫子東ペースは変わらない。佐原南は防戦一方のままである。

でも、目的は防戦なんだ。みんな、よくやってる。相当に奮戦している。裕子は手に汗握りながらも、少なからずの手ごたえを感じ始めていた。

我孫子東は、ピヴォを金本陽子から羽場繁子へと交替させて来た。佐原南が引き気味の布陣を敷いたため、俊足を活かして掻きまわすスペースがなくなったからだろう。背が高く、足元の技術のしつかりした選手を投入してきたのだ。

さっそく選手交替の成果が出た。羽場繁子のポストプレーから、寺崎詩緒里が飛び出し、迷いの無いシュートを放った。

ボールは咲の肩に当たり、床に落ちた。

羽場繁子は、重戦車のごとき突撃で、こぼれを押し込もうと迫る。咲がボールを拾うべきか蹴り飛ばすべきか躊躇したその一瞬の隙に、すでにボールは奪われていた。

羽場繁子は真横へのステップで咲をかわした。無人のゴールへ流

し込むだけ。落ち着いて、ボールを蹴った。しかし、我孫子東のゴールはならなかった。羽場繁子がボールを蹴ると同時に、佐原南の武田晶も真横からボールを蹴っていたのだ。

ボールはシュートにもクリアにもならず、小さく跳ね上がり、転がり落ちた。羽場繁子が俊敏な反応を見せ、ボールに近寄る。

間一髪、咲は床に這うようにしてボールに食らいつき、覆いかぶさった。

咲は、胸の中のボールの感触をしっかりと確かめると、ゆっくりと立ち上がった。

かろうじてゴールを死守した佐原南。だが、試練はこんなものでは終わらなかった。

審判の笛が吹かれた。

「四秒」

審判は親指だけ折り曲げた四本指の手を作り、高く上げた。

咲は青ざめた顔で、自分の両手の中にあるボールを見た。

フットサルは、スピーディな展開のため、また守備的プレー抑止のためのルールがいくつかあり、四秒ルールもその一つ。自陣で四秒以上、ボールをキープしてはならない。従ってゴレイロがボールを抑えたあとも、四秒以内にそのボールを手放さなければならない。咲はそのルールに違反してしまったのである。

ゴール近くで、我孫子東に間接FKを与えることになってしまった。

キッカーは中島祥子。彼女はゆっくりとボールをセットした。

佐原南のゴール近くで、相手ゴレイロを抜いた九人の選手がひしめき合う。

葉月や春奈など、痩せぎすな体型ばかりの佐原南に比べ、我孫子東はみながっちりした肉体をしており、このように並ぶとその迫力の違いは一目瞭然だった。

中島祥子はボールに向かって助走、強く蹴ると見せかけて、インサイドキックで床の上を転がした。

晶を押しのけるように飛び出してボールを受けた水島茜は、ヒールで角度を変えて、後ろの羽場繁子へとパス。羽場繁子はノートラップでシュートを放った。

鈍い音を立て、ボールは咲の顔面を直撃していた。

ぽろりと落ちるボール、咲は大きく蹴飛ばした。

「咲、サンキュ」

晶は、ボールを追って走り出した。

咲はとりあえずの危機を脱すると、「いってえ」と顔を押しさえ、しゃがみ込んだ。激しく脳を揺さぶられたか、頭がふらふらする。

晶と寺崎詩緒里とが、ボールを目掛けて競争になった。わずかながら、晶のほうが足が速かった。タッチラインぎりぎり、ボールが落下したと同時に、そのままドリブルに入っていた。前方には相手ゴレイロだけ。またとないカウンターチャンスだ。

晶はボールを大きく蹴り、全力でボールを追いかける。中島祥子と水島茜が、晶のあとを追って走る。

横目に、駆け上がってくる葉月の姿が見えた。晶は瞬時に二つの選択肢を考えていた。相手も守備に戻ってきてしまうというリスクを承知で、中央に切り込んで、葉月と二人で攻撃するべきか。このままクロスボールを送り、葉月に託すべきか。そして、後者を選択した。葉月とゴールネットとの間を目掛け、浅い角度からクロスを送った。転がすつもりだったのだが、つい上げてしまった。

ゴレイロの田中姫子が飛び出して来た。

葉月も足の回転を加速させて落下地点へと迫ると、急ブレーキ、振り返って田中姫子を背負い、胸でボールを受けた。それを腿で少し横に蹴り上げると、ボールを追うように素早く反転してボレーシュートを放った。

葉月のシュートは無人のゴールネットへ突き刺さるかに見えたが、運悪く、ポストに当たり、跳ね返った。

佐原南の初シュートは、惜しくもゴールはならなかったが、その素晴らしいプレーに観客席がどっと沸いた。

ドンドンドンドン、と太鼓の音。

跳ね返ったボールは、田中姫子がしっかりとキャッチした。

「葉月、よかったよ！」

裕子が叫んだ。

田中姫子の投げたボールを追い、走り出す葉月。

「運に助けられただけ。いま失点してたよ！ 真面目にやれ！」

中島祥子が怒声をあげた。

その言葉の効果かは分からない。単に時間経過とともにエンジンがかかってきただけでも知れない。とにかく、我孫子東のパスが、これまで以上に繋がるようになってきた。ボールとともに人間も動き、F P 四人が連動して、どんどん佐原南ゴールへと突き進んでくる。

春奈、晶、葉月、花香、咲は必死に弾き、防ぎ、掻き出す。しかし、我孫子東の攻撃を弾いても弾いても、次の瞬間にはもう佐原南の陣地へと攻め込んで来る。怒濤を越えた攻撃はとどまるところを知らず、何故これまで無失点に防げているのか、佐原南の選手たち自身にも不思議なくらいだった。

咲がかりうじてクリアしたボール、その落下点目指して素早く駆け上がった晶。ボールを足元に収めたはいいが、我孫子東の激しいプレスにパスの出どころを考える一瞬の隙すら与えてもらえなかった。

寺崎詩緒里の突進を、晶はなんとかかわしたつもりだったが、直後、ボールを失ったことに気付いた。

ボールを奪った寺崎詩緒里は、勢いよくドリブルで攻め上がる。花香がなんとか食い止めようと頑張るが、中島祥子とのワンツーで翻弄された。花香はファール覚悟で寺崎詩緒里の前に体を入れたが、弾き飛ばされてしまった。もともと花香のファールであったためか笛も吹かれない。

ほとんど寺崎詩緒里一人の個人技で、佐原南守備陣を突破した。佐原南の守備は、もうゴレイロの咲しかない。

対して我孫子東は寺崎詩緒里に、並走する中島祥子の二人。

ゴールまでの距離は、約二メートル。

咲は寺崎詩緒里へ向かって飛び出した。しかし次の瞬間、ボールは中島祥子へと渡っていた。

実は咲は、それを読んでいた。読んでいたというより、自らの行動によりパスを出すように誘導したのだ。飛び出したその瞬間に中島祥子へと方向を変えた咲は、パスが中島祥子へと渡った瞬間、そのボールを弾こうとスライディングを仕掛けていた。

だが……咲にとっては一手二手先を読んでのバクチだったが、中島祥子にとってはその行動は常に予測している選択肢の一つでしかなかった。冷静に、ジャンプしながらボールを浮かせると、空中で小さく足を出し、再び寺崎詩緒里へとボールを戻していた。

咲の真上を、中島祥子が飛び越えていく。

咲は倒れたまま、顔をゴールのほうへと傾けた。

無人のゴールの前で寺崎詩緒里は、浮き球パスを右足で軽く押し込んだ。

ゴールネットが揺れた。

そして、前半終了の笛が鳴った。

6

「ごめんなさい。防げなかった」

ハーフタイム。

咲は申し訳なさそうな表情で、首をたれた。

「あたしがまずい場所で奪われたからだよ。咲のせいじゃあない」
晶は、咲の肩を叩いた。

それを見ていた山野裕子は突然、梶尾花香の口をおさえた。花香、もごもごいいながらもがき、裕子の手を振り解いた。

「なにすんですか、王子先輩！」

「いや、この流れからしてハナも、あたしが弾き飛ばされたのが悪いんです、なんていうに違いないと思って。晶、咲、反省会は、

試合が終わってからやれって。失点なんてソーターの範囲内。途中からほとんど一年生だったのに、これだけやれりゃあ上出来だよ。向こうさんがこれまでの試合で何点取ってきたか考えてみな。まだ前半終わったばかりとはいえ、一失点しかしてないんだよ。試合がはじまったときはさ、やっぱりこいつら強え、何点取られるんだよ、なんて不安に思っちゃったけど、ところが前半過ぎてみりゃあこの結果。本当に、たいしたもんだよ。咲、よく頑張ってる。ハナも、葉月も。みんな、自信もっていいんだから」

そう一気に喋ると、裕子は呼吸を整えた。

みんなの表情が少しだけ明るくなったのを確認すると、裕子は続けた。

「それじゃ、後半戦だけど、すぐメンバー入れ替えるから。里子、サジ、あたし、茂美、晶で。フォーメーションはダイヤモンド……でも、もしかしたら、途中からイプシロンにするかも」

「そんなの、練習でやったことない」

佐治ケ江が、不安そうな表情を浮かべた。

「面白そう」

里子是对象的に、笑みを浮かべている。

「あと、里子とサジは交替せず、最後まで出て貰うから。里子は体力あるから平気だろ」

「あたしはいいですけど、サジ先輩が死んじゃう」

佐治ケ江の体力がないのは、誰もが知るところである。

「死んだら、他にも選手いるから」

裕子は冷めた顔で淡々と、そういった。

「王子がやれというなら、やるよ」

佐治ケ江は頷いた。

裕子にはにんまりとした笑みを浮かべた。

「これまでの二試合、サジをどんどん出せば、もっと楽に戦えたかも知れない。そうしなかったのは、他のみんなを信じていたのもあるけど、本当は、こうなることを考えていたから。もしも勝ち上が

ったならば、相手は我孫子東になるだろう。サジを最大限に活用しないと絶対に勝てない。だから、あまり疲労しないように温存した。……それと、強くなりたいというサジの気持ちを聞いたから、なおのこと、サジには我孫子東と思う存分に戦って欲しいと思った。死ぬ気で、戦って欲しいと思った。そういう個人的な感情で試合をどうこうするの、みんなには申し訳ない気持ちもあるけど」

「ありがとう、王子」

佐治ケ江の感謝の言葉、その表情、視線を受けて、何故だか裕子は胸がどきっとした。

うわ、なんだこのどきどき、こ、これってひょっとして恋？ バカバカ、サジは友達、友達、友達、友達。つか、サジは女だろが！「ま、まあ、そ、それが決勝大会突破のための最善の策とも思ってたしさ。……それじゃ、後半は一人一人がもうちょっと素早い判断で、ボールを回してこう。それには、チームメートを思いやること。あたしの大好きな言葉にこんながある、ひとりはひとりのために！ えっと、あとなんだっけ？」

「あともなにも、出だしから間違ってたんだけど。知らない言葉使うなよ、バカのくせに」

晶の容赦ない突っ込み。

裕子がこんな調子でグダグダなトークをしている間にハーフタイムも終了。

佐原南は、勝とうと負けようと決勝大会最後となる円陣を組んだ。我孫子東のキックオフで、後半戦がスタートした。

佐原南は次々と選手交替を行い、裕子の指示通りに、ピヴォ里子、左アラ裕子、右アラ佐治ケ江、ベッキ茂美、ゴレイロ晶、というメンバー構成になった。

後半になっても、我孫子東は前半の勢い衰えず、どんどんパスを回し、右から左から攻めてくる。

佐原南は、陣形や戦術を変更したことと、個人能力の高い選手が入ったことにより、前半ほどには防戦一方の展開ではなくなった。

だが、我孫子東の個人技やチームワークは、やはり一枚上手であり、なかなかボールを奪うことが出来ないし、なんとか奪えても簡単には攻め入る隙を与えてくれない。

相手のパス回しを上手く読んだ茂美が、素早く駆け上がりボールカット。だが、金本陽子の速い寄せに、一瞬もたついてしまい、そして二人はぶつかりあった。茂美はバランスを崩し、床に転がった。笛が鳴った。金本陽子のファールが取られた。

佐原南のFKだ。

茂美は裕子へとゆっくりと歩いて来ると、なにやら耳打ちした。

「ん？　なんだって？」

聞き返したが、もう一度いわれても裕子にはさっぱり聞き取れない。裕子はサイドライン際まで茂美の手を引いていくと、

「亜由美、通訳して」

茂美は、亜由美に向かってなにやら小さく口を開いた。

「いま転ばされたので、足を痛めたって」

「さっさといえよ、もう。……鈴と交替。亜由美、茂美にテーピング頼む」

「分かった」

交替ゾーンより、茂美と鈴が入れ替わった。

「鈴、ベッキだけど大丈夫か？」

「はい、頑張ります」

裕子は、前の試合では鈴とベッキを変わってあげたが、この試合はなるべくならば裕子は前目のポジションにいたい。

佐原南のFKは佐治ヶ江が蹴った。

カクツ、と折れ曲がるように落ちるボール、裕子が頭で合わせようと飛び込んだが、ボールとの間に入り込んだ中島祥子にクリアされてしまった。

試合の流れは膠着状態になった。一進一退ではない。誰が見ても、我孫子東は佐原南を圧倒している。我孫子東、誰もが優れた個人技を持っており、チームとしても、非常に洗練された戦術が充分に浸

透している。攻撃には緩急があるし、守備は完璧で、まるで穴がない。

ただ、佐原南も、守備に関しては、少しずつ対応出来るようになってきた。

しかし、計算していたことではあったが、佐治ヶ江の呼吸が、少し荒くなってきた。走り出しなど、動きがやや鈍くなってきた。

頑張れよ、サジ。一緒にさ、気持ちのいい場所まで突き抜けようぜ。裕子は心の中でエールを送った。

我孫子東の交替ゾーンに、林原かなえが立った。

いよいよ来るか。

裕子は覚悟を決めた。

主将の中島祥子と入れ替えに、ピッチに入ってきた。

現在ボール保持しているのは里子。要注意人物である林原かなえの投入に、警戒心を強めた。さっそくというべきか、林原かなえは自分のほうへと走り出してきた。里子は、身体を反転させてボールを守り、裕子の場所を確認すると、パスを出した。いや、その足は空を切ただけだった。足元にあったはずのボールが、いつの間になくなっていった。里子はふと後ろを振り返ると、そこにはボールを足元に保持する林原かなえの姿があった。

いつの間に……。いったい、どうやって。

里子はさっと足を伸ばし、ボールを奪おうとした。

林原かなえは、里子と向き合ったまま、足で細かにボールをコントロールして、ボールの所有権を維持し続けている。

里子は全力を出しているというのに、林原かなえは涼しい顔だ。体を使うなり、味方へパスするなり、他に安全な方法はあるのに……要するに舐めてんだ。……でも、ここは我慢だ。こいつのほうが実力が遥かに上なのは、とつくに分かっていること、むしろ舐めてくれたほうが助かるってもんだ。里子はそう思うことで、相手を突き飛ばしたくなる衝動をぐっと堪えた。

「野蠻なだけで、つまんない」

林原かなえは、目の前の相手との勝負に飽きたといわんばかりに、素早いステップで一瞬にしてマークを振り切ると、前線の金本陽子へとロングパスを送った。しかし、それは繋がらなかった。パスが甘かったか受け手が油断していたか、金本陽子とボールとの間に佐原南の真砂茂美に入り込まれて、大きくクリアされてしまった。

茂美のクリアはそのまま佐治ケ江へのパスになった。佐治ケ江は左腿を上げて、ボールを受ける。寺崎詩緒里がすかさずプレスをかけてくる。それを見ると、佐治ケ江はすぐさまピヴォの里子へとパスを送った。

右足の裏で踏みつけるようにボールを受けた里子。

すっ、と里子の死角から迫っていく林原かなえに気付いた佐治ケ江は、「里子、後ろ！」と叫びながら、フォローのために走り出した。遅かった。里子は、一瞬のうちにボールを奪われてしまった。

林原かなえと、佐治ケ江が向かい合った。

勝負は一瞬で決まった。

林原かなえは、佐治ケ江の動きを読み、佐治ケ江の足の間にボールを通し、佐治ケ江の背後へと回り込み、そしてそのボールを回収した。

「たいしたことないね」

鼻で笑うと、ドリブルで駆け上がりはじめた。と、いきなり佐原南の山野裕子に身体をぶつけられ、よろけた。バランスを取り戻して再度走り出そうとしたところ、審判の笛がなった。いまの山野裕子のファールを取ったのだ。

我孫子東にFKが与えられた。

キッカーは林原かなえ、前方のスペースへとボールを転がした。

佐原南のマークを素早く外した寺崎詩緒里が飛び出し、ボールを力一杯に蹴飛ばした。

ゴレイロの晶の正面。晶は両手でキャッチしたが、ボールの勢いに負け、こぼしてしまった。床に落ちたボールに、すかさず寺崎詩

緒里が押し込もうと猛然たる勢いで迫るが、晶が飛びつくほうが早かった。今度は、胸にがちりと抱え込んだ。

寺崎詩緒里は全力で駆け出した勢いを急には殺せず、倒れているゴレイロの身体にぶつかった。転倒し、ゴレイロの背の上に膝を落としてしまった。

武田晶の絶叫に近い悲鳴が、会場に響いた。

寺崎詩緒里にイエローカードが出された。

「悪気ないのは見てれば分かるけど、ルールだから」

審判は、寺崎詩緒里の顔を見るなりそうなだめた。イエローは酷いのではないか、そう抗議しそうな表情を彼女が浮かべていたからだ。フットサルは接触プレーに厳しい競技のため、故意かどうかにかわりなく、このようなプレーは審判によっては躊躇なくイエローカードが出されるものだ。

「晶、サンキュー！ 背中、大丈夫か？」

裕子は心配になり、聞いた。
「ちょっと乗られただけ。こんなもん気にしてたら、ゴレイロなんて出来ないって」

晶はズキズキと痛む背中をさすりながら、強がった。

FKは晶が蹴った。大きく、前線へと送った。そして、一瞬にしてボールの所有権は我孫子東へと移った。晶からのロングボールを追った里子が、水島茜に簡単に競り負け、奪われてしまったのだ。

なおも我孫子東の攻勢は続く。

佐原南、選手交替。

山野裕子 アウト 衣笠春奈 イン

裕子自身は体力的にはまだやれるが、単に猪突猛進するだけでは、林原かなえにいいようにやられてしまう。個人技は劣るが目と心の視野が広くて全体把握の出来る春奈を出すことにした。

春奈は一对一において粘り強い守備を見せ、戦術的には相手のパスコースを確実に塞いでいく。個人技の足りない部分を補う巧みなポジショニングで、我孫子東の攻撃の芽を摘み取っていく。

だがやはり、我孫子東のほうが、個人技だけでなく、組織力としても上回っていた。ピッチの外から中島祥子が修正をかけると、あつという間に春奈の存在は無効化された。

戦術的に五分ならば、個人技で劣る佐原南には圧倒的に不利な状況である。

友原鈴は、気力と運と体力とで我孫子東の攻撃を食い止めていた。だが、幸運もいつまでもは続かない。必死の抵抗を見せる鈴を嘲笑するかのように、林原かなえは華麗なステップで抜いた。鈴は咄嗟に足を伸ばしたものの、足にびたりと吸い付くようなボールに、かすめることも出来なかった。

林原かなえはドリブルで佐原南ゴールへと向かう。

ゴレイロの武田晶が構えている。

一対一になった。

林原かなえのボールタッチが少し大きくなったのを、晶は見逃さず、飛び出した。

そして晶は、相手の狡猾さ、自分の迂闊さを呪った。

まだボールは、林原かなえの足元にあった。タッチが大きくなったふりをして、ボールにバックスピンをかけていたのだ。晶の飛び出しを誘うために。より確実に得点の出来る、完全無人のゴールを作り出すために。

晶は前へと突進する自身の身体に必死にブレーキをかける。背中に電撃が走った。先ほど寺崎詩緒里にやられたところだ。激痛を氣力で弾き飛ばした。時間にしてほんの一瞬だが、それは致命的な一瞬だった。晶のその横を、林原かなえが余裕の表情で通り過ぎていく。

やられた。晶は観念した。

と、林原かなえの身体がよろけた。

彼女のすぐ背後に友原鈴の姿。

鈴は、林原かなえをとめようと背後から迫ったものの、その動きに付いていくことが出来ず、そして結果として背中を突き飛ばして

しまったのだ。そして、転ばせ、その上にのしかかってしまった。
審判の笛が吹かれた。著しく危険な行為。鈴にレッドカードが出された。

苦痛の表情で足をバタバタさせている林原かなえ。我孫子東にP
Kが与えられたことを知ると、けろりとした顔で起き上がった。

友原鈴は、呆然とした表情で突っ立っている。

キッカーは、林原かなえ本人がつとめるようだ。彼女はペナル
ティーマークにボールをセットした。

「どうも、すみません」

鈴はしょんぼりした表情で裕子の元へと歩いてくると、深く頭を
下げた。

「絶対失点ってとこだったんだから気にしない」

裕子は笑みを浮かべ、鈴の肩を叩いた。

「でも、PKになっちゃって」

「晶を信じよう。あいつ、顔も頭も悪いけど、ここ一番で凄い力を
発揮する奴だから」

「はい……」

やばいな。どうしよう。よりによって、林原かなえが出てる時に
PKかよ……

鈴にはああいったものの、裕子は内心、相当な焦りを感じていた。
林原かなえは、PKが得意でよくキッカーを任されている。そし
て、中学時代から含め、公式戦では一度も失敗したことがない。そ
う聞いている。

どうしようじゃないよな。晶、信じるしかないじゃん。鈴にばか
りえらそうにいつてないでさ。もしもの時には、あたしらが頑張っ
て点を取ればいいだけじゃないか。

裕子は佐原南ゴール前で対峙する二人の勝負を見守った。

晶はゴール前の中央で、直立不動。特に両腕を広げたり、威嚇す
るような表情を作ったりなど、相手の心理を揺さぶるようなことは
なにもしていない。顔は、あくまで無表情。比べて林原かなえは真

逆、薄笑いを浮かべ、明らかに楽しそうである。あまりに晶が無反応なため、ちよつと面白くなさそうな顔を作ったがそれも一瞬だけで、すぐ笑みに戻った。

林原かなえは、ゆっくりゆっくりと助走した。

相手を嘲笑するような表情で、まるでからかうように、ゆっくり、ゆっくりと助走した。

ゆっくりと足を振り上げた。

さして力まず、その足を振り下ろしていく。

ゴレイロの身体がびくりと反応したことを確認するや、突如、足の動きを加速させた。蹴った。弾丸、とまではいかないが初期モーションから想像も出来ないようなスピードのあるボールになった。

その弾道は、完全に杵を捉えている。

そしてその弾道は、完全にゴレイロの逆をつくものだった。

決まった。

と、林原かなえは口の端を吊り上げ、笑った。その笑みは一瞬しか続かなかった。驚愕に目が見開かれ、次いでぼつかりと口が開かれていた。

武田晶が、シュートの軌道上にしっかりと立って、両手にボールをキャッチしていた。その顔には余裕の表情すら浮かんでいた。

観客席がどつと沸いた。

「なんで……」

公式戦ではじめてPKを失敗したショックのためか、膝についてしまった。

「技術に自信ある奴って、どいつもこいつも逆をつきたがるからね。逆と分かってりゃあ、止めるのは簡単」

林原かなえの中の、なにかが音を立てて崩れた。

ゴレイロの動きを読みきって蹴ったつもりだった。しかし実際には、蹴らされていたのだ。

PK阻止に、ピッチの外で抱き合って喜ぶ裕子と鈴。

「まったく、無駄にかっこつけやがってさ」

裕子は、頼もしい守護神へと視線をやった。

「無駄じゃあないよ」

晶は、ちよつとだけ照れたように、唇を歪め、鼻の頭を搔くと、ボールを大きく前方へと蹴飛ばした。

んなこと、分かっているって。裕子は、心の中で呟いた。

このPK阻止は、一点防いだ以上の意味があるよ。

晶の演技めいたPKセーブ、確かにその効果は絶大だった。林原かなえの動きに、誰の目にも分かる明らかな変化が生じていた。精神的な動揺のためか、動きにキレがなくなっている。その自覚があるのか、佐原南にプレスをかけられると無理に抜こうとせず、すぐにパスを選択するようになった。

もしも一対一で負けたらさらに自尊心が傷つく。だから無意識のうちに勝負を避けてしまっているんだ。裕子は、そう考えた。

パスに逃げる林原かなえであるが、次第にそのパスすらもカットされるようになってきた。

ボールを持つ林原かなえ、里子はその正面に立った。

「あたしみたいな技術のない野蛮人から奪われたら恥ずかしいよね。はやくパスしたら？」

意地の悪い……。裕子は苦笑した。

林原かなえは、里子の挑発には乗らず、寺崎詩緒里へとパス……と思ったが見ると衣笠春奈がしっかりマークしている。林原かなえは、思考時間を稼ごうと反転、その瞬間、いつの間に背後にいたのか佐治ヶ江にボールを奪われていた。林原かなえの頭は、一瞬真っ白になった。完全に、佐原南の術中にはまっている。

佐治ヶ江はドリブルで駆け上がると、遠目、角度のないところからシュートを放った。

ゴレイロの田中姫子、素早く反応しブロックの体勢に入るが、ボールはポストに当たり、跳ね返った。

その跳ね返りに反応して、反対側から駆け込んで来ていた里子がシュートを打った。反対側に飛び出しかけていたゴレイロは完全にバ

ランスを崩していた。しかし、強靱な肉体能力で足を後ろに突き出して、ボールになんとか触れ、蹴り出していた。

佐原南はCKを得た。キッカーは佐治ケ江優。駆け寄ってきた春奈へとボールを転がした。受けた春奈は、すぐ里子へと繋ぐ。

パス回しで補填までの時間を稼ぐつもりだ。中島祥子はそう判断した。

「向こう、一人少ないんだよ。なに回されてんだ！」

中島祥子が叫んだ。

我孫子東のプレスがきつくなった。相手の人数が少ないということから、どこか他人任せになってしまっていた、そんな甘えを、中島祥子は叱咤し、吹き飛ばしたのだ。

里子は佐治ケ江へとパスを出した。だが、ボールは水島茜の伸ばした足に当たって小さくバウンドして、転がった。

寺崎詩緒がさっとボールへ詰め寄った。ボールを持ったその瞬間、後ろから佐治ケ江優に足を入れられ、奪われていた。

ボールを奪った佐治ケ江。寺崎詩緒里が振り向くや、奪い返そうと足を出してくるが、それを、細かなボールタッチでかわす。横から、金本陽子が迫ってきた。ファール覚悟か、佐治ケ江の足ごと払おうかという横殴りの一閃、しかし佐治ケ江は間一髪ボールと自身とを浮かせ、よけていた。空中で、膝でボールを蹴り上げ、頭上を通して背後へと回した。

二対一だというのに、佐治ケ江のボール捌きは実に冷静に見え、素早くて確で、まったく奪われない。奪おうと突き出される無数の足の間を、小刻みにボールが踊っている様は、さながら魔法を見ているかのよう。

佐治ケ江本人としては余裕はまったくなく、ただ必死であった。これ以上パス回しを続けるのが危険と判断し、賭けにはなるが個人技で時間を稼ぐ手に出たのだが、いつまでもつか自信がない。

林原かなえが向かってくる。それに気付いた佐治ケ江は、寺崎詩緒里と金本陽子の間を一瞬で潜り抜けると、自ら林原かなえに向か

っていった。足元の技術の高い林原かなえに、こちらから一対一の勝負を仕掛ければ、むしろ、他の誰も手を出してこないだろうと判断したのだ。

先ほどから消極的なプレーの目立つ林原かなえだが、さすがに強気になり、挑まれた勝負を買った。だがこの勝負で彼女の自信が回復することはなかった。目の前に立つ、この華奢な体躯の相手からまったくボールを奪うことが出来なかったのだ。佐治ヶ江優の足や、ボールの動きがまったく予想出来ない。蹴り足の予想的中しても、何故かボールはまったく予期せぬ方向へと逃げる。

世界が違う。自分が赤子同然の扱いを受けていることに、林原かなえは愕然とした。

ボールの動きに身体だけではなく、脳まで混乱し始めていた。

もうそろそろ、鈴の退場から二分になるはずだ。佐治ヶ江はちゃんと前にボールを蹴ると、一気に林原かなえを抜いた。ドリブルで、さらに水島茜をかわし、遠目からシュートを打った。ボールは、ポストを直撃し、跳ね返った。ゴレイロの田中姫子が体勢を崩している間に、詰め寄っていた里子がシュート。しかし、打ち上げてしまった。

林原かなえは、寒気に全身鳥肌が立つのを感じていた。

さっきから、わざとポストに当ててるんだ。ヒメ先輩の反応速度が高いのを逆手に取って……。でも、あんな、遠くから確実にポストに当てるなんて。しかも、反射角度まで完璧に……

佐原南、退場から二分が経過した。選手補填、真砂茂美が入った。茂美の右足には、テーピングがぐるぐるとまかれている。

入ったばかりの茂美が、いきなりよいプレーを見せた。相手と激しく競り合い、ボールを奪い取ったのだ。そして、里子へとハイボールを送った。

里子と林原かなえが競るが、これは絶対的な身長差で里子が有利だ。跳躍しながら頭で受けた。着地と同時に、腿で蹴り上げる。頭、胸、腿、とまるでリフティング練習のように高いところでボールを

蹴り続け、林原かなえには渡さない。しばらくすると、前方で待つ佐治ヶ江にパスを出した。

林原かなえは、ボールを追った。だが、ボールはすぐ生山里子へと戻る。林原かなえは、佐治ヶ江優と生山里子のパス交換に翻弄された。いつしか、思考が完全に吹き飛んでいた。気がつく、目の前に生山里子が倒れていた。

生山里子は激痛に顔を歪め、足を押さえてばたばたともがいている。

笛が鳴った。

審判は、林原かなえを指差し、レッドカードを高くかかげた。

後ろから、スライディングで転ばせてしまったんだ。林原かなえは、自分のしてしまったことを理解した。

里子を引き起こすと、林原かなえは顔面蒼白になり、頼りのない足取りでピッチの外へと出た。仲間がタオルをかけ、肩を叩き、慰めている。

泣いていた。

林原かなえは、涙をぼろぼろとこぼし、口を歪め、泣いていた。なんか可哀想だけど、でも同情している余裕は、こっちにはないんだ。裕子は選手交替を指示した。

衣笠春奈 アウト 山野裕子 イン

相手の退場や、集中の乱れに、佐原南のパスがどんどん繋がる。

必死の形相で攻撃を跳ね返す我孫子東。

先ほどまでとは完全に形勢逆転していた。

「おろおろしてんな！ 練習通りに！」

中島祥子が叫ぶ。

我孫子東も、もちろん退場者が出たときの戦術は考えているだろう。練習だっけしているだろう。だが、実戦経験はほとんどないはずだ。何故なら、エリートである彼女らから退場者が出ることなど、まずないからだ。裕子が調べた限り、公式戦で退場者を出したのは、今回を抜かせば数年前の一回きりだ。

我孫子東の劣勢の原因はそれだけではない。単純に佐原南の勢が増しているのだ。それはそうだろう、圧倒的不利な状況、耐えに耐え切って掴んだチャンスなのだから。

だが、どんなに狼狽していても、さすがは我孫子東である。とにかく守備が堅い。ゴレイロの晶も積極的に攻撃参加するものの、あと一步のところで弾き返されてしまい、せつかくの波状攻撃を得点に結びつけることが出来ない。

守備陣を突破して、あとは決めるだけという状況を何度も作ったが、ゴレイロの田中姫子が身体を張り、鬼神のごとき活躍で佐原南の得点を許さない。

佐原南のゴレイロ武田晶もさすがに焦れて、攻め上がる時間が増えていく。

我孫子東の高尾真野が、ボールを大きくクリアした。闇雲に見えるたクリアボールは、奇麗な弧を描いて選手たちの頭上を飛んでいく。やばい！

晶は自陣ゴールに戻るように全力で走り出した。この弾道だと、佐原南ゴールに入ってしまう。晶の後ろから、寺崎詩緒里が追ってくる。結局、晶は間に合わなかった。しかし、ボールはゴールインはせずにクロスバーを直撃した。

跳ね返りが晶の頭上を飛び越えた。

晶のすぐ後ろにいた寺崎詩緒里は跳躍すると、ボールに頭を叩き付けていた。

いまから振り返って対応しようにも間に合わない。晶は、瞬時に五感を研ぎ澄ませ、音、空気の流れ、気配から、背後で起きたこと、そしてボールの弾道を予測。ゴールを目掛け、自分の脇を抜けていくボール、後ろ回し蹴りで弾き飛ばしていた。

ボールはタッチラインを割って、二階観客席まで飛んでいった。神が降り立ったかのような凄まじいプレーに、客席からどよめきがあがった。

一番信じられないのは、晶自身だった。

だが、どんなに素晴らしいプレーを披露しても、得点が出来なければ佐原南には敗北しかない。

時間は刻々と過ぎていく。

結局、我孫子東の人数が少ない間に得点を上げることは出来なかった。林原かなえの退場から二分が経過したのだ。

我孫子東は選手を補填した。主将の中島祥子が入った。

「ガンガン攻めるよ！」

中島祥子は気合を入れた。これでまた、こっちのペースだ。

だが、彼女の読みは完全に外れることとなった。

佐原南の攻勢が、一向に衰えないのだ。

四対四で、なんでうちが負けてる？

中島祥子は、対戦相手のあまりの不気味さに、全身に鳥肌が立つのを感じた。

佐原南の攻勢は、まだ終わらなかった。

「いくよ、イプシロン！」

山野裕子の指示とともに、佐原南の基本陣形が変化した。

前に生山里子、佐治ケ江優。中央に山野裕子。後ろに真砂茂美。

Y字型、もしくはスター型と呼ばれるフォーメーションだ。

相手がなにをやろうと関係ない。水島茜は強気になり、ドリブルで駆け上がった。だが、気付いたときには山野裕子と真砂茂美とに囲まれ、ボールを奪われていた。

裕子は佐治ケ江へパスを送った。

すぐに、中島祥子がついた。

佐治ケ江はふらふらと動きの読めないドリブルから、急加速で一気に中島祥子を抜いた。シュート体勢に入ったが、背後から中島祥子に身体をぶつけられ、ボールを奪われた。

笛が鳴った。

中島祥子のファールが取られ、佐原南に直接FKが与えられた。キッカーは佐治ケ江。

ボールをセットすると、すぐに蹴っていた。

壁を越え、直接ゴールを狙った。

無回転ボール、短い距離だというのに、ずっと奇麗に落ちる。

だが田中姫子は、鋭い読みと反射神経とでキャッチしていた。

ボールは水島茜へ。そこから、寺崎詩緒里へとパス。

だが、次の瞬間には、寺崎詩緒里は、生山里子と山野裕子の二人に取り囲まれていた。驚いた一瞬の間に、ボールを奪われていた。

イブシロンの……アレンジだ……

中島祥子はそう理解した。

中央の山野裕子が移動をすることで、彼女ともう一人とでボールを奪ったりパスコースを消す戦術だ。空いた中央の穴も、他のポジションの選手が少し動くことで、リスクの軽減をしている。

でも……そんなやりかたじゃあ、他の選手は走り回らなくて済むけど、中央の選手の体力消耗は半端じゃない。替わる選手がいればいいけど、あの動きが出来る選手が山野裕子以外にいるか？ 山野裕子がやり続けるしかない。これは、現実的なやり方じゃ……正気の沙汰じゃない。

これまでの試合の疲れだってあるだろうに、

山野裕子……どれだけ、底なしの体力を持ってるんだ。

我孫子東の人数が一人少なかったとき以上に、佐原南が押している。

佐治ケ江のシュート、里子のシュートが我孫子東ゴールを次々と脅かしていく。

我孫子東の攻め具合に対応してYの字を回転させ、我孫子東の長所を打ち消している。布陣について、細かな指示を出しているのはピッチの外に立つ衣笠春奈だ。実はこの変則イブシロンは、以前に裕子と春奈が冗談で話していたものなのだ。それを裕子が先ほど唐突に採用したのである。

中島祥子は舌打ちした。相手がなにをやっているのか、分かっているというのに、それを止めることが出来ないなんて。

だから、戦いたくなかったんだ。佐原南とは。

でも……残り時間あと五分。リードしているのはこっちだ。守り
きればいいんだ。頼むよ、茜、ヒメ。

寺崎詩緒里が、また山野裕子と真砂茂美に捕まった。苦し紛れに
放ったシュートも、武田晶に冷静に対応された。

晶から、裕子へボールが渡った。そして裕子から、佐治ケ江へ。

佐治ケ江は小細工をせず、すぐさまドリブルに入り、真っ直ぐ駆け上がる。瞬時にしてトップスピードへと乗る。俊足なタイプではないが、瞬発力があるのが佐治ケ江の特徴だ。

小細工に構えていた水島茜は、意表をつかれ、対応が遅れた。

佐治ケ江の背中を追いかけ、ぶつかって倒してしまった。

水島茜にイエローカードが出された。

佐原南にFKが与えられた。

佐治ケ江は水島茜に起こされたが、ふらふらと数歩進むと、急に力抜けたように膝をついた。

次いで両手もつき、四つんばいの姿勢で苦しそうに息を切らせている。

胸をおさえている。

病氣、まだなおっていないのだろうか。裕子は急いで駆け寄った。

「サジ、大丈夫？ 交替しようか？」

尋ねた。

「大丈夫、だから。……いま、とっても……気持ちいいんだ」

切れ切れに、そう応えた。

「そう」

裕子はそう短くいった。言葉の短さとは反対に、なにやら心の中に大量の、なんとも名状しがたい感情が沸き上がってきていた。

すぐにその感情がなんなのか、分かった。

きつとあたし、うれしいけどもさびしいんだな。

……この試合、絶対に勝たなきゃな。サジのためにも。

「時間がない。どんどん攻めてくぞ！」

佐原南、選手交替だ。

真砂茂美 アウト 梨本咲 イン

この大会で、すでに何度かやっている、晶をFPにする作戦だ。

晶は急いでFPのユニフォームを着た。

「咲もどんだん上がってきていいんだからな。それで失点したって文句いわないから」

裕子が入ってきた咲に、そう声をかけた。

「冗談じゃない。絶対にゴールは守りますから、そっちも絶対に点をとってくださいよね」

さっきだって、晶先輩が攻め上がってゴール前から空きで失点するところだったんだから。あんなこと、一試合中にそう何度も出来るもんじゃないでしょ。

晶はベツキだというのに守備をゴレイロに任せてどんだん上がっていく。晶がFPになるのは絶対に得点が必要な状況のときだけだから、ということもあるが、もともとからして守るよりも攻撃するほうが好きな性格なのだ。

失点の危険性はやや高まったものの、ラインが全体的にコンパクトになり、よりボールが回るようになった。佐原南は、我孫子東のお株を奪うような見事なパス回しで、我孫子東陣地へと侵入していく。

晶のスループス、里子が反応して飛び出した。里子とゴレイロの一对一。里子はためらいなくシュートを打った。距離一メートルの至近距離だ。

しかし、ゴレイロの田中姫子は凄まじい反応を見せ、足で弾き返していた。

そのボールをクリアしようと水島茜が駆け寄ったが、彼女を追い越してシュートを打つ者がいた。

梨本咲だ。だが、ジャストミートせず、ポストの横に外れてしまった。

上がってきてんじゃん。

裕子は心の中で苦笑した。

田中姫子の素早いリスタート。

ゴールクリアランスは、中島祥子が受け、すかさず前線へと蹴った。

佐原南は前掛かりになっていたため、自陣には広大なスペースが空いていた。佐原南の選手たちは、慌てて戻りはじめる。

金本陽子は得意の俊足をいかし、ボールを追った。ゴレイロまで攻め上がったことで誰もいない佐原南陣地、あのボールを受けることさえ出来れば我孫子東の得点と勝利は間違いないだろう。

渾身の力を込めて走る金本陽子、短距離走なら誰にも負けない自信がある。

だが、その隣を並走する者が。佐原南、山野裕子だ。

そして裕子は金本陽子を追いつくと、先にボールに追いついた。タッチライン外に蹴り出した。

「あたしより、速いなんて」

金本陽子はなんとも悔しそうな顔で、思わず呟いていた。

裕子は自分の頭を指さし、

「脳味噌ない分だけ軽いんでね」

そういうとボールを拾い、金本陽子へ渡した。

我孫子東のキックイン。受け手である寺崎詩緒里の前に、武田晶が裏から巧みに回りこんで身体を入れ、ボールを奪った。

晶はすぐさま佐治ケ江へとパスを送った。

要注意人物である佐治ケ江優に、すかさず二人のマークがついた。中島祥子と水島茜。

二人掛かりでボールを奪おうとするが、佐治ケ江優の足、身体は実に不思議な動きをし、どうしても奪うことが出来ない。緩のようで急、柔のようで剛、捉えどころがない。しかもボールは前後左右に逃げるばかりでなく、上下動も激しく、ボールを追えば追うほどまるで手品を見せられているような錯覚に陥ってしまう。

佐治ケ江は二人の間を抜け出した。足元にはボールがぴったりと吸い付いている。まるで、ボールのほうに彼女から離れるのを嫌が

っているかのようなのだ。

ゴレイロの田中姫子と佐治ケ江との一対一。

佐治ケ江はシュートを打った。

ゴールネットの上に突き刺すようなボール、田中姫子は鋭い反応を見せ、両手で真上へ跳ね上げていた。

ボールは宙高く舞っている。

里子が走りこんできた。

田中姫子は空中のボールをキャッチしようと素早く膝を曲げるが、生山里子の方が一足先に高く飛び上がっていた。

里子は落下してくるボールを、頭頂でさらに浮かせた。ボールはループを描き、遅れて跳躍した田中姫子の手の上を越えた。

落ちてくるボールを押し込もうと、佐治ケ江は詰め寄った。

だが田中姫子、後ろが見えるはずなのに、経験というべきか、後ろ手を伸ばしてボールを大きく弾いていた。

再びボールは跳ね上がった。

佐治ケ江はボールを追う。

守備に戻ってきたベツキの水島茜と肩を並べ、競り合った。

紙一重の差で佐治ケ江が早かった。

走りながら前方へ大きく跳躍、伸ばした右足の爪先で小さくボールを浮かせると、そのまま空宙で身体を捻り、左足でシュートを放っていた。

そんなこと、物理的に出来るはずない！

田中姫子は、自分の常識を覆す出来事に驚くあまり、一瞬、反応が遅れた。

そしてその一瞬の間に、ボールはゴールネットへ突き刺さっていた。

佐治ケ江は受身に失敗して、尻から床に落ちた。

残り時間あと四分というところで、ついに佐原南は追いついた。今大会初失点に、がっくりと膝を落とす田中姫子。

山野裕子は両腕を大きく広げ、なにやら雄叫びをあげながら、ま

だ床に倒れている佐治ケ江へと走り寄った。

「あたしのサジ！」

そう叫びながら、佐治ケ江の上に倒れこみ、その身体を抱きしめ、ほお擦りをした。

「やってくれると思ってた！　ほんとサジ、すっげえ！　愛してる！」

「あ、ありがとう」

去年も、茂原藤ケ谷との対戦で同じようなシュートを見たことがあるが、そのときは大きく打ち上げて外してしまった。今回は、完璧なタイミングで決めてくれた。

「サジ先輩、ナイシュー！」

里子が、二人の上に覆いかぶさってきた。

「あたしもやんなきゃダメみたいじゃんか」
最後に晶が乗った。

「重い……」

佐治ケ江は脱出しようともがく。

「切り替え切り替え！　リードされてるわけじゃないんだから！」

中島祥子が手を叩き、意気消沈する味方を鼓舞している。

我孫子東のキックオフで試合再開。

試合も終盤、どちらの疲労も相当なもので、佐原南の一方的なペースではなくってきた。かといって我孫子東がペースを取り戻したわけではなく、試合は完全な膠着状態に入った。ただ、試合展開は膠着していても、試合を楽しむことにおいて、完全に佐原南は勝利し、我孫子東は負けていた。

里子、佐治ケ江は、疲れの色を隠す時間も勿体無いとばかり、次々と仕掛けていく。

大きく肩で呼吸をしている佐治ケ江。このピッチの中で、一番疲労の色が濃いのが彼女だろう。しかし、そんな状態であるにもかかわらず、技の冴えはまったく衰えることがない。むしろ、増してきてさえる。

サジ、とても楽しそうだな。裕子には、そう見えていた。

あまりの疲労のため、表情こそ苦悶に歪んでいるが、佐治ケ江は自分がどこまでやれるのか、チャレンジしている。自信を持って、仕掛けている。そのたびに、どんどん自分の殻を突き破っている。フットサルのことだけじゃない。この戦いを通して、佐治ケ江は人間として強く、成長していつている。

その成長に付き合えたこと、裕子は嬉しく思っていた。

疲労困憊し、体力的に限界を迎えているはずの佐治ケ江を、交替で入ったばかりでフレッシュな我孫子東の選手が、一対一で止めることが出来ない。

中島祥子は佐治ケ江優の背後に忍び寄り、後ろから足を伸ばして、ようやくにしてボールを奪うことに成功した。だが、彼女も疲労で思考力が鈍っていた。パスを、生山里子にインターセプトされていた。

佐治ケ江は、四つんばいになると、喘ぐように大きく呼吸をした。ボールを奪った里子はドリブルで駆け上がる。寺崎詩緒里と対峙。裕子へパスを出す振りをして、さらにドリブル。里子も疲れており、少しボールタッチの大きくなってしまったところを、水島茜に奪われてしまった。

水島茜は、前線の羽場繁子へとロングボールを送った。

羽場繁子が頭で落としたボールを、中島祥子が拾った。

中島祥子はシュート体勢に入りかけたが、真横から迫ってくる武田晶に気付き、振り返り、後ろへ戻した。

ベッキの水島茜、佐原南陣地にまで入ってきており、中島祥子からのパスを受けた。生山里子がボール奪取を試みるが、それを間一髪でかわすと、また中島祥子へとパス。

また、我孫子東のパスが繋がるようになってきた。FP全員が攻め上がり、佐原南陣地でパスを回す。

様子を見るように横パスを繋ぐ我孫子東、寺崎詩緒里がいきなり縦パスを出した。羽場繁子はスルーパスに反応し、武田晶のマーク

を外して完璧なタイミングで飛び出した。

飛び出した梨本咲がスライディングでクリアしようとしたが、ボールは小さく跳ねただけで、寺崎詩緒里へと渡ってしまった。

寺崎詩緒里は、ゴールへの軌道上に梨本咲が倒れているのを確認すると、ボールを浮かせ、ループシュートを狙った。

ボールは綺麗な軌跡を描き、梨本咲の身体を通り越え、ゴールネットへと向かい、落ちていく。

我孫子東の選手は、誰もがゴールを疑わなかった。やっと、勝った。

だが、ゴールインするまさに直前、走りこんだ佐治ケ江が足を伸ばし、ボールを受けていた。

床に落ちるボールを、佐治ケ江は踏みつけた。呼吸はまだまったく回復してはおらず、ぜいぜいと苦しそうに息をしている。

中島祥子は、残る体力を振り絞り、獣のごとき勢いで佐治ケ江へと飛び掛った。

絶対に、そのボールを奪ってやる。

勝つのは、我孫子東だ。

中島祥子の視界から、不意にボールが消えていた。佐治ケ江優が持っていたはずのボール、彼女の前から不意に消えていた。

佐治ケ江は走り出し、中島祥子の脇を抜けた。

中島祥子は、振り返った。

そして、自分の目を疑った。

佐治ケ江優の背中に、白い翼が見えた。

光、ふわりと空から舞い降りて、佐治ケ江優の身体を包み込んだ。ヒールリフトで抜かれたのだ。その技のあまりの美しさに、中島祥子は幻覚を見たのだ。

佐治ケ江は、ドリブルで駆け上がっていく。

我孫子東は、ゴレイロ以外の全員が、相手ゴール付近にまで攻め上がっていたため、佐原南にとっては絶好のカウンターチャンスになった。

山野裕子も、佐治ヶ江の後を追うように、走り始めた。
そして、力の限り、叫んだ。

みんな、走れ！

エピローグ

1

現フットサル部の部員全員に、木村梨乃、夏木フサエ、楽山織絵といったOGまで。

それどころか金子前々部長まで来ている。相当に手を焼いた後輩だから、とても可愛いのだろう。

しかし、この人数。

一昨日の夜に、送別会をやったばかりだというのに。

成田国際空港。国際線が主だが、主要都市への国内線も数こそ少ないが離発着している。

今日、その国内線で佐治ヶ江優が父親の待つ広島へと帰る。

みんな、彼女を見送りに来たのだ。

母親の姿はない。今日帰るのは、佐治ヶ江一人だけだ。母親は、こちらでやり始めた仕事があり、その整理が残っているため、一ヶ月か二ヶ月は千葉を離れることは出来ない。

「みんな、ほんとうにありがとう。フットサル部に入って、よかった」

送別会で何度もいった言葉。でも、何百回いおうと決して薄らぐことのない、心からの言葉だ。

「我孫子東に、勝ちたかったね。最高の思い出を作ってあげられなくて、ごめん」

山野裕子は謝った。

「そんなことない。最高の、思い出になったよ」

千葉県決勝大会最終戦、結局、佐原南は我孫子東に勝つことは出来なかった。

同点で迎えた後半終了ぎりぎりに、カウンターから失点してしまったのだ。

「羨ましいくらい、最高のチームだね。とても、強くて、最後までどうなるか分からなかった。あたしたちが勝てたのは、運がよかっただけ」

中島祥子は試合後に、そういった。

「だから、いい勝負になるっていったでしょ」

裕子は負け惜しみでなく、そういった。結果は1―2の敗北だが、それが0―9だったとしても、同じことをいつていたと思う。裕子にとっては、佐治ヶ江が強くなること、佐治ヶ江が自信をつけること、それ以上によい試合はないのだから。そして、その通りになったのだから。

「かなえ、ちょっと来な」

中島祥子は、寺崎詩緒里の背中に隠れている林原かなえを手招きした。

林原かなえは、裕子たちの前へと、ゆっくり近付いてきた。

「ほら、なんか一言、あるだろ」

中島祥子は、林原かなえの脇を肘で小突いた。

「……ごめんなさい」

林原かなえは、深く頭を下げた。

「色々と、失礼なことをいつて、済みませんでした」
震えている。

それを見ていた生山里子は、彼女の態度が他人事には思えず、何故か泣きそうに辛い気持ちになった。自分もプライドの塊だったからだ。プライドというのは一種の刃、道具であり、使い方を間違うところなのだ。

「あたしからも、謝ります。どんな相手にも経緯を払え、って常々いつてるんだけど。この子、実力あるから、すっかり天狗になっちゃってて。……かなえ、鼻へし折ってもらえてよかったな。人間いろいろ、世の中にはな、お前にはない能力を持ってるのなんて、いくらでもいるんだよ!」

林原かなえの鼻をつまんでぐりぐりと回した。

「痛い痛い。もう謝ったんだからいいじゃないですか！」

両手で中島祥子の手を引き離すと、また寺崎詩緒里の後ろに隠れてしまった。

「ひとの背中にばかり隠れてんじゃないよ」

寺崎詩緒里は、林原かなえの頭を掴むと、脇に抱え込んでぐいぐいと締め上げた。

中島祥子は両手を腰に当て、小さくため息。

裕子へと向き直った。

「また、戦いたいね」

「そうだね」

「正直いうと、佐原南とは当たりたくなかったんだ。なんだか怖くて。でも、勝ったとか負けたとか関係なく、こんな舞台で、あんな面白い試合が出来るのなら、またやってみたいなあ。」

本当に、気持ちのいい連中だった。あんなに強いのに、驕りたかぶるところがなくて。

「結局、我孫子東も負けちゃったけどね」

千葉代表として代々木にある会場で戦うことになった我孫子東、一戦目は6―0と圧勝。続く、東京代表との対戦では、まさかの前半二点ビハインド。怒涛の追い上げで、2―2で迎えた延長戦。しかしそこで、力尽きた。

関東という小さな舞台で、あれよりもっと強いチームがあるってんだからな。日本だの世界だのってのは、どんだけ凄い世界なんだろう。

裕子には想像もつかない。

「そろそろ時間だよ」

晶の声に、裕子も発着状況の電光掲示板を見た。

「サジ、わざわざいう必要もないけど他にかける言葉がないからいうけど……元気でね。いつかそっち遊びにいったら、お好み焼きの美味しいところ連れて行ってよ」

「好み焼きはよく分らないけど、美味しいお店、お父さんに聞いておくよ。そっちこそ、元気で。……でも、王子は少し元気がないくらいでちょうどいいのかもね」

裕子は佐治ケ江の口から発せられた予期せぬ言葉に、しばし沈黙してしまった。

「……あのう、サジ、ひよつとして、それ、冗談？　サジ最大級の冗談？　シミズの舞台から飛び降りる的な気持ちで、よーし優ちゃん最後に一発かましちゃうぞーみたいな」

佐治ケ江は、顔を赤くしてうつむいてしまった。

「シミズじゃなくてキヨミズだよバカ。ていうかさ、これでお別れだってときに、なにいじめてんだよ。サジがせっかくもの凄いこといったんだから、爆笑してあげんのが礼儀だろ」

「晶、それ全然サジを庇ってないぞ」

「もうその話はやめて欲しい……」

佐治ケ江、消え入りそうなか細い声。

「サジ、王子じゃないけど、向こうでも元気にやんなよね。なにかあったら、いつでも連絡してよ」

木村梨乃は力強くそういった。

「はい。先輩方にも、本当にお世話になりました。特に、梨乃先輩にはいくら感謝しても足りないくらいです」

「なにもしてないってば。大袈裟なんだよ、サジは」

そんなことありません。本当に、先輩がいたから、自分は強くなれたんです。王子たち、素晴らしい友達が出来たんです。佐治ケ江は、心の中で呟いていた。

「サジ先輩、勝ち逃げじゃあないから心配しないでください。いつかきっちり負かしてあげますから。だから、これからもフットサルを続けて下さいよね」

「もちろん続けるよ。……いつか、どこかでね」

佐治ケ江と里子は、握手をかわした。

「もう、いかなきゃ。……それではみなさん、お世話になりました」

！」

佐治ケ江は、佐治ケ江らしくない大きな声を出すと、深く頭を下げた。

裕子は柵に身を乗り出し、里子からひったくった白いハンカチを右に左にと大きく振っている。

飛行機が、どんどん小さくなっていく。

やがて、雲の向こうへと姿を消した。

「いっちゃったね」

篠亜由美が、呟くようにいった。

「いっちゃったなあ」

裕子は、振り上げていた腕を下ろした。

「でもまあ、また会えるよ。地球は狭い。広島なんて陸続き。走ってりゃ、いつか会える」

「あれ、王子、よく広島が陸続きなんて知ってたね」

「そりゃ知ってるわよ晶ちゃん……バカにすんじゃないぞコラ！」

裕子は晶の両肩を掴むと、激しく引き寄せるようにして頭突きを浴びせた。ガッガッ、と素早く二回。

「いってえ！ また頭突きしやがった。しかも二度も！」

「ジャガイモ顔のくせに舐めたこといってっからだよ。もう、おでこにデンプンがくっついちゃったじゃんか」

裕子はハンカチで、額を拭った。

「王子先輩、それあたしのハンカチですよ！ やだ、晶先輩のデンプンくっ付いた！」

里子は、裕子からハンカチを取り返すと、はたいてからポケットにしまった。

「そんなもんくっ付くわけないだろ！」

「晶、最近怒りっぽくなったなあ。……そういえばさ、里子、さっき、サジとまたフットサルやろうって約束してたよな」

「はい」

「部活辞めんじゃなかったつけ。ボール捌き、サジいなくなったら、どう考えても里子がナンバーワンだろ」

「辞めるわけないじゃありませんか。あたしの次の目標は、このフットサル部の部長になることですから。いつかまたサジ先輩とフットサルをやれる日まで、腕をみがくんです。敵味方かも知れないけど」

2

住宅街の中の停留所で、路線バスを降りた。

大きなトランクを持って降りるのは大変だったが、運転手さんが親切に手を貸してくれた。

周囲を見渡した。

遙か遠くを、ぐるりと山が取り囲んでいる。

緩やかな傾斜があちらこちらにある、こじんまりとした町。

しばらく立ち尽くし、様々な思いに身を寄せていた。

やがて、キャスター付きの大きなトランクを転がして、歩き始めた。

狭く、曲がりくねった坂道を上っていく。

この町から離れて、ほんの数年しかたっていないというのに、なんだかとても懐かしい。

二十年も生きていないというのに、なんだか何十年振りかのように感じられた。

町並みは、記憶と比べていささかの変化も見せてはいない。

町は自らの時間を止めて、自分の帰ってくるこの日を待っていたかのではないだろうか。

町並みどころか、知っている人たち、みんな記憶通りのままの姿なのではないだろうか。もしもそうならば、ここには中学生の自分もいるのだろうか。そうだとしたら、自分は誰なんだろう。

もしかしたら、あれからのことは……ずっと、夢だったんじゃないだろうか。

佐治ケ江優は、ちょっとだけ不安になり、背中のリュックから写真を取り出そうとした。青いユニフォーム姿の裕子や、自分、晶、佐原南フットサル部の全員で撮影した、千葉県決勝大会準優勝を祝ったの記念写真があるはずだ。

でも写真は見つからなかった。

そうだ、ポシェット、トランクの中にしまったんだ。

夢かどうか不安になるなんて。

以前はあんなに、これがみんな夢ならいいのに、自分のいるこの世界そのものが夢で、目覚めると同時にすべてが消えてなくなってしまうばいのに、そう考えていたのに。

今日は、自宅に父親がいるはずだ。一人でゆっくりと帰りたいかったので、飛行機の到着時刻は教えなかった。知られたら絶対に空港まで迎えに来てしまうだろうから。

かつて駄菓子屋だったお店が、お好み焼き屋になっているのにふと気が付いた。

やはり、時間は少しずつ、流れているのだ。

どこの場所だって、そして誰にだって。

このお店が美味しかったら、王子が本当に遊びに来たときに、近くて便利だな。でも自分は、お好み焼きって食べた記憶なくて、美味しいとか美味しくないとか判断出来ないと思うし、やっぱりお父さんに聞こう。

ビクッ、と佐治ケ江の肩が跳ね上がった。

前方から歩いて来る中年女性が、犬を散歩させているのだ。真っ白な、小さな犬。プードルだろう。

トランクの右側を歩いていた佐治ケ江だが、ぐるっと左側へと回り込んだ。そろそろトランクを押して、歩き続ける。中年女性、プードルと、擦れ違った。

振り返り、女性を通り過ぎていくのを確認した。

ほっ、と安堵の息。

緩い坂道を上り切ると、しばらく平坦な道が続く。

その途中で足を止めた。

自宅に着いたのだ。

住宅街の中に溶け込んで目立たない、ごく平凡な一戸建ての家だ。数年前まで、お父さんとお母さんと自分の三人で暮らしていた家。もうしばらく我慢すれば、お母さんもこっちへ来る。また三人で、一緒に暮らすことが出来る。

あらためて、仲間たちに感謝の気持ちを抱いた。佐原南高校での様々な出会いがなければ、こうしてここに帰って来ることはなかっただろうから。

門を開け、重たいトランクを両手で持ち上げると、玄関までの短い階段を上った。

母親から渡された、この家の鍵を取り出すと、鍵穴に差し込み、捻った。

ドアノブに、手をかけた。

「ただいま」

あらたな人生への扉を、佐治ヶ江優は、いま、ゆっくりと開いた。

あとがき

新ブストサルをお届けします。

山野裕子を主人公にしながらも、前作以上に「佐治ヶ江優の物語」です。

佐治ヶ江優と山野裕子の友情が基本的なテーマですが、もうひとつ盛り込んだテーマが、「みんな輝いている」です。

頑張っている人たち、悩んでいる人たち、みんな、きらきらと輝いている。

だから、何名かにスポットを当てて、苦手なうなぎ食べたりなど、本編と関係ないところばかりクローズアップしています。

読んだ方が、誰かに対して感情移入や共感をして頂けるのであれば、書いた甲斐があるというものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4039k/>

新ブストサル

2011年4月28日11時40分発行